

# 不良少女(仮)

茜崎良衣菜

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

花咲川女子学園には不良生徒がいる。

彼女の名前は氷川朝日。

それは風紀委員長である氷川紗夜の姉だった。

## 目次

### 第一章 君たちへの言の葉を。

私は姉妹の落ちぶれです。	1
サボり常習犯？いやいや仕事です。	8
買い食い、説教。	13
オフ会当日、元クラスメイトと出会いました。	19
私は姉妹と仲が良くない。	24
仲良くしたいとは思うけど。	29
後輩にキスされるってなんて名前のギャルゲー？	35
過去を羨み、未来に怯える。	43
君たちは何も知らない。	47
言い争いはしたくないが。	53
青より水色が似合うから。	60
代わってしまった三つ子の関係。	69
スカウトか挑発か。	77
猫耳と天然と妹と…。	84
大切な人と写真、嫉妬心と独占欲。	91
妹属性を發揮されるのは困るから。	98
友人と遊びに行ったらカツアゲと言われました。	104
お泊まり会、そして…。	111
不仲でもないかと落ち着かないらしい。	121
咲祭と共に感じる気持ち。	128
逃げたい、逃げられない。	135
バンドとポスター。	141
文化祭前日の。	147

息の止まるその瞬間。	153
執事と姫。	159
想いを君に。	165
頼むよ、あいつを連れて来て。	171
解けない問題。	177
真相、確信。	184
小悪魔な後輩。	189
見られたくなかった事実。	196
正義を突き通すために。	205
説明とか、する必要ないよね。	210
無力な私たち。	219
金髪美少女は笑う。	226
秘密の話を私と君で。	234
結託の日。	243
妹とブラフと心の叫び。	249
知りたいこと。	255
知らない私。	262
笑えない冗談。	270
いてほしくないのに。	280
限界なんてもうとつくに。	286
真実を。	295
時、動き出す。	301
嬉しいこと。	312
疑問、溢れる。	318
きつかけと先輩。	326

今の先輩。

332

想い、重なる。

340

さよなら。

346

想いと決意。

358

本音をぶつけて。

365

## 第二章 君たちと過ごす日常。

山あり谷あり。

371

見たいのは君の笑顔。

378

全員で前へススメ。

387

S P A C Eと私と後輩と。

393

舞台には魔物がいる。

401

紅のギターをこの手に。

411

名前で呼んで。

419

テストは留年を掛けた戦争なんだよ。

428

これは自業自得の罰ゲームだよ。

439

私のファン。

448

子猫は効果抜群。

455

想い、夏の計画。

463

寂しさ、失いたくない曲。

471

テンパる私と熱を帯びて。

478

ケンカ。え、ケンカ？

486

報告と、出会い。

493

キミたちは知らない秘密事。

502

はじまりの合宿デイズ。

509

過去を知る者。

515

レクリエーション。

行方不明と確信事項。

もう二度とやらないと誓った。

ケンカの原因、それは……。

会いに来たよ。

会長直々の代表者。

想像通りの厳しさで。

悩み、葛藤、緊張。

生徒会長選挙

第X章 君たちといつもと違う日常を。

祝福の日。

私だけの先輩。

私はあなたが好き。

私への約束。

好きだって言わせたいだけよ。

好きだって言ってほしいだけだよ。

523

528

540

550

557

563

572

579

586

595

604

610

615

627

639

## 第一章 君たちへの言の葉を。

私は姉妹の落ちぶれです。

授業を聞くだけで勉強が学年で一番できる。

スポーツは言うまでもなく完璧。

絵を描けば何かしらの賞に入賞する。

何でもできるその人のことを周りは「天才」と呼んだ。

◇?◇?◇?

「朝日!これは何!?!」

「何って見ればわかるでしょ、英語の答案用紙」

「じゃあこの点数は!?!私たちの顔に泥を塗るつもり!?!」

「85点で汚れるなんて、相変わらず心が狭いね母さんは」

「っ!親に対してなんて物言いをするの!」

「さあ?アンタが育てた子じゃん」

85点で怒られるテスト。

自分のことしか考えていない親。

放任主義のくせに変に絡んでくる。

私は全てが嫌いだった。

「あれー?おねーちゃんとお母さんどうかしたの?」

「あら日菜ちゃん。なんでもないのよ」

そして何より使える駒には猫を被る。

日菜は優秀だから手元に置いておきたいんだろう。

自分の子供はこんなに出来る子なんです、って言いふらしたいだけ。

子供は親を輝かせるためのアクセサリーだとも思っているんだろう。

考えることが見え見えで吐き気がする。

「…はあ、私部屋に戻る」

「おねーちゃんご飯は？」

「食欲ないからいららない」

こんなクズの作る物なんて食べたくない。それが本音。

この人の作った物を食べるくらいなら一食抜いたって構わない。

何より自分で作った方が上手い自信がある。

私は部屋に戻ってすぐノートパソコンを立ち上げた。慣れた手つきでマウスをクリックしゲームの画面を開く。

本当ならデスクトップのパソコンを3台ほど並べてやりたいところだがあの親に見られたら最後、売られるか破壊される未来しか見えない。

見慣れたタイトル画面を進んでいけば既にフレンドがログインし待ち構えていた。

へあっーひっさー！待ってたよー！

悪魔の格好をした少女は笑顔で出迎えてくれる。



隣にいたウィザードも微笑んでいた。

〈ごめんね、りんりん、あこちゃん。遅くなった〉

〈全然大丈夫だよひさちゃん〉

〈今日に入るの遅かったね。何してたの？〉

〈ちよつと親と話してて…〉

嘘は言っていない。

ちなみに「ひさ」というのは私のこの世界での名前だ。

〈今日は期間限定クエスト行くんだっけ？〉

〈うん！激レアアイテム出現率アップと聞いたら行かないと損だよ！〉

〈私も今回のアイテムで新しい装備を作りたいので〉

〈おっけー。なら早速行こうか〉

彼女たちはネット上で最近知り合ったパーティメンバー。このゲームに潜っている時は高確率で遭遇する。

いわゆるネット友達さん。一人称が私だから女の人だと思っているけど実際どうかかわからない。明らかに女性のプレイヤーネームでも男性の可能性がある。

というかこういうゲーム自体男性のプレイ率が高いんだから仕方ないことだろう。

〈やったああ！激レアアイテムゲット!!〉

〈よかったねあこちゃん〉

〈今日の目的はこれでクリアかな〉

〈うん！ありがとうりんりん、ひっさー！〉

〈いいよ。どうせ暇だったから〉

そうキーボードに打ち込みつつ手元の置き時計の時間を見た。

22時。頃合いだろう。

〈もう私は寝ようかな〉

〈ひっさーちよつと待って！〉

〈どうしたのあこちゃん？〉

〈あのね今週の土曜日って空いてる!?唐突なんだけどオフ会しませんか?〉

オフ会。ネット上で知り合った共通の趣味を持つ同志達がリアルで会うこと。全世界の人達のいくらかはやったことのある行為ではなからうか。

だが自分がやるとなると覚悟がいる。

もし相手が年上のガタイのいい男性だった場合逃げたくても逃げられない。傷物になってしまうこともありえるからだ。

だから普通に考えてオフ会というものは相手のことを前もって知っていなければやるのは危険だと私は思っている。

なので私としても結構悩みどころだが……まあ、いいか。

私の身に何かが起こったところで両親が心配するはずがない。

妹たちは心配するかもしれないが、もしそーゆーことになったとしても隠し通せる自信はある。

今まで周りを騙して来た演技力舐めるなよ。

〈いいよ。私も二人と会ってみたいと思ってたし。場所はどこにするの?〉

〈ひさちゃんも東京に住んでる人?〉

〈そうだよ〉

〈場所決まったらSNSで連絡するね〉

〈わかった。じゃあ今週土曜日ね!楽しみにしてるよ!おやすみ〜〉  
〈おやすみー!〉

〈おやすみなさい（\*☒?☒\*）〉

ゲームからログアウトしパソコンをシャットダウンする。  
椅子の背に体重を預けふっーと一息吐いて目を閉じた。

脳裏によぎるのはやはりフレンドの彼女たち。

私の予想ではあこちゃんも明るい子でりんりんは優しい子だと思う。

まあゲーム内とリアルじゃ全然違う可能性もあるから何とも言えないんだけど。

せめて女子であってほしいなー。

もうそろそろかな。

「朝日、来なさい」

扉越しに聞こえた1オクターブ低い声。ため息を吐いて腰を上げた。

また今日も悪夢の時間が始まる。

◇?◇?◇?

「っ!かは…っはー!」

「あんたがいなければ私の顔に泥を塗らなくて済むのに!なんであんたは!!」

理不尽な理由で殴られるのほもう日常茶飯事で、だいたいやられるのは夜遅く。紗夜と日菜が部屋にいる時。

殴ったり蹴ったり、腕や足だけでなくお腹までやるもんだからさすがに死にそうにもなる。背中を全力で蹴られた時は息が止まって本当に死ぬかと思った。

言うんだこいつらは。

テストの点が悪い。

スポーツなんか出来もしない。

その上素行不良。

なんでそんな面汚しがここにいるんだ、つて。

私がそうなっているのは全部こいつらのせいなのに。

私が全部悪いということになっている。

「お前、何してるんだ」

「あらお父さんおかえりなさい。今丁度悪い子にお仕置きをしていたところよ」

母親バケモは笑顔で答える。

何がお仕置きだ。ただのストレス発散だろ。

「そうか。なら俺からも教育が必要だな」

そう言っつてこいつらはまた私を殴ったり蹴ったりする。さつきと違うことといえば一人が私を押さえつけた上で殴れるところだろうか。

正直意識が朦朧としすぎて何をされてるかよくわからない。

「今日はこのくらいで勘弁してやる。感謝しろ」

「あと誰かに相談なんかしないでね。その時はもっと酷い目に遭わせるから」

寝室に戻る両親の後ろ姿を眺めながら下がっていく瞼を受け入れた。

次に目が覚めたのは夜中も3時を回ったところ。

痛む身体を無理矢理起こして自分の部屋へと足を進める。リビングで寝ていたとなると紗夜や日菜に勘づかれてしまう。それだけは困るんだ。

右足に力を入れれば激痛が走るし頭がフラフラして壁伝いじゃないと真っ直ぐ歩けない。

なんとかかして自分の部屋の扉を開け中に入った。鍵をかけてその場に倒れ込む。

本来ならケガのケアをしないといけないんだろうけど今の私にそんな気力はなくて、自然と下がる瞼をまた受け入れた。

それが週一以上のペースで行われる。体調崩すのも素行不良になるのも無理ないだろう。

だって、誰かがこうならなきやいけないんだから。

誰もが望んでいるはずのハッピーエンドを私はきつと迎えることができない。

サボり常習犯？ いやいや仕事です。

「姉さん！なんですかその格好は！」

「何って？ちゃんと制服着てるでしょー？」

「そういうことじゃありません！ピアスに指輪、あと髪も染めてるなんてどういいうつもりですか!？」

「どうも何もしたいからそうしてるんだよ。放っておいて」

「そういう訳にはいきません！」

朝、学校へ登校すると廊下ですれ違った風紀委員長に声をかけられた。

風紀委員長である私の分身の一人は私の身なりや態度に随分ご機嫌ななめの様子。

「擦り傷や包帯だって、また喧嘩でもしたんですか!？」

「紗夜には関係ないことでしょ」

「関係はあります。姉妹ですし、話してください！」

「嫌だよ。めんどくさい」

紗夜も毎日このやり取りするの疲れないのかな。

私は疲れる。というより傷の正体がバレないか心配している。

紗夜の小言を聞き流し特等席の屋上へと向かった。

授業なんて留年しない程度出席日数を稼げればいいのだ。就職先の決まっている身としては卒業さえできればいいくらいしか考えていなかった。

まあ真面目な妹はそんなこと知りもしないが。

一人は好きだ。誰にも関与されずに過ごせるから。

そう思いカバンの中に入れていたノートパソコンを取り出した。

部屋にあったものとは別の重量がどれよりも軽いヤツ。じやないと持ち運びも憂鬱だし。

それを起動させUSBを挿す。仕事の下準備はこれで終了。あとは書き進めるだけ。

私は小説家だ。ペンネームは「赤日あかひわ和ひき」本名のアナグラム。思いつかなかったからほぼ適当に付けた。

ぶっちゃけ本が売れてくれれば名前なんてなんだって構わないと思っていたし。

一作目はありがたいことに5万部売れているので高校生にしては高額な貯金を持っている。パソコンもそのお金で買った。

妹たちや両親は知らない。私の秘密。

だって知られたら今まで苦労して貯めてきた貯金取られちゃうでしょ？嫌だもんそんなの。お小遣いなんてものが貰えていない以上、なくなったら生活できないし。

「先輩、またこんな所でサボってるんですか？」

「やあ後輩、ここで会うなんて奇遇だね」

「なんで少し爽やかなんですか…」

「遠回しに拒否ってるの汲み取ってくれないかな？」

「それだと私の居場所がなくなっちゃうじゃないですか」

「サボつといて何言ってるんだか」

「そっくりそのまま先輩に戻しますよ」

隣いいですか？という律儀な言葉に仕方なく了承を出す。

時計を見ればもう既に授業は始まっている時間だった。

「それに私たちのクラスは今自習なのでサボりじゃないですから」

「それ、抜け出している理由でもないだろ」

「先輩は？」

「私は登校してすぐここに来たから知らない」

「サボり常習犯ですね」

「不登校児に言われたくはないかな」

これじゃあ集中なんてできやしない。そう思いパソコンを閉じた。  
そして隣の後輩、市ヶ谷有咲いちがやありさに向き合う。

「頭良けりや別になんでもいいじゃないですか？」

「さすが学年一位。でもちゃんと出席してないと大学も就職もキツいと思うよ」

「先輩も同じでしょ」

「小説家は関係ないよ」

サボり常習犯だろうが不登校児だろうが高校中退だろうが。小説家には何も関係ない。話さえ書ければ問題ないんだ。それが面白ければやめる必要もないしアニメ化やドラマ化、実写映画化すればなおさら。

「今日はあっち行くんですか？」

「んーどうだろーねー。早く帰らないとまた殴られるし、って早く帰らなくても変わらないけど」

家族の話を有咲と出来るのは、彼女が私の事情を知る数少ない人の一人であるからだ。じゃなきゃこんな話他人と出来るわけがない。

「証拠抑えて警察に行けば一発で逮捕確実なのにどうして行かないんです？」

「確かにそうだよ。あいつらはそれだけの罪を犯してるからね。でもその時は今じゃない。」

私はね、有咲。あいつらを絶望の淵まで落としたいんだ。けど今警察に行かれたら困るのは妹たちなんだよ。

高校生の間は学費に生活費もかかっちゃう。大学に行くとなると



もつとだよ。そんな中であいつらを消したら金がなくなっちゃうじゃん。せつかく妹たちには甘いATMなのに。引き出せるだけ引き出さないともつたないよ。

それにもし親戚の家に行くってなったら？親戚への負担が大きくなる。いきなりお世話になるわけにもいかないだろうし。

二人くらいなら私の貯金でどうにか出来るけどそれだと二人が納得しないから。それでバイトとかしてやりたいことに費やす時間が減ったら嫌だもん。

だから落とすのは今じゃないんだ。もつと後、姉妹が自立してこれから幸せになっていくって時に落としてやる。妹たちの幸せな空間にあいつらはいらない。刑務所の中で永遠に妹たちのことを想って泣き喚けばいい。そして私にやって来た仕打ちを後悔すればいい。

そうなつてこそ私の復讐は成功するんだ。そうじゃなきゃ意味が無いから」

「……………うわぁ……………」

少し早口めで話す私に有咲はドン引きした様子。

学校屋上で後輩に向けて何を話しているんだって感じだけど彼女相手に本心を隠す意味もないだろうから躊躇わなかった。

「先輩って重度のシスコンですよ。聞いてるだけで狂気を感じたんですけど……………」

「そう？…普通だよ」

一般的なのがどの辺かわからない以上私の中で姉妹愛はこれくらいあって当然なのだ。それにあいつらをずっと妹たちとくつつけて置くなんて姉として許せない。

「とりあえずそういうわけだから有咲は邪魔しないでね。邪魔するならいくら有咲でも容赦しないから」

「わかってますわかっています。だから殺気は仕舞ってください」

少し焦りながら有咲は言う。

別に殺気なんて出してるつもりないのにな。あいつらの話になるとどうしても出ちゃうだけ。

「でも近いうちに紗夜先輩にはバレちゃうんじゃないですか？」

「紗夜が？ いやいや気づかないよきつと。今までがそうだったし」

どんなに酷い怪我をしてもバレてなかったのに今更バレてたまるか。

私は私の使命を成し遂げる。絶対に、何がなんでも。

授業終了のチャイムが鳴る。

1時間目が終わるのなんてあつという間だ。

「ほら有咲、授業終わったぞ。さっさと教室戻れ」

「言われなくてもそうしますよ。それじゃあ先輩また後で」

素直に屋上から出て行く有咲の後ろ姿を見送る。

扉が閉まり完全に姿が見えなくなったところで再度パソコンを開くのだった。

買い食い、説教。

放課後、学校帰り。私は商店街のとある店を訪れていた。店の扉を開けばパンの良い匂いが鼻の中をかけていく。それだけで腹の虫が鳴きだしそうだ。

「いらっしやいませ朝日先輩」

「久しぶりだね沙綾」

レジの前で店番をしていた同じ高校に通う後輩の山吹沙綾やまぶきさあやは笑顔で挨拶してくれた。

沙綾とは中学の頃からの付き合いではあるが高校に入ってから疎遠になっていたのだ。高校に入ってから中学の時よりも問題児になった私に最初は戸惑っていたけど慣れてくれたのかすっかり仲良しに戻っていた。

怖くないのかと聞けば「朝日先輩は変わってませんから」とのこと。

「今日も食料調達ですか？」

「そうだよ。じゃないと死んじゃうからね」

「メロンパンとチョココロネは焼き立てですよ」

「ならそれ貰うよ」

「毎度ありがとうございます」

焼き立てと言われたら買いたくもなる。そんな私の心情を見越して沙綾は薦めてくる。やっぱり商売上手だ。

トレイの上にメロンパンとチョココロネを置きつつ店内を見て回る。あいかわらず美味しそうな物ばかりで目移りしてしまう。

「新作つてもう出来たんですか？」

「いやまだだよ。ちよつとあいつらのこともあつて進まなくてね」

沙綾も有咲同様私の家を知っている。

有咲の時と違って自分から曝け出したわけではなくケガの手当てを  
してもらった時に話すことになった感じだが。

「あーあからさまに暗くならないで。同情される方が嫌だから」

「そう言われても……」

「いい的沙綾は気にしなくて」

あ、カレーパン美味しそう。

「先輩がそう言うならいいですけど、無理はしないでくださいね」  
「無理って……」

沙綾にだけは言われたくないから。という言葉呑み込む。

私だって人にどうこう言えたものじゃない。

「沙綾、ちよつとこつち来て」

「え、なんですか？」

自分だって家族のために無茶するくせに。強がり。

呼べば少し納得のいかない表情の後輩。隣に来たところで彼女の  
頭に手を置いた。キョトンとした顔が視界に入る。

「心配しすぎ。私なら大丈夫だって」

「……子ども扱い、しないでください」

「はいはい。ごめんごめん」

「お会計お願いします」と言えばパンを一つ持って沙綾が戻ってきた。  
それも一緒に袋詰めされる。

「あれ、これ」

「私のおごりです。頑張ってください」

「ありがとう沙綾」

沙綾は慣れた手つきで一つの袋にまとめていく。

表示された金額を出して一つパンの多い袋を持った。

「じゃあまたね」

「はい。また学校で」

店の扉を開こうとドアノブに手をかけた時、沙綾の声が耳に届いた。

「先輩、新作楽しみにしてますね！」

「期待してて」

笑顔を見せて店から出た。涼しい風が頬を撫でる。

その追い風を受けながら家まで歩き始めた。

◇?..◇?..◇?

「姉さん、今までどこに行ってたんですか」

「…ああ、紗夜。ただいま」

「おかえりなさい。それでどこ行ってたんですか」

家に帰れば風紀委員長が仁王立ちで待っていた。腕を組み、表情は

険しい。

激おこなのが手に取るようにわかる。

「どこって学校帰りにパン屋に寄っただけ。時間も遅くはないでしょ」

「学校？私は今日一度も姉さんが教室にいる姿を見ていませんが？」

「へえー奇遇だね。私も紗夜の姿を朝以外見てなかったよ」

「またサボリですか？」

なんだ、わかってるじゃん。いちいち言わせたいの？めんどくさいな風紀委員長。何も気にしなくていいのに。

「いい加減授業に出てください。進路に響きます」

「もうだいぶ響いてるし今更変わるんないよ。テストは点取れてるんだしいいじゃん」

「よくないです。成績はテストだけで付けられるわけではないんですよ？わかってますよね」

母親のような説教に少し苛立ちが募る。

私がやっていることなのに理不尽だ。

「紗夜は真面目すぎ」

「姉さんは不真面目すぎです」

「真面目なのはつまらないからね」

「子供の悪足掻きだとは思わないんですか」

「悪足掻きで結構だよ」

紗夜の隣をすり抜ければ腕を掴まれた。やけに力が入っている。逃がさないと言っても言いたげだ。

「…答えてください。なぜわざと相手を怒らせるようなことをするん

ですか」

「何の話？そんなことしてないよ」

聞いてもどうせ解決できやしない。

「ならどうして校則を知ったうえで破ったり私を怒らせるようなことを言ったりするんです」

「気のせいでしょ。自惚れはやめなよ」

紗夜にも日菜にも。だったら

「姉さんはなぜ変わってしまったんです。中学の頃はあんなに」

「紗夜には関係ないことだよ。気にするだけ時間の無駄だから」

「っ！時間の無駄って、私は姉さんを心配して！」

突き放してしまった方がいいと気が付いたから。

「しなくていい。紗夜はいつも通りに過ごしてよ」

「姉さん！」

紗夜の声を無視して自分の部屋へと戻り制服のままベッドに倒れ込む。

今日は仕事もオンラインゲームもやる気がない。

紗夜の表情は見れなかった。だってきつと悲しい顔をしているだろうから。

知っているのだ。紗夜が私との仲を元に戻そうとしていることは。

私はそれを拒否し続けている。

妹たちが自分から離れていくことは怖いくせに、自分は妹たちを遠ざける。今は絶対に離れないと自信を持っているがそれもいつまで続くかわかったもんじやない。

もしかしたらあいつらとの縁を切る前に離れているかもしれない。  
怖いのに、苦しいのに、辛いのに、私は茨の道に足を突っ込んで傷  
ついて。

本当にバカだな。



オフ会当日、元クラスメイトと出会いました。

土曜日、運命の日。

朝は11時20分。私は待ち合わせで指定された場所に來ていた。理由は楽しみであり不安でもあったあこちゃんとりんりんとのお会合のため。

予定の時間は11時30分。あと10分だが人が多くて二人がどこにいるかわかりやしない。唯一の連絡手段であるSNSでダイレクトメッセージを送る。すぐに返事が返って來た。

〈着いたけどどこにいる?〉

〈近くのファストフード店にいるよ。あこちゃんも一緒だよ〉

ファストフード店はすぐに見つかった。

席は入って一番右奥らしい。それを頼りに進んで行けば楽しげな声が段々と大きくなっていく。

「ねえりんりん、ひっさーってどんな人だろうね!あこ会えるの楽しみだよ!」

「うん、そうだね...私も楽しみ...だよ」

どうやらここで間違いないらしい。二人の声質的にも女の子だ。

ひとまずお持ち帰りされる心配はないだろう。

けどすごく仲良さそうだな。私が間に入ってもいいものなのか。ダメそうなら先に帰らせてもらおう。

「あの、あこちゃんとりんりんで...えっ!」

声を掛けた相手に私は動揺を隠せなかった。

だって彼女は...

「ひ、氷川さん!？」

「え、紗夜さん!?! いやでもピアスなんてしてないし、だ、誰ですか!？」

同じ高校の白金燐子<sup>しろかねりんこ</sup>。

今年はクラスが違うが去年は同じクラスだったから覚えている。静かで休み時間も本を読んでいるようなタイプ。クラスでも目立たない存在だった。サボりがちな私が覚えているのも奇跡に近い。

が、その彼女がここにいるというのはそう言うことなのだろう。まさか初オフ会で知り合いと出会うハプニングが起こるなんて誰が想像していたことか。

「二人があこちゃんとりんりんなんだよね。色々説明したいから座ってもいいかな？」

コクリと頷く彼女たち。片方のソファに移動し対面に私が座る。目に見えて困惑している二人にふうーと息を吐いた。

「とりあえず自己紹介しようか。わかっていると思うけど私が『ひさ』。本名は氷川朝日よ。よろしく」

「えっと、『聖墮天使あこ姫』の宇田川あこです」  
「……『りんりん』、白金燐子、です」

プレイヤー名ほとんど名前変わってないのか。  
ネットゲーマーにしては珍しいな。

「あこちゃんは紗夜のこと知ってるみたいだね。私は紗夜の姉だから」

「紗夜さんのおねーさんなんですね。最初紗夜さんが来たのかと思つてびっくりしました」

「……………」

あこちゃんの方は元気で話しやすい。予想していた人柄と同じだ。りんりんに関しては確かに優しい人だろうけど、どちらからと言うと断れない人だろう。

無邪気さが前面に押し出されていていかにも後輩って感じだ。りんりんは緊張しているというか怯えているというか。普通腕に包帯巻いて目つき悪い奴が現れたら誰だって怯えるけどね。

「りんりん？大丈夫？」

「……う、うん……」

あこちゃんが不安げにりんりんを見つめた。

りんりんが怯えているのが私のせいだとわかっているがどうしたもんか。

「……呼び方はりんりんでもいいのかな？色々思うことはあるだろうけど学校の時の私と学校外の私は別人だと思っしてほしい。今は学校みたく無関心な態度も反抗的な態度も一切取らないと約束する。だからお願い。話を聞いてくれない？」

なるべく温厚に、これ以上怯えられたりしないように、優しく話しかける。

そもそもあの態度は好きで取っているわけじゃないからその方が助かる。怯えられたままは辛いし。

「……わかり……ました」

「ありがとう。助かるよ」

これで断られたらショックだった。

「まず聞きたいことはどうして今日オフ会をしようと思ったのか。雰

困気から察するに二人の仲は良いんだろうから二人の方が良かったんじゃない?」

「確かに二人でオフ会やるのも楽しいけどひっさーにも会ってみたくて……」

「だからって女子高生二人が急に会おうって、相手が男だったらどうするつもりだったのさ」

「もし変なことされそうになったらおねーちゃんに連絡するつもりだったから大丈夫だよ!」

「……あと、あこちゃんは……中学生、です……」  
「なおさらダメでしょ」

中学生って、余計危ない。

でもなんか納得だ。やけに子供っぽい高校生だと思ってたし、あこちゃん、妹感強いし。

「あこちゃんはどこの中学?」

「羽丘の中等部です!」

「羽丘か……」

なら日菜の後輩ってことになるのか。道理で見たことないわけだ。

「朝日、さんは紗夜さんと同じ花女ですか?」

「そうだよ。意外かな」

「いえ、そんなことないですよ!制服も似合ってるだろうし、カッコいいと思います!」

「かつこいい、のかな……?とりあえずありがとう」

「ただピアスなんてしてたら紗夜さんが怒りそうだけど……」

「ちゃんと紗夜の性格わかってるね。正解だよ。」

「紗夜は堅物風紀委員長だから。」

「実際怒られてるよ。ほぼ毎日」

「ほぼ毎日!?!」

頬杖を突きながら言えば見事なオウム返しに耳に刺さった。紗夜のイメージが強いのか意外とでも言いたげだ。

「私は紗夜と違って不真面目だし、日菜と違って才能もない。だから何の役にも立たないことばっか趣味にしてくだらない日常を楽しんでるんだ」

本気なんか出さなくていい。二人が輝いて見えるなら私はどれだけでも落ちてやる。そのためだったらなんだってしてやる。

「……でもテスト……毎回高得点じゃ、ないですか……」

「80点は別に高得点じゃないよ。だって天才は100点しか取らないし秀才は常に90点以上だからね。毎回80点でも素行不良が重なれば姉妹内の評価は下がるもんだよ」

「そんなことないと思いますけど」

「あるよ。私たちの家ではね」

だから仲の良かった姉妹の関係は変わった。変えられてしまった。

私は孤立して落ちぶれて、グレた。

紗夜は日菜からの期待の目に耐えられなくて拒絶した。

日菜は空気を読めずに避けられた。

全部全部比べられてきたせい。

それぞれがそれぞれの重荷になってしまっている。

ただ同じ時に生まれたというだけでどうして私たちはすれ違わないといけなかったんだろう。

私は姉妹と仲が良くない。

「まあ私の家の話はどうだっていいよ」

これ以上話すつもりもないし。

それよりも気になってることがある。

「そういえば聞きたかったんだけどさ。りんりんが紗夜のこと知ってるのはわかるんだけど、なんであこちゃんや紗夜のこと知ってたの？」

「紗夜さんとあことりんりんは同じバンドのメンバーなんです！」

「バンド、メンバー？」

「はい！Roseliaって名前で、ちょーかっこいいんです!!」

待て待て、紗夜って少し前は違うメンバーとバンド組んでたじゃないか。変わり身早くて。いや紗夜の性格的には当然かもしれないけど。てかこの二人が紗夜と同じバンドにいることが全く想像がつかないんだけど。

「結成してどれくらい経った？」

「んー、一カ月くらいかな……」

妥当な数字だな。まだまだ始まったばかり。

だけど紗夜は日菜と比べられたくないからってギター全力すぎるからな。そのせいで舐めた演奏や態度、音楽に対する向き合い方にはだいぶ辛口だ。

今まで色々なバンドに加入して脱退してきた。長くても半年くらいまでしか続いていないのも事実だ。

二人には悪いけどRoseliaも続くとは思えなかった。

「そっか。頑張りなよ」

「はい！」

どうしよ可愛すぎるよあこちゃん。

「あこちゃんはどの楽器担当してるの？」

「あこはドラムです！」

「へー、ドラムか」

小さいのにドラムなんてよくやれるね。私なら無理だよ。

多分バンドに必要な楽器の中だと一番合っている気はするけど。

「大変じゃない？」

「確かにRoseliaの曲は難しいし練習も大変だけど、それ以上に楽しいんだ！」

「……そうなんだ。よかったね」

楽しいならそれに越したことはない。それならきつとこの先もバンド続けていけるだろうし。

「でも、体調管理はしっかりしなよ。体調崩したらせつかくの曲も台無しだからね。特にドラムは崩れちゃったら演奏が全部ダメになることだってあるから」

「はい！わかりました！」

言った後で中学生相手にプレッシャーになる発言かと思ったけどあこちゃんは素直に頷いていた。ニコニコしている。

「あの朝日さん。紗夜さんって家でもずっとギターの練習してるんですか？」

「……どうして？」

「紗夜さんの演奏ってちよーかつこよくて痺れるんです！そう感じられるくらい練習してるってことですよね？だから家でも練習してるのかなって！」

「…そういうことね。興味津々なのはいいけどあこちゃんの望むような回答はできないよ」

「え？」

「私は、妹たちと仲が良くないから。紗夜のことと日菜のこともよくは知らないんだ」

ずっと関わって来なかった。今更だ。二人が何をしているようが把握なんかできるわけない。それだけでもう離れてしまっている。

「ごめんねあこちゃん」

「う、ううん。あこの方こそごめんなさい…」

「なんであこちゃんが謝るの？怒ってないから安心して」

不安げな瞳に笑いかけた。対面に手を伸ばしてあこちゃんの頭を撫でてやる。

「今日は楽しく遊ぶために集まったんでしょ？これからどこ行くか決まってる？」

「…近くでNFOの…コラボカフェがあつて…」

「ならそこ行こうか」

私は席から立ち上がり二人に手を差し出す。渋々と言った感じで二人は私の手を取った。

ファストフード店を出てコラボカフェを目指す。

「コラボメニュー頼むと限定アイテムが手に入るですよ！」

「そうなの？」

「……はい……楽しみ、です…」



私から話を振れば最初は戸惑っていたもののすぐに会ったばかりの時と同じテンションに戻っていた。

「そういえば朝日さん！朝日さんは何か楽器やってるんですか？」

「私は？私は紗夜と同じギターだよ」

「そうなんですか！カッコいいですね!!」

カッコいい、か。カッコいいなんて、そう言われたのはいつぶりだろう。

声を上げるほどのことでもないのに。あこちゃんは無邪気で少し羨ましいや。

「まあ今はもうやってないけどね」

「ええっ！なんで!？」

「私が先に始めたのに紗夜の方が上手くなってやる気なくしちゃったんだよ。めっちゃくちや演奏が正確で引け目感じたから」

嘘は言っていない。

本当の理由でもないけど。

「そうなんだ……あこ朝日さんのギター聞いてみたかったなー」

「…私も…です……」

「ごめんね。落ち込まないで。機会があれば弾いて見せてあげるからさ」

「ホント!!」

「もちろん。約束するよ」

「わーい！楽しみにしてますね朝日さん!!」

嬉しそうに頬をほころばせるあこちゃん。なんか本当に妹みたいだ。りんりんは優しく見守っていて、姉だな完全に。

『おねーちゃんこれ教えて!』

『教えてって、日菜の方が上手いでしょ…』

『できない技があるの!ね、お願い!』

『日菜、姉さんが困ってるじゃない』

『…今日はやらないといけないことがあるからさ、また今度でもいい?』

『わかった!約束だよ!楽しみにしてるね!』

「っ!?!」

……ああ、一体どこで私は。

「…朝日、さん?」

「どうしたの?」

「なんでもないよ。それでなんだっけ?」

「そうそう、この前学校でね…」

せめて彼女たちとは、真摯に向き合おう。

きつとそれも私に課せられた使命の一つかもしれないから。

仲良くしたいとは思っけど。

「今日はありがとうございました朝日さん！」

「楽しかったよ、ありがとね。あこちゃん、りんりん」

「…私も、楽しかった…です…」

NFOのコラボカフェは思いのほか満足できるものだった。

料理は味方だけでなく敵キャラのもあって、敵をどんどん駆除しているようで少し楽しかった。

二人に共感を求めれば目を合わせて苦笑された。

「…印象…変わりました…」

「目キラキラさせてるし、朝日さんって意外と子供っぽいんですね」

仕方ないじゃないか。コラボカフェなんて初めて来たんだから。テンション上がるのも無理ないだろう。

そんなこんなで楽しんだオフ会。日も暮れてきたことだし今日はもうお別れだ。

「またオフ会誘ってよ。予定が合えばいつでも付き合うよ」

「ホント！いいの!!」

「うん。りんりんもいい？」

「…はい…もちろんです…」

とは言っても学校ではこんな優しく接せないんだけどね。ごめんね、と心の中で謝っておく。

「あー、ただ一つお願いがあるんだけどいいかな」

「なんですか？」

「今日私と会ったこと、紗夜と日菜には黙ってほしい」

「…どうして、ですか…」

「言ったでしょ。二人とは仲良くないって。バレて色々話聞かれるのが面倒なの。だからお願い」

二人に仲良くしてるってことがバレたら問い詰められるに決まってる。特に日菜に。紗夜にも多少は責められるだろう。

ダメだよそれは。わざと距離を置いているのがバレたら困るんだ。

「よくわからないけど、わかりました!」

「家まで送って行くか?」

「…すぐ近くなので、大丈夫…です…」

「そっか。じゃあまたね」

そう言つて私は二人に背を向け歩き出す。背後からの元気な声には振り返らず軽く手を振った。

今日は楽しかった。誰かとどこかへ行つて何かをするの自体久しぶりだったし、何より終始笑顔であつてくれたことが嬉しかった。

また、があればいいんだけど。いつになるのかな。そもそも次なんであるのかな。学校で会つた時今日との落差でりんりんをびっくりさせてしまう気がしていない。

一体どうしたものだろう。今更学校での態度なんて変えれないし変えたところで受け入れてもらえるわけない。

「あれおねーちゃん?」

家に着き自分の部屋へ戻ろうとした私を呼ぶ声。目を向ければそこにいたのは日菜だった。テレビでバラエティ番組を見ていたようだ。

が、私を見た途端不思議そうにしていた。

「なんで一人なの?」

「はあ?一人じゃ悪いのか?」

「え、だって、お母さんたちと出掛けてたんでしょ？」  
「は？」

誰があいつらと出掛けるかよ。

「何の話だ」

「朝お母さんたちが『今日は朝日と出掛ける予定だったんだけどどこに行ったか知らない？』って聞いてきたから。昼には家から出て行つたし、てつきり合流して出掛けてたんだと思つてたよ」

着信入ってなかった？

そう聞かれて私は思い出す。りんりに連絡を入れて以降電源切ってたんだ。着信なんか入っても気付くわけがない。

朝早く家から出て仕事場で時間潰してたのが仇になってしまった。  
これはキツくやられるな。

「……あー、報告どーも」

「あ、おねーちゃん！」

「…何？」

「一緒にテレビ見よう！おねーちゃんが好きな動物番組録画してたんだ！」

「…紗夜と見なよ」

家のリビングで好き勝手したらどんなお仕置きが待ってるか。日菜には悪いけどその提案に乗ることはできない。

それに日菜の言っていた動物番組は朝から観ていた。可愛くて悶え死にそうだったよ。

「おねーちゃん帰ってくるの遅いつて連絡あったんだよ！だからいいでしょー！」

「嫌だよ。紗夜と見た方が喜んでくれるだろ」

いつの間にか二人が連絡取るまで仲良くなってる。進歩じゃん。日菜のこと遠ざけてたのに、やっぱしつこく声掛けられてると変わるんかねえ。

「確かにおねーちゃんとも見たいけど、先におねーちゃんも見たい！」  
「付き合いきれないな。私、部屋戻る」  
「ちよつとおねーちゃん！」

日菜の声は無視して二階への階段を登っていく。  
日菜がどうかか私と紗夜のことを繋ぎ止めようとしてくれていることはわかっていた。持ち前の明るさと元気さで元に戻そうとしているのだから。私だって、戻りたいんだ。  
けどだからってそれに乗るわけにはいかない。  
必死に興味ないフリしているんだからやめてくれ。  
想いが溢れて止まらなくなるから。

部屋に鍵を掛けてパソコンを開いた。  
早く今日手に入れたアイテム使ってみよう。

画面を進みコード入力する。読み取りが完了すればプレゼントボックスにアイテムが追加されていた。

《ロードリエスのローブ、ロードリエスのブーツを手に入れた》

SEと共にそんな文字が表示された。  
ロードリエスのローブは耐久性が高く、物理攻撃に対する防御力を10%減らしてくれる。ロードリエスのブーツも同じく耐久性が高く、地形変化の物理ダメージを10%減らしてくれる。

装備の説明を見て思ったことがある。  
え、これ普通にいいアイテムじゃね？ちよつとリアルマネー使っただけでこんなアイテム手に入るの？めっちゃ得じゃん。

へひっさー！コラボアイテムゲットした!?!>

へうん。装備した時の能力が思いのほか強くて驚いてる  
へだよね！あこもびっくりだよ！

あこちゃんが話しているのを想像して頬が緩んだ。今日会ったからか文字だけでその熱量が伝わってくる。可愛くて仕方がない。

へりんりんは？まだ入ってないみたいだけど

へりんりんは家族と夜ご飯食べに行くってさつき連絡があつたよ

へあこちゃん、りんりんと仲良いよね。元々知り合い？

へひっさーと同じでオフ会で初めて会ったんだよ

マジか。あこちゃん君中学生だろ。身の危険とか感じなかったの？

りんりんもりりんんだ。あの性格でよくオフ会参加できたよね。

絶対怯えてたでしょ。

へ最初は緊張してたんだけど、段々楽しくなっちゃって気付いたら仲良くなってたの！

へ凄いね。さすがあこちゃん

人懐っこいし可愛いし素直だし。こんな子が目の前に現れたらそりゃ仲良くするよ。

何にでも興味津々って感じだったし、怒られるかもって思った時なんて完全に子犬だった。

へあこちゃんはそのままクエスト行くの？

へうん！そのつもり！ひっさーは？

へ私はアイテム受け取りに来ただけだからもう落ちるよ

へそっか。じゃあまたオフ会でね！

へまたね

チャットを終え、ゲームからログアウトする。パソコンもシャットダウンした。

明日の日程を確認しようとスマホの電源を入れる。ロック画面になればえげつないほどの通知が表示されていた。

100件とか、引くレベルである。ここまできると逆にあいつらは私のことを気に入っているのではないかと思えるくらいだ。

そんなことは天地がひっくり返ってもありえないが。こりや何されるかわかんないな。

どうせ今しか休める時間はない。なら今休まなければ。そう思いベッドに転がった。思い出すのは楽しかった記憶。

可愛かった。楽しかった。またねの言葉が嬉しかった。次が楽しみで仕方ない。こんなことを思う私は単純だろうか。

緩む頬はそのままにそつと目を閉じた。



後輩にキスされるってなんて名前のギャルゲー？

重たい瞼を開く。

いつもより低い視線にため息を吐いた。その行動だけで色々な部位が痛むのは重傷だろう。

時計の針はてっぺんを2週も過ぎていて、正直寝すぎだ。昨日のこっとと床に倒れ込んだこともあつて身体は痛かった。

起き上がろうにも動きたくない。だからその場でダラダラしていることにした。

容赦なんてなかった。

自分たちが誘ったのになぜ電話一本も取らないのか。なぜ掛け直さないのか。舐めているのか。

言われたことは記憶にうつすらとしか残っていない。多分そんな感じだった。

そして殴られる。念入りに、出かけた時に買ってきたのであろうロープで腕を縛られて、動けないところを一方的に。いつも一方的なのにどうして縛ったのか。

紗夜たちにバレないようにロープは外されたけど痕は残っている。

痛々しい、赤い傷が。また包帯を巻かなければ。

今日は、ここにはいないでおこう。ここ以上に気の休まらない所なんてないから。そう思えば行動は早かった。

無理矢理身体を起こして私は鞆に着替えとスマホ、充電器、一応筆記用具を詰めて部屋を出た。とりあえず包帯を巻くまでの間は黒のパーカーを着ることにした。下は長ズボンだし、傷がバレることもない。

偶然にも誰かに会うことはなく家から出ることができた。スマホを取り出し、電話履歴を遡る。見つけた名前に速攻掛けた。

「もしもし」

「今時間あるか？」

「どうしたんですか？」

「折り入って頼みがあるんだけどいいかな？」

痛む足によるけそうになるのを必死に堪える。それが伝わったのか彼女も聞く耳を立ててくれた。

「やまぶきベーカーリーでパン買って来てくれない？お金は後で払う」

「……あっちに持っていけばいいんですか？」

「話が早くて助かるよ。お願いしていい？」

「すぐ行きます」

淡々とした声に電話を切られる。

ホントに頼みを聞いてくれるのはありがたいけど、やってたこと後回しにして私のこと優先してないよな？それは彼女の為にもやめてほしい。

思い通りに進まない身体に苛立ちを覚えつつ歩を進める。

見えてきたのはとあるアパート。新しく建てられたばかりの新築。ポケットから鍵を取り出し借りている部屋の扉を開いた。電気を付ける。数日前に訪れた時と同じく、部屋の中は変わっていない。

最初から備え付けられていたベッドに冷蔵庫、キッチン。私がいち足したのは机、パソコン、本棚、あとは思い出の品くらい。無論本棚には数々の有名小説が並んでいる。ここから学校に直行することもあるためクローゼットの中には夏服と冬服どちらも置いていた。

とりあえず荷物を下ろし彼女が来るのを待つ。

机の下から救急箱を取り出し机の上に置く。

ベッドに転がり天井を見上げた。今日は仕事をする気にもなれない。

しばらくボーッとしていたらチャイムが鳴った。起き上がり扉を開けば呼んだ人物以外にもう一人いた。

「持ってきましたよ朝日先輩」

「こんにちは。市ヶ谷さんについてきちやいました」

有咲と沙綾が目の前にいた。

有咲は私と呼んだ。けど沙綾は一体どこから？やまぶきベーカーリーに行つた時か？てかこの二人つて仲良いのか？

「まあいいか。上がって」

二つの「お邪魔します」が重なる。そのまま中へと入つてきた。

「朝日先輩。もしかして足怪我してますか？」

「…そう見える？」

「そうにしか見えないですけど」

隠し通せるはずないしその気もないから早々と白状する。自分一人だとやらないといけないこともやりたくないと思つてしまうから彼女たちの存在はありがたい。

どこからか取り出された袋に氷を入れたのは沙綾だった。

有咲は机の上にパンを置き、入れ替えて救急箱を手を取った。沙綾も私をベッドに背を向ける形で座らせる。そして痛む足首に氷を当ててくれた。

「じゃあ朝日先輩、脱がせますね」

「いや一人でもできるって…」

「甘えるのも大事ですよ」

甘える必要のないのでは？と思うも言つても聞かないだろうから沙綾の好きにさせることにした。パーカーのジッパーを下ろし抜き取る。その下の肌を見て二人は息を飲んだ。眉をひそめている。

「…酷い……」

「今回は、何されたんですか」  
「ロープで縛られて殴られた。それだけ」

二人は納得いってない様子。でも事実だから仕方ない。盛ってるわけでも控えめに言ってるわけでもない。

「…どうして、朝日先輩だけがこんな目に遭わないといけないんですか……」

「どうしてだろうね。私も知りたいよ」

沙綾は家族と仲良しだから信じられないんだろう。けどこれが現実だ。変えられはしない。

沙綾はなぜか悔しそうに歯を食いしばる。見ていられなくて頭を撫でた。

「沙綾が苦しまないで。私は大丈夫だよ」

「…子供扱い、しないでください」

「私からしたら年下は子供だよ」

いつか似たようなことをした。頬を膨らませ不服です、とても言いたげで口元が緩んでしまう。

普段大人っぽく見えても中身はまだまだ子供だ。

「…そんなことしてねーで早く手当するぞ」

「あれー？市ヶ谷さん拗ねてる？」

「有咲も頭撫でてやろうか？」

「は、はあ!?そんなんじゃねえし!朝日先輩も撫でようとすんな!」

顔を赤くして怒る有咲。やっぱり有咲はいじりがある。本人も内心は嬉しいだろうしいいよね。

「ごめんごめん。手当お願いね有咲」

「私も手伝うよ市ヶ谷さん」

「からかってねーで最初からそうしろよな」

呆れたように有咲は言う。有咲の反応が好きでやってるって気づいてるのかな？

私は二人に腕を取られ処置をしてもらう。両手が使えないため何もやることがない。だから天井でも眺めることにした。茶色のそれを見ていれば腕に別の感覚。

「……沙綾？何してるの」

「見てわからないですか？」

いや何されてるかはわかってる。だがなぜそうしたのか理解できない。

有咲に関しては顔を赤くしていた。こっちだつて恥ずかしい。

「……どうして？」

「傷が痛々しくて見てられなかったからです」

薄く笑う沙綾に頭を抱えた。

なんでこの子は腕にキスなんかするかな。

「なら包帯巻くだけでもいいでしょ」

「まあそうですけど……つい」

ついって……ホントになんなんだ。

「朝日先輩は、嫌でしたか？」

「……それはズルい」

嫌ではない。恥ずかしいだけ。てか私が嫌でないのを見越して聞くのはダメだろ。

私と有咲とは対照的に沙綾は普段通りの笑みを浮かべる。変なところで余裕発揮するな。

「い、いいからそんなことしてないで！手当終わらせろよ山吹さん！」  
「何怒ってるの市ヶ谷さん？別に私は先輩のこと独り占めしてるわけじゃないよ？」

「は、はあ!?!何言ってるんだよ！そ、そんなじゃねえ！勘違いすんな!!」

「え、有咲私のこと独り占めしたかったの？気付けなくてごめんね。抱きしめてあげようか？」

「先輩も悪ノリすんな!!」

ふざける私たちに有咲のツツコミが炸裂。二つの笑い声が部屋中に響いた。

有咲を宥めつつ手当を再開してもらおう。

有咲は丁寧に、沙綾は慣れた手つきだった。

「はい、終わりました」

「ありがとうございます。助かったよ」

「いいですよ。私たちが勝手にやってることですし」

「そうだったとしてもだいぶ楽になったからさ。素直に受け取ってほしいな」

お礼に今度何か奢ってあげよう。二人には借りしかないし。

「…あ、すみません。家から電話です。ちよつと出てきますね」  
「おーわかった」

沙綾はスマホを片手に部屋から出て行く。

有咲と二人。いつもは流れない静寂が訪れた。私の腕を見つめたまま有咲は動かない。

「…有咲？」

だから、驚いてしまった。

有咲の意外な行動に。

「なん、で急に…」

「…ちゃんと元に戻ってほしくて」

「なんだそれ」

「私は朝日先輩の音が好きだったから」

少し大胆な行動に頬が緩んでしまう。

が、ストレートな言葉には泣きそうだった。

「…朝日先輩の方が私なんかより辛いつてことは知ってます。でもそれでも私は、あの音が好きだった。今でもまた聞きたいって思ってるから」

有咲は再度手首にキスを落とす。くすぐったくて身じろいだ。でも有咲が手を離してくれない。

…変な気になりそうだ。

「…ワガママですよね。すみません」

離してくれた時には同時に謝罪が飛んできた。申し訳なさそうに眉を下げている。

その表情はこっちが悲しくなるからやめてくれ。

「朝日先輩、市ヶ谷さん。私店に戻らないといけなくなったのでもう

「帰りますね」

「私も帰る」

「え、市ヶ谷さんも？」

「なんだ？私が一緒は嫌なのか？」

「いやそんなことないけど…」

部屋に戻って来た沙綾がチラッと私を見る。不安げに見えた。その顔を見ていたくなくて私は二人を帰るように仕向ける。

「ほら、明日は学校なんだから帰りなよ。私なら二人のおかげでもう元気だから」

「…わかりました。それじゃあまた明日」

「……………さようなら」

二人を見送り、扉に鍵をかける。使っていた氷嚢は流し台に置きベッドに座った。

視線を机の横に移動させる。

ライトグリーンのギターがこちらを見ていた。



過去を羨み、未来に怯える。

譜面通りに指を動かす。それに合わせ口ずさむ歌。

目の前の観客たちが真剣に私の演奏を見ているのがわかる。

最後の四小節。それを弾けばこの曲は終わる。

初めて完成させた曲はとて前向きなものだった。

「わあー！おねーちゃんギター上手だね！」

「正確に、でも生きてるみたいな音色：かっこいいわ姉さん」

「…そう？ありがとう二人とも」

二人の素直な反応がむず痒くて頬をポリポリ搔く。けど上手く弾けている実感もあつたからそう言われるのは嬉しかった。

「ね！もつと弾いて！」

「私も聞きたい」

キラキラと目が輝いている二人。

期待には答えなきやね。おねーちゃんなんだから。

「ホント？なら頑張っちゃおうよ！今度は二人も一緒に歌おう！」

私が弾けば歓声上がる。それに調子付いて自由なテンポで弾いてみたり、正確に弾いてみたり。

質の違う三つの歌声が部屋中に響いて、全員が良い笑顔を浮かべていた。

夕日が出る前に始めたはずのミニライブは結局夕飯になるまで続いた。

まだ関係が良好だった頃のとある一日である。

◇?◇?◇?

中学一年生の時、日菜と同率一位を取ったご褒美に買ってもらったライトグリーンのエレキギター。ずっと相棒でかけがえのない親友だった。

毎日練習して、その度に上手くなっていくのが嬉しくて。私の部屋で定期的に行われたミニライブを楽しみにしてくれる人がいた。

でも今の私はその相棒を上手く弾けない。

分厚く少しだけ硬い指先を握りしめる。昔はもつと硬かった気がする。練習してないから腕は落ちてく一方。

とは言っても練習なんかろくにできやしない。

久しぶりに、弾いてみることにした。

相棒を持ちストラップを肩から掛けチューニングを始める。チューナーはどっかにしまっただけであるけど探すのが面倒だからだいたいでいい。本格的に弾くつもりもないから適当でいいだろう。誰にも迷惑かからないし。

簡単にコードを押さえる。

：うん。まだ覚えているし押さえられる。これなら今日こそいけるかな。

譜面は頭に入っている。そう思って思い出の一曲を弾き始めた。問題なく前奏が終わり歌も歌う。意外と弾けている事実が少しだけ信じられない。でもこれならとサビに入ろうとした時。

「ッ!？」

手首に激痛が走った。ピックが重力通りの運動をする。

演奏は止まり、痛む手首を握りしめた。痕が残るのではないかってくらい、強く。

数十秒か、数分か、はたまた数十分か。

治まった痛み。荒れた息遣いを落ち着かせていく。額に流れる汗が床へと落ちた。

落ち着き次第、ギターを定位置に戻す。

「やっぱりまだ、全然ダメみたいだ。」

後遺症は、二年経っても治ってはくれないらしい。

ベッドに寝転がる。

微かに震える指を中心に猫のように丸まった。

また、繰り返した。

あいつらに暴力を振るわれるようになってから、私の手は言うことを利いてくれない。普段はなんてことないのに、ふとしたことで走る激痛には耐えられない。パソコンをいじっている時はそうでもないのに、どうしてギターを弾く時はこうなるんだ。

私が何したって言うんだよ。

なんで私が大切な物を奪われないといけない。

なんで理不尽なことを言われないといけない。

なんで露骨に嫌な態度を取らないといけない。

なんで私だけが不幸でいないといけないんだ。

全部自ら進んで来た道なのに、後悔が大きい。

私はただ妹たちを守りたかつただけなのに。

どうして私は何もかもを奪われる。

もしかしたら全て守るための代償なのかもしれない。

でもそうだとしても、いくらなんでも、酷いだろ。

望むものは手に入らぬまま、過去を羨んでいる。

ただ最悪の未来に怯えている。

君たちは何も知らない。

学校へ行つて、授業はほとんどサボつて、ただ時間を潰す。変わらない何の刺激もない一週間がまた過ぎ去つて土曜日になった。

暴力だつて変わらずやられている。

変わつてほしいと願っているのに行動できない自分が嫌になる。

そして理不尽なあいつらに殺意だけが湧いていった。

「おねーちゃん！明日暇？」

「…日菜？」

パソコンでNFOを始めようとしていたら突然部屋の扉が開かれた。どうやら鍵を掛け忘れていたらしい。扉が開いた先にいたのは末っ子でやけにニコニコしている。

手には何やらチケットのようなものが握られていた。

「…ノックくらいしろ」

「ごめん次から気をつけるー！」

そのセリフ聞くの何回目だと思つてるんだ。

「それよりおねーちゃん！明日一緒に遊園地行こう！」

「はっ！」

話が急すぎてついて行けないんだけど…。

相変わらず天才の考えていることはわからなかった。

説明を要求する。

「あのね、昨日事務所から遊園地のペア招待券貰ったの。それでおねーちゃんのこと誘ったんだ!」

「…事務所?」

「あれ?言ってなかったっけ?私今『Pastel\*Palette』っていうアイドルバンドやってるんだよ」

なにそれ知らない。アイドルバンド、という単語自体初めて聞いたし少なくとも日菜からそんな話をされた覚えもない。

「……いつからやってるんだ?」

「つい最近からだよ!」

「…それはバンド?」

「うん!そうみたいだよ!」

「……日菜の担当楽器は?」

「ギターだよ。おねーちゃんたちと同じ!」

おいおいおいおい、嘘だろ…。

「紗夜に、その話したのか?」

「したよ。ついでにギター教えてって言ったんだけど断られちゃった」

紗夜の反応は当たり前だろう。紗夜は日菜との才能の差に悩んで日菜には負けまいと日菜が興味なさそうな音楽を始めてこれまでギターの練習に励んできたんだ。

それなのに日菜がギターを始めるなんて言い出して、紗夜は焦ったはずだ。

また追い越される。今まで積み上げてきたものを軽々と超えていられる。また日菜に負ける。

それだけで紗夜のストレスになってしまう。長くやっているかど

うかは関係ない。日菜は見ただけ聞いただけですぐにコツを掴んで1ヶ月後には誰にも負けなくらい上手くなっていることだってある。

いくら紗夜が経験を多く積んでいたとしても日菜はそれを当然のように追い抜く。

日菜は冗談抜きで天才なんだ。

しかしその能力がありつつ日菜は紗夜や私のことを自分より上の存在だと思っている。尊敬してくる。それが尚更私たちのことを傷つけていった。

「日菜ちゃんが凄いつて言うなら日菜ちゃんよりも上手なの？」

「日菜ちゃんのおねーちゃんは勉強も完璧らしいよ」

「日菜ちゃんよりスポーツも得意なんだって！」

日菜の尊敬の眼差しが、日菜のオーバーな発言が、日菜の天才性が、日菜という存在そのものが。

ただ私たちを完璧でなければならぬという結論まで追い詰めた。その事実には、日菜だけが気付いていなかった。

「遊園地もね、最初はおねーちゃんのこと誘ったんだけどRoseliaの練習があるからダメだった」

「それで私に聞きに来たど？」

「そういうこと！一緒に来ようよ！」

「明日ねえ…」

「もしかして何か用事でもあった？」

明日は小説作りに使おうと考えていたからな…。遊園地となると一時間や二時間じゃ終わらないし、日菜の性格的に朝行ったら閉店時間までいるつもりだろうし。確実に作業なんてできるわけがないんだよね…。

うん、日菜。捨てられそうな子犬みたいな目しないで。断りにくい

から。

「他の人誘え」

「みんな予定があるから行けないって」

「…そのアイドルバンド？のメンバーは？」

「千聖ちゃんは仕事で他のメンバーは私と同じ日に行くって行ってるから」

「じゃあ私が行かなくてもいいよな」

「そしたらチケット1枚余っちゃうよー！もったいないじゃん！」

いや日菜と一緒に遊びに行くこと許してくれない人たちがいるから安易に答え出せないんだけど。

「もういつそ来週行け」

「期限が今週までなの！」

「なんでそんなもの事務所が渡すのさ…」

期限短すぎだよ。

「いいじゃん行こうよおねーちゃんー！」

「ええ…」

どうしよめんどくさい。いくら断つてもキリないじゃん。

「姉さん、日菜。私の部屋まで声が響いていて勉強に集中できないの。少し静かにしてもらえるかしら」

「あ、おねーちゃん！」

部屋の前で呆れた表情をしていたのは紗夜だった。扉が開いたままだったことを今になって思い出す。これは紗夜に申し訳ないことをしてしまった。



「…ああ。ごめんね紗夜。気付けなくて」

「次からは気をつけてください」

「そうだ紗夜。明日日菜と遊園地行ってあげなよ」

「私はバンドの練習があるから行けないの。日菜にもそう言ったはずよ」

「練習が終わってからでもいいから」

「その後は自主練習をするつもりなの。だから無理よ」

「自主練なんて1日くらいやらなくても平気でしょ。ちよつとくらい日菜に付き合っただけなら？」

「1日くらいって！私は！」

「自主練なんて言い訳じゃん。紗夜は逃げてるだけでしょ？」「っ!？」

知ってるよ。日菜に追いつかれたくないってことも、姉としてのプライドがあることも、ギターが好きだってことも。

けど、それで逃げちゃダメだよ。特に日菜には向き合わないと。

「姉さんに何がわかるんですか!？」

「わからないよ逃げてるやつのが持ちなんて。知りたくもない」

どの口が言ってるんだよ。

「逃げてなんかいません！私は今勉強とギター以外に時間を割いている時間はないだけです！」

「なら短期集中でやりなよ。それで結果出せれば問題ないじゃん」

ギターはバンドのことだけじゃない。結局日菜に負けたくないからでしょ。これ以上やって来たことを否定されたくないからでしょ。

「だいたいどうして姉さんにそんなこと言われたいいけないんですか！姉さんだって色々なことから逃げてるのに！」

「紗夜にはそう見えてるだけでしょ？私は、逃げてないよ」

少なくとも立ち向かわないといけないものからは逃げてない。

「もういいです。姉さんと話していても仕方ないですから」

「そうだよ。さっさと部屋戻りな。日菜も」

「え、でも」

「遊園地には行けない。話はそれで終わりだよ」

少し強引に日菜を部屋の外に出す。今度こそ鍵をかけてベッドへと転がった。

目を閉じ後悔する。

紗夜はいつも通りだった。だけど自分の部屋に戻ろうとした時、確かに悲しそうな表情をしていた。それは日菜だって同じだ。

自分が逃げていることくらい知っている。けどだからってどうすればいい。

私が妹たちとちゃんと向き合うためにはあいつらを消さないといけない。けど今はまだその時じゃないから手が出せない。完全に詰んでる。

本当はちゃんと向き合いたい。反抗的な態度なんて取りたくない。昔みたいに笑い合いたい。

けど今の私たちはそれには程遠くて、それぞれがバラバラに歩を進めている。

それがなぜかすごく寂しかった。

そして、この家で私だけが抱えていることに永遠と気づかないでほしいと願った。

言い争いはしたくないが。

「紗夜！この点数は一体なんだ!?!」

「朝日ちゃんと日菜ちゃんより15点も下なんて、ちゃんと勉強したの!?!」

「…ごめんなさい」

「謝れと言っているんじゃない！結果を出せと言っているんだ!」

「次のテストはこれより上がっていないとダメよ！わかってるわね!」

返ってきたテスト。日菜と私は1位と2位。

喜び、褒められた私たちと違い20位ほどだった紗夜は怒鳴られ、罵倒された。

中学1年の後半。

その光景を偶然影から覗いていた私は見てしまった。

怒ることでもないのに両親が紗夜にキレたのを。

そのことに対して、紗夜が泣くのを堪え、震える身体を無理矢理押さえつけ、拳を握りしめているところを。

それが中学生の私には許せなかった。

ただそれだけの話。

◇?◇?◇?

「付き合ってくれてありがとうございます朝日さん!」

「いいよ全然。それより、買う物ってそれだけでよかったの?」

「はい!助かりました!」

日曜日、私はあこちゃんと共にショッピングモールに来ていた。

なんでもあこちゃんが学校で使うシャーペンの芯やらノートやらが切れたらしく、今日までに買ったそう。それでオフ会ついでに買い物に付き合っただけと連絡が来たのだ。予定はなかったため了承した。

りんりんは家の用事で来られなかったらしい。

そして買い物も無事終わったためカフェでお茶をしていたのだ。

「今日Roseliaの練習はなかったの?」

「練習はこれからです。なので忘れないうちにと行って…」

「そっか。練習、頑張っただね」

「はい!」

あー可愛い。なにその笑顔。あこちゃん天使かよ。見てるだけで癒されるわ。妹にでもならないかな。

「あ、あこそろそろ行かないと…」

「そう?私はまだここにいるから練習行ってきていいよ」

「そうですか?ならお金渡しておきますね」

は?天使にお金を払わせるだど?できない。そんなことしたら天から罰が下る。天使にお金払わせるなんてできない。

「いやいいよ。奢ってあげる」

「え!?!で、でも」

「いいからいいから。ほら、早く行かないと遅れちゃうよ」

「…本当にいいんですか?」

「いいって。頑張ってくださいなよ」

「ありがとうございます!!」

あこちゃんは勢いよく頭を下げてカフェから出て行った。笑顔で手を振ってくれる。マジ天使。

残っていたカフェオレに口を付ける。何気なくスマホでSNSを眺めること約10分、目に入ったものに驚く。思わず二度見していた。

私の対面の机の下、そこにあっただのはNFOのコラボバッグ。誰のものかなんて考えなくてもわかった。

手に取り中身を確認すればスマホ、財布、ドラムスティックが入っていた。頭を抱える。

あの子は一体何しに行ったの。バンド練習じゃないの。スティックいらぬの。しかもお金払おうとしてたのに財布ここに入ってるってどゆこと。いやそもそもスマホ入れたままにされたら連絡の取りようがないし。はーバカ。ホントおバカ。でもそんなところも可愛くて好き。愛嬌しかない。

とりあえず、と思つてりんりに連絡を取ることにした。

この前交換した連絡先に電話を掛ける。

「…もしもし」

「あ、りんりん? 私、朝日だけど」

「…朝日、さん…? どうか…しました、か?」

「今からバンド練習なんですよ? そこにあこちゃんいる?」

「あこちゃん…? まだ、ですけど…」

「あのねさつきまであこちゃんとお茶してたんだけど鞆忘れてったみたいで。今からそつちに届けるからあこちゃんが来たら伝えといて

くれると助かるんだけど」

「…わかり、ました…：位置情報…送ります…」

「ホント？ありがとうりんりん。それじゃあまた後で」

私はあこちゃんの荷物を背負い会計を済ませ店から出た。その間に送られてきた地図に少しばかり驚いてしまう。しかしあこちゃんのためだと思い歩き始めた。

15分後。辿り着いた場所はライブハウス「CIRCLE」。この文字を見るのですら実に二、三年ぶりだ。

懐かしいな。まさかまたこのライブハウスに訪れる日が来るなんて。

扉を開けば冷気と共にスタッフであろう声が耳に届いた。視界に入った人物に固まる。相手も同じ様子だった。

「え、あ、朝日ちゃん!？」

「…お久しぶりです。まりなさん」

CIRCLEの従業員、月島まりなさん。

私がまだギターを弾いていた頃にお世話になった人だ。

「久しぶりだね。会わない間に、なんか印象変わった?」

「そうですね?」

「うん。なんだか大人っぽくなったって言うか」

「そんなことないですよ」

「ううん、絶対そうだよ。私が保証する」

最後に会った時とか変わらない。明るくて話しやすい。会わなくなって二、三年ほどだが五年くらい会ってなかった気分だ。

「それで、今日はどうしたの?またギター弾きに来た?」

「…いえ。今日は知り合いの忘れ物を持って来ただけで。まりなさ

ん、Roseliaってどこのスタジオに入ってますか」

「Roselia?…あ!朝日ちゃんってもしかして紗夜ちゃんの姉妹か何か?」

「紗夜は私の妹ですよ」

「そっか!納得だよ。すっごく似てるもんね!」

それは外見だけで性格は正反対だけど。知ったらまりなさん驚くかな。

「ああ、引き留めてごめんね!Roseliaなら三番のスタジオだよ」

「ありがとうございます」

お礼を言って三番のスタジオに向かう私に付け足しでまりなさんの声が届いた。

「朝日ちゃん!いつでもここでギター弾いていいからね!」

「…考えておきます」

できないとは言えない。だってまりなさんは私のことを最後まで応援してくれて、突然消えた私にも何も言わず笑顔を向けてくれたから。

そんな人にギターはもう弾けないなんて言えるわけがない。

手首を握った。

三番スタジオはすぐそこだ。あこちゃんに荷物を届けて、任務は完了。仕事場でゆつくり小説のネタでも考えておこう。

扉を開けば人が5人いた。

あこちゃんの隣にはりんりんがいて、何やら楽しげに会話をしていた様子。対してギターのチューニングをしていたのであろう紗夜は

キョトンとしていた。他の二人は首を傾げている。

「あの、どちら様かしら？・紗夜によく似ているけど」

「えーつと？」

「あ！朝日さん！」

そんな空気を破るようにあこちゃんはこちらに駆け寄ってくる。そんな彼女に荷物を渡せば笑顔が返ってきた。可愛い。

「はいこれ。次からは忘れないでね」

「はい！ありがとうございます！」

「それじゃあ用事は済んだから帰るね」

「待ってください」

引き止めたのはやはり分身様。

明らかなあこちゃんとのテンションの落差を感じる。ギターを置いて私の元へと向かってきた。

「…何用かな？練習、しなくていいのか」

「それはこの後します。それより、どうしてここにいるんですか」

「そりゃ、彼女の忘れ物を届けに来たからだよ」

「…宇田川さんと知り合いなんですか」

「だったら何？紗夜には関係ないことだろ？」

「どうして宇田川さんの物を持ってたんです」

「今日会ってたからね。その時に」

「…変なこと吹き込んだりしてませんよね」

「変なこと？私が何を吹き込むってのさ。いい加減学校以外で風紀委員モードやめなよ。お堅くて呆れる」

「それは姉さんの素行の問題でしょう！私が悪いみたいに言わないでもらえますか!？」

「いちいち声荒らげるなようるさい。感情のままに行動するから紗夜



はダメなんだよ。寛大になれば？そうすれば日菜とも向き合えるでしょ？」

「姉さんだって私のことは何も言えないじゃないですか！日菜から逃げてるのは姉さんも同じ」

「自分のこと棚に上げんな。そういうことは自分が向き合えてから言えよ」

「っ!?姉さん!」

「なあ紗夜。いつまで私と言い争ってる気？」

後頭部を掻きながらいつもより低いトーンで呟けば、驚いたのは紗夜だけではない。りんりんも隣のあこちゃんも、茶髪ギャルに銀髪も。その場の空気が一瞬で固まった。

「日菜に負けたくないって言うんなら、今のままじゃダメだってわかってるだろ。なら、ちゃんと考えて行動しろ。私なんかに構ってるな。それが紗夜の敗因でもあるんだから………ッ!?!」

目の前の紗夜は悔しそうな表情のまま俯く。拳は握りしめられ震えていた。泣いてはいないだろうけどやってしまった。

あの日の姿が蘇る。

言い過ぎた。いくら嫌われようとしたからってこれはやり過ぎだろ。紗夜の努力も気持ちも知っておきながらこの言い方は酷い。最低だ。

でも今更否定することもできず私は紗夜をそのまま、逃げるようにスタジオから立ち去った。

青より水色が似合うから。

「どうして上手くいかないの！どうして紗夜ちゃんや日菜ちゃんが私に冷たいの！全部お前のせいよ!!」

また一日の終わりと共に理不尽な一日が始まる。

仕事の失敗も妹たちと少し距離が離れたことも全て私のせいにされて、私を罵る声も痛めつける行動も。慣れてはいけないことなのに慣れてしまっている自分がある。

そろそろ飽きてほしい。こんなことしても何の意味もないと自覚してほしい。

最初からこの人たちが嫌いだったわけじゃない。

嫌いになったのは三つ子を比べ始めた時から。それがなければ子供のことをちゃんと想っている人たちだったはずなのに。

日菜という天才が生まれてしまったから。

三つ子の中で飛び抜けている才能があったから他にもそれがあるのと期待してしまった。

私は日菜と並ぶ才能があった。ただ紗夜にはそれがなかった。才能ある者たちの間に挟まれて、窮屈な想いをしていたことだろう。証拠に人以上の努力を積み重ねて今の紗夜がいる。今となっては努力の才能を持っていたと言えるところだが、努力の才は天才には届かない。よくても秀才止まりなのだ。

見えない壁が私たちと紗夜の間にある。秀才ではどうやっても壊せない壁。

日菜は人の感情を気にしないから何も行動することはない。だから行動した。

見えないはずの壁を私は無理矢理破壊した。

才能なんてあつてほしくなかった。

そうすればみんな平等に、愛されていたはずなのに。一人の才能が、関係を大きく崩すことになるなんて。

神様は意地悪だね。

「…姉さん？」

ほんと意地悪だ。なんで今紗夜と鉢合わせにするかな。

まあどうせ、紗夜と話すことなんてないからいいか。

「そのケガ、なんですか」

けど今日は普段起こらないことが起こるらしい。

大して触れられることのない腕の傷のことを紗夜に問いかけられた。

ボロが出ないうちに部屋に戻らないと。

「……何って見ての通り。殴り合いの痕だよ」

「…いい加減ケンカなんてバカバカしいことやめてください」

あんなこと言った後なのに話してくれるなんてやっぱり紗夜は優しい子だ。

「それは風紀が乱れるから？それとも他の理由？」

「……前者です」

「そう」

本当は私の心配もしてくれているんだ。けど紗夜はそれを言わない。私に言っても無駄だと思っているのか、それとも羞恥からか。こんな私になつてもまだ諦めてくれないのはありがたい。

紗夜は優しい。優しすぎるくらいだ。

だからこそ私は、いつ捨てられるのかという恐怖に怯えている。

「悪いけど私がふっかけたわけじゃなくてあいつらが始めたことだから。私にはどうすることもできないよ」

「…どうにか関わらないようにすることも、ですか？」

「無理だね。確実に」

同じ家に住んでいるんだ。私が関わろうとしなくてもあいつらが関わってくる。どうしろと？

「…あと、もう一つ」

「何」

「…：髪染めるのもやめてください」

「また説教？校則がどうか言うんだろ？」

「いえ。確かにそれもありますけど」

真っ直ぐ私の目を見て紗夜は言った。

「姉さんは青より水色が似合っているから」

「…：そう。助言どーも」

私は部屋に戻り扉を背に座り込む。

そして地毛の色に戻りかけている髪に触れた。

「青より水色が似合う、ねえ…」

◇?◇?◇?

学校帰り、今日は真っ直ぐ仕事場に行く予定だった。それなのにどうして私は今ファミレスにいるのだろうか。

「うーん。何にしようかなー」

しかも、名前も知らないような人と。

「えっと、朝日、でいいんだよね?何にするか決めた?」

「…フライドポテトとドリンクバー」

「わかった。アタシ注文するねー」

注文ボタンを押せば茶髪ギャルは私のものと自分のものを注文していた。ドリンクバーを取るため席から移動する。コーラを取って席に戻った。向かいのギャルはオレンジジュースか何かを取ったようだ。

「…なんか意外」

「は?」

「甘いものって言うよりコーヒーとか頼む人だと思ってた」

「突然どんな偏見だ。ポテトとコーヒーの組み合わせは好きじゃないだけだよ」

よくわからない。どうしてここに連れてこられたのかも彼女の言動も。

「つか、誰」

「そう言えば自己紹介してなかったね。アタシは今井リサ。羽丘女子の二年生で、Roseliaのベース担当。これからよろしく〜」

「面倒だからよろしくはしない」

「ええー!?そんなこと言わないでよ〜」

チャライ、明るい、コミュ力オバケ。こんな人もバンドやるのか。しかも紗夜、あこちゃん、りんりんと同じグループで。全く想像できん。

「んで?その今井リサ?が私に何の用?私は用ないから帰るな」

「ちよ、ダメダメ!アタシは聞きたいことがあるの!ステイ!」

「私は犬か何かかよ…」

初対面の人にその対応はどうなんだ。これだから明らかに属性の違う人は得意じゃないんだよ。住む世界絶対真反対でしょ。

「いいでしょちよつと話すくらいさ。遅くまでいるつもりもないし」

「それまでの時間を君と過ごす理由もないだろ」

「ホント紗夜とも日菜とも違うんだね。三つ子でここまで変わるんだ」

「…日菜とも知り合い?」

「クラスメイトだよ。結構仲良いんだ」

紗夜とは同じバンドだから知っていて当然だが、まさか日菜とも知り合いだったなんて。しかもこのタイプだ。日菜と間違いなく話が合う。

面倒だ。日菜に色々言伝こいつでされる前に逃げたい。

「それで聞きたいことなんだけどね」

「その前に一つ約束しろ」

「ん？何？」

「今日私に会ったことは紗夜にも日菜にも話さない。それだけだ」

「…なんで？」

「なんでもだ。じやなきや今すぐ帰る」

「あーわかったわかった。言わないよ。それでいい？」

「ああ。それで何か？」

「わかってると思うけど、紗夜のこと」

やっぱりか。まあここ数日であったことと言えばそれしか思いつかないから当然だ。想定はしていた。

「朝日は紗夜が日菜に負けないように努力してるのは知ってるんですけど…」

「そりゃあね」

「ならなんであんなこと言ったの。紗夜が傷付くかもしれないのに」

なんで、か。答えは一つしかない。

「全部紗夜のためだよ」

「紗夜のため？」

リサは首を傾げる。

店員さんが持ってきたポテトを摘み口に運ぶ。

「紗夜と同じバンドで日菜とクラスメイトなら二人の関係性はわかるだろ。はつきり言って最悪だ。壁がある」

「…まあ、そうだね」

「何よりも問題なのは紗夜が勝手に壁を作っていること。日菜がいくら紗夜のことを認めていても紗夜は天才の日菜の隣に自分が立てていないと思っっている。だから紗夜はいつまで経っても日菜の隣に立ってない。いや、立っていても気づかない。」

紗夜は日菜を嫌っていない。むしろ大好きなはずだ。それなのに日菜が大好きオーラを振り撒いても素直に受け取れないのは、紗夜性格もあるだろうけど一番はプライドのせい。どう努力しても日菜の隣に並べない不甲斐ない自分に腹が立ってるんだよ。

でも私はそうじゃないと思っている。紗夜の努力で培った能力と日菜の才能は全くもって別物。そもそも姉妹だからって比べられること自体おかしなことじゃないか。人間なんだし二人は違って当然だ。比べる理由も意味もない。比べたら片方の良いところがくすむ。そんなのダメ。二人には二人の良いところがあるんだから。

だからこそちゃんと言き合わせないといけない。紗夜は日菜と向き合っただけをぶつけないといけない。紗夜は日菜に劣ってなどない。私がヒントを与えるんじゃない。私がヒントを与えるんじゃない。紗夜も日菜も、本当の意味で仲良くなれない。お互いの優秀なところも劣っているところも全部引つ括めて尊重しあってこそその姉妹だからね」

「……ホント、意外だね」

「何が」

「不真面目そうなりに、ちゃんとおねーちゃんしてるんだなーって」

優しく笑う彼女に視線を逸らす。

くだらないことを言ってしまった。一応口止めしているとはいえ本当に話さない保証はないというのに。何してるんだ私は。

「…君にだけは不真面目だとは言われたくない」

「ちよつとー。それアタシが不真面目に見えるってことー?」

「見えるだろ。授業抜け出して男と遊んでそう」

「ちよつ！偏見だよ！そんなことしたことないって！」

「どーだか」

「そ、そういう朝日こそ遊んでそうな外見してるじゃん！」

「遊んでるって言ったら？」

「え…?え!?!」



「嘘だよ。まともに受け止めるな」

「も、もう！朝日！」

私の冗談にリサは顔を赤くして反論する。どうやら彼女はそういった手の話にはあまり耐性がないらしい。意外だ。

だがそうなったのはからかってきた彼女が悪い。

「ごめんごめん。人は見かけによらずなんだね」

「それはごつちのセリフだって。変な汗かいたよ…」

どうやら本気で慌てたらしい。ふうーと息を吐いていた。

「…にしても、朝日って案外話しやすいんだね。最初の印象は紗夜より怖い人かと思ってたよ」

「よくそれで話しかけようと思ったな」

「それは紗夜のこと聞きたかったからだよ。それにあこが怖がらず笑顔で向かって行ったからね。危ない人でないのはわかったよ」

「酷いな。中学生に手を出してるやつだと思われかけてたのか」

「紗夜みたいな外見なのにピアス付けて髪染めて、目付きも鋭いし腕には包帯とか完全に不良じゃん？思われてもおかしくないでしょ」  
「だろうな。よく言われる」

中学生になって日菜の才能が開花して、紗夜が努力するようになって、私は出来損ないだと言われ続けた。

不良だの不真面目だの。それでもそれなりの成績は出していたから気に入らなかつた生徒たちはよく思わなかつたのだろう。悪い噂だつてそれなりにあつたし目をつけられもした。

本当ではないから気にしたことはなかつたしずっと無視していたが。

「別に昔からそうだったわけじゃないさ。紗夜と日菜が仲違いしたよ

うに私も二人から離れただけ」

「…仲違いしたままでいいの?」

「私か?私のは仲違いじゃねーからな」

もういいだろう。これ以上話すことはない。紗夜や日菜にバレるのはここまでの情報だけで充分だ。

「じゃあ私は帰るから」

「え、もう?」

「あいにくこれ以上君に話すことはない。ポテトも食べていいよ」

財布を取り出しとりあえず2000円をテーブルに置いた。席を離れようとしたら焦った声が耳に届く。

「ちよー!お金こんなにいらさないよ!」

「んじや余った分は口止め料ってことにしとけ」

2000円くらいなら痛くも痒くもない。細かいお金を出す気にもなれないしそれでいいだろう。

ファミレスから出て家を目指し日も暮れかけた道を歩く。

今井リサ。一緒にいて心地のいい陽だまりみたいな人だった。

代わってしまった三つ子の関係。

そいつが現れたのは何ら変わりない普通の日だった。

「うわぁー！屋上ひろーい！」

いつもなら私がいるからと誰も入って来ない屋上に珍しく訪問者がいた。バカでかい声に身体を起こした。

目をキラキラさせてクルクルとその場を見渡す。その頭には猫のように耳が付いていた。

なんだこいつ。

それが真っ先に思ったこと。

「あれ、人がいる。こんにちは！」

「……」

なんだこいつ。

私に自ら笑顔で話しかけてきた？え、なにこいつ。ホントになんなんだ。

「おい香澄！何やってるんだバカ！」

「ちよつと香澄！そこは入っちゃダメだつて！」

「あ！有咲！さーや！早くこっち来てよ！」

「人の話聞いてんのか!？」

屋上の扉の前に現れたのは有咲と沙綾だった。それから察するに猫耳の彼女は二人の知り合いのようだ。

「有咲、沙綾。こいつは君たちの知り合いか？」

「すみませんこいつすぐ連れて行くんで！」

「ほら香澄！戻って来て！」

「え、なんで？ここで食べようよ！先輩？もいいですよね？」

「いやよくねーよ」

なんで一緒に食べる流れにしようとしてるんだよ。有咲と沙綾が必死に連れて帰ろうとしてるの無下にすんなよ。

「か、香澄ちゃん！」

「香澄、なんで屋上にいるの？」

「りみりん！おたえ！」

なんか増えた。小動物と美人。なにこのメンツ。何繋がり。

「みんな今日はこちらでお昼ご飯食べよう！」

「え!？」

「香澄は暗黙の了解知らないの？」

「あんもくのりようかい…?」

なるほど。私を知らない数少ない人物の一人か。ここまで校則破って紗夜に説教されまくってる私を知らないなんてありえるのかはわからんがこれを機に教えてやるか。

ここは私のテリトリー。許可したやつ以外に入られるのはムカつくんだよね。

「香澄とか言ったかそこの猫耳」

「はい。なんですか…先輩？」

「今すぐ出てつてくれないか？」

「え？どうしてですか？」

「ここは私が使っているから。君たちがいるとうるさくて仕方ないんだ」

「でも屋上ってみんなの場所じゃないんですか？」

「みんなの場所だったら静かにしてほしいやつの邪魔をしてもいいってのか？よくねーよ早く出て行け」

「先輩も一緒にお昼ご飯食べましょう！みんなで食べると美味しいですよー！」

話に通じてないな。追い出されそうになつてるのにお昼に誘うって何考えてるんだ。頭痛くなる。

「香澄！ここで昼はダメだ！朝日先輩も静かにしてほしいって言ってるし」

「あさひ先輩？そーいえば誰かに似ているような…」

「姉さん」

猫耳が考える素振りを見せた丁度その時屋上に声が響いた。この呼ばれ方は一人しか知らない。

「紗夜。何か用か？」

「偶然近くを通ったら揉めている声がしたので」

「いちいち見に来るなんてさすがは風紀委員長。真面目だねえ」

「姉さん。仕事を増やすようなマネやめてください。何度も言っているでしょう」

「紗夜はいつも同じことを言う。そういうの疲れない？」

「そう思うのなら校則破らなくてください。仕事を増やしているのは姉さんなんですから」

その通りだ。紗夜の仕事を増やしているのは私。でもそれは現段階で必要なことだからやっているだけ。本当は困らせることをしたくはない。今は言えないから引くしかないけれど言える日はいつくるのやら。

「どこに行く気ですか」

「帰る」

「午後の授業はまだ残っています」

「私が帰りたいたいと思っただけで帰る。それが私のルールだから」

私は日陰に置いていたカバンを持ち、何か言いたげな紗夜の横をすり抜けた。引き留められるかと思ったがそんなことはなく簡単にその距離は離れる。

今日の紗夜は至って冷静だった。怒ることなく言い聞かせるように言っていた。何の心情の変化だろうか。わからない。紗夜は今何を思っている。

紗夜は私のことを、諦めたとも言うのか。

◇?◇?◇?

姉さんは、変わってしまった。

最近はその嫌という程実感する。

昔はとても仲の良い姉妹だったはずなのに。

中学二年生から関係は大きく変わった。

あの日家に帰って来た姉さんはなぜか機嫌が悪かった。いつものように話しかけても適当な返事ばかり。疲れているのだと思っ自分分の部屋に戻ったがそれが間違いだった。

次の日、挨拶を無視された。一緒に登下校もなくなった。学校では一切話さなくなった。話しても知らない顔をされた。

最初は私たちが姉さんに何かしたんだと思っていた。だから姉さんは口を聞いてくれなくなったんだと。

私と日菜は謝った。何が悪いのかもわからぬまま必死に。謝れば姉さんはいつも通りの優しい姉さんになってくれると思っていたから。

でも現実とは違った。

「何に謝ってるの」

「それは、わからないけど姉さんが私たちに対して怒ってるみたいだったから」

「あたしたちがおねーちゃんに何かしちやっただと思つて」

「…ああ。そういうこと。そうだね、私も何の説明もせずにこんな態度とつてたもんね。ごめんごめん」

やけに投げやりな態度に私たちは困惑した。知らなかったこんな姉さんを。いつも明るく困った人がいたら手を差し伸べて私たちを大切に思ってくれる。それが私たちの知る氷川朝日だったのに。

「もうさ、私には構わないでほしいんだ」

「え……」

「どういう、ことですか」

「言葉の通りだよ。学校でも家でも私に話しかけないで、私を呼ばないで、極力私の視界に入らないで」

姉さんが何を言っているのかわからなかった。明らかな拒絶の言葉に二人して動揺を隠せない。

「な、なんで!? あたしたちおねーちゃんの気に障ることしちやっただ!? もしそうなら謝るから!」

「意味がわからないわ! どうして急にそんなこと!」

「……………」

「こんなの納得できないよ!」

「お願い! 理由があるならちゃんと saying!」

「……なら、言ってあげるよ」

ため息の後に吐かれたのはだいぶ低い声で圧が強くて私たちは揃って後退してしまふ。そして信じられないセリフを口にした。

「私は二人のこと、好きじゃないんだよ。ただ親におねーちゃんだから面倒見ろって言われたからそうしてただけ。それ以上でも以下でもないんだ。さすがにさ、もう一人でどうにかできる人たちに手をかける理由が見つからない。私も自由にしたいと思ってたよ。でも二人が話しかけてくるんじや自由にできないんだ。」

だから私に構わないで。私にとって二人は、邪魔でしかないから」

私の中で碎ける音がした。

姉さんに対する信頼、尊敬、憧れ、数々の思い出、全て。

「姉さん!!」

正直、我慢の限界だった。

「おねーちゃん!!」

感情のまま姉さんの胸倉を掴み震える拳を構えた。日菜の叫びはどちらに対するものだったか知らないがそんなことどうだってよかった。

私は楽しかった思い出の全てを否定されたのが許せなかった。

姉さんは驚き、一瞬だけ目を見開いた。でもすぐさま普段の表情に戻って、冷静に淡々と言った。

「殴りたいなら殴りなよ」

「は……?」

「それで紗夜の気が収まるならそうすればいい。今回限りは許してや



る」

姉さんのそれは私への肯定だった。今度は私が狼狽する。別に姉さんを殴りたいわけじゃない。流れでそんな体勢になっただけ。そもそも姉さんのことを私が殴れるわけがない。私の拳は力なく下ろされた。

「殴らないんだ」

「…私が、できるわけないでしょ……」

「そう…」

力が緩んだ胸倉の手を姉さんは剥がす。そして部屋へと戻って行った。

日菜が心配そうに私を見つめる。私はその場に立ち尽くすことしかできなくて、今日あったことが全て夢であってほしいと願った。

しかしそう簡単に現実が変わってくれない。むしろ悪化していく。耳にピアスをし、髪の色を変えた姉さんはもう私たちの知る姉さんではなかった。

どんなに話しかけても、どんなに気を引こうとしても、その度に姉さんの態度は悪くなっていく。

校則を破り、授業を抜け出し、教師に楯突く。

日に日に知らない人になる姉さんが嫌で嫌で見ていたくなくて。でもどうすることもできない自分に腹が立っていった。

そして気づけば私は日菜に八つ当たりをしていた。

日頃の生活と姉さんの態度と日菜の天才性。重なったストレスが爆発した。

日菜を遠ざけた。

「なんでも努力せず完璧にできて、できない人の上に立とうとしないですよー!」

「お、おねーちゃん…? あたしそんなこと」

「してないって言うならどうして私のマネばかりするのよ! 日菜にマネされると全部できないみたいない扱いを受けるの!」

「あ、あたしはただおねーちゃんと一緒のことがしたかっただけで。

おねーちゃんはあたしよりなんでもできるし」

「ツ!? その態度が私は一番嫌いなもの! どうして私を見せ物にするの! どうして私が日菜より上だって言うの! 私の気持ちを一度でも考えたことがある!? ずっとバカにされているんだから!!」

「お、おねーちゃ…」

「私が姉じゃなくて、日菜が姉だったらそうはならなかったのに!!」

日菜に酷いことを言った自覚はあった。でもいっばいっばいだった私は日菜のことを考えることはできず距離が離れた。

私は姉さんに習ったギターにのめり込み、そのせいか姉さんのことも日菜のことも何を考えているのかわからなくなっていた。

学校でも家でもどこにいても。あんなに仲の良かった三つ子は姿を消していた。

スカウトか挑発か。

「氷川朝日ね」

「そーだけど何か」

「話があるの」

放課後。正門を通過したら聞こえた声に視線を移す。

銀髪の長い髪。その隣には笑顔で手を振る人物。

真っ直ぐ帰りたかったため無視して彼女たちに背を向けた。

「ちよいちよい！なんで無視するの朝日！」

急いで私の目の前に回り込む人影。それにため息を吐く。

「帰りたいからだ。お前らといるとろくなことないだろ」

「長時間拘束するつもりはないわ。すぐ終わるもの」

ギャルの隣の彼女が誰かなんて聞かなくてもわかる。

湊友希那。Roseliaボーカルでありリーダーだ。前のオフ会であこちゃんとりんりんから彼女のことは聞いている。

曰く厳しい人。曰く音楽に全力な人。曰く歌姫。

そんな人が私の元に来る理由なんて一つしか思いつかない。

「答えならノーだ。他を当たれ」

「まだ何も言っていないのだけど」

「Roseliaに入れて話だろ。どこから私のこと知ったか知らないが嫌だね」

「あれだけの実力を持っていながらどのバンドにも所属していないなんて宝の持ち腐れよ」

「宝の持ち腐れで結構。そもそもお前らのバンドに入る理由もない」

「……なぜ、かしら」

「は?」

「どうしてギターをやめたの。あれだけライブでも楽しそうに演奏していたのに、やめる理由がどこにあったのよ」

やめる理由。

忌々しいバケモノのせい。

使えない腕のせい。

想像するだけで手首に痛みが走った気がする。

「飽きたんだよ音楽なんか。くだらないと思った」

やめる理由。

紗夜に自信を失わせないため。

紗夜のプライドを傷つけないため。

紗夜を輝かせるため。

「くだらない、ですって」

「どうやら歌姫さんは私の言葉が気に入らなかったらしい。本気でやってる人からすれば怒って当然だ。」

それなら畳み掛けよう。バンドに誘われぬように行動しよう。

「そうだよ。所詮学生のやるバンドなんてお遊び、たかが趣味程度だろ。それに全力を尽くす必要はない。音楽なんて結局何の意味もないんだ。本気でやってる方がバカみたいだよ」

「あ、貴方ねえ!」

「はいストップ!友希那も朝日もケンカしないで。ここ学校の前だし、決着なら別の場所ですべて」

ギャルが仲裁に入る。歌姫さんは怒っている様子だったがギャルの言うことには従うようだ。

しかし、別の場所で決着をつけるというのには納得できない。なんせ私は今すぐに帰りたいのだから。

歌姫さんは考える素振りを見せた後言った。

「……なら、こうしましょう。今からRoseliaのスタジオ練習があるわ。そこで私を納得させる演奏を見せて」

「どうして私がそんなことしないといけないのかな」

「音楽をやめる理由が『飽きた』や『くだらない』と言うのならそれなりの実力はあると思っただけよ。貴方の実力を見せて私を黙らせればいいだけじゃない。それとも何。実力もないのに『飽きた』と言ったのかしら。随分口が達者なのね」

見た目のわりに下手な挑発。この程度の挑発に私が乗るとでも思ったのか。バカバカしい。

でもいい機会だ。ここで私の実力を見せつければ彼女は二度と私をバンドに誘わないだろう。その後誘われることになっても断る口実になる。

そもそも私を誘うのはバンドのためにもやめた方がいい。

「いいよ。乗ってあげる。自分が言ったことだ。後悔するなよ」

「ついてきなさい」

後悔するのは私かもしれない。

そう思いながら二人の後ろに続く。

今日だけでいいから持つてほしいと手首を握った。

「あれ、朝日さん？」

スタジオに入れば既に三人が準備を進めていたようで突然の来訪者である私にそれぞれの反応を見せる。それに構うことなく紗夜の元へと向かった。

「紗夜、ギター貸して」

「……なぜですか」

「お前たちの歌姫さんが私を挑発したからだ」

「意味がわからないのですが」

「あーはいはい。アタシが説明するね」

ギャルは三人に事情を説明する。

すると紗夜は納得したのかすんなりギターを渡した。

「チューニングは？」

「まだです。今チューナーを」

「いらない。自分で合わせる」

驚く五人を視界に入れつつ私は弦をはじいていく。

当たっている確信はない。ただこの辺だったという感覚だけで合わせた。わざとズラしてもいいがそれはなぜかバレる気がしたからやめる。

「で、曲は何にすればいい」

「そうね、弾ける曲で構わないわ」

弾ける曲って、全部思い出の曲だ。ここで、紗夜のいる前で弾くのは気が引ける。

「紗夜、適当に楽譜貸して」

「それでは…これを」

『Hacking to the Gate』か。譜面をとりあえず一番だけ確認する。

聞いたことあるし、これならきつと大丈夫だろう。自分を信じてやるしかない。

「それじゃあ始めていいかな」

「いつでも」

「あこちゃん、最初のカウントだけ取ってきてくれる」

「わ、わかりました！」

あこちゃんのカウントに合わせてギターを奏でる。悪くない感覚。紗夜の相棒だしいつもと違う感触だがすぐ馴染むだろう。

バンドでやる用に作られてるだけあってギターだけだとやはり物足りないが、今回はやむを得ない。

もう一番が終わる。ここまでだ。これでRoseliaに関わることもなくなる。

そう気が緩んだのが原因かもしれない。

「……っ!?!」

弦を全て抑えて音が鳴らないようにする。ピタリと音が止んだ。

それに対して幾人かの困惑の声が耳に届いた。

「…どうして、やめたの」

「これ以上やる意味はない。私の実力ならわかっただろ。ギター返す」

「え、朝日!？」

「姉さん!」

紗夜にギターを返し鞆を持ってスタジオを出た。外に出た瞬間に走り出す。

見てしまった紗夜を。驚いて悲しげな瞳をした紗夜のことを。

紗夜は私の演奏をどう思った。きっとまたギターに触れたことを喜んではいない。喜んでいたらあんな顔しない。見間違えるわけがない。

あれは紗夜を落ち込ませた。それだけでなくムカつかせたはずだ。ギターを長年弾いていなかった人間が昔のままの演奏をする。私だってそんなことされたら嫌なのに。

手首のことが必死すぎて、気が回らなかった。

姉なのに、大切な人なのに、私が紗夜を追い込むなんて。最悪だ。

◇◇◇

「姉さん!」

出て行く姉さんに声を掛けるもそれは空しくスタジオの扉が閉まった。



スタジオ内に静寂が広がる。  
ただ私はその場に立ち尽くしていた。

姉さんが突然現れた時は驚いた。信じられなかった。でもまたギターを弾いてくれたことは少なからず嬉しかった。久しぶりに聞いた姉さんの演奏は昔に比べても劣ることのない、引き込まれる演奏だった。私よりも明らかに上手い。才能の差を感じるレベルだった。そのはずなのに、どうして姉さんはあんな顔をしたのだろう。

曲の一番が終わる寸前、一瞬だけ向けられた視線に急に止まった音。俯く姉さんに静まり返った私たち。

逃げるように去った姉さんはどこか辛そうで寂しそうだった。

「あ、あの紗夜さん……大丈夫、ですか？」  
「……………」

宇田川さんの言葉に全員の視線が私に集まる。その視線を避けるように持ち場についた。

「練習、しませんか」  
「……そうね」

もちろんだが今日の練習は集中なんかできなかつた。  
姉さんの表情が脳裏をよぎって仕方ない。

姉さんは一体私に何を隠しているの。

## 猫耳と天然と妹と…。

世界というのは偶然でできている。  
それは最近よく思うことだった。

私たちがあの両親の下に生まれたのも。  
私たちが三つ子であったことも。  
私たちが今の境遇で育っていることも。

全ては偶然。言うなれば神様の気まぐれだ。

そして同時に思う。

もし私たち三つ子が三つ子でなかったら、と。  
偶然が私たちを出会わせたのならそうでなかった可能性もある。

普通の姉妹であれば比べられることはなかったのだろうか。  
最初からずっと仲の良いまま育っただろうか。  
常に笑い合っていていられただろうか。

そもそも他人同士だったら。

完全な赤の他人なら、仲良くできていただろうか。  
出会うことは叶ったのだろうか。

答えはわからない。もしかしたらその未来もありえたかもしれないが偶然は三つ子という答えを導いた。

だから考えても仕方ない。わかっているがどうしようもないほど考えてしまうのだ。

仲の良い姉妹の未来を。

ケンカしてもすぐに仲直りできる未来を。

悪の手が伸びない平和な未来を。

今は叶えられない。一つの夢。

◇?◇?◇?

「ギターが弾ける人？」

「はい。朝日先輩の知り合いにいませんか」

電話越しの有咲に私は質問をそのまま繰り返す。

唐突なこと過ぎて有咲の質問意図が読めなかった。

「それは私じゃダメなの？」

「えーっと、私は別にいいんですけど先輩がどう思うかが問題っていうか……」

「…説明してくれる？」

有咲の言葉を聞いてなんとなくの状況は理解できたつもりだ。

有咲の知り合いにギターを始めるやつがいて、有咲は未経験者だからできる人に教えてもらいたい。それで私に掛けたそうさ。

「なるほどね。それなら私が教えてもいいけど」

「ただ教えるやつが問題っていうか…」

「私はどう思うか、ってやつ? 誰。私が知ってる人？」

「……戸山香澄って名前なんですけど」

香澄。その名には覚えがあった。前に屋上で騒ぎ回ってた猫耳だ。

有咲が遠慮気味だった意味がやっとわかった。私のことを思っただろう。

だが私の知り合いでギターが弾ける人となると、音楽関係の知り合いが紗夜しか知らない。

そして音楽関係の知り合いとは二年以上連絡を取ってないし、今更連絡もしづらい。

「…有咲」

「はい」

「私か紗夜か」

「え？」

「教えてもらうならどっちがいい」

「………朝日先輩でお願いします」

「知ってた。日程教えて」

有咲からしても猫耳からしても紗夜は困るだろう。話したことがほとんどない人と一緒に練習はキツイ。私でもキツイ。

猫耳に教えるのはどうせすぐ終わるし、有咲の頼みとあれば断る理由もない。

と思ったのが、間違いだったかもしれない。

あれから一週間。私は猫耳に怒りを覚えていた。

「だから！そこはGだって言ってるんだろ!?!なんで違うコードになるんだ!」

「ええ!?!じゃあこうですか」

「それはCだって!どうやったら間違えるんだよ!」

有咲の家で経営している質屋「流星堂」。その隣に位置する蔵に私はこの一週間出入りしていた。理由は猫耳にギターを教えるため。そして毎度のことながら私の声が蔵中に響いていた。

「いい加減にしろ！家で練習してたんじゃねーのかよ！次間違えたら承知しねーぞー！」

「あ、有咲！助けてー！」

「無理。そもそも香澄が悪い」

涙目の猫耳。スパルタ教育はこいつには合っていないのか、単に物覚えが悪いのか。知らないが私に習う以上は慣れてほしい。

「香澄、いつも朝日先輩に怒られてるね」

「私、朝日先輩の声にいつも驚いちやうよ…」

「あ、ごめんねりみちゃん。驚かせる気はなかったんだよ」

「私の時と反応が違う！」

「ああ？猫耳はこの扱いで充分だろ。文句があるなら結果出せ！とつとと弾けるようになれ！できないなら私の時間を返せ！」

「酷い!!」

向かい合う私たちの背後からはクスクスと笑う声。

「まあ朝日先輩の言う通り香澄はさっさとギター弾けるようにならねーとな」

「じゃないとバンド活動できない。フアイト香澄」

「頑張つてね香澄ちゃん」

「ううー。頑張るよおー」

「なら10分後に見てやるからそれまで自主練してろ」

猫耳はピックと指を構えまた弾き始めた。既に間違っている。見

てられない。下手にも程があるだろう。

私はソファに腰を下ろす。鞆の中から水の入ったペットボトルを取り出し一気に煽った。

「お疲れ様です先輩。めっちゃ疲れてますけど大丈夫ですか」

「大丈夫に見えてるならお前の目は節穴だよ。猫耳のやつ今まで教えてきたギタリストの誰よりも下手くそだ」

「それは素人目から見てもなんとなく察してました」

「よくこれでバンド始めるなんて言ったもんだ」

猫耳のレッスン初日。今蔵にいるメンバーでバンドを組むことになったと言われた。

有咲はピアノ経験者。花園たえは小学生からギターを弾いていた。牛込りみは『GLITTER☆GREEN』のギターボーカル牛込ゆりの妹で姉と共にセッションしていたという。この段階ではできそうなメンツが揃っているように見えていた。しかしそれ以外に問題を抱えていた。

このメンバーを率いるリーダーが猫耳こと戸山香澄だが、まさかの楽器未経験者。いやそれはいい。誰だって最初はあるから。

問題なのは異常なほど下手だと言うこと。センスの欠片もない。もう三人だけでいいのでは？と言いたくなるレベルである。

「まだ始めたばかりですから大目に見てください」

「そうしてるよ。じゃなきゃ私の方が疲れてたりしない」

有咲の頼みでなければこんなの引き受けてない。すぐに逃げ出してる。

「でもホント助かってます。ありがとうございます」

「いいよいいよ。どうせ暇だったし。それより曲の方は順調？」

「ボチボチって感じですかね。私も鍵盤に触れるのは久しぶりでした

から」

「ブランクあるのによくできるよな」

「それ、先輩が言いますか…」

苦笑する有咲だが間違ったことは言っていない。

私は一応定期的にギターに触ってはいた。ただ痛みが走るから長くできないだけで音楽は好きだしギターは生活の一部だ。

長らく触ってすらいなかったのに弾けている有咲が恐ろしいよ。

「てかお前らドラムはメンバーにいれないのか？リズム隊足りないと思うんだが」

「私たちの知り合いにドラム叩ける人がいなくて…」

「え…」

有咲のやつ、まさか沙綾がドラマーってこと知らないのか？じゃあ有咲と沙綾は別に仲良しってわけでもないのか。

まあ、もしバンドに誘われてたしたら沙綾は断るだろうけどな。

「グリグリのひなちゃんに頼もうかなー？」

「でも別に絶対必須ってわけでもないだろ。ドラムがいなくてもバンドできないわけじゃねーし」

「朝日先輩の知り合いで私たちと同じ年くらいのドラマーっていませんか？」

無茶言うなよ。沙綾以外知らねーよ。グリグリのひなこさんに頼めるならそれでもいいと思う。

にしたって、初めてここに来た時は私に怯えてたのによく一週間で話せるようになったもんだな。私も教える側だし物腰は優しくしたつもりだがまさか効果があるとは…。

そもそも猫耳とおたえは最初から私に怯えた感じはなかったな。りみちちゃんくらいか、怯えてたの。…それはそれで悲しい。妹属に

怯えられてたなんて…。

「…生憎同い年のドラマーに心当たりはないかな」

「ならとりあえず今は4人でやろう。メンバーが増えるなら後でも問題ない」

「そうだねおたえちゃん。一曲完成させよっか」

「そのためにはまずあのバカどうにかしないとだぞ」

ドラマー。一応沙綾に話してみるか。猫耳がこの調子じゃライブなんてどうせまだまだ先の話だ。それまでに説得できればきつと沙綾も変わるかもしれない。

「おい香澄！何お菓子食ってんだよ！」

………猫耳の師匠として教えることは多そうだ。



## 大切な人と写真、嫉妬心と独占欲。

「……………ねー有咲。有咲ってさ大切な人っている？」

「なんですか突然」

昼休み。いつもは猫耳たちと一緒に昼を食べているらしい有咲だが、今日はりみちやんが休みで猫耳とおたえが補習だとかで私と沙綾の三人で一緒に食べていた。

私は一足先にお昼を食べ終わり寝転がっていた。有咲は「食べてすぐ寝ると太っちゃいますよ」なんて言ってたがそんなもん迷信に決まってる。

沙綾は飲み物を買って出て行った。

有咲と二人きり。特に何か話すわけでもなく各自適当に過ごしていた。そんな時不意に頭をよぎった質問をそのまま有咲に投げる。

スマホを眺めていた有咲は「何企んでるんですか」と言いたげだが私は何も企んでいないから。怪しげに見ても何も起こらねーぞ。

「いいから。いるの？いないの？」

「…そりゃあ、いますけど……………」

「それってさ、有咲にとってどんな立ち位置の人」

「…ばあちゃんとかですな」

家族か。そうだよな。一般的にはその答えが正しいよな。

私も間違っちゃいないが、半分くらいは不正解。

「なんでそんなこと聞くんですか？」

「…なんとなく、としか言えないよ」

「先輩の大切な人は紗夜先輩と日菜先輩ですよね？」

「……………」

私の大切な人。紗夜と日菜。

間違いない。間違いないはずだけど。なんだろう少し腑に落ちない感じは。今までは自信を持ってそうだと考えていたはずなのに。

「……………先輩……………」

有咲は心配そうに私のことを覗き込む。

ダメだダメだ。有咲にそんな顔させたら。

「いや。有咲の言う通り、私の大切な人は紗夜と日菜で間違いないよ」

「……………そうですか」

怪しんでるな。仕方ない、ここはおちよくってやろう。

「あー。心配しなくても有咲も大切だから。拗ねるなよ」

「は、はあ!?!そんなんじゃないです!!」

「私に名前があげられなくて寂しかったんだろ?仕方ないなー抱きしめてやるよ」

「ちよー先輩!」

私は起き上がって有咲を抱きしめる。腕の中で抵抗されるが離してやらない。

有咲には間が空いていたことを不思議に思われただろう。無理に気を紛らわせようとした結果がこれだが、なんか急に恥ずかしくなった。それを誤魔化すように言葉を並べる。

「ホント有咲は可愛いなー。恥ずかしがらなくても私はわかってるから」

「か、からかわないでくださいー!てか離して!」

「離さないよー」

今顔見られたら絶対赤いだろうし。けど、なんかあれだな。こんなやり取りしてたら少し不安になってきた。

私はいつまで有咲とこんなくだらなことを続けられるのかな。

「…ねえ有咲。有咲は私のこと、裏切ったりしないよね。私から離れたりしないよね」

「え、あ、当たり前じゃないですか」

「…ホント…?」

「朝日先輩? 今日どうしたんですか。なんか変ですよ」

理由を問われてもただ不安になっただけとしか言えない。

これは何も有咲だけに限ったことじゃない。

私がいくら紗夜と日菜を大切に思っているも二人は何とも思っていないかもしれない。

そっぽ向かれて諦められて私の手の届かないところまで行ってしまったら、私はどうすればいい。

それはありえない未来じゃないんだ。

手を伸ばせば届いてしまう位置にある。

だから私はいつだって怯えてしまう。

抱きしめる力が自然と強くなる。もう有咲は抵抗なんかしなくなっていた。それをいいことに有咲の肩に顔を埋めた。

抵抗しないのは私も同じ。それどころかしっかりと抱きしめられて頭を撫でられる始末。これじゃあどっちが年上なのかって感じた。

「大丈夫ですよ朝日先輩。私は何があっても先輩の側にいますから」

その言葉はとても温かくて私はしばらく有咲に抱きついていてのだった。

カシャツ!という音が聞こえるまでは。

「これはレアな写真が撮れたな」

「さ、沙綾!？」

「え、や、山吹さん!？」

私の目の前、有咲の真後ろ。そこにいたのは沙綾でニヤニヤしている。それに加えて何か企んだような笑みを浮かべている。

嫌な予感しかない。

「おい沙綾。今お前写真がどうのって言ったか……?」

「はい。珍しく弱気な先輩と珍しく大胆な市ヶ谷さんがいますけど」

「消せ!今すぐに消してください!」

「えー。どうしてですか?こんなレアな写真これから先も撮れるかわかりませんかよ?」

「撮れなくていい!いいからスマホ寄せ沙綾!」

「嫌ですよ。しばらくの間、このネタでいじれそうですし」

今までは家族思いの天使にしか見えなかった沙綾が今は悪魔にしか見えない。

すぐにでも写真を消去しないと、私だけでなく有咲までからかわれる。それは有咲のためにも阻止せねば。

「それじゃあ先輩また後で」

「逃げるな沙綾!」

屋上から早足で去って行く沙綾。私は有咲から身体を離して追いかけた。

結果としては沙綾が自身の教室に入った直後にチャイムが鳴ったことにより私が勝負に負けた。一、二週間は確実にあの写真をネタに色々こき使われる気がする。

◇?◇?◇?◇?

「沙綾。いい加減写真消して」

「嫌ですよー。いいじゃないですか一枚くらい恥ずかしい写真があったって」

「嫌だよ！お願い！なんでもするからその写真消して！」

放課後。帰り道で昼休みの写真を消すよう朝日先輩に頼み込まれていた。私はあの写真を消すつもりはなかった。ホントにレアだし、もう二度と見られないかもしれないから。

だけど「なんでもする」と言われてしまったらちよつと期待。先輩、そんなこと簡単に言っていていいんですか。私、調子に乗っちゃいますよ？

「ホントになんでもいいんですか？」

「私の叶えられる範囲なら！」

「そうですか。ならお願いがあります」

予防線張られたのはしょうがないよね。朝日先輩って見た目のわりに臆病だし。でもこれは先輩にしか頼めないことだし、叶えられる範囲だからいいよね。

「朝日先輩、週末泊まりに行ってもいいですか？」

「…泊まり？うちに？」

「あ、さすがに紗夜先輩たちのいる方じゃないです。仕事場の方でいいのでお泊まり会しましょう」

「……お願いって、それだけ？」

「はい。何か変ですか？」

「いやそんなことはないけど。……わかった。週末な」

「やった！ありがとうございます」

朝日先輩はどうして私がお泊まり会を提案したのか首を傾げている。

残念ですけど教えてあげません。これは完全に私情だから。

「それじゃあ私こっちだから」

「今日は仕事場行くんですか？」

「突然沙綾が泊まりに来るらしいからな、少し片付けるんだよ。またな」

そんなことしなくても充分片付いてる。というか何も無いのに。あいかわらず朝日先輩は真面目だ。

背を向け歩き出した先輩の背中を見送る。そして週末のお泊まり会を取り付けることに成功した、元凶の写真をスマホに映した。

朝日先輩と市ヶ谷さんが抱き合っている写真。

先輩はやけに弱々しくて今にも壊れてしまいそうな雰囲気だ。

市ヶ谷さんはそんな先輩の頭を撫でていた。市ヶ谷さんの表情は映ってはいないがきつと優しい顔をしていることだろう。仲良いもんね二人は。

おかしくない。何も変なところはない。単純に仲の良さを表しているだけじゃないか。

だからこんな感情、持っちゃいけないのに。

こんな先輩、私は初めて見た。私には無理にでも強がってお姉さんぶってるところしか見せないくせに。

「ズルいな、市ヶ谷さんは。きつと私の知らない先輩の顔も知ってるんでしょ…?」

嫉妬心と独占欲が、ただ溢れていく。

妹属性を発揮されるのは困るから。

私がそれに気づいたのはネットサーフィンをしていた時。トレンド上位に上がっていた記事に少なからず目を奪われていた。

『Pastel\*Palettes』ライブで観客を騙す!?

そんな見出しとともに写真に映っていた五人のうちの一人は私の妹。

内容を読んでみればそこに書かれていたのは昨日行われたライブのことだった。

『Pastel\*Palettes』の初ステージ。楽器の生演奏を披露する。そんな新たなプロジェクトに期待を持ち集まった観客だったが、曲の途中で全ての音が止まるというハプニングが発生。生演奏ではなく音源が流れていたことが判明した。

これに一部の観客は激怒。「騙された!」「チケット代を返せ!」などと事務所への問い合わせが後を絶たないという。

こりゃ酷いな。全部当て振り、口パクでやってたってことか。楽器演奏するって言うっておいてそれはないだろ。客も怒るに決まってる。

だけど変だな。日菜の担当はギター。楽譜さえ貰っていれば間違はなく完璧に弾けただろう。元々芸能人ではなかったのだからオーディションで選ばれたと思うし、弾けることは前提だったはずだ。

ドラムの大和麻弥ってのも昔ライブハウスで見たことがある。確かバンドメンバーというよりはサポートスタッフ的な感じだったけど記憶ではどのバンドよりも上手かった。

…ベース。白鷺千聖、か。天才子役って呼ばれてた同じクラスのやつ。白鷺千聖はドラマに出ずっぱりだ。恐らくビジュアル的なのを



考えて入れたのだろう。だが彼女が楽器経験者だとは聞いたことがない。

よく見りやボーカルの丸山彩は隣のクラス。しかし丸山彩に歌が上手いイメージは全くない。

キーボードの若宮イヴつてのも聞いたことないな。

ギターとドラム以外は素人。いやギターも素人か。それに加え結成日は一ヶ月ほど前。ぶっちゃけ素人が楽器を練習して披露するにどう足掻いても足りないと思う。

それなのに昨日お披露目だったってのか？

これ、スタッフは最初から音源で流す気だっただろ。そんなの最初は上手くいってもいつかはバレてファンがいなくなってもおかしくないのに何考えてんだか。

客の反応を見ても「がっかりした」だの「金払って損した」だの散々だ。

「おねーちゃん！何見てるのー！」

「っ!?!……日菜」

突然部屋に入って来た妹に驚く。私の後ろに回った日菜はパソコンを覗き込んだ。

「あ、この前のライブの記事だ。うわあー色々書かれてるねー」

妹が自分たちの記事を見て一番に出てきた言葉はやけに他人事だった。

「おねーちゃんあたしの記事見ててくれたんだー」

「トレンド上位に上がったからだ。見たのは偶然にすぎない」

この記事読んで言うセリフはそうじゃないだろう。日菜は人に何

か言われて落ち込んだりすることはあまりないがこれ見ても落ち込まないというのは人間性を疑う。本当に我が妹は人か？

「日菜、お前ギター弾かなかったのか？」

「うん。だって事務所の人たちが弾かなくていいって言ってたし」

「オーディションでギター審査もあつたんだろ？それなのにか？」

「別に審査なんてなかったよ？そもそもあたし以外はみんなオーディションしてないし、どの楽器がいいか事務所の人に選ばされたんだー」

衝撃的すぎる事実には私はつい黙ってしまふ。

え、そんなことある？事務所がそんな適当でいいの？今の時代のアイドルってそんなんで務まるの？いいのかそれで。

「それにあたしは何言われても気にしないし。この企画も楽しそうだったからオーディション受けただけで飽きたら辞めるよ。千聖ちゃんもきつとあたしと同じ考えだと思う」

日菜のと白鷺千聖のは訳が違うだろ。

日菜は楽しいかそうじゃないかの判断だが白鷺千聖はそんなこと思っていないと思う。学校で話したことがあるわけじゃないが彼女は情に流されてどうこうするタイプでもなかるうに。これ以上自分のメンツに傷がつくようなら白鷺千聖は辞める。勘だがきつと間違いない。そうでもしないと子役からずつと売れ続けられまい。

「…そう。好きにすればいいんじゃない？」

「おねーちゃんはアイドルやつてるあたしとそうじゃないあたしだったらどっちがるんっ♪てくるっ？」

『るんっ♪』てのがよくわからんがどっちでも私には関係ない」

「ええ〜！冷たいこと言わないでよー」

「言われたくないなら早く自分の部屋に行け。邪魔だ」

「別にいいじゃーん。たまにはお喋りしよーよー」

「お喋り？」

「うん！おねーちゃんは聞いているだけでいいから。…ダメ？」

…可愛くお願いなんかするなよ。断れないだろ。突然縮こまって遠慮ガチに見つめて。可愛い声だしやがって。妹属性存分に発揮するなよ。

「……私は聞いているだけだからな」

パソコンを閉じ英単語帳を開いた。これはあくまでも勉強の片手に聞いているという口実を作るためだけ。正直勉強などせずに聞きたいが、後が怖いからな。

それに、たまには妹に構いたいと思うのは姉の宿命ではなからうか。

キラキラ目を輝かせた日菜はとても嬉しそうだ。

「あのねおねーちゃん！この前学校でね！」

そこから数十分に渡って続いたマシンガントーク。

学校のこと、アイドル活動のこと、ギターのこと。色々なことを話してくれた。時々相槌を打ってやればさらに嬉しそうに顔をすることもだからつい日菜の話に耳を傾けていた。

英単語なんて一つも頭に入っちゃいない。

けどたまにはこういう時間もないと本当に妹たちと話す機会がなくなりそうだ。

◇?◇?◇?

朝日おねーちゃんは天才だった。

テストではいつも満点で、スポーツをやったらどの部にもスカウトされて、なんでもできる人だった。

紗夜おねーちゃんも同じくらいなんでもできる人だった。それでも自分の実力を故意に見せつけることもなく、誰にだって優しい、困ってる人がいたら助けて、あたしの面倒をよく見てくれた。

あたしはそんな二人のおねーちゃんが自慢で同時に憧れていた。

けどいつからかおねーちゃんはおねーちゃんじゃなくなった。

真っ先が変わったのは朝日おねーちゃん。あたしとおねーちゃんに好きじゃないと言って距離を取った。おねーちゃんの方からは話してくれなくなっただし一緒に登下校もなくなった。

けどあたしは構わず話しかけた。何度遠ざけられてもその度に近づいた。そうしないとおねーちゃん存在がなかったことのような気がするから。そんなのは嫌だった。

懸命に話しかけても結局は変わらない。多少は口を利いてもらえようになっただけど小学生の頃みたいに笑い合うことはなくなった。悲しくて仕方なくて、同じように悩んでいたおねーちゃんに相談もした。

おねーちゃんは「大丈夫」「すぐ元に戻ってくれるわよ」って言って頭を撫でてくれた。その言葉に安心してあたしは泣いていた。

けど、その紗夜おねーちゃんも変わった。

どうやら朝日おねーちゃん同様紗夜おねーちゃんもあたしのことをよく思っていなかったらしい。おねーちゃんに追いつきたくてマ

ネしていた行動は否定された。

おねーちゃんはあたしにマネされたくない、あたしにマネされるとおねーちゃんが劣っているように見えると言った。

そんなことないのに。あたしの中ではおねーちゃんがやっていることが全て輝いて見えていたからそのおねーちゃんを目指していたのに。

逆効果だった。あたしが輝いてしまうとおねーちゃんは影のように見えなくなるらしい。

三つ子は、ケンカしてもすぐに仲直りできると思っていた。けどそれは間違いだった。

あたしたちは仲良くなんてなかった。血の繋がりだけの存在だった。

そうだとわかったら、世界なんてつまらないものになった。

人が何を考えているのかわからなくなった。

なんで簡単なこともできないのか理解できなかった。

でもおねーちゃんに話しかけることだけはやめられなかった。それをやめると今までの思い出が全部ウソになるから。楽しかった、笑い合った日々はウソ偽りのないものだったって信じたかったから。

あたしはおねーちゃんたちに戻ってほしい。

いや、あたしがおねーちゃんたちを元に戻さないといけない。

だっておねーちゃんたちが変わったのは全部あたしのせいなんだから。

友人と遊びに行ったらカツアゲと言われました。

「うわあ！かわいい！りんりん、朝日さん！見て見て!!」

「うん……かわいいね……」

「うん。すごく可愛いな。あこちゃん」

猫を抱えて満面の笑顔を見せるあこちゃんに私の心は奪われていた。ホントに可愛い。猫も可愛いけどあこちゃんが一番輝いてるよ。一面には至る所に猫、猫、猫。何を隠そう今日は猫カフェに来ていた。

そうだと決まったのは数十分前のこと。

放課後、家へ帰ろうとした私。しかしこの前の歌姫さん同様に正門には違う学校の制服を着た少女がいてつい足を止める。少女も私に気がついたらしい。元気よく手を振っていた。

「朝日さん！」

「あこちゃん、こんなところで何してるの？りんりんのお迎え？」

「はい！これから猫カフェに行くんです！」

猫カフェ。猫に癒しをもらうための場所。いいね。動物好きとしては堪らない。

まあ私はあこちゃんに癒してもらってるから充分だけど。

「ちよ、あの子冰川さんに絡まれてない？」

「ほんとだ。中学生くらいなのに可哀想」

そんな声が私の耳に届く。幸いあこちゃんの反応を見る限り聞こえてはいないだろう。

陰口ならもつと分かりにくいところでしょうよ。あこちゃんに聞かれたらどうする気だ。それに可哀想なのはお前らの脳内だよ。私をなんだと思ってるんだ。

「そっか。楽しんで来てね。私は帰るから」

「朝日さん、今日はもう帰るだけなんですか？」

「そっだよ。どうして？」

「ならあこたちと猫カフェ行きましょう！」

「もちろん喜んで」

あこちゃんの周りにキラキラエフェクトが見える。

いや断れないね！あこちゃんに誘われて行かないなんて言えるわけがないじゃん！断らないよMy Angelのお誘いとあらば！

それにきつと断ったらあこちゃんは悲しい顔すると思うし、天使に悲しい顔はさせられない。

私の反応にあこちゃんは喜んでくれている。うん、可愛い。

「……お待たせ、あこちゃん……朝日さんも……一緒、ですか……？」

「そっだよりんりん！猫カフェ朝日さんも連れてつていいよね？」

「……うん……！……もちろん……」

かけついたりりんりんは私を見て首を傾げていたけどすぐに笑って受け入れてくれた。ホント優しく可愛い子だ。

「それじゃあ時間も限られてるし行くこうか」

「はいー」

元気のいい返事とともに私たちは歩き出した。

場所はショッピングモールの3階奥。受け付けのお姉さんが笑顔で接客してくれる。代金を払ってドリンクを取り中に入った。

入るや否や、ドリンクを私に渡したあこちゃんは冒頭の言葉で私たちを癒していたのだ。

はー、どうしてあこちゃんはこんなに可愛いのかな。今日来てよかった。

「朝日さん！りんりんも！こつち来てよ！猫ちよーかわいいんだから！！」

私とりんりんは顔を見合わせ笑う。

テーブルにドリンクを置いて、あこちゃんの元へと向かうのだった。

◇？◇？◇？

学校に登校すれば私を見るなりヒソヒソと話し出す生徒たち。今日は授業に出ようと思っていた日だからと真っ直ぐ教室へ入る。それまで騒がしかった教室が一瞬で静かになった。いつも私を腫れ物のように扱う彼女たちだが今日は何かが違う。何か良くないことが起こっている気がした。

授業は、正直つまらない。教師の教え方は上手くない。かと言って内容が面白いわけでもない。そう思っているのは私だけでなく他の生徒もらしく話し声があちこちから聞こえてくる。私はそれを耳に入れたくなくて机に突っ伏した。

「じゃあこの問題を……氷川」



「……………」

「氷川！」

無視無視。聞く理由もない。問題なら他の人に当てればいいのに、どうしてわざわざ寝てる私に当てるかね。バカなのか。

「あ、あの……氷川さん、当たってるよ……………」  
「……………あーもう、起きりゃいいんだろ」

誰も声なんてかけないのに隣の席の弱々しい声の彼女は勇敢にも私に話しかける。さすがにそれを無視するのも悪い気がして仕方なく身体を起こした。

ホツとしている視線は一つだけ。他は笑ったり怒ったりしている。  
うわあ、面倒。

「氷川、この問題を解いてみる」  
「……………」

「ねえ、氷川さんわからないんじゃない？」

「授業ほとんど出ないもんね。そりゃわからないよ」

「あんた教えてあげたら？」

「えーやだよー」

なんて底辺の会話してんだ。この程度がわかんないわけないだろ。問題を認識してただけだわ。ていうか誰が恩着せがましいお前らなんか教えてもらうか。

私は立ち上がって黒板に向かう。チョークを手に取り数式を書いていく。5行ほどの数式を書き終えれば教師やクラスの奴らは目を丸くしていた。解けないと思ってたのかよ。

「正解ですよね？」

「あ、ああ……………」

席に戻りまた机に突っ伏せば今度は何も言われることはなかった。人を見た目で判断するな。わかってねーのはお前らだ。

「……………朝日、さん……………!」

昼休みも半分が過ぎた頃。屋上の扉が結構大きな音を響かせた。目線の先にいたのは珍しい人物で私も目を丸くしてしまう。

「りんりん? どうしたの?」

「朝日さん……………今日は、その……………すみません……………!!」  
「へ?」

突然すぎる謝罪に戸惑う。

私は何か謝られるようなことさせたか? いや相手はりんりんだ。私が謝ることがあったとしてもりんりんから謝ることなんてないはず。

とりあえず話を聞くために頭を上げてもらう。

「待って何。何かあった?」

「……………今日朝日さんに……………視線が集まって……………いたの……………私のせい  
いかも、しれなくて……………」

「……………どういうことだ?」

詳しく話を聞けば昨日あちやんとりんりと猫カフェに行くと

ころを見ていた生徒が「氷川朝日が白金燐子と中学生をカツアゲしていた」と噂したらしい。素行の悪い私のことをほとんどの生徒が知っているため信ぴょう性が高かったとかなんとか。

りんりんも朝からコソコソ噂されていたらしく昼休みにお昼を食べていたら「昨日大丈夫だった？」と心配されたようだ。それで急いでそのことを話に来たらしい。

道理で見られているとは思っていたけどそんなことになっていたのか。これは二人に申し訳ないな。

「……そっか。ごめんねりんりん、面倒なことに巻き込んで」

「い、いえ……！……私は、全然平気……です……」

「誤解ではあるけど解こうとしなくていいからね」

「……え……でも……」

「りんりんがそんなことされてないって言ってもあいつらは聞かないよ。むしろ私にそう言うように命令されてると思われるだけだから」

「……けど、朝日さんは……悪くないじゃ、ないですか……」

「別にいいんだよ。私はその役割に慣れてるから」

そんなことよりりんりんが孤立することの方が怖い。ただでさえ人見知りで話すことが得意ではないのに。それが私のせいだというのは後味が悪い。

そもそも「私がりんりんとあこちゃんをカツアゲした」という事実  
は存在していない。

「……朝日さんが、そう言うなら……」

「うん。……心配しないでよ」

心配そうな瞳に私は優しく微笑む。

納得してくれたのかりんりんは教室へと戻って行った。

屋上の日陰に私は寝転ぶ。

午後の授業はサボろう。そう決意した。

お泊まり会、そして……。

「お邪魔しまーす」

「おう、いらっしやい」

金曜日の夕方、仕事場に現れたのは沙綾だった。黄色のリュックを背負い笑顔で私に挨拶をする。

家の中へ招き入れ、荷物をベッドの横に置かせる。

「早かったな。家の手伝いとかでもう少し遅くなるかと思ってた」

「父さんたちに朝日先輩の家に泊まりに行くって言ったら手伝いはしなくていいって言われました。むしろ朝日先輩の迷惑にならないようにだそです」

「山吹家は私のことをどれだけ偉い人だと思ってるんだ？」

沙綾くらいしっかりしてる子が他の人の家に泊まりに行つて迷惑なんかかけるわけないだろうに。

「父さんも母さんも朝日先輩が無茶しがちだって知ってるから心配してるんですよ」

「過保護。道理で沙綾みたいな子が生まれてくるわけだ」

「それどういう意味ですか？」

「蛙の子は蛙ってことだよ」

何か言っている沙綾を視界の隅に入れ私は買い物に行く準備を進める。家の冷蔵庫には食材がほとんどないのだ。

「沙綾、夕飯何が食べたい？」

「え、朝日先輩が作ってくれるんですか？」

「何嫌なの」

「そうじゃなくて！えーっとそうですね……ペペロンチーノがいいです」

「おっけー。好きだねペペロンチーノ」

「先輩は好きじゃないんですか？」

「別に普通だよ。まあスパゲッティとかよりはペペロンチーノの方が好みではあるけど」

でも沙綾の場合どこに行ってもペペロンチーノ頼むからなあ。たまにならいいけど毎回毎回ペペロンチーノというのは飽きないのだろうか。

「買い物行くけど沙綾は家で留守番してる？」

「一緒に行きます。家で待ってるのは暇ですし部屋の主一人でなんて行かせられませんよ」

「そっか。ありがとね」

沙綾はスマホだけを持って私と一緒に仕事場を出た。本当は財布も持とうとしていたのだが私が「持たなくていい」と言い、渋々と言った感じでカバンにしまっていた。気にしなくていいのに。

目的地は近くのスーパー。この時間ならセールでもやっているだろうか。

「沙綾の家だとペペロンチーノに何入れる？」

「何って普通のペペロンチーノですよ」

調味料はあるから食材だけでいいか。

必要な食材をカゴに入れていると沙綾が話を振ってきた。

「朝日先輩って普段料理とかするんですか？」

「ある程度はね。そう言う沙綾はめっちゃくちゃ上手そうに見えるけど

？」

「いやいや。そんなことないですよ。母さんの手伝いはよくしますけど料理スキルは人並みです」

会話から伝わる良い子さ。どうせお母さんの身体が弱いこと気にして一人でやってたんだろう。普通に料理できそうだ。

でも沙綾が家にいたら最高だな。可愛いし優しいし面倒見いいし。

「沙綾ならいいお嫁さんになりそうだね」

「お、お嫁さん!」

「そうそう。毎日エプロン姿で起こしてもらいたい」

「エプロン姿で!」

考えてみたら朝起きたら目の前に笑顔の沙綾が現れるとか最高じゃないか。将来的に起こしてもらえるやつ幸せかよ。

「……………沙綾? どうした?」

「い、いえ! 私料理の勉強頑張りますね!」

「あ、ああ……………」

黙り何かを考える素振りを見せる沙綾に声をかけたらそう言われた。

なんで突然。そんなに手料理振る舞いたいやつでもいるのかな。

スーパーから帰ってきた私たちはすぐさま料理に取り掛かった。沙綾にも手伝ってもらったがすぐ慣れた手つきだった。

誰かと食べるご飯はいつも以上に美味しいと感じるものらしい。この感覚も久しぶりだ。

「ごちそうさまでした」

「お粗末さまでした。食器貸して。洗うから」

「あ、私やります」

「いいの？」

「はい。ですから先輩はゆっくりしててください」

食べ終わり食器を片付けようとしたら沙綾が代わりにやってくれ  
るという。お言葉に甘えてベッドに腰掛けた。

ベッドからキッチンはよく見えるから沙綾の食器を洗う後ろ姿が  
目に入る。

クルツと先端の跳ねるピンクのポニーテールにそれをまとめている  
黄色いリボン。うなじはなぜか色っぽくて、身体のラインが出ている  
服は沙綾のスタイルの良さを私に見せつけていた。二の腕に余分  
な脂肪はなくて、まるで中学の頃みたいだ。

「……………沙綾」

「なんですか」

「沙綾はさ、もうバンドやらないの？」

「……………どうしたんですか急に」

間があつた。声のトーンも半オクターブくらい低い気がする。

「知ってるかもしれないけど今有咲たちがバンド組んでてドラムがい  
ないんだよ。それで沙綾が出来たりしないかなーと」

「無理ですよ。家の手伝いがありますし、母さんのことも心配ですか



ら」

「だよな。じゃあ知り合いにドラマーいたりしないか？」

「……………思い当たる人はいますけど別のバンド組んでいるので」

「そっか」

まあなかなかいないよなドラムやってる人。沙綾の知り合いもダメなら自力で見つけるしかないだろう。有咲や猫耳には力になれなくて悪いが。

「先輩、先にお風呂使っていいですか？」

「いいぞ。ごゆっくり」

食器洗いが終わったのか沙綾は着替えを持ってお風呂場へ行った。30分ほどで出てきた沙綾はダボツとしたラフな格好。頬は少しだけ赤く染まり髪から水滴が垂れる。残念なことにここにはドライヤーを置いていないので頑張つて乾かしてくれ。

入れ違いに私もお風呂に入る。さっぱりして部屋に戻れば沙綾はなぜかベッドに座り私の相棒を手にしていた。

「あれ。沙綾つてギター弾けたっけ？」

「いえ全く。ただこのギター見たら先輩が弾いてるところ思い出して……………」

沙綾の前で相棒を弾いたのなんて二年前。手首が使いもんにならなくなつてからは弾こうにも弾けなくて沙綾の願いを叶えられずにいた。今もまだ叶えられない。

その事実が悔しくて沙綾からギターを取り上げ元の位置に戻した。沙綾は少しだけ悲しそうな顔をしていた。そんな隣に座る。

「沙綾。本当にもうドラムやらないの」

「……………やりませんよ。何度も言ってるじゃないですか」

「でもそれは家族のこと、やまぶきベーカリーのこととかお母さんのことがあるからでしょ？沙綾はどう思ってるの」

「どうって……………」

「ドラムが嫌いになったわけじゃないでしょ？」

「そんなの……………当たり前じゃないですか」

知ってた。沙綾がドラムを叩いてる時はいつも笑顔だったから嫌いなわけではないことくらい。でも口に出したことは重要だ。

沙綾は誰かのために自分の気持ちを押し込められるやつだ。だったら誰かがやってもいいと言ってやらないといけない。

「ならやればいいじゃん」

「そんな簡単に……………」

「簡単に言っていないよ。私は今よりバンド活動してた時の沙綾の方が輝いてたと思う。お母さんが心配なのはわかるよ。でもだからって沙綾が何もかもガマンする必要ないじゃん」

「……………先輩」

「それにドラム続けてくれたら夏希や有咲たちも喜ぶと思うし」

「……………また、市ヶ谷さん、ですか」

「え」

気が付けば私は沙綾に肩を押された。一秒にも満たない時間で背中にもベッドの柔らかな感覚が訪れた。まだ濡れている髪の毛の冷たさが肌を掠める。

明るいはずの天井は影になっていて目線の先には沙綾がいた。まっすぐ見つめられ両手は沙綾の手によって拘束されている。

ここで今自分の置かれている状況を理解した。

「さ、沙綾！なにして！」

「いいですよね市ヶ谷さんは。先輩の色々なところを知ってて」

「は」

「私が見たことない先輩をきつとたくさん知ってるんだろーな」

「ちよ、おい」

「逃げちゃダメです」

覆い被さっている沙綾を退かす術は私にはなくて必死に逃げようと身じろぐも簡単に押さえつけられてしまう。沙綾ってこんなに力強かったっけ。

「ねえ先輩。先輩はどうして強がるんですか」

「え？」

「市ヶ谷さんには弱いところ見せて本心ばっか見せるのに。なんで私にはそうしてくれないんですか」

「そ、んなの偶然だって！」

嘘。本当は沙綾に弱いところを見せるのが嫌なだけ。

「そうですか。なら」

すると沙綾は含みのある笑みを見せた。それに嫌な予感がして冷や汗が流れる。

「朝日先輩。私しか知らない一面、見せてください」

「っ!?!さあ」

キス、された。

この前の手当の時のようなイタズラではなく、完全に本気のキスが唇に。何度も角度を変えられ柔らかい感触が次々と降ってくる。上手く息継ぎができない。かと言って口を開けば待っていたと言いたげに舌が入ってくる。目を閉じているため視覚以外の感覚がフル回転していた。段々抜けていく力に私は身体をベッドに預けた。

「……………さあ、や……………」

止んだ口付け。息を整えながら沙綾を見れば何故か目に涙を溜めていてその雫がポロポロと私の頬に落ちていく。

驚いて沙綾を見つめれば本人も予想外だったのか両手でそれを拭っていた。

「おか、しいな……………なんで、涙が出るんだろう」

「さあや」

「すみませんキスしちゃって……………もう、しませんから」

「沙綾」

「だからおねがい……………きらいにならないで」

「沙綾！」

「っ!？」

上半身を起こした私は沙綾を力の入らない腕で抱きしめた。首を振って否定している。しかしすぐに逃げ出せるであろう力なのに沙綾が逃げる様子はなかった。そつと頭を撫でる。

「心配しなくても、私は沙綾のこと嫌いになんかならないぞ」

「……………うそです。だって、むりやりキスしたし」

「気にしてないよ。驚きはしたけど」

「……………ほんとう、ですか……………」

「嘘ついてどうするのさ」

この後輩、今日は色々な表情を見せてくれる。それがなんだか嬉しくて仕方なかった。

「それにしても沙綾って我慢強いのかと思ってた」

「……………ずっと、ガマンしてたんです。そうじゃないと朝日先輩が離れていくと思って」

「そんなわけないのに。馬鹿だな」

「……………全部先輩が悪いです。私と話してるのにずっと市ヶ谷さんのこと出してくるんですから」

「……………もしかして嫉妬？」

「……………もしかしなくてもそうです」

なんだそれ可愛すぎ。

沙綾は身体を離して真っ直ぐ真剣な眼差しで私を見ていた。

「この際ハッキリ言っておいた方がいいですよね。」

朝日先輩、私朝日先輩のことが好きです。紗夜先輩や市ヶ谷さん、他の人たちより明らかに私の方が先輩のこと好きですし、世界で一番愛してます。なので、私と付き合ってください」

真っ直ぐすぎる愛の告白になんだか照れくさくなった。恥ずかしくて今にも逃げ出したいくらい。

だけど勇気を出してくれたんだ。なら逃げるわけにもいかない。

「……………沙綾。私も沙綾のこと好きだよ。でもそれは友達や後輩として。今はまだそれ以上の感情で見たことはない。けどもし、それでも私のことを好きだって言うならアピールして。沙綾のこと好きにさせて見せてよ」

私の言葉に沙綾は目を見開いて、そして笑った。

「そういうところ、先輩らしくて好きですよ」

「それはどうも。こりやあ沙綾の私に抱く好感度上がったんじゃないか？」

「現段階で最高値なのでこれ以上上がりません」

「……………それは困った」

沙綾のやつ、隠さなくていいと分かっただから言葉がストレートだ。これは私の心臓が持たないかもしれない。

沙綾はまた含みのある笑みを浮かべて私の耳元に近づいた。吐息がかかって嫌でもドキドキしてしまう。

「朝日先輩。私、絶対先輩のことオトしますからね」

ホントに、困った後輩だ。

不仲でもいないと落ち着かないらしい。

「おねーちゃん、朝日おねーちゃんは？」

「…部屋にいないの？」

「いなかったよ。どこ行っちゃったんだろー」

ノックと共に部屋に入って来た日菜はそんなことを言った。勉強の手を止め日菜に向き合う。

どうやら姉さんがいないらしい。時計の針は10の字を過ぎていて確かにおかしいと思った。姉さんは遅くても10時までには帰って来ている。

「連絡はした？」

「したよー。けど繋がらなくて…充電切れてるのかなー？」

なんだかんだ日菜のことを気にかけている姉さんだ。連絡せずに遅くなることなんてないはず。

しかし日菜でも連絡が取れないとなると私が連絡しても意味がない。

一体どこへ行ったのだろう。事件などに巻き込まれていないといいが…。

「あれ、おねーちゃん電話鳴ってるよ」

「ほんとだわ」

日菜に指摘されスマホを取ればディスプレイに映っていたの知らない番号。不思議に思いつつ画面をスライドした。

「もしもし」

「紗夜。私、朝日」

「…！姉さん。今どこにいるんですか！」

電話の相手は姉さんだった。それに日菜も少なからず反応している。

「知り合いの家。泊まるって言ってなかったからな」

「そういうことは前もって言うてください。心配します」

「だから忘れてたんだっつーの。んじやそゆことで」

「ちよ、姉さん！」

一方的に切られてしまった。仕方なくスマホを定位置に戻す。

おそらくスマホの充電が切れたからその知り合いから携帯を借りてかけたのだろう。とりあえず連絡が取れて一安心だ。

しかし長々と話したくないとも言いたげなやり取り。

やはり私は姉さんに嫌われているようだ。

「おねーちゃんなんて？」

「…今日は知り合いの家に泊まるそうよ」

「そうなんだ。連絡取れてよかったねー！」

日菜も同じことを思っていたよう。姉妹というのは変なところで繋がっている。

「ならもう用はないでしょう。部屋に戻りなさい」

「あ……」

日菜は悲しそうに声を漏らす。

私はその声に弱いからやめてほしい。

「何」

「う、ううん！なんでもないよー！」



日菜は私と話す時少しだけ遠慮気味。姉さんと話す時はそんなことはないのよね。

「何よ。言いたいことがあるならはつきり言つて」

「え、えーつとね……もう少しだけ、おねーちゃんと話してたいなーと思つて……ダメ、だよね？」

そんなことを悩んでいるのは日菜らしくない。いつもなら好き勝手話しかけてくるのに。姉さんがいないからだろうか。

だけど、いくら日菜を避けているとしても、ここで断るのは少し可愛そうだ。

「……………いいわよ」

「……………え!?ほ、ほんと!!?」

目を見開いて驚いている日菜に私は頷いた。そんなに私の行動はおかしかつたのか。日菜が提案してきたことなのに。

「ただし、私は勉強しながら聞くから聞いていなくても怒らないですよ、うん！もちろん！」

よほど嬉しかつたのか日菜は今日ニコニコしている。

なんだかこのやり取りは私らしくもない。私も姉さんがいないことが寂しいのだろうか。いや、いてもほとんど話はしないのだ。寂しいということはない。

結局、話を聞き流すのは悪い気がして日菜の話に集中し勉強が終わったのは日菜が部屋に戻った後。次の日になってからだつた。

「……………ねえ日菜」

「なあにー?」

「日菜は、姉さんのことどう思ってるの」

「おねーちゃんのこと?好きだよ?」

「…それは誰よりも?」

「んー。おねーちゃん2人と比べたら選べないけど、他の人と比べるんなら世界一かな!」

「……そう」

遠ざけられて、私よりマシだが酷いことを言われて、嫌になってもおかしくないのに。

どうして日菜は笑えるの。

強いことが、羨ましい。

「おねーちゃんも、朝日おねーちゃんのこと好きでしょ?」

「……否定はしないわ」

◇?◇?◇?◇?

いつもは感じない匂いで目が覚めた。薄く瞼を開けばキッチンにはいないはずの人物。身体を起こせばそれに気付いた彼女が振り返

る。

「あ、先輩おはようございますー!」

やば、女神がいる。

「もう朝ご飯できてるので顔洗って来てください」

なんでエプロンに手におたまなんて嫁みたいな姿が似合うの。

は、え、なに、理想にもほどがあるでしょうよ。最高かよ。満面の笑みってところがさらに。

「先輩?どうかしました?」

つい固まってしまった私に沙綾がおたまを置いて近づいてくる。近くなれば近くなるほどその威力は高くなる。

「……ねえ沙綾」

「なんですか?」

「結婚しよう今すぐに」

「ええ!?!」

「それで毎日朝食作って」

「そ、それはいいんですけど」

「私のこと好きなんだよな!なら今すぐゴールインしよう!」

「寝ぼけてますか!?!とりあえず落ち着いてください!!」

沙綾のエプロン姿だぞ?しかも寝起きにそれなんだぞ?落ち着いてられるわけないだろ!

沙綾は苦笑気味だ。

「いいから顔洗って来てください。話はその後にしましょう」

「私本気で沙綾のエプロン姿毎日見たいと思ってる。だからいいよね？」

「一瞬の気持ちに惑わされなさいよ…キャラがおかしいです」

「失礼な。私は元々こんなやつだよ」

「そのカミングアウトはしてほしくなったなあ……」

沙綾は頭を抱えていた。私にこの反応は珍しい。

「というか、早まらなくても大丈夫ですよ」

「へ？何が？」

「だって」

沙綾はベッドに片足をかけ、身体を起こしていた私の肩を押した。背をベッドに預ける私の頬に片手を添え言う。

「先輩をオトすのは、今の私の楽しみなので」

唇を舐めながら言うのはそこに神経集中するからやめてほしい。

沙綾は小さく笑って私から離れた。

「顔洗って来てください。朝ご飯にしましょう」

私は大人しくその言葉に従う。逃げるように洗面所へ移動した。

鏡越しに自分を見つめる。頬が赤く染っていた。両手で頬を触る。

いつもの10倍は熱い気がする。

はあああああ!!?なにあれ、なにあれ!!破壊力半端ないんだけど!?!誰だ!沙綾にあんなこと吹き込んだやつ!出てこい!今すぐに出てこ

い!!全力で愛でるから!!なんでも奢ってやるから!!!

イケメンすぎるだろ……

結局顔の赤みや熱はすぐに引かず洗面所から出られたのはそれから10分後だった。

咲祭と共に感じる気持ち。

クラスに行けば机の中に入れられていた二枚のプリント。それに私は眉をひそめた。

咲祭が始まるらしい。

咲祭。花咲川で進級してすぐに行われる文化祭。夏休み前に行うのはクラス内の親睦を深めるためだとかなんとか。まあ私には関係のない話だ。

サボっている間にクラスの出し物は決まったようだ。もう一枚入っていた紙にはこれまた親切に「執事喫茶」と書かれていた。仕事内容やメンバーまでメモられている。

だがこれがなぜ私の机の中に。非協力的な人間は必要ないと思うが。てかこれ手書きだし。一体誰が……。

「あ、氷川さん。それ見てくれたんだ」

声のした方を見ればそこにいたのは隣の席の松原花音だった。私を見てニコニコしている。

「なんで私の席に?」

「なんでって咲祭の出し物が決まったから。氷川さん前の時間いなかったでしょ? 知らなかったら困るかなって」

「いや私咲祭出る気ないから。渡されても困る」

「ええ!?! な、なんで!?!」

「興味ないからだ」

私は自分のクラスのことをどうでもいいと思っている。出し物には興味もやる気もない。

「じ、じゃあ料理とかできたりしない？私、裏方やることになったんだけどあまり得意じゃなくて……」

「できるが面倒だから断る」

「そ、そこをなんとか……!!」

なんでこの子私に頼むの。料理くらいクラス内にできる奴いるだろうに。

謎だ。前に話したときはめっちゃオドオドしてたのになんで今はこんなにしつこいの？

「嫌だつての。友達いねーの？そいつに頼めよ」

「い、忙しいから頼めないよ……!」

「なら諦めろ。それが運命だ」

「氷川さんー!!」

私が暇だとも思ってたのか。

しかも友達がみんな忙しいってどんな状況だよ。そんな少ないのかよ。

「花音？そんな大声出してどうしたの？」

彼女の数少ない友達が現れた。その人物に私は驚く。

「ち、千聖ちゃん……!」

白鷺千聖。子役の頃から芸能界に足を踏み入れていて、今でもドラマや舞台に出演している。最近は日菜と同じバンドでベースを担当していたはずだ。

まさか彼女の友達が芸能人とは。予想外だ。そして面倒な展開になる気がする。

「氷川さんと何話してたの？」

「あのね、氷川さんに料理習おうと思って」

「そうなの？よかったわね料理できる人が見つかった」

「私は許可してないからな。そいつが勝手に言ってるだけだからな」

なんで私が教える流れになってるの。全力で拒否したいんだが。

「ほ、放課後に少しだけでも？」

「放課後は先約がいるから無理だ。他を当たれ」

「先約？」

あの猫耳にギター教えるって約束は多分咲祭前でも続いているのだろう。てか咲祭でバンド演奏するのかあいつ。それなら尚更みっちり教えねーと人になんか到底見せられねーし。

なら今すぐに有咲の家の蔵に行かねーと、猫耳は休ませてやらねえ。

私はカバンを持って席を立った。

「つーわけで帰るわ」

「ちよ、氷川さん！」

面倒ごとに巻き込まれる前に私は教室を飛び出した。



◇?◇?◇?◇?

「へえー。先輩たちのクラスは『執事喫茶』やるんですね！」

放課後の蔵練。休憩時間。

そんな時振られた話題はやはり咲祭のこと。猫耳は外部生だったと聞いている。高校初めての文化祭に少なからずテンションが上がっているのだろう。

「クラスは、な。私は参加する気ない」

「え！なんでですか!？」

「お前にギター教えないといけないからだろ猫耳。咲祭まで時間ないのわかってるのか?」

「朝日先輩いー!!私のこと、そんなに好きなんですかー!!!」

「よし有咲。私用事ができたから帰るな」

「ちよつと！朝日先輩！帰らないで!!」

鞆を手を取った私を猫耳が止める。

それに私はため息をついた。鞆を元の位置に置く。

「ねえ猫耳。そんなくだらしないこと言ってる暇があるんなら練習するべきだと思っただけ私だけかな?」

「いえごもつともです!!」

「香澄、完全に手の平で転がされてるな……」

有咲は呆れたような声を出す。おたえは真剣な表情をし、りみちやんは苦笑いしていた。

「朝日先輩のクラスは、執事喫茶……」

「ん？どうしたおたえ」

「執事は男の人。つまり朝日先輩は、男子……？」

いやなんでだよ。男装するって話だろ。

まさかそれで真剣な顔してたのか。わかるだろそれくらい。もつとマシなこと考えてろよ。

考えてる顔が整ってるのが異常に腹立つわ。

「そもそも私は男装する気もないから」

「えー！なんで!？」

「なんでと言われても興味ないからな」

「いいんですかせつかくの咲祭なのに」

「それ、有咲には言われたくないよ」

「……朝日先輩の男装、見たかったな……」

「ホントりみちちゃん？りみちちゃんなら見せてもいいよっ」

「先輩りみに甘すぎです……」

妹に優しくしたくなるのは私の性格なんだから仕方ないんだよ。

有咲は少し不服そう。

「心配しなくたって有咲にも見せてあげるから」

「べ、別に見たいわけじゃ……」

「本当は？」

「……まあ、ちよつとは見たいですけど」

素直になれよ。

「わ、私は？」

「お前はとりあえずギターの練習でもしてろ」

「あーさーひーせんぱあーいい!!」

「ああもう鬱陶しい!くつつくな!!」

私の右腕に縫りつき額を擦りつけてくる猫耳の頭を押して遠ざける。

だが離れる様子がない。遠ざければ遠ざけようとするほど強い力で私にくつつく。

なんだよそんなに見たいのかよ。別にいいものでもないだろうに。

「わかった!お前にも見せてやるから!だから離れろ!!」

「ほんとですか!?!わーい!!」

私の言葉にあっさり手を離す猫耳。掴まれていた右腕をさすりため息をつく。

猫みたいな見た目なのに性格完全に犬だ。

「……………」

視線を感じてそちらを見ると有咲がじっと私のことを見ていた。

「どうした有咲」

「……………なんでもないです」

そう言ってそっぽ向いてしまう。なぜか不機嫌そうで首を傾げた。それにりみちちゃんは再び苦笑していた。

「それじゃあ朝日先輩は咲祭サボれないですね」

「うわあ……………めんどくせえ……………なあ」

別の機会じゃダメか？  
そう口にしようとしたが四人の期待の目が刺さってそれ以上は言えなかった。

逃げたい、逃げられない。

「と、言うわけで花音先輩。朝日先輩のこと頼みますね！」  
「うん。任せてたえちゃん！」

次の日教室に行くとなぜか松原花音と楽し気に話しているおたえと猫耳がいた。その後ろにはりみちちゃんと有咲が控えめに少し居心地悪そうにしている。

それに嫌な予感がして私は松原花音と話している二人の肩を掴んだ。

「おいお前ら。こんなところで何してる」

「あ！朝日先輩！おはようございます！」

「おはようございます朝日先輩」

「おはよう氷川さん」

「おはよう。じゃなくて、質問に答えろ」

笑顔で挨拶をしてくれた三人にとりあえず挨拶を返す。

私を差しおいて何かよくないことが起こっているのだけはわかった。

「氷川さん咲祭ちゃんと参加してくれるんだね！よかった！」

「は？何言ってる」

「昨日約束してくれたんですよ！『香澄のために男装してやる』って！」

「言ってるじゃない！そんなの一言も言っていないから！」

「でも男装はするって言ってました！」

確かに言っただけども、それは別に今じゃなくなっていたいいだろ。

まさかこいつらと松原が知り合いだったなんて思いもしなかった。

神は私に味方しないな……。

「すみません朝日先輩。でもこうなったら香澄とおたえは止められないので諦めてください」

「有咲、お前私を見捨てるのか……？」

有咲は頭を掻いた。まさか有咲に見捨てられるなんて。

で、でもきつとりみちゃんは……。

「が、頑張ってください」

見事に見捨てられました。

うん。知ってたよ。

「でもこうでもしないと朝日先輩に逃げられるかもしれないって聞かなくて……」

猫耳にすら私の行動は見透かされてるのかよ。

「か、香澄ちゃんは単純に朝日先輩の男装を見たいだけなので別に朝日先輩の邪魔をしようとしてるわけじゃないんです」

「わかってるよ。………はぁー。ギリギリまで休んでて適当なタイミングで衣装係のやつから衣装借りて見せて終わろうと思ってたのに」

「全部聞こえていますよ」

「朝日先輩！ちゃんと咲祭出てくださいいね！」

完全に退路は閉ざされた。これはいくらなんでも逃げきれないな。

ため息をつく。もう諦めよう。松原花音にこの会話が聞かれてる以上きつと逃げられもしないんだろう。どうしようもない。

「それじゃあ氷川さん。今日の放課後家庭科室で料理しようね」

◇?◇?◇?

私は今すごく後悔していた。

目の前の無残な姿のクレープを見て思う。

「……なあ松原」

「な、何。氷川さん」

「私帰るな」

「待ってください!」

帰ろうとする私の手を松原が引き止める。

あからさまに嫌な表情をしたのは言うまでもない。

最初は普通に作っていたはずなんだ。メニューがクレープだと聞いていたから楽勝だと思っていた。だって生地作ればいいだけだから。

だが調理に入った直後に状況が変わった。

メニュー表を見ながら材料を入れていくだけ。何の迷いもなくできるときの工程だった。

ただ知らなかったただけなんだ。  
松原が不器用だつてことを。

どうして？

そう言いたくなるようなことばかりだった。  
粉の入ったボールをひっくり返して床を白くする。  
冷蔵庫から持ってきた牛乳を溢して白くする。  
挙げ句の果てに生地焦がして真っ黒にする。

もう無理手に負えない。ここまで酷いとは想定してなかった。  
しかも料理が下手じゃなくて全部ドジしてるせいで時間食ってるし。まだ料理ド下手な方が良かったの！

「……お前執事になれ。そしたら全部解決する」  
「む、無理だよ！男装なんて似合わないし人がたくさん来るんだよ！それにもう役割は決まっちゃったから……」

身長あるし似合わないことはないだろうけど、頼りない執事にはなるな。松原のヘマでクラスの出し物を潰したら彼女が責められ落ち込むハメになるし、やっぱり裏方がいいのか。

「お、お願い！……どうにか当日までにはできるようになりたいの！」  
「言つとくけどこれ全部お前のドジだからな!?料理以前の問題だからな!?まずはそのドジっ子直して出直して来い！」  
「ふ、ふええっ！す、すみません！」

家庭科室の現状は酷すぎる。さすがに真っ白になった床はすぐホウキではいて雑巾で拭いた。けどその他の片付けは後回しにしていたのだ。流しにはボウルやら計量カップやら今日使った器具が大量に積まれていた。

時間も時間だから早く片付けないと。



いや、先に残った生地と食材をどうにかしないとな。

「あ、片付けは私がやっておくから氷川さんは先帰っていいよ?」

「は?なんで?」

「なんでって、今日半ば無理矢理手伝わせたわけだし時間も思ってたより遅くなっちゃったし、これ以上氷川さんに迷惑かけられないもん」

「……なるほど。そういうこと」

松原の言葉に納得する。確かに正しい判断だ。無理矢理連れてきた自覚もあって助かる。

だから私は――

「……氷川さん?何してるの?」

「いいから見てる」

コンロに火をつけフライパンを温める私を松原は不思議そうに見ていた。それもそうだろう。帰ると思っていた相手が突然料理を始めようとしてるんだから。

出来上がった生地にイチゴ、生クリーム、チョコを盛り付けてクルリと巻く。あつという間にクレープの出来上がり。我ながら上出来だ。

「ほれ」

「え」

「食え」

「あ、うん」

呆然とする松原に出来たクレープを差し出す。それを一口食べた彼女はいい笑顔を浮かべていた。

「お、いしい。美味しいよ！」

「だろうな。クレープなんだし」

「すごいね氷川さん！こんなすぐに作れるなんて！」

「まあ大して難しいことしてないからな」

褒めてくれて何よりだ。そう思って自分の分も作っていく。

「氷川さん、料理上手だね」

「普段からやってるからな」

「私は全然できなかったのに」

「お前は下手すぎ。要領悪くて笑えた」

「ひ、酷いよ！」

「事実だ」

作り終えたクレープを食べる。うむ、美味しい。

「……氷川さんも笑うんだね」

「私をなんだと思ってるんだよ」

「だって教室にいる時、退屈そうにしてるでしょ？その顔しか見たことなかったから」

「……まあ。教室は暇だからな」

仲良くする理由が見つからなかったから仲良くしなかった。

私が不良生徒だからみんなから離れて行った。

そんな居心地悪い環境にしておいて楽しいはずがない。

「なんだっていんだよそれは。それよりさっさと片付けて帰るぞ」

「うん！私も手伝うね！」

片付けを始めてからも松原のドジは空気を読むことはなかった。一人で片付けた時の倍以上時間がかったのは言うまでもない。

バンドとポスター。

周りみんな咲祭の準備に熱が入っていた。

どこもかしこも準備中の必死で、でも楽しそうな声が耳に届く。ただ歩いていけるだけなのにやる気のない私はその雰囲気壊してしまいうそで怖い。やっぱ飲み物はどうせ暇している有咲に買わせるんだった。

どこのクラスも気合が入っているように見える。辺りを邪魔しない程度に見渡していると、ふと一枚のポスターが目に入った。

驚き、そのポスターを凝視する。

Poppin' Party。猫耳たちのバンドのポスターだった。日程と時間が書かれている。当たり前だ。咲祭の体育館のステージで披露するのだから。

そこじゃない。問題はポスターの下の方にあるメンバー紹介。星の先端に一人ずつ書かれたローマ字の名前。

Kasumi 猫耳ギターボーカル

Arisa ツンデレキーボーディスト

Tae 天然リードギター

Rimi 癒しベーシスト

Saya 私はこの名前のドラマーを一人しか知らない。

山吹沙綾以外きつといない。

だけど沙綾がバンドでドラムを…？いつの間に。Poppin' Partyに加入していたのなら、またバンドを始めることになったのなら。笑顔で私に報告があってもおかしくはない。いや間違いな

くそうなるだろう。

でも私は沙綾からそんな報告を受けた覚えは…。

刹那一つの考えが頭をよぎる。

いくらなんでもありえないだろう。と思いつつもあの猫耳ならやりかねないとも思った。なんて言ったって猫耳は強引なのだから。

そう思っているところちに近づいてくる足音が一つ。

「何見てるんですか先輩」

一度彼女のことを見て再度視線を戻す。

「バンドのポスター見てる」

「あ、これって市ヶ谷さんのやってるバンドですか？」

「有咲と知り合いだったんだ」

「同じクラスですから」

「て言っても有咲は友達も知り合いも少ないし」

「なかなか酷いこと言いますね…」

事実しか言っていないのが悲しいくらいだけだね。

有咲のやつ最近は大馬鹿になってるけど基本は不登校生だし。

「仲良いんですか？市ヶ谷さんと」

「そこそこね。夏希は？」

「用がある時くらいですかね。話しかけるといつも驚かれますけど」

そう言って海野夏希は笑った。

こうして学校で話すのも数ヶ月ぶりだ。懐かしくて仕方ない。私  
がこうなってるからは彼女たちも遠慮気味だったし。

「沙綾、やるんですか。バンド」

「……さあ。私は本人からは何も聞いてないよ」

「もしそうなら、嬉しいなあ……」

私だって嬉しい。そうなってほしいと思っている。  
だけど。

きっと沙綾はバンドやらないと思う。

その言葉は胸の中にしまった。

だって少し頬を緩めて微笑んでいる夏希にそんな残酷なこと言えるわけないじゃないか。

「CH<sup>チ</sup>iS<sup>ス</sup>Pa<sup>パ</sup>もライブするの？」

「はい。市ヶ谷さんたちの前に」

「そっか。頑張りなよ」

「朝日先輩も見に来てください」

「いいよ。どれだけ成長したのか見に行く」

「うわあ…プレッシャー……」

「緊張するなって。いつも通りやればいいから」

「わかってますよ」

「楽しみにしてる」

そう呟いて私はこの場を後にした。

「朝日先輩は、もうバンドやらないんですか？」

背後からの声には何も答えなかった。

◇◇◇

「……………つまり。許可もなしにポスターに名前を書いた挙句、やらないと言い張っている沙綾に何度も何度もしつこくアタックして  
るってことか？」

「は、はい…」

目の前で正座している猫耳。私はその前に立っていた。

原因はあのポスター。蔵に着き次第そのことを問い詰めると色々  
おかしい答えが帰ってきた。私はいつもより少し低めのトーンで猫  
耳の言ったことを要約すると声を震わせながら頷いた。

やっぱりそうかとため息をつく。

ちなみに有咲たちは巻き込まれないよう数分前に買い出しに出か  
けた。

「あんな猫耳。なんでならないって言ってる人間を何度も誘うの？バ  
カなの？沙綾は店の手伝いもあるんだから一回断られたら諦めろよ。  
んで？断られてくるくせになんでポスターに名前書いた。あれはいく  
らなんでも迷惑だろ。お前には考える力がないのか？本当に高校生  
か？小学生からやり直した方がいいんじゃないか？そんな常識ない  
やつは弟子にいらんだけど？」

「本当にすみませんでした!!」

猫耳は体勢そのまま勢いよく頭を下げた。世に言う土下座というもの。珍しいものが見れた。

猫耳の強引さは有咲やりみちゃんを引つ張って行くのには最適かもしれないが今回ばかりは裏目に出たな。

沙綾は優しいから怒らない分私が怒ってやらねーと。繰り返されちやたまつたもんじゃねえ。

「はあー……………とりあえず顔上げろ」

恐る恐る顔を上げた猫耳は私の様子を気にしている様だった。

「お前ホント強引すぎ。ちよつとは相手のこと考えて動けないのかよ」

「すみません……………」

「いやまあお前がそんなことできるわけないのはわかってるから謝られてもって感じだけど」

「それはそれで酷い！」

「自業自得だ。それが嫌なら考えを改めろ」

多分改められないと思うけどな。

「いいから沙綾はもう誘うな。あいつがやりたいって言わない限り」

「……………なんでですか？」

「なんでって、お前は私の話を聞いてなかったのか？沙綾は……」

「だってさーや。バンドのことやりたそうに見てましたよ」

「っ……………」

いつから気づいてたんだ猫耳のやつ。こいつ何気に人のこと見てるからな。しかも沙綾と同じクラスで仲良いつて聞くからなあ。

「朝日先輩はさーやがバンドやらない理由知ってるんですか？」

知ってる。知ってるさ。嫌な程。家族のために自分を犠牲にしてやりたいことを我慢して。悩んでいることは私と程遠いようで近い。私が説明するのは簡単だ。だけどそれじゃ意味がない。こういうのは自分で話さないといけないから。

「さあな。私を知るかよ」

120%の嘘をついた。



## 文化祭前日の。

咲祭を翌日に控え私たちのクラスも最終確認の段階に入っていた。私は衣装合わせのために教室に向かう。

その時には日が暮れかかっていた。

それも仕方のないこと。私が他のやつと衣装の試着が被りたくないと言ったから。咲祭の準備は完璧で今日クラスのやつらはほとんど残らないと事前に聞いていたのだ。松原たちには悪いが私はどうしても隠したいことがあるから誰かと一緒に着替える訳にはいかなかった。

教室に入れば松原だけでなく衣装係のやつも待っていた。

それについてはサイズ変更があった場合の手直しとされているのだろうから問題はない。だが松原と一緒ににやけているのはどういうことなのか。訳が分からない。

不審に思いつつ今更約束を破る訳にもいかないから大人しく着替える。

「うわあー！似合ってるよ氷川さん！」

「そうか」

白の長袖のYシャツに黒のベストに黒のズボンというシンプルな格好。シンプルなのは着やすいから助かる。だが一つ言いたい。

なぜこの執事の衣装は私にピッタリなのだろうか。

元々咲祭に出る予定なかったからスリーサイズなんか伝えてないのに。え、ほんとになぜこんなピッタリ。

そう思っていたら衣装係が得意げな表情で私を見ていた。

「やっぱりあたしの見立ては間違ってたね！」

「うん。氷川さんピッタリだよ！」

「……………一体何者だよお前」

すると衣装係は得意げな顔で言う。

「あたしの家仕立て屋だからこういうの慣れてるんだよねー。昔からよく家の手伝いしてて。身に付いた特技は相手のスリーサイズ当て！」

「それ特技にするのは色々不味いと思うぞ。法的に」

最近は特に厳しくなってるし。

普通に明るそうなやつだと思ってたけどそれ以上に中身やべえ。

「あははっ。なにそれ。あたしのこと心配してくれてるの？氷川ちゃんって見た目の割には優しいんだね！」

「そうだよ。氷川さんはとっても優しいんだ」

「おい勝手なこと言うなよ。優しくねえから」

「照れるなよ。それにあたしがスリーサイズ当てるのは女子限定。男子にはやらないよー」

「いや、そういう問題じゃねえだろ……」

同性だから許されるとかじゃないだろ。明らかに当てずっぽうの域超えてるし、どうやって服の上からちゃんとした数値測ったんだよ。

「ちなみに身長体重体格からある程度大雑把なスリーサイズを出すこともできるよ」

「聞きたくなかったそんな変態特技」

なんだそれ何に使うんだよ。仕立てもはや関係ないただの趣味だろ。

「ところでその衣装どう？キツイ所とかない？あたしの仕立てに間違

いはないだろうけど一応聞いてくね」  
「……………」

衣装係の態度はなんかうざったいが仕立てはどうかやら完璧みたいだ。

「ふふーん。氷川ちゃんに褒められたー」

「よかったね。氷川さんはあんまり人のこと褒めないんだよ！」

「褒めてないし。頭の中お花畑かよ」

「氷川ちゃんの表情でわかるよー」

もうこいつらダメだ。私じゃ手に負えない。

「あ、そうだ氷川ちゃん。ちよつとベスト脱いでもらっていい？」

「なんで」

「その絵も見たいから」

よくわからない注文だったけど断る理由もなかったからベストを脱ぐ。

それに衣装係は満足した様子だった。

「てか氷川ちゃんってなんだよ」

「んー？氷川ちゃんは氷川ちゃんでしょ？」

「ちゃん付けはやめろ」

「えー。じゃあ名前呼びでいいってこと？」

「……………勝手にしろ」

私の言葉に衣装係は喜んでいた。松原と一緒に。いやなんで松原も喜ぶんだよ。

ため息をつき着替えようとすると松原に呼び止められた。

「あ、待って。シャツのボタン取れかかってるよ」  
「あーホントだねー」

指摘され初めて気が付いた。最初に着替えた時にはそんな感じはしていなかったからベストを脱いだ時に引つかかったのか。でもそんなことで取れかかったりするか？

「じゃあ朝日。脱いで」

「は？」

「縫うから。脱いで」

「あー。今から着替えるから」

「いや。今ここで脱いで」

「…：は!？」

何言ってるのこいつ。

「着替えるから待つとけよ」

「えー。大丈夫だよここには女の子しかいないから」

「いやそういう問題じゃー!」

「もー! 恥ずかしがるなよー!」

衣装係はそう言ってる私のシャツを脱がせようとする。今の状況だと簡易更衣室に逃げ込んだところで意味はない。だから逃げることにした。

「おい頼むから脱がそうとすんな!」

「大人しく捕まりなよあーさびー!」

ホントになんなんだよこいつ! 今脱がされるのは本気で困る。

私は見られたくないのに!

「花音ちゃん！そっち行ったよ！」

「う、うん！」

「おい松原！そこどけ！」

松原が教室の出入口を塞ぐ。退く気はないらしかった。

「うわっ!？」

「よし朝日つかまえた！花音ちゃん！今だよ！」

「わかった！」

「おい待て！本当にやめろ！」

衣装係に両脇から手を通され動きを制限される。見た目の割に筋力があるようで離れられない。必死の抵抗にと松原に懇願するもノリノリの人間を止めるのに私の言葉は力不足だった。

ボタンが一つ一つ外されていく。最後のボタンが外されると衣装係は私の着ていたシャツを勢いよく剥ぎ取った。

私の背中が露わになり腕の関節まで脱がされたところで小さく「え……」と言う声が聞こえてきた。目の前の松原も目を見開いている。見られてしまった。

背中に、お腹に、胸元にできた無数の傷を。

私は顔を逸らして緩んだ衣装係の拘束を解く。シャツをボタンまで締めないものの着直した。

「あ、さび。何その傷」

「……お前らには関係ない」

「いやでも……」

「関係ない。だから関わるな」

バレてしまったかもしれない。私の秘密が。

もしそうなら二人はどうするのかな。

やっぱり同情してかわいそうな子だと言うのだろうか。

更衣室に入ってすぐに制服に着替え直す。

衣装係に衣装を押し付けて私は教室を後にした。

教室に立ち尽くす二人。

どちらかが私の後を追ってくることはなかった。

息の止まるその瞬間。

「朝日さん！咲祭一緒に回らない？」

咲祭当日、屋上でくつろいでいた私に元に現れたのは有咲でも沙綾でもなく松原だった。

昨日許した（松原に言ったつもりはない）呼び方で私を呼ぶのに少し違和感を覚える。

笑顔なのが、いやそもそも昨日のことがあったのに構ってくるのが不思議で仕方がない。

「…………断るって選択肢は？」

「香澄ちゃんに見張ってるように言われてるからないよ」

猫耳のやつ、何勝手なことしてんだ。こうなったら練習の時にいつもの倍厳しくしてやる。

「それにシフトの前に逃げられたら困るから」

「逃げねえよ」

さすがにあのメンツとの約束を破ったりしない。破ったらりみちゃんにがっかりされる。妹に落ち込まれるのは辛い。

それに多分、しばらくの間有咲に口利いてもらえなくなるし沙綾に着せ替え人形にされる。それはそれで面倒だ。

「もしかしたら目を離れた隙にいなくなってるかも！」

「私をなんだと思ってるんだよ」

それただの迷子じゃねえか。

「松原なら私が逃げないことくらいわかってると思ってたけど気のせいだったか。」

「いいから行こう朝日さん」

「……はいはい。行きますよ」

どうせ行かないって言っても無理矢理連れていかれるんだろう。それなら今言うこと聞いている方がマシだ。

「それじゃあどこから回ろうか。香澄ちゃんたちのところ？」

「松原に任せる」

ほんと、私の周りは強引なやつばかりだ。

「あー！朝日先輩！」

1-A。猫耳たちのクラスはカフェのようでお客さんもそれなりに入っていて賑わっていた。

ただ私が教室に入った途端生徒の空気が変わった。それを気にしていないのは猫耳とおたえだけのよう。りみちゃんと沙綾の姿は見えないが裏方なのだろうか。てか待てなんでおたえはギターなんか持ってやがる。



「珍しいですね花音先輩と一緒になんて」

「私は一緒に行動する気なかつたけど、どっかの後輩がこう仕向けたんだよ」

「ええ!? 誰がですか!？」

「……無自覚ならタチ悪いぞ」

元々は猫耳とおたえが松原に私のこと頼んだのが原因だったのに。数日前のこともう忘れたのかよ。

「香澄ちゃん。とりあえず席に案内してくれると嬉しいな」

「あー! そうでした! 奥のお席にどうぞー」

猫耳に案内され奥の席に通される。その間も幾人かに注目されるのは完全に自分が悪いのだけど無性に嫌な気になった。

席に置いてあったメニユーに目を通す。ドリンクの他にパンがリストアップされていた。

「ここに載ってるパンはやまぶきベーカリー提供なんですよ!」

「やまぶきベーカリー?」

「沙綾の家だよ」

「へえー。そうだったんだ」

松原は沙綾の家がパン屋だと知らなかつたらしい。まじまじとメニユーを眺めていた。

私もメニユーに視線を落とす。

「何にしますか?」

「私はチョココロネとカフェラテ」

「うーん。じゃあ私はメロンパンとオレンジジュースにしようかな」

「わかりました! しばらくお待ちください!」

猫耳はオーダーを取ると早足で教室を駆けて行った。  
文化祭でもいつもの落ち着きのなさは変わらない。むしろ増して  
いた。

気持ちはわからなくもないが。

「ふふっ……」

「なんだよ急に笑ったりして」

「ううん。朝日さんって、香澄ちゃんのこと好きなんだなーと思って  
「は？」」

私が猫耳を好き？ Why？ 何故？ 何故そうだと思われている？  
ちよつと理解が追い付かない。

「だって香澄ちゃんを見守っている目が温かいもん」

「……まあ、一応師匠ってことになってるからな」

そういう意味ね。沙綾のこともあつたしちよつと焦った。

そもそも松原は告白のこととか知らないんだしその発想には至ら  
ないか。

「優しいね朝日さんは」

「優しくねーよ」

松原は私の言葉に首を振って「優しいよ」と続けた。

「じゃなきや私のことを助けてくれたり、ワガママに付き合ってくれ  
るわけないもん」

「別にそれくらい誰だって」

「朝日さんは優しいよ。誰が何と言おうとも私はそう思う。だって」

だからこそ氷川さんを、妹さんのことを避けてるんじゃないな

いの？

息が止まった。

それはどういう意味だ。

松原はそれ以上は何も言わなかった。

「お待ちせしました！チョココロネとメロンパン、カフェラテとオレンジジュースです！」

「……あ、ああ。ありがとう」

「ありがとう香澄ちゃん」

猫耳がタイミングよく持ってきたカフェラテにすぐさま口を付ける。

そんなに喉乾いてたんですか？という猫耳の言葉は一切無視。

想定外のことが起こっている。必死に脳を回転させた。

確かに昨日私は傷を見られた。だけど見られただけ。どうしてもそれが私が紗夜を避けていることに繋がるんだよ。繋がらないだろ普通。まさかバレたつてのか……。

いや落ち着け。まだ気付いたと思うには早い。

ケンカしてるから紗夜が巻き込まれないように避けてる。

そう思われているだけだ。そうだろ。じゃなきやこんな少しの情報で、身体中の傷だけで私の秘密虐待がわかるわけない。そうだろう。だったら焦る必要もない。

いつも通りの氷川朝日を演じればいいんだ。  
数秒落ち着くのに、カフェラテは割と有能だった。

「朝日さん。次はどこ行こうか？」

「え……あ、あーそうだな……」

いつの間にか猫耳は他のお客さんの対応をしていた。

また松原と二人。覚悟して松原の言葉を待つが、口にしたのは文化祭のことだった。表情から察するにこれ以上追及するつもりはないようだ。ありがたい。だが……。

「じゃあ、有咲のところにも行こうかな……」

「わかった。有咲ちゃんのところね」

何も追求されないのは逆に怖かった。

## 執事と姫。

「パンケーキとクレープ一つずつ」

「おっけー！」

「わ、わかった！」

声を掛け伝票を横に並べる。パンケーキ担当の生徒とクレープ担当の松原は少し投げやりに返事をする。

私たちの執事カフェは繁盛していた。オーダーを通すも忙しそう  
で時間がかかりそう。忙しい時ほどミスは生まれやすい。お節介だ  
ろうが頼まれたドリンクをコップに注ぎつつ松原がへましないか見  
守っていた。

「朝日さんこれ三番テーブルね」

「了解」

できた商品を指定のテーブルに運んでいく。一応商売だから笑み  
くらいは向けているが反応はバラバラで内部生はほとんどが驚いて  
いた。そんなに変な顔してたんだろうか。

シフトに入る前にとりあえず有咲のところに行った。

けどどんなか姫みたいな格好で、よくわからない出し物だったから  
つい教室のドアを閉めてしまったのだ。可愛かったけど理解不能す  
ぎて、写メだけ撮って逃げた。

ドアを閉める直前目が合った有咲が顔を赤くして何か言おうとし  
ていたけどいいことでないことは確かだったから聞かなかった。

松原は「いいの？」と確認していたけど有咲に怒られるのが確定し  
ている中に入るつもりはなかった。

多分有咲も恥ずかしがっているだけだから気にする必要もない。

シフト的に一緒に回れないから思い出の写真はそれだけで満足

だった。

と思っていたら新たな来訪者。時間が少し空いたタイミング。猫耳とその後ろに隠れたお姫様。恥ずかしそうにしている姿が愛らしくてついついイタズラゴコロが湧いてしまう。

「おかえりなさいませお姫様」

片膝をついて姫に手を伸ばす。

赤くした表情に、黄色い悲鳴が室内から聞こえて来た。

「ただいまです朝日先輩！」

「お前に言ったんじゃない。ちよつと黙ってる猫耳」

「酷い！」

猫耳に反応してほしいわけじゃない。

でも猫耳の笑顔も普通に可愛いからな。これが妹ならポイント高かったのに。

有咲はまだ照れている様子だった。

「ほーら姫様。手、取ってくれないの？」

「い、いやあの……」

「……はあ。さすがにこれはやってくれないか。残念。手繋がたら散々に弄ってやろうと思ってたのに」

「なっ！ちよつと朝日先輩！」

「ははっ。冗談冗談。奥のお席にどうぞ」

立ち上がって二人を空いている席に案内する。

猫耳は嬉しそうに、有咲の顔は赤に染まったまま席に座った。

「朝日先輩。オススメって何ですか？」

猫耳の質問に私は顎に手を当てた。

オススメと言われてもどれも美味しいことに変わりはないし特に何がいいとかない。

なんて答えようか。……あ、そうだ。

「クレープとかどうだ」

「クレープ！美味しそう！じゃあ私それでお願いします！」

「有咲は？どうする？」

「わ、私もクレープで」

「クレープ二つね。ちょっと待ってる」

松原が作ってるからって理由だったけどほとんどメニュー見ずに決めたな。そんな適当でよかったのだろうか。て、薦めた本人が言えないけど。

「松原。クレープ二つ」

「香澄ちゃんたちの？」

「そう。クレープがいいってさ」

「なら後輩のためにも頑張って作らないとね」

「じゃあ私はドリンク入れる」

私は二つのグラスにそれぞれアイステイーを注いでいく。

その行動に松原は首を傾げていた。

「……あれ？でもオーダー入ってないよ？」

「有咲たちにサービス。代金は私が払う。そう伝えとけ」

「朝日さん。やっぱり香澄ちゃんたちのこと好きだね」

「……自分を慕ってくれる後輩を嫌いになれるわけないだろ」

それは完全に本心だった。目を合わせないように準備を進める。

横目で見れば松原は驚いて、でもなんだか優しく微笑んでいた。

「松原はさっさとクレープ作ってる。後がつつかえてるぞ」

私はドリンクを持って二人の元へ向かった。

「お待たせ。これドリンクな」

「え？ 私たち頼んでませんよ？」

「私の奢りだ」

「ほんとですか!?!ありがとうございます！」

猫耳は何の躊躇もなくグラスに刺さっていたストローに口を付けた。

有咲もお礼を言って飲んでいった。

「てかずつと聞きたかったんだけどさ」

「はい？」

「なんで有咲はそんな格好してるんだよ」

「……悪いですか」

姫は機嫌が悪いようだ。

「悪くはないけどどうしてここに来る時まで姫の格好してるんだよ」

「クラスのやつらに、嵌められて。安易に引き受けるんじゃないよなかつた……」

「朝日先輩。有咲はまだクラスの出し物中なんですよ。有咲姫を見つけたら豪華賞品をゲットできるんです！」

なら今すぐにクラスに連行してあげようかな。

いや、それしたら多分姫様の機嫌が最高に悪くなるからやめよう。



「そうか。なら見つからない程度にゆっくりしてけよ」

「わかりました！」

「先輩があんなことしちゃったからとつぐに見つかってますけどね  
……」

否定はしない。けど仕方ないだろう。有咲姫が現れたんだから。

「姫には優しくしないと執事じゃないでしょ。もし願いがあるなら叶えてあげるよ」

「ほんとですか!？」

「お前に言ってるんじゃないの」

「……なんでも、いいんですか?」

「叶えられる範囲でな」

どうやら有咲には叶えたい願いがあるらしい。「じゃあ」と口を開いた有咲は続けてこう言った。

「この後、エスコートしてくれますか?」

「……私はしてやりたいけど、どうしようかな」

ここで勝手に逃げ出すわけにはいかないだろう。何のためのシフトかわかんないし。誰か代わりのやつがいれば……。

「あ、朝日ー。そこにいるのって朝日の後輩ちゃん?可愛いじゃん」

「いいやつがいた」

「え?」

タイミングよく現れたのは衣装係の彼女。

これは神が行けと告げている。

「お前、名前なんだったつけ?」

「へ？新田だけど？」

「よし新田。今すぐ執事になって来い」

「いやどうということ」

困惑している彼女の肩を叩き笑いかけた。

「私は宣伝活動をしてくる。だからお前は私の代わりな。よろしく」

「え、ちよつと朝日！」

「お待たせ香澄ちゃん、有咲ちゃん。これクレープね」

「花音先輩ありがとうございます！」

「ありがとうございます」

「じゃあクレープは歩きながら食べるか」

「ちよつと待ってホントに行くの!？」

焦った声が耳に届いた。どうせちゃんとやってくれるんだろうという期待を込めて言う。

「おう。あと任せた」

「いいけど……はあー。あとで何か奢ってよ」

「猫耳。有咲。行こうぜ。あ、猫耳は残ってていいぞ」

「行きます！」

クレープを片手に立ち上がった二人。

先に教室から出て荷物をまとめて置いていた教室に入って財布を取る。

会計を終えた二人と合流して宣伝活動を始めることにした。

想いを君に。

二人がクレープを食べ終わり適当に校内を回る。  
他の飲食店やお化け屋敷、ダンス部の出し物なんかを見て、去年以上に満喫した咲祭だったと思う。

まだ終わってないけど。

猫耳は体育館でライブの最終打ち合わせをしに行き、私は有咲と二人、中庭に設置されているベンチに腰かけていた。

ちなみにまだ私は執事の、有咲は姫のままだ。有咲姫可愛い。

「先輩、今日めちやくちや楽しんでましたね」

「そーかも。やっぱ滅多にないイベントだからかな」

「普段なら参加しないくせによく言いますよ」

「うっせ。そっくりそのまま返す」

どの口が言ってたんだか。サボり魔のくせに。

「でも良かったです。朝日先輩が楽しそうで。去年なんか、ほんとにつまらなさそうでしたし」

「そもそも去年はずっと屋上で有咲と話してただろ。適当に昼ご飯買って。けど有咲と話してるのにつまらなさそうなわけあるかよ」

「……先輩って、そういうところズルイですよ」

「ズルイって何が」

「わからないならいいです」

そう言つて有咲はスマホを覗く。猫耳に連絡でもしてるのだろうか。

「朝日先輩。香澄から『ライブのことりみりんとおたえに伝えてくる！』ってメッセージ送られてきたんですけどどう思います？」

「……あいつは何のためにスマホ持ってるんだ？」

「さあ。鉄の塊だから筋トレじゃないですか」

「何の筋肉もつかねえよ」

いくら弟子と言えど未だに猫耳の考えてることは理解できない。それはきつと有咲も同じなんだろう。頭を抱えていた。

ライブまであと一時間半くらい。つまりもう姫衣装とはお別れということ。このまま何もしないのはなんだか勿体ないな。

「あ、そうだ有咲。スマホ貸して」

「どうぞ。何に使うんですか？」

「ほれ有咲。笑って」

スマホを有咲に向ける。すると顔を赤くして慌てていた。

「ちよ！待って！何するんですか！」

「何って写真。せっかくの衣装なのに撮らないのは損でしょ。思い出残そうぜ」

「だ、だからって私単体で撮る必要ないじゃないですか！」

「えー。めんどくさいなー」

私は有咲との距離を詰める。スマホを持ち直して内カメラにした。所謂自撮りと呼ばれているやつだ。

「これならいいだろ？」

「……まあ、それなら」

「私と撮りたかったんならそう言えよ」

「……わかってるなら最初からそうしてください」

にやける私と睨む有咲。有咲を宥めつつ写真を撮った。流れで私のスマホに送る。

これで有咲のスマホから消されても安心だ。消されないと思うけど。

「スマホ返すよ」

「先輩って、私に意地悪じゃないですか」

「そんなことないよ。気のせいだろ？」

こんなにからかいたくなる後輩はなかなかいない。ここまで反応がいいとついやってしまうのは仕方ないことだと思うんだ。この場合悪いのは有咲だし。

後輩と言えば、今日はまだ沙綾のこと一度も見えてないな。クラスでも見てない。沙綾こそ真っ先に私の元に来そうなのに。

「有咲。そういえば今日沙綾は――」

「朝日先輩。今日のライブ、楽しみにしてください。絶対盛り上がるライブにしますから」

「え、あ、それはもちろん」

遮られた言葉。真剣な眼差し。その目に引き込まれて。

「それから今日の放課後、後夜祭が始まったら屋上で待ってもらえませんか。大切な話があるんです」

口元は笑っているはずなのにその表情は何故か悲し気に見えた。

◇◇◇

沙綾は体調を崩した母親に付き添って朝から病院に行っているらしい。

ライブが始まる前にりみちちゃんが教えてくれた。

道理でいないわけだと納得する。だけどそれを知るのが午後ってどうなんだよ先輩として。

絶対拗ねてる。……今はそんな余裕ないかな。

私はスマホを持ってダメもとで沙綾に電話をした。4コール目まで出てくれた。

『もしもし、朝日先輩？』

「もしもし沙綾。今大丈夫か」

『はい。大丈夫ですよ』

いつもと変わらないトーンだった。そこから母親に何もなかったことを察してホッとする。

『どうかしたんですか？』

「りみちちゃんから沙綾が今日来てないって聞いて電話したんだ。お母さんの具合どう？」

『あーはい。今は大丈夫です。わざわざありがとうございます。心配かけちゃってすみません』

「気にするなよ。私が勝手にやってるだけなんだから」

あいかわらずこの後輩は自分以外に気を遣ってばっかだ。

「それよりそつちが落ち着いたんなら学校来たらどうだ？今から来ればあいつらの演奏見れるぞ」

『……でもまだ病院にいないと。弟たちを置いていけないですから』

「そつか」

いつだって自分の優先順位が低い。性格的にそうなのだろうけど、決定的なのは去年バンドを始めて家の手伝いが疎かになったことで母親が病院に運ばれたこと。そしてそれを自分のせいだと思いついでいること。

なら誰かがその思い込みを壊さないとずっと沙綾はこのままだ。

『はい。だから先輩——』

「私は、来てほしい」

『……え……』

「沙綾にあいつらの演奏見てほしい。だってあいつらまだ全然下手だけど頑張って練習してたんだから。それに」

スマホを握る力が強くなる。

違う。私が言いたいのはそんなことじゃない。ちゃんとまっすぐ、伝えるんだ。

「ううん。あいつらのことを先にあげたのは建て前。本当はあいつらは関係ない。」

私が見たいんだ。沙綾がまたドラムを叩いてる姿。あいつらの演奏を見てまたやりたいって言つてほしい。

こんなのワガママだってわかってる。お節介だつてことももちろん。それでも私は——」

仲間と一緒に笑顔で楽しそうな沙綾の姿は今でも鮮明に思い出せ

る。

好きな人

私と一緒にの時とは違う。

心から何かを成し遂げるために努力していたあの頃の表情がないのは、嫌だった。

「ずっと沙綾のドラムが好きだったから、このままやめてほしくない」  
『……………』

「沙綾の気持ちができるなんて言わない。もしかしたら私は沙綾のことなんて何もわかってないのかもしれない。

ただ家族のために頑張りたいのはよくわかるよ。私だって、同じだから。

けどさ、やりたいこと全部我慢する必要はないだろ。沙綾はずっと家族のために頑張ったんだ。バンドくらい、好きなことの一つくらいやったって誰も文句言わねーよ」

沙綾は何も言わなかった。

私もそれ以上は言わなかった。

ここから先は沙綾が決めること。私にできるのはこれくらい。

これでも沙綾がやらないと言うのなら私はそれを受け入れるだけだ。

「私は待ってるから」

返事も聞かずに一方的に電話を切った。

そろそろライブが始まる。

私はスマホをポケットにしまって体育館の中に入った。



頼むよ、あいつを連れて来て。

黒いカーテンが閉められ薄暗くなった体育館のステージが照明で明るく照らされていた。その中央で演奏をする四人の少女たち。

ポップで明るい曲調にギターボーカルの彼女の歌声は合っていた。新メンバーであろうドラムの子の演奏もなかなかのもの。四人の息が合っていてつついっ引き込まれる。あの子が合わせているようにも感じた。

演奏が終わり四人がステージからはけていく。新たな四人がステージに上がった。

ランダムスターを持ち、マイクに向かって軽くMCをするあいつはやっぱりどこにいてもうるさかった。

「皆さん初めまして！私たちPoppin' Partyです！」

続けて色々なことを話していく猫耳。

正直鬱陶しい。けど嫌ではなかった。あいつらしいと思った。ステージから下り体育館の出口に向かう人影に声を掛ける。

「夏希、お疲れ」

「お疲れ様です朝日先輩」

「真結、文華、あと君もお疲れ」

「お疲れ様です」とそれぞれが零す。ドラムの彼女は少し恐縮していた。

私相手だからだろうか。

「良かったよライブ。前に見た時より上手くなった」

「ほんとですか!? やった！褒められた！」

「ナツはしやぎすぎ」

「でもそう言ってもらえるのは嬉しいよね」

「う、うん……」

猫耳たちの演奏が始まる。ちよつと上手くなったギターの音が耳に届く。

「CHiSP<sup>チ</sup>A<sup>ス</sup>のライブって、なんだかんだ初めて見たからさ。うん。良かったよ。バンド続けてくれて本当に」

「……確かに沙綾が抜けちゃったのはショックでした。けどさとちゃんが入ってくれたから今も続けられているんです」

「そっか。なら君が救世主だな。さとちゃんだっけ。ありがとう」

「いえ。私もこのバンドに入れてよかったと思ってます」

私が素直に感謝の言葉を伝えると微笑みを返してくれた。りんりに近いしいものを感じる。

「市ヶ谷さんたち楽しそうですね」

「まだまだ必死だけどな」

おたえは技術的に安心できる。有咲とりみちゃんは緊張気味だ。猫耳に関しては完全に楽しむことしか考えてない。

おたえと猫耳の二人は良い所で、有咲とりみちゃんは直すべき所。だけどそれを見られるのは今だけかもしれないから嬉しくてたまらない。

ここに、沙綾もいたらなあ――

「……ねえ夏希」

「なんですか?」

「沙綾のこと、任せていいかな」

「え?」

気が付けばそう口にしていた。夏希たちが目を丸くする。そんな四人とは視線を合わせずに私はステージを見ていた。

なんでこんなことを言ったんだろう。

やっぱ沙綾に笑顔になってほしいから？

沙綾にドラム続けてほしいから？

こいつらが元バンドメンバーだからかな。

いや、違うな。

私だと沙綾をバンドに引き戻すには力不足だと思っただからだ。

私は沙綾と何度かセッションしたことはある。

だが共に練習した時間は明らかに夏希たちの方が長い。私は暇な時に沙綾に付き合ってただけ。

沙綾はここに来ると信じていた。ただ本当に来る保証はない。

けどもしもここに沙綾が来るなら、ここに連れてくるのは悔しいけど私の役目じゃない。

「頼むよ」

ステージから目を離し真剣な瞳を夏希に向ける。

また目を丸くして、そして笑った。

「朝日先輩が沙綾のことでそんなに困った顔してるの初めて見ましたよ」

「可笑しいか？」

「全く」

沙綾とはそれなりの時間一緒にいた。それなのにどう対応すればいいのかわからないのは初めてだった。

そんなの困るに決まってるだろ。

「任せていいよな」

「へへー。任せられました」

夏希は笑っていた。

他の三人も笑っていた。

それが嬉しくて私もつられて笑った。

CHiSPAの四人がいなくなっただけで私は一人Poppin' Partyの演奏を聞いていた。

咲祭で三曲もできるのはいい経験になるだろう。まだ所々の間違いは目立つ。特に猫耳のミスはわかりやすい。今はおたえのアドリブでどうにかごまかしてるが。

これは次のライブまでに特訓を積みませねーとな。

上手くなってるのは事実だけどまだまだだ。

今のところ沙綾は体育館に来ていない。

猫耳たちはもう三曲目に入る。

「次に歌う曲は今日のために作った曲です。みんなで作った曲。

今日は一人いないけど、いつか一緒に歌おうって約束しました」

猫耳の想いは一途だった。そこは私と同じみたいだ。

「いつかはまだまだけど、信じてる。一緒に歌うこと。できるって」

失笑が漏れる。

やっぱ私の声じゃ、あいつには届かなかったかな。

「えっと。そんな気持ちを含めて歌います。聞いてください」

その時だった。

突然体育館の出入り口が開いた。暗かった空間に光が差す。

それは私が求めていた光だった。

「沙綾！」

「沙綾！」

「沙綾ちゃん！」

猫耳たちの声がマイクにのる。周りは急なことにぎわっていた。私は驚いて、でも同時に胸が温かくなった。

「沙綾……」

その声は周りにかき消される。

そのはずなのになぜか沙綾には届いていてやる気に満ちた笑顔で私に手を振っていた。

手にはドラムのスティックが握られている。

沙綾は真っ直ぐステージへ向かう。猫耳の手を取って舞台上に上る。その行動が、すごく、嬉しかった。

ドラムセットをいじって音を出す。その姿に笑顔が零れた。

どうかしてるよ。ぶっつけ本番でこんなことするだなんて。だいたい曲知ってるのかよ。

本当にどうかしてる。けどそんなところが私は好きだ。

「それじゃあ聞いてください。STAR BEAT♪ホシノコドウ  
」

でたらめなドラムだった。

スティック落としそうになるし全然違うフレーズ叩いたり、でも

リズムはちゃんと刻んでいて他の四人と目を合わせて。  
周りに見られて恥ずかしそうなおことはない。  
むしろ今までにないくらい楽しそうで。

今日のライブは今までにないくらい最高なものだった。

解けない問題。

ずっと、後悔してた。

中学の頃にバンドを始めて、家に帰る時間が遅くなって母さんが倒れた。

バンドをやめると決意して、ナツたちと顔を合わせるのが辛くなった。

香澄にバンドに誘われて、断るのがしんどかった。

全部全部、今までやりたいと思ったことが悪い方向にしかいかない。

そのせいで色んな人を傷つけた。気を遣わせた。悲しませた。

だから自分のやりたいことなんて言わない。みんなのために行動して後悔しないようにしてた。それでいいと私も思っていた。

それなのに。

『私は、来てほしい』

電話越しの朝日先輩のたった一声に、今までの決心が揺らいだ。

『沙綾にあいつらの演奏見てほしい。だってあいつらまだ全然下手だけど頑張って練習してたんだから』

『私が見たいんだ。沙綾がまたドラムを叩いてる姿。あいつらの演奏を見てまたやりたいって言ってほしい』

『こんなのワガママだってわかってる。お節介だっことももちろん。それでも私は！』

『ずっと沙綾のドラムが好きだったから、このままやめてほしくない』

朝日先輩の言葉一つ一つが私の心に落ちていく。

先輩はこういうことを嘘で言えない。だから本心だっことはわかってた。

『沙綾の気持ちがかかるなんて言わない。もしかしたら私は沙綾のことなんて何もわかってないのかもしれない』

『ただ家族のために頑張りたいのはよくわかるよ。私だって、同じだから』

『けどさ、やりたいこと全部我慢する必要はないだろ』

『沙綾はずっと家族のために頑張ったんだ』

『バンドくらい、好きなことの一つくらいやったって誰も文句言わねーよ』

私のことを家族のように理解してくれる先輩。

それが、何よりも嬉しくて、仕方なかった。

『私は待ってるから』

こんな私に「待ってる」と言ってくれた。

こんなどうしようもない私に。

こんなに私を認めてくれる先輩。

その期待に応えたかった。

好きな人にそんなこと言われたら嫌でも期待が大きくなってしま  
う。

単純な自分が、今日は嫌いじゃなかった。

咲祭でのライブは、私が乱入するというサプライズを含め大成功に  
終わった。

初めてのライブは、すごく楽しくて自然と笑顔になれて、ナツたち  
も嬉しそうだった。

朝日先輩も、同じだった。笑って誰よりも嬉しそうにしてた。



私はそれが嬉しかった。

「朝日先輩！」

その名前を呼ぶ。

「沙綾」

その声で私の名前を呼んでくれる。

「来てくれて、よかったよ」

微笑みを向けてくれる。

こんなことで嬉しいなんて単純すぎ。

そんな自分が好きだって最近思う。

「私、朝日先輩の言葉が無かったら来てなかったと思います」

「沙綾が来なかったら私泣いてたかもなー」

「それはだいぶレアですね」

「わりと本気で言ってるんだけど？」

ちよこつと先輩をからかってみる。眉を寄せる表情はなんだか可愛かった。

知ってますよ。だって朝日先輩の言葉は全部まっすぐで偽りなかった。それに私が無理にしないように凶ってくれていたんですから。

私たちが好きなもの、わかっていますよ。

「私を待っていてくれてありがとうございます朝日先輩」

「お前が望むならいつまでも待っててやるよ」

ほんと、そういうこと言っちゃうのはズルいですって。

「……じゃあ、先輩」

欲が出ちゃうじゃないですか。

「今日の後夜祭。一緒にいてくれますか？」

「もう執事の時間は終わったんだけど、仕方ないから沙綾姫のために延長な」

沙綾姫という単語に心臓が跳ねる。

そういえば朝日先輩は執事になってたんだっけ。

見たかったなあ、朝日先輩の執事姿。絶対かっこいい。

「けど少し用があるんだ。だから後夜祭が始まって30分後、迎えに行くからクラスで待っていて」

「わかりました」

朝日先輩は手を振ってどこかへかけて行った。

その姿が離れて行くのが、嫌だった。

後夜祭が始まってすぐ、私は有咲との約束の場所である屋上へ向かっていた。

ベンチで私を呼んだ有咲はとても真剣だった。言っていた通り大切な話なんだろう。内容に見当はつかないが遅れては行けない気がした。

階段を駆け上がる。そして屋上に続く扉を開けた。

外は赤く染まる。視線の先にはフェンスから校庭を見下ろす待ち人の姿があった。

「有咲」

その名前を呼ぶ。

「……待ってましたよ朝日先輩」

振り返った有咲はやはりどこか悲しげだった。今にもどこかへ行ってしまいそうに見えた。

そんな彼女の元に一歩ずつ近づいていく。

「それで話って何？」

相談事か何かだと、そう思っていた。

けど有咲の発言がそんなわけないと言ってくる。

「好きです」

はつきり聞こえた声にピタリと私の足が止まった。

有咲の口角が少しだけ上がる。悲しげな顔は変わらない。

「好きって何が」

「もちろん朝日先輩のことですよ」

平然と当たり前だと言うように、有咲は言った。  
いつもの照れ屋な市ヶ谷有咲は見当たらない。  
目の前にいるのは別の誰かだ。

「朝日先輩、私朝日先輩のことが好きです。この世で一番、大好きです」

衝撃だった。

「朝日先輩が好きだから一緒にいられるのは嬉しかった」

そんなの私の秘密を知っているから良くしてくれているんだと思ってた。そうじゃなくても話しやすいからだって。

「朝日先輩が好きだから山吹さんとか香澄とか他の人の話ばっかするのが嫌だった」

いつも普通に聞いていたから気にしたことなんてなかった。  
有咲が私との距離を詰めてくる。

「朝日先輩。私朝日先輩のことがどうしようもないほど好きなんです」

苦しげな表情の彼女になんと言えばいいのかわからない。  
だって好意を持たれているなんて知らなかった。

私は有咲のことを後輩として見ていたから。だから急にそんなこと言われたって……。

「あ、りき……う？」

「先輩は、誰が好きなんですか」

私に控えめに抱きついてくる有咲。咳かかれた言葉。

その言葉のせいで、その小さな背中に手を回すことも、言葉を付け足すこともできなかった。

私はきつと有咲とそれから沙綾に甘え続けていたのだろう。

二人ならどんなことでも受け止めてくれるって思っていたから。

その思い込みが結果的に二人に好意を持たせてしまった。

私は、一体どっちが……。

その答えはいくら待っても出なかった。

真相、確信。

「有咲ちゃんって朝日さんのこと好きだったんだね」  
「盗み聞きなんてよくないと思いますよ松原先輩」

朝日先輩が出て行き一人になった屋上。そこに新たに現れた先輩はいつも通りの笑みを浮かべて私に近づいてくる。

さっきの朝日先輩みたいだなあーとどうでもいいことを考えていた。

「聞いちゃったことに関しては謝るよ。だけど人を好きになることは悪いことじゃないんだし、そんなに警戒しないでよ」  
「……からかいたいただけなら出て行ってくださいよ」

朝日先輩に対する告白はとても曖昧に終わった。

正確には私が曖昧に終わらせた。

だって先輩の表情は完全に驚いたものだった。

先輩は察しが良い。だから紗夜先輩を庇う時も早かった。  
なのに私の告白には驚いた。

朝日先輩と二人きりの時とか、特に咲祭の間。私はわりとあからさまに先輩にアピールしていたつもりだった。それなのに先輩は私の照れを、恥ずかしがり屋だからだと取っていたようだ。

完全に脈なし。それでも諦められないから、だから告白の返事は聞かずに曖昧にした。

いつか朝日先輩が私を好きになってくれると信じて。

けどそれを、人に見られていたことに関してはいい気はしない。その相手が口の堅そうな松原先輩だったとしても、私は松原先輩のこと

をよく知らないから。

「違うよ。本当に有咲ちゃんの告白を聞いたのは偶然。私は有咲ちゃんのこと探してたの」

「……私を？」

「うん。有咲ちゃんに聞きたいことがあって」

聞きたいこと。松原先輩が私に？

大した接点もないうえに話したことも数回しかない。  
そんな私に聞きたいこと？そんなの普通あるはずが――。

「朝日さんのことなんだけどね」

松原先輩が口にしたのは私たちの最初で最大の接点だった。

「有咲ちゃんは朝日さんのこと、どこまで知ってるの」  
「え……?」

質問の意図が分からなかった。ただ一瞬で松原先輩の雰囲気が変わる。真剣な眼差しで見つめられ脳が冴えた。

「それは、どういう……」

「有咲ちゃんは知ってるんでしょ」

「何を……」

「朝日さんの身体の傷のこと」

「ッ!？」

松原先輩の言葉を理解しなくなかった。

朝日先輩の身体の傷のことはもちろん知っている。手当もしていたから。

けどどうしてそれを松原先輩が知ってるんだ。

「やっぱり知ってたんだね」

「……なんで、松原先輩が」

「衣装合わせの時に見ちゃったんだ」

衣装合わせの時って、先輩が人前で肌を見せるわけないのに？

朝日先輩は傷のこと気にして最善の注意を払っている。そんな朝日先輩の傷なんか普通見られるわけないんだ。

なんでバレた。

「……それを知って、松原先輩は何がしたいんです。もし、朝日先輩を傷つけるようでしたら許しませんよ」

「そんなことしないよ。言ったでしょ。朝日さんのことどこまで知ってるって。私は朝日さんのことが心配なの」

何を言っているんだと思った。朝日先輩のこと、何も知らないのに興味本位で聞いてきて。

心配なんて言いつつそんなただの同情だ。

それに勝手に話すことはできない。だって朝日先輩が望んでいないから。話したところで何も解決できないから。

事実、私や山吹さんはずっと側にいるだけで何もできなかった。それどころか朝日先輩が傷ついている姿を見ていることしかできなかった。

そんな自分に腹が立つ。そしてもし他の人が協力して解決してしまったら私は何のために近くにいたかわからなくなるだろう。

「……話すことなんて、ないですよ」

「そう言うっことは色々知ってるんだね」

「……もう、出て行ってください」

私が話す気はないということがわかったのかしばらくして松原先



輩は屋上から出て行った。

私はその場に座り込む。ただフェンスにもたれ夜空に輝く星を眺めていた。

◇◇◇

ただ気になっただけだった。

あの日見てしまった白い肌に目立つ痣。胸元からお腹にかけてあったそれに私は驚きを隠せなかった。

朝日さんはバツが悪そうに目を伏せて関係ないと言った。私は朝日さんを追いかけれなかった。

最初はケンカでできた傷なんだってそう考えていた。朝日さんの見た目とか態度って完全に不良って感じだから。

だけでもしそんなら朝日さんは傷を見られたことをあんなに嫌がるのかな。ってそう思った。

もちろん見られなくなかったものに変わりはないだろうけど、それでも私からしたらあの行動は不自然だった。

勝手なイメージかもしれないけどケンカでできた傷なら朝日さんは平然としている思った。

だって毎日包帯を巻いてるから。それはケンカの結果できたもの。本人が氷川さんにケンカだと言っているところを見たことがあったからこれは間違いない。他の生徒たちとの共通認識でもあるだろう。

でも朝日さんは目を伏せた。力なく衣装係だったクラスメイトを引き剥がした。

ケンカが理由ならそもそも逃げることもしなかっただろう。だって傷を見せなかったからあの場で言えばよかつたんだ。「ケンカでできた傷を見せたくない」って。そうすれば私も彼女も納得した。けどそれをしなかった。あの瞬間ケンカって単語が出てこなかったのはきつとあの傷の原因がケンカじゃないから。だから焦っていたんだと思う。憶測にすぎないけど違うと確信できる何かはない。

氷川さんは何が原因で傷ができたのか知ってるのかな。でも朝日さんと氷川さんって校内でも言い争いばっかしてるし、朝日さんが氷川さんを遠ざける理由ってなんだろう。

触れ合ってみて朝日さんが優しい人だっことを知った。

面倒見がいいし困ってた私のことも助けてくれた。ただのクラスメイトに半ば無理矢理頼まれたことに最初は嫌そうにしてたけどけど最終的には協力してくれた。

朝日さんは、普通の人だっけきつと面と向かって話したりしなかったら知ることにはなかった。関わらなかつたら何も思わなかつたと思う。

けど関わってその優しさを知ってしまったら後には引けない。気になつたら知りたくなる性格だから。

「有咲ちゃんは朝日さんのこと、どこまで知ってるの」

核心に迫りたかった。

## 小悪魔な後輩。

一体私は、誰が好きなんだ。

考えれば考えるほど迷宮入りしていく問題に私は頭を抱えた。有咲からの告白には驚いた。けど嬉しくもあって。

それは沙綾に抱いたものと同じようで少し違ったように思う。

わからなかった自分の気持ちだ。

ずっと紗夜と日菜のために戦って来たから、他のことをすっかり見れていなかったのかもしれない。そのせいで二人には悲しげな顔をさせてしまった。

そんな表情見たくないのに、どうすればいいのか全く分からない。慣れの問題だと言うのならleaveの見習い勇者の私には経験値が足りなすぎた。

そしてこれから一緒に後夜祭を過ごす沙綾がどんな顔をするのか見当がつかなかった。

今日二度目の1-Aカフェ。扉の前で一度深呼吸。覚悟を決めてその仕切りを開いた。

「朝日先輩ー」

「悪い沙綾、待たせた」

「いえ全然ですよ」

中にいた沙綾は窓際の席に座っていた。私に笑顔を向けてくる。かわいい。

そんな沙綾の前の席に私は腰を下ろした。

「用事終わったんですか？」

「っ……ああ。大丈夫だったよ」

有咲に告白されたことは言えなかった。

「そうですか」

沙綾は窓の外に目を向けていた。つられて外を見る。

校庭に作られた簡易ステージ。その上でギターをかき鳴らす猫耳がいた。無論音は遠くて聞こえないが観客は盛り上がっている様子。

「香澄、楽しそうですね」

「そうだな」

下手くそなギターでも雰囲気次第で上手く聞こえることはある。楽しめばそれだけ上手くなれる。だからこそああいう場は猫耳に合っていると思った。笑みが零れる。

「盛り上がりすぎて明日バテないといいですけど」

「いいんじゃないか。どうせ明日休みなんだし」

「それもそうですね。香澄の演奏、聞きに行きますか?」

「……いや。それはいいや」

ちよつと聞きたいが聞いたら聞いたで口出しするかもしれない。さすがに楽しんでいるところに水を差す気にはなれなかった。だから今回ばかりは見なかったことにする。どうせあとでうざ絡みされるのはわかっていたし今くらい休んでいてもいいだろう。

「そう言えば気になってたんですけど、先輩ってどうして香澄のこと猫耳って呼んでるんですか」

「どうして?」

「だって弟子って言うわりには扱いが雑だし、考えてみたら先輩が香澄のこと名前で呼んでるところ見たことないなーと思って」

確かにそうだ。私は一度も猫耳のことを香澄と呼んだことはない。けどそれがそんなに変だろうか。

「別に大した理由なんかないよ。初めて出会った時からそう呼んでる。それに今更呼び方変えるのもおかしくないか」

「そうですか？名前で呼んだら香澄喜ぶと思いますよ」

「そんなの求めてないから」

ただ猫耳の反応はなんとなく想像できる。騒ぎまくってうるさくなる。それむしろ呼びたくねえよ。

「で？なんで沙綾はそんなこと言うわけ？猫耳の話振ってくるなんて珍しいじゃん」

「……朝日先輩。私決めたことがあるんです」

「うん。何？」

「私、またバンドやろうと思います」

自分の耳を疑った。沙綾に目線を向ければまっすぐに私だけを見つめていた。その瞳に吸い込まれそうになる。

「朝日先輩のおかげですよ。ありがとうございます」

「……別に私は何もしてないよ。ここに来たのは沙綾の意思でしょ」

「言ったじゃないですか。先輩の声でここに来たって」

ずっと後悔してました、と続く。

「私本当に家族のためなら何を犠牲にしてもいいと思ってました。けどバンドだけは違っていて、楽しくて上手く叩けるようになるのが嬉しくて達成感があつて。そんなバンドを、ドラムを、本当はやめたくなかった。

やめなくてよかつたつて、今日の香澄たちとの演奏で思いました。だからあの電話をくれた朝日先輩は私の恩人なんです。本当にありがとうございます」

沙綾は目に涙を溜めたまま頭を下げた。机の上に涙が数滴落ちる。肩をふるわせ下を向いたままの彼女の頭に片手を置いて、優しく撫でた。おそろおそろといったように顔を上げる。

「恩人は大袈裟だ。私は沙綾のためにと思つて行動しただけ」

「なにそれ、口説いてるんですか……?」

「事実しか言つてない。……でも少し違うか。私は自分のために動いたんだ。私が見たいつて電話越しでも言ったでしょ。私的な理由だったんだから恩人は間違つてるよ」

「もしそうだったとしても、手を差し伸べてくれたのは朝日先輩だったから」

沙綾は私の手を机の上に置き直し、イスからおもむろに立ち上がった。急な行動に首を傾げていると私の前に立ち手を広げる。

「朝日先輩、抱きしめてもらえませんか?」

「……今日は強引にキスしたりしないんだ?」

ニヤニヤしながら聞くと沙綾は口角を上げ近づいてきた。片手で私の顎を撫でる手は少し冷たくて肩が跳ねる。

「しても、いいんですか?」

心臓がバクバク動く。何も言えず固まってしまふ。多分顔は赤いことだろう。

「ふふっ。冗談ですよ」

「……………心臓に悪い」

「先に仕掛けたのは先輩ですよ？」

この小悪魔な後輩のことを黙らせてたくてその手を引っ張る。こちらに倒れ込む沙綾を抱きしめた。沙綾は私の背中に手を回す。

「……………好きですよ朝日先輩」

「知ってるよ」

「自分から抱きしめてくれたってことは先輩も私のこと好きなんですか？」

「人肌が恋しくなっただけ」

「その言い訳、苦しくないです？」

「じゃあもう離れろ」

「ダメですよ。離しません」

再度強く抱きしめられる。

教室内が、少しだけ暑かった。

「ご機嫌だね沙綾」

「おかげさまで」

イスに座る私の足の間に座っていた沙綾は笑う。落ちてしまわぬ

ようにお腹に手を回しこちら側に引き寄せた。

「先輩は、私がしてほしいと思うことしてくれますよね」

「気のせいじゃないか」

「気のせいで抱きしめたりしてくれるんだあ」

からかい口調の沙綾に私は何も言えなくなる。

「朝日先輩、せっかくの咲祭なんだし写真撮りませんか？」

「いいよ。撮ろっか。スマホ、私のでいい？」

「はい」

私はポケットからスマホを取り出して沙綾に渡す。

カメラを起動し体勢そのままにシャッターをきった。

沙綾が画像フォルダを開いて撮った写真を確認していた。

そして思う。これ、色々勘違いされる写真じゃね？と。

「写真、大丈夫みたいです」

「そうだな……」

「先輩、執事姿の写真ってないんですか？」

「一枚だけなら撮ってるよ」

「見ていいですか？」

「ああ」

写真をスクロールして、沙綾の身体が固まった。

「……市ヶ谷さんと、撮ったんですね」

「時間とタイミング的に他のやつらとは撮れなかった」

「ふーん……」

明らかに拗ねた声だった。が、それくらい許してほしいものだ。



そもそも私誰とも付き合っていないし。

ただこの程度のことと嫉妬している後輩を可愛いと思う。

「今先輩は私の執事なんです。他の人に愛想を振りまいてる姿は嫌で  
しくないんです」

「……じゃあ私はどうすればいいんでしょう姫様」

「抱きしめてください」

それで機嫌が直るなら安いものだ。

そう思って私は沙綾を後ろから抱きしめた。

見られたくなかった事実。

「沙綾。どれにするか決めたか？」

「いえ。どれも良さそうで……」

沙綾が正式に Poppin, Party のメンバーとなつて最初の休日。私と5人は江戸川楽器店に足を運んでいた。

今までバンドを避けて来た沙綾には自分のドラムがない。蔵で練習するのにそれは不便なため買いに来たのだ。その話を沙綾の両親と弟妹に話せばとても嬉しそうな表情をしていた。金銭面もとても協力的なよう。

そして楽器店に入ってからはや20分。

沙綾は色々なドラムを見て、いい感じに悩んでいた。

「いい音で叩き心地が良すぎるのは高すぎて手が出せませんし……」

「どれ？」

「これなんですけど」

そこには20万近いドラムセットがあった。

あーさすがに20万はな。いくら貯金と親からの支援があつても気を遣つて高すぎるものは買えないだろう。

よし！ここは先輩が一肌脱いでやろう。

「沙綾。私が半分出そうか？」

「え!?それはさすがに遠慮しますよ!」

「いいよ沙綾にはお世話になつてるし」

「私の方がお世話になつてますって!それに自分の楽器は自分で買いたいんです」

そう言われたら手は出せないなー……。  
がしかし、金銭面は簡単にどうにかできるもんじゃない。私になら  
ゆっくり返していくって形でもいいのに。

「ねえ沙綾。これ面白いよ」

おたえがとある電子ドラムに触れていた。音の高さや音色を調節  
できるタイプらしい。

沙綾も興味津々だ。

「……うん。いいねこれ！」

どうやら気に入ったようだ。

「それじゃあこれにする？」

「うーん……そうしようかなー」

「でもお高いんでしょ？」

有咲の言葉にその場にいた全員が目線を向けた。

11万の文字。

「たけえええ!!」

有咲の声が店内にこだまする。沙綾も悩んでいた。  
そこに近づく一つの影。

「あなたは欲しくなーる」

「え、リイ先輩？」

「欲しくなーる。欲しくなーるー。どんどん欲しくなーる」

グリグリベース担当、江戸川楽器店で働いているリイ先輩が人形<sup>デペコ</sup>

を沙綾に近づけながら近づいてくる。

沙綾は動揺しつつも気持ちは買う方向に揺らいでいた。

「学割あるよ」

「買いますー!」

即答だった。確か学割はありがたい。

にしてもリイ先輩商売上手だな。

「よかったな沙綾」

「はい」

笑顔でそう言う沙綾に自然と頬が緩む。

奥の方ではクマの絵の描かれたエフエクターを手に取った猫耳が

「買いますー!」と叫んでいた。

沙綾と猫耳はレジにてお会計をする。

買ったドラムは分けて全員で持つことになった。小分けしてもらった袋を片手に店から出ようとすると

「ねえ朝日」

リイ先輩に呼び止められた。

素直に振り返ると笑顔を向けられた。

「朝日がまたここに来てくれて私は嬉しいよ」

「……私も、来られてよかったです」

それは紛れもない本心だった。

◇◇◇

蔵につき次第ドラムセットを組み立てていく。

出来上がってすぐに「私の心はチョココロネ」を演奏した。

最初聞いた時はなんて変な曲だと思ったけどりみちゃんがりきんと作った曲なら段々いい曲のように思えてきた。てか普通に好き。

うん。前に聞いた時よりも確実に上手くなってる。猫耳も間違えずに弾けてるな。まさか短期間でここまで伸びるとは。正直初めて教えた時は思いもしなかった。

これはご褒美でも考えておくか。

「それじゃあ次何の曲やる？」

「新曲作ろう！」

「はあっ!？」

唐突にそう言った猫耳。みんなキョトンとして有咲が驚いた声をあげる。

「SPACEで披露する用に？」

「そう！」

「いや別に新曲じゃなくてもオーディションは受けられるだろ……」

有咲の意見はごもつとも。だがレベルアップしている最中なら

色々挑戦させてもいいだろう。

「いいんじゃないか新曲。どうせこれからもライブやるようになるんだろ？自分たちのしたことをやりたいようにやった方がいい」

だから私は猫耳の発言を肯定した。

「朝日せんぱーいい!!」

「その分猫耳への指導は厳しくなるけどな」

「うっ……そ、それは……」

猫耳は目を泳がせる。

どのみち短期集中になるんだから厳しくなるんだけどな。SPA  
CEのオーデイションは1ヶ月後だ。

「猫耳」

「は、はい!」

「毎日指の動きを練習すること。あとは往復練は怠るな!ちゃんとやれよ!」

「な、なんで私だけ!?!」

「お前が下手くそだからだよ!」

「事実だけど酷い!」

「ならさっさと上手くなれ!」

「はい!」

「なんなんだあれ」

「朝日先輩もなんだかんだ香澄の世話焼くの好きだからね。愛故の行動だよ」

「朝日先輩、香澄ちゃんのこと大好きだもんね」

「おいそこ聞こえてんぞ!」

こういうやり取りは5人になっても変わらないらしい。それが落ち着く。

ただ猫耳が好きってことは否定させてもらおう。

「照れてるのはわかりますけど、落ち着いてくださいよ朝日先輩」

「照れてない。時間ねえんだからそんなこと言ってる場合じゃないだろ。練習しろよ。もしくは新曲でも考えてろ」

「えー。一回休憩しましょうよー」

「まだ一回しかやってないのか？つかなんで猫耳がそれを言うんだよ。私さっきなんて言ったと」

「はいはいそこまでですよ朝日先輩。一旦休憩して、それから新曲考えましょう。いいですよね？」

「……わかったよ」

確かに落ち着きがなかったと思う。落ち着くためにも休憩にしよう。ソファに腰かけ息を吐く。

そう言えば、変わったことが一つあったんだっけ。

「私飲み物取ってくる」

「有咲一人で大丈夫？私手伝おうか？」

「じゃあ手伝ってくれ沙綾」

有咲と沙綾のお互いの呼び方が変わった。

そうなったのも香澄が原因らしく「なんでさーやと有咲って名字で呼びあってるの？」と言われたそうだ。確かに私も二人が名前で呼び合っているのを見たことがなかった。本人たちは中学の頃からその呼び方で慣れてしまっているから気にしたことなかったそう。だから Poppin, Party を機に名前呼びに変えたそうだ。

二人はそれで納得したと言う。まあ別にあの二人の関係性なら突然名前呼びになっても違和感ないし。そもそも今まで名前呼びじゃ

なかったことが不思議でならない。

二人は、少し変わったように見えた。

それなのに私は、何も変わってないように思う。

答えを出さないといけないのに、二人の優しさに甘えて返事を先延ばしにして。

早く答えを出さないといけないのはわかってるんだ。

それなのに答えを出せないのは。答えが出てくれないのは。

ガタツと蔵の入り口が開いた音がした。

「あれ、早かったな」

「家にいないと思つたらこんな所にいたのね朝日」

「っ!？」

狼狽した。勢いよく立ち上がって後ずさる。ローテーブルにぶつかった。

なんで。そう言いたかった。

目の前の人はここには絶対いないはずの人物。口元だけ笑っていた。ただ目が笑っていなくて。足が震えて仕方なかった。

「探したのよ朝日。まさかこんな所にいるとはね」

「……………どうして、ここが……………」

「さあ。どうしてでしょうね」

いや、そんなことどうだっていい。問題なのはこの状況に無関係者こいつらバケモノが絡んでいることだ。なんつータイミングで来てんだこの母親は。穏便に済ませられる気がしねえよ。

「貴方たちは朝日とどういった関係なの？」

「わ、私たちですか？ 私たちは」



「言うな!!」

猫耳が驚いたように私を見るも私はそれに気づけなかった。こっちは誰かの表情気にしてるほど余裕なんてないんだ。悪いが何も話さないでくれ。

目で合図を送る。伝わったかは全くわからない。

「あら。私相手に随分と威勢がいいのね。家ではそんなことないのに驚いたわ」

「……用件は、なんですか」

「そうね。貴方を家に連れて帰るのが目的だったんだけど。やっぱりやめたわ」

嫌な予感がした。笑うバケモノは猫耳に近づく。

「ねえ貴方たち。これからお茶でもない？全額きちんと奢ってあげるわよ」

「何言ってるの」

「私はただお茶に誘っているだけよ。朝日のおともだちをね」

「冗談を言うのは家だけにしてくれ」

猫耳の腕を引いてりみちちゃんたちの方へ後ろ手に押しやる。

「冗談に見えていたの？」

こいつらに何しようとしてたんだよこの野郎。

無意識に身構えてしまう。

「へえ。そんなに大切なのね」

「……っ、いいから帰れよ」

「それ、誰に向かって言っているのかしら」

早くこの場から抜け出さなくて零れた言葉はバケモノの機嫌を損ねるには十分だった。

気づいた時にはもう遅い。左頬に感じる痛みとともに倒れていた。「先輩！」という声がある。次に右の手首を踏まれた。激痛が走る。息が止まった。苦しくてもがく。痛みは和らいではくれなかった。

「アンター！何してんだよ!!」

有咲の声だった。今戻って来たのだろう。最悪のタイミングだ。声にバケモノが振り返る。その間も踏み続けていて辛かった。

「まだいたのね、朝日のおともだち」

「今すぐに出て行け！警察呼ぶぞ！」

「あら。それは困っちゃうわね。今はこのくらいにしておこうかしら」

やっとの事で離された足。笑うバケモノは仕方ないというようだった。

警察沙汰にはなりたくないことはわかった。が、痛いのは勘弁してくれよ。歪む顔でバケモノを睨む。

「それじゃあ朝日。また家で会いましょう」

それはただの死刑宣告だった。

正義を突き通すために。

「朝日先輩！」

沙綾に支えられながら身体を起こしていく。ソファに背を預けた。

「どこやられました!? 手首だけですか!？」

「……落ち着け沙綾……っ大丈夫だから」

「大丈夫なわけないですよね! こんな時まで強がるのはやめてください!」

「沙綾退け。私がやる」

そう言つて救急箱を持った有咲は私の手を取った。道具を出して手首を固定される。湿布が熱をもった手首に染み渡った。

「とりあえず二週間は安静に……と言いたいところですけど」

「無理な相談だろうね。今日は特にきついと思うし」

「誰かの家に泊まるのは……」

「帰らなかつたらお前らまで被害がいきそうだから却下」

「そんなこと言ってる場合なんですか!」

「私はお前らを傷つけてまで傷つきたくないわけじゃないからな」

私は立ち上がった。そして視界に入った三人のことを思い出す。

驚愕に歪んだ顔。ほんと、見せたくなかつたな。

私はおもむろに立ち上がって蔵の外に出た。当然、家に戻るために。

「朝日先輩!!」

蔵から出ると名前を呼ばれすぐに掴まれた手。

「離せ有咲。私は帰る」

「ダメです。まだ帰しません」

腕を有咲に掴まれる。わざとなのか右手を掴まれたせいで下手に動けない。

「離せよ有咲」

「今帰ったらどうなるかわかってますよね」

「今か後かの差だよ。それなら今でいい」

「それ私たちが許すと思ってるんですか」

「逆に聞くけど、なんで止めようとするの」

これは単純に疑問だった。有咲と沙綾は私の事情を知っているのに、この後何をされるか知っているのに、どうして止めようとする。私はそんなこと頼んでいない。むしろ二人に、他のやつらに迷惑が掛からないようにしてるのにどうして。

「それはこっちのセリフです！何されるかわかっててみすみす帰せるわけ」

「だったら私の邪魔するのかよ！頼んでねえだろ引き留めろなんて！」

「私はただ先輩に傷ついてほしくないだけです！なんでわからないんですか!!」

「わかってたまるか！これは私の問題だろ！」

「先輩の問題だって言うなら私たちに知られないところでやってください！心配かけておいて気にするとかふざけてるんですか！」

「放っておけばいいだろ！私なんか気にしなければお前らは普通に生きていけるんだから」

「いい加減にしろよ!!!」

胸倉を掴まれた。キツ！と睨まれた。

突然のことに動揺して何も言えなくなる。

「なんで私たちが朝日先輩のこと気にしてると思ってるんだ！朝日先輩のことが好きだからだ!!朝日先輩のことが何よりも大切だからだ!!なんでそれがわからないんだよ!ずっと近くにいたくせに!!」  
「ツ!?!」

有咲の目から涙が零れる。

ズルイだろ。そんな風に泣かれたら私は。

「……朝日先輩。たとえ家のことだったとしても一人で抱え込まないでください。困ったことがあつたらちゃんど相談してください。なんだって受け止めます。どんなことだって力になります。

だから、もう勝手に傷つくのだけはやめてくれよ」

でも……いくら泣かれたって私は私の意見を曲げる気はない。

だってそうだろ。私があいつらのサンドバッグになり続けていれば紗夜や日菜、こいつらにだって被害はいかないんだから。そりゃ必死にもなるよ。短い時間ではあるけどこいつらという時間は楽しくて幸せで私の日常の一部になってたんだ。それを守るためならなんだってする。この身体がいくら傷つけられてもその方が楽なんだよ、精神的に。

むしろこいつらが傷つけられる方が私は嫌だ。そうなるくらいなら私はなんだってしてやる。

それだけこいつらは私にとって大切な存在になったから。

私はお前らが私のせいで傷つけられる可能性があるって言うなら、二度とお前らとは関わらない。絶対に。

「……………いいから離せ。私は、もうここには来ない」

私は、自分のために動く。ならPoppin Partyのメンバーが何と言おうと私は私の正義を貫けばいい。胸が痛むのなんて、気のせいだ。

私は有咲の元から逃げ出した。

◇◇

大人に近づくにつれて自分が情けないと思うことが増えた気がする。

朝日先輩と有咲がいなくなった蔵で私は自分の力のなさを実感していた。

結局朝日先輩が痛めつけられているのを見ていることしかできなかった。

手当てをしたのは有咲。朝日先輩を追いかけたのだから有咲。多分今朝日先輩の話を聞いているのだから。

私は、先輩の役に立ちたいのに一番何もできていない。ただ告白して先輩を困らせただけ。側にいるのに何もしていない愚か者だ。

「……………さーや」

「……………何」

「……………さーやと有咲は、朝日先輩のこと知ってたの」

香澄が控えめに聞いてくる。私はそつと目を逸らした。  
朝日先輩と両親のことは聞いても面白いことはない。むしろ心が  
苦しくなるだけ。それでも香澄たちは。

「あ、有咲ちゃん……！」

蔵の階段から有咲が降りてくる。その隣に朝日先輩はいなかった。

「……有咲、朝日先輩は？」

「……」

有咲は何も言わなかった。有咲なら連れ戻せると思ったのに。

「……悪い。今日は、もう解散。早く帰ってくれ」

有咲は悲しげな目でまっすぐに私たちを見つめていた。

説明とか、する必要ないよね。

「泣かないで」

誰に向けての言葉？

「頼ってよ」

何を？

「私を信じて」

信じてるよ？

「好きだよ。君はどう思ってるの？」

どうしてそんなこと聞くの？

私は好きだって言ってるでしょ。

なんで伝わってないの？

私が君たちを大切にしていることは、目に見えていたはずなのに。

ねえ、こんな私でもまだ愛してくれますか？



◇◇◇

「りんりん！最近朝日さんと連絡取った？」

Roseliaの練習後、あこちゃんがそんなことを言ってきた。突然のことに首を傾げる。

「私は……取ってない、けど……どうか、したの……？」

「最近NFOにもログインしてないしメッセージ送ったんだけど一週間経っても既読にならないの。なんでか知ってる？」

「……ううん……私は、何も……」

あこちゃんの発言に私は疑問しか生まれなかった。

今まで朝日さんにメッセージを送って返事が返ってこなかったことなんて一度もない。一週間も既読がつかないなんて以ての外。そういう学校でも姿を見ていない気がする。

何かあったのだろうか。

「宇田川さん、白金さん。片付けは終わったの？もう出る時間ですよ」

「あつ、紗夜さん！」

「す、すみません……まだ、終わってないです……」

ギターを背負った氷川さんが私たちに声をかける。時計を見ればあと数分で出なければいけない時間だった。慌てて片付けを始める。

友希那さんたちはもう部屋から出て行ったようだ。

「私は先に行きます」

「あの紗夜さん！」

「なんですか」

「あ、えっと、その……」

足を止めた氷川さん。あこちゃんは少し口ごもっていた。  
多分氷川さんと朝日さんの仲があまりよくないことを知っているから聞いていいのか戸惑っているのだろう。

「……最近、朝日さん……どうしてですか……」

「……姉さんがどうかしたんですか？」

「いえあの大了なことじゃないんですけど朝日さんと連絡が取れてなくて……」

あこちゃんがそう言うのと氷川さんはキョトンとしていた。

「姉さんなら普通に学校に行ってます。まあ、大概サボっているようですが」

「え、そうなんですか？」

「はい。連絡が取れないってことないと思いますよ。日菜はメッセージを送ったら返ってきたと喜んでいましたから」

「へ？」

「早く来てくださいね」

氷川さんは私たちの言葉を信じずに出て行ってしまった。あこちゃんと二人顔を見合わせる。

「……朝日さん、いつも通り……みたいだね」

「うん……。けどどうして日菜ちゃんとの連絡には返信があるのにあこたちにはないのかな？これって変だよな？」

あこちゃんの言う通りだと思う。朝日さんは連絡したら一日以内に絶対返信が返ってくる。ママで丁寧な人だから日菜さんにだけに返信してあこちゃんにだけ返信しないなんてことしないと思うけど。

「明日……学校で、話してみるね……」  
「お願いりんりん」

あこちゃんのお願いに頷いた。  
多分朝日さんに何かが起こってる。何かはわからないけど、とてつもなく嫌な予感がした。

結果から言うなら私の予感は当たっていた。

次の日のお昼休み。私は朝日さんと会うために屋上へ続く階段を登っていた。体力のない私はそれだけで息が上がってしまう。やっとのことで登りきった階段。なのにそこに朝日さんはいなかった。お昼休みは屋上の適当なところで昼寝でもしているものだとばかり思っていたから予想外だ。

お昼はもう食べ終わっていた。朝日さんがどこに行っただか見当がつかない以上戻ってくるまでここで待とうと決心する。

けどいくら待っても朝日さんは現れなかった。お昼休み終了五分前のチャイムを聞いて仕方なく屋上を後にした。

放課後にもう一度訪れても朝日さんはいなかった。もしかしたら今日は休みだったのかもしれない。そう思っtて Roselia の練習に出るために正門へと移動した。

「だからなんで!?!」

正門の前には私を迎えに来てくれたあこちゃん。

「わからないわけじゃないだろ」

そしてもう一人。私が探していた朝日さんがいた。仲良しな二人。そのはずなのになぜか今日は険悪な雰囲気だった。いや、あこちゃんが一方向的に怒っている？そんな風に見えた。その背後には友希那さんと今井さん、氷川さんが立っていた。それが驚いたような表情をしているように見える。

「……お待ちせ、しました……どうか……」

「わからないですよ！なんで急にそんなこと！」

私の言葉を遮るようにあこちゃんが声を上げた。あこちゃんに余裕なんかなさそうでとても焦っている様子だ。

「本当に、わからないのか」

「わかりません！朝日さんが何考えてるのかあこには全然！」

「じゃあ教えてやるよ」

いつもの朝日さんじゃない。あこちゃん相手に攻撃するような声を出して、鋭い目つきで睨みつけて。

朝日さんはいつだってあこちゃんに優しく、あこちゃんもそんな朝日さんが好きで「もう一人おねえちゃんができたみたい」って嬉しそうにしていたのに。

一体どうしたというのか。この雰囲気は機嫌が悪いとかそういうレベルじゃない。明らか、敵意だ。

「私が拒否する言葉を出さないからってはしやぎまわってさ。私があるだけうざ絡みされて何も思っていないと思ってたのか。お前の行動の一つ一つが鬱陶しかつたんだよ」

「ッ!？」

何を言ってるの。素直にそう思った。

鬱陶しい？冗談だよ。あこちゃんにそんな酷い言葉を朝日さん

が投げかけるわけ、ないですよね。

だって一緒に過ごした時間、本当に楽しそうに嬉しそうにしてたのに、あの笑顔や言葉が全部嘘だったなんてそんなわけ……。

「そんだけ。だからもう、私には関わるな」

決定的だった。言葉が出ない。朝日さんがそんなこと言うなんて思いもしなかった。

その場で固まっていた私の方を見ずに朝日さんはあこちゃんや氷川さんの横をすり抜けて行ってしまった。

涙が零れて私に抱きつくあこちゃんを抱きしめながら、朝日さんの後ろ姿を眺めていた。

◇◇◇

あんな姉さん、知らない。それが今日思ったこと。

Roseliaの練習のため、学校に集まった私たち。スタジオの予約時間は迫っているが白金さんだけがまだ来ていなかった。教室にいなかったからもう来ているものだと思っていた。しかし白金さんが遅れるというのも珍しい。そう思いながら待っていると先にやってきたのは白金さんではなく姉さんだった。

「朝日さんー！」

真っ先に反応したのは宇田川さんだった。笑顔で姉さんに近寄って行く。飼い犬が飼い主の元へ駆けるようですごくほっこりした。

「最近連絡取れなくて心配してたんですよ！何かあったんですか？」  
「……」

「忙しかったんならそう言ってくればよかったのに」

「……」

「えっと……本当にどうしたんですか朝日さん。いつもの朝日さんじゃない気がするんですけど……」

だがそれを見た姉さんは不機嫌そうで違和感を覚える。変だと思っただ。

前にスタジオに宇田川さんの荷物を届けに来た時はもつと優しく微笑んでいたはずだ。それなのに今はそんな様子は一切ない。ただ見下したような視線。宇田川さんもそれに気づいて戸惑った表情になっていた。

「朝日さん……？何か言ってくれないとあこ困っちゃいますよ」

「……ならこの際、ハッキリ言わせてもらう」

やつとのことで口を開いた姉さんの声は普段よりも明らかに低くて、機嫌の悪さが滲み出ている。というより、なぜか宇田川さん相手に敵意が見えた。

「もうお前と話すことはない。二度と私に関わるな」

「え……」

宇田川さんが目を見開く。だけど姉さんの言葉を理解できていないのかポカンとしていた。姉さんの表情は変わらない。

まるで最初からそう思っていたみたいだな。隣にいた湊さんと今井さんが驚愕したのがわかる。宇田川さんは遅れて理解したがその言葉を信じたようには見えなかった。

「ど、どういう意味ですか」

「意味？そんなもの必要か」

「必要ですよ。じゃなきゃあこ、何も納得できない」  
「話す必要がないから話さない。理由はそれだけで」

「だからなんで!？」

宇田川さんの心からの叫びが正門辺りに響き渡った。それでも姉さんの表情は変わらない。

「……わからないわけじゃないだろ」

「わからないですよ！なんで急にそんなこと！」

わかるわけない。今の姉さんが何を考えているのか、私には見当もつかない。

だって姉さんは仲良くなった人を傷つけるようなこと、言ったりしない。だからこそ姉さんの周りには人が集まってくる。どれだけ言葉が素直じゃなくても優しさは変わらないから皆それに惹かれる。

そのはずなのに、なんで姉さんは。

「本当に、わからないのか」

「わかりません！朝日さんが何考えてるのかあこには全然！」

「じゃあ教えてやるよ。」

私が拒否する言葉を出さないからってはやぎまわってさ。私があんだけうざ絡みされて何も思っていないと思ってたのか。お前の行動の一つ一つが鬱陶しかったんだよ」

「ッ!？」

どうして、そんな酷いことを言うの。私たちを突き放したときの言葉よりも遥かに酷い。しかもそれを言った相手が宇田川さんなんて。

どうしてなの姉さん。

「そんだけ。だからもう、私には関わるな」

横を通る姉さんのことを私は止められなかった。知らない人の様に見えて怖かったというのものもある。わけわからない行動ばかりして驚いたというのものもある。

だけど一番は。

「くそっ……」

すれ違う寸前、小さく漏らした言葉と苦しそうな表情があまりにもミスマツチすぎたこと。

高校生になって、姉さんのことがわからなくなった。なんで姉さんがそんな顔できるのよ。宇田川さんを傷つけたのは姉さんなのに、どうして自分が傷ついた顔なんか。

この場の誰に聞いたって、答えてくれる人はいなかった。



無力な私たち。

朝日先輩が屋上からいなくなった。

授業をサボって何時間待ったって朝日先輩はあの後から一度も屋上に訪れていない。かと言って教室を覗いてもいない。松原先輩や白鷺先輩に聞いても知らないと帰ってきた。

蔵練にだって、一度も来ていなかった。そのせいでポピパの雰囲気は最悪だ。

……いや朝日先輩のせいじゃない。私のせいだ。私があの人に朝日先輩を引き留められなかったから。あの日、私がちゃんと朝日先輩を連れ戻せたら。あの人の心に住めていたら。もつと諦め悪かったら。

無理矢理にでも朝日先輩を帰さなければよかった。私が傷つくくらいで朝日先輩を助けられるのならそれでよかったんだ。

なんで、朝日先輩のことを逃がした。好きなら離さなければいいのに。どうして私はそうしなかった。

「有咲。練習行こう」

香澄の声で現実に戻される。クラスにはもう私以外のクラスメイトは数名しかいなくて、ギターやベースを背負ったメンバーが目の前にいた。

笑っているその表情は、ただのカラ元気だ。

「……おう。行くか」

席を立って皆の隣に並ぶ。蔵に向けて歩き出した。

多分、私や沙綾よりも香澄たちへのダメージの方が大きいと思う。私たちは知ってたんだ。朝日先輩最大の本当は誰にも知られたく

ない秘密を。

けど香澄たちはあの日初めて知った。包帯の正体も、その時に初めて知った。しかも一番最悪な方法で知ってしまった。その代償はきつと私たちの比じゃない。

「……」

「……」

「……」

「……」

「……」

静かだ。世間話なんて、くだらない話なんて、誰もしない。ここ最近ずっとそう。

蔵練に行くはずなのにこの雰囲気はまるで誰かの葬式に行くみたいだ。

「……………ねえ。今日は朝日先輩、来てくれるよね」

「……………そんなの先輩次第だろ」

もう来ないかもなんて口が裂けても言えない。

朝日先輩は頑固だ。普段なら簡単に折れて相手に合わせるからそう思うことが少ない。けど自分が大切だと思うことに対しての意思は絶対に曲げない。

あの日朝日先輩は言った。「もうここには来ない」と。私はハツキリ、言われたんだ。真剣で、真っ直ぐで、悲し気な眼差しで。

それなのにどこに可能性があるって言うんだよ。あの人はもう蔵には来ないんだ。そしてきつと私たちに会うつもりもない。

また自分一人で抱え込んで、解決しようとしてる。本当にバカなんだよ。

私は言ったのに。一人じゃ解決できないこともあるから私を――

「ッ!？」

「え、さーや!？」

「は?」

突然耳に届いた香澄の焦った声。いつの間にか下がっていた顔を上げれば沙綾が走っていた。訳が分からない。なんで急に。みんな同じ場所に向かっているんだから走る必要なんてどこにも……。

「まさかつ!」

あつた。一つだけ沙綾が走る理由が。だとしたら。

「香澄、りみ、おたえ。先に蔵に行つてくれ!」

「あ、有咲!?!どこ行くの!？」

「心配すんな!用が済んだらすぐ行くから!」

沙綾を追いかけるように校内を走る。途中で風紀委員の人が走るなど注意していたけど全部無視だ。そんなものに従っている場合じゃない。

階段を駆け下りて渡り廊下を越えていく。この先は旧校舎だ。授業の時くらいしか使われないからめっちゃ静か。そのうえ用がなければ誰も来ない。なんでこんな絶好のサボりポイントを見落としてたんだよ私は。

「朝日先輩!!」

「……やっつと、見つけた」

旧校舎の一番奥。今は使われていない社会科準備室。そこに朝日先輩はいた。

息を切らす私たちと対称的に朝日先輩は狼狽して、私たちを睨んで

いた。

「……何か用かよ」

「ずっと探してました。朝日先輩、どうしてこんなところに……」

「それは私のセリフだ。なんでお前らがここにいる」

「先輩がここに入っていくのを見かけたからです」

沙綾が気づかなかつたら朝日先輩の居場所を見つけるのにもつと時間がかかったと思う。

今見つけた以上、逃がしたくない。

「知るか。出てけよ」

「朝日先輩。なんで私たちのこと避けるんですか」

「はあー？」

「葦練には来ない、屋上にはいない、連絡しても全部無視。これで避けてないなんて言いませんよね」

おかしいことだらけなんだ。こんなの朝日先輩じゃない。

朝日先輩がどれだけのものを抱えているかはわからないけど、ただこれはいくらなんでもやりすぎだ。

先輩のこと、あんたが教えてくれたんじゃないか。それなのに私たちから逃げんなよ。

「避けてたら何？避けたことでお前らに何か迷惑かけた？」

「迷惑って……本気で言ってるんですか」

「……私はお前らには関わる気はない」

「だから、避けてるんですか」

「ああ。これ以上お前らに迷惑はかけられない」

そんなこと言うなら、先輩の秘密を知る前に突き放してくれた方がマシだった。

「迷惑だなんて、私たちは思ってません！」

「香澄たちだって心配してます。だから戻ってきてください朝日先輩！」

「戻る気はない」

「朝日先輩！」

「私は!!」

私たちを遮った朝日先輩は苦しげな表情で、歯を食いしばっていた。

「……私のせいで誰かが傷つくくらいなら、味方なんかいらぬ。お前らだって、そうだろ」

その言葉はやけに私の心に刺さっていた。私はずっと朝日先輩の隣にいたいがために行動していた。だから朝日先輩の目線で物事を考えたこと、なかった。

多分私も朝日先輩の立場なら同じことをしたかもしれない。周りを遠ざけて勝手に抱え込んで。だって大切な人に傷ついてほしくないから。いくらその人に頼れと言われても傷つけたくない意思の方が強いに決まってる。

なんでそのことに私は気づかなかったんだ。

「……頼むから、もう近づくな」

また、先輩のこと助けられなかった。

◇◇◇

「……氷川、さん……」

宇田川さんの一件があり、急遽スタジオ練が休みになった今日。家でギターの練習をしようと帰る支度をしていた私を呼び止めたのは同じクラスで同じバンドメンバーの白金さんだった。

カバンを片手に私の前に立つ。バンド内で話すことはあってもクラス内で話すことはほとんどない。そもそも彼女の方から話しかけてくることも少ないから珍しいなと思った。

「白金さん。どうかしましたか？」

「……氷川さんは……朝日さんのこと、何か知っていますか……？」

予想通り、と言えばそうだ。

白金さんと宇田川さん、そして姉さんは仲が良い。何故かは全く分からないが気が付いた時には下の名前で笑顔を向けあっていた。

それなのに数日前の姉さんは私のイメージと異なっていた。

宇田川さんに吐いた暴言は、おかしなものだ。

素行の悪い姉さんの姿しか見たことのない方々は何も不思議に思わなかっただろう。宇田川さんに向けて「可哀そう」と適当なことを思っただけだ。

だが私たちがからしたらケンカをしているように、いや。あれは一方的に姉さんが嫌っているようにしか見えなかった。

そう見せているように見えた。きつと最後の眩きがなければただ姉さんに文句を言うだけだっただろう。

その一言のせいで、姉さんがわからなくなるなんて思ってもいなかった。

「……先に、聞いてもいいですか」

「……なん、ですか……」

「姉さんと宇田川さんが話している時って、変な雰囲気とかありました？少しでも不満そうだったか」

「……………そんな素振り、一度も……………だから私は……………驚きが隠せないんです」

白金さんは辛そうな表情で首を振った。

近くにいた白金さんが知らないというのなら、あれは一体……………。

「なら私にはわかりません。正直な話。あんな姉さん、私も初めて見たので」

姉さんは授業をサボったり、両親と揉めることはあっても、根は優しいはずなのに。

宇田川さんや白金さんのことを避けて日菜との距離が縮まった理由。

それを突き止めれば私たち姉妹の仲は戻るのだろうか。

金髪美少女は笑う。

「おねーちゃん！見てみて星がいっぱい！」

「本当ね。綺麗だわ」

「あれ確かオリオン座だよね！砂時計みたいな形してるやつ！」

「うん。そうだよ。オリオン座で一番光ってるのが一等星のベテルギウス。ちなみにその近くにある一等星がこいぬ座のプロキオンとおいぬ座のシリウスで冬の大三角だよ」

「わあっ！おねーちゃんすごい！物知りだね！」

「星って綺麗だから見てるの楽しいよ。ずっと見てたらどんな星座があるのか気になって」

「ねえねえおねーちゃん！あたしにも星座教えて！」

「姉さん。私にも教えてほしいわ」

「もちろん。あそこにあるのがふたご座のカストルとポルックス。この星座には面白い話があつてね……」

楽しかったんだ。

心の底から好きだった。





スマホと財布だけをカバンに詰めて家を抜け出す。仕事場に立ち寄ってシャワーを浴びて、ギターを背負って私は歩き出した。

行き先は夜の学校。

時刻は八時過ぎ。部活動生たち数人の横を通り過ぎて、人気のない階段を上がっていく。

この時間からここに足を運ぶ者はほとんどいない。いるとしても忘れ物を取りに来たくらいですぐにいなくなる。屋上なんて誰も来やしない。だって用事があるやつなんかいないから。

だからこそ私が一人ギターに没頭するにはちょうどいい空間だった。

ここなら誰にも邪魔されない。

初めて来たわけじゃないからわかる。ここは警備員もほとんど見回りに来ない。来ても非常階段を登ってタンクの置かれている所まで行けばバレやしない。

壁にもたれてギターを取り出す。チューニングをして空を眺めた。

今日は星が綺麗に見える。そんな日はあの曲が聞きたくなる。

星に願いを込めて、大切な人たちへの想いを歌った曲。私たちが中学生の頃に流行って未だに売れ続けている曲だ。ずっと好きでこういう星が見える日に弾きたいと思う。

ギターはアンプに差していないから音はたいして鳴っていない。歌声が屋上に響いているわけでもない。それでよかった。

こんな下手くそなギター、誰かに聞かせるようなものじゃない。他のやつらに訊かせる時はある程度できていないといけなから気が抜けない。

けど今は違う。私が勝手に弾いて満足すればいい。下手くそでも関係ない。

だってここには私しかいないんだから。

「あなた素敵なギターと歌声ね！」

そう思っていたのに聞こえてきた明るい声。ギターの演奏をやめて声のした方を見れば花女の制服を着た金髪の美少女がいた。見たことないし一年か。彼女はニコニコと私のことを見ている。

「……誰」

「あなたいつもここで演奏しているの？」

「質問に答えろって」

「私は弦巻ころろよ！あなたは？」

「名乗るほどの者じゃない」

「そうなの？まあいいわ！私は答えたんだから今度はあなたが私の質問に答える番よ！」

「……別に。気が向いたから来ただけだ」

帰ろう。これ以上はこいつに邪魔される気しかない。

そう思いギターを仕舞おうと動けば彼女は不思議そうに私のことを見つめていた。

「もうやめちゃうの？」

「お前が来たからな」

「私が来たらやめるの？」

「誰が来てもやめるつもりだったんだよ」

警備員なら別に何も思わなかった。けど同じ学校の生徒なら話は変わる。

面倒なんだよ、ここにいたことがバレると。

「それはどうしてかしら？」

「はっ」

「先にいたのはあなたなんだし私はあなたの演奏を邪魔する気はない

わよ」

「そんな話じゃねーんだよ」

こいつ、私のこと知らない口だな。どうしよ。速攻で突き放すか。けどこの純真無垢そうな目のやつを遠ざけるのはやっぱ抵抗あるな。……って。あこちゃん突き放した後に何言ってるんだろ。

関係ないだろそんな私情。全く関わっていない今突き放すのが一番楽なのはわかってるだろ。

「お前らがここに居続けるって言うなら私は出て行く」

「ねえ、ギター弾いてみて!」

「人の話聞いてんのか」

「どっちかが出て行かないといけないなんて変じゃないかしら。私はどっちもいいと思うの」

「それはお前の意見だろ。聞いてねえよそんなこと」

なんなんだこいつ。なんで私に構うんだよ。

「あなた星を見ながらギターを弾くのが好きなの?」

「なんで」

「だって星を見て歌っている時のあなたは楽しそうだったもの」  
「っ……」

当たり前だろ好きなんだから。

好きなことで笑えないほど私の精神はまだ腐りきってない。けど

「……好きじゃねえよ。星に興味なんてねーし。適当なこと言ってるじゃねえ」

「どうして? 星座を見てるのすごく楽しいじゃない! ほら! ベテルギウスが綺麗に見えるわ!」

「は? 何言ってるんだお前。今オリオン座が見えるわけ」

「興味がないって言うっておきながらよく知ってるわね」

しまったと思った時にはもう遅い。彼女は私を見て笑っていた。まさか頭の中がお花畑そうなやつ相手にこんなカマかけられるなんて。侮ってた。

「ちよつとこころろ！急に走らないでっ！……ひ、氷川朝日先輩!？」

「朝日さん？どうしてここにいるの？」

彼女に続いて階段を駆け上がってきたのは黒髪の女の子。私のことを確認して驚いていた。

そしてもう一人は松原だった。どうしてはこっちのセリフなのに。

「か、花音さん知り合いなんですか!？」

「クラスメイトだよ。意外と仲良いんだ」

「仲良いの!？」

「勝手なこと言うな。良くねえよ」

ただ一方的に話しかけてきて少し優しくしたら懐いただけ。傷を見られたのも弱みのように感じている。

「朝日さんここで何してるの?」

「なんだっていいだろ」

「花音！この人さつきギターを弾きながら歌ってたのよ！すつごく素敵だったわ!」

やめろそんなこと言うな。

「朝日さんギター弾けたんだね」

「……確か、紗夜先輩と日菜先輩も弾けるんですよ。なんか納得です」

「どうして紗夜と日菜が出てくるの？」

「知らないのころちゃん。その二人と朝日さんは姉妹なんだよ」

「そうなのね！だからあなたのギターが上手だったのね！」

「だからってなんだよ。あれを上手なんて、ありえねえよ」

バラバラで途切れ途切れのギター演奏、誰が喜ぶ。あんな演奏、幻滅されるだけだろ。

「そうかしら？ 私にはとつても上手に見えたわよ！歌もとても素敵だったわ！」

「なわけあるか。お世辞も大概にしろ」

「朝日さん。こころちゃんはお世辞なんて言わないよ。口から出る言葉全部本心だから」

そんな人間いるのかよ。怖すぎだろ。

「知るか。出て行く気がないなら私は帰る」

「待って朝日！」

「あ？何呼び捨てにしてんだよ一年。初対面のくせに馴れ馴れしいんだよ」

「どうしてそんなに怒っているのかしら。笑顔の方が良いことあるわよ！」

「は？」

「大切なのは笑顔なの！笑顔になったらみんながハッピーになるわ！朝日だってギターを弾いてる時は……」

「黙れ」

笑顔の方が？何も知らないのにどうしてそんな適当なことが言えるんだよ。

笑顔で何もかもが解決できるわけないだろ。ふざけんな。どれだけおめでたい脳なんだよ。

それで全てが解決できるって言うのなら私はなんでこんなことしてる。

みんなを突き放して、心にも思っていないこと言っ、困らせて怒らせて泣かせて。

なんだよ。あの暴力的な両親バケモノにも笑顔を向けておけば解決するって言うのか。いくら殴られても笑っていいりやいいのか。そんなのどっちがバケモノがわからねえだろ。

「言っておくがそれは恵まれたやつだから言えるんだよ。肉体的にも精神的にも不安なんてないやつだから言えるんだよ。そんなの押し付けられたってみんながみんな幸せになれるわけじゃない。苦しんでるやつに笑えなんて頭おかしいだろ。」

笑っていて何もかも上手くいくならみんな笑ってる。貧富の差なんか生まれない、いじめなんて起こらないし、ムカつくこともないからストレスなんか微塵も感じない気持ち悪い世界になってるはずだろうが！」

どうせならそんな世界の住人になりたかった。

そうしたら私は誰かを傷つけたりしないのに。したくないのに。

「私はおめでたいやつは嫌いなんだよ。二度と顔見せんな」

都合のいいことばかり起こらないことくらい知ってるんだ。世界が、私の身近な場所が理不尽なことはもう。

けどそれを変えるのは私だ。他の誰でもない私が変わるんだ。

あいつらを警察送りにしたら有咲たちにはすぐに謝るつもりなんだ。

どんな願いでも聞いて、許してくれるのなら一生をかけてでも尽くすつもりでいる。

だから今は少しでもそんな美しい世界の希望を持たせないでくれ。

私は、それができるかもと信じてしまうから。甘えてしまうから。  
辛い現実を突きつけられた方がマシなんだよ。

秘密の話を私と君で。

放課後の誰もいない空き教室。そこに私は呼びだされていた。今日蔵練は休み。だから他の三人は帰ってしまった。時間も五時半を過ぎていてほとんど生徒は帰宅したことだろう。残っているのは部活生徒生徒会くらいではないか。そもそも空き教室に用がある生徒なんていない。

故に秘密の話をするには最適だ。

空き教室の扉を開けば椅子に座り本を読んでいる有咲がいた。私に気づいてそれをしまう。

「やっと来たのか。遅かったな沙綾」

「ちよつと、先生に呼ばれて。……それで話って何、有咲」

「わかってるんだろ沙綾。とぼけるなよ」

イスに座ったままそう返される。頬杖をついてこちらを見ていた。もちろん有咲の言いたいことは理解していた。だけどそれはここで話してもいいものなのか判断しかねる。

「なあ沙綾。お前さ朝日先輩のこと好きだろ」

そんな時に飛び出した発言に心臓が飛び出しそうだった。

「そ、そりゃあ好きだよ。大切な先輩だし」

「そつちじゃねえ。恋愛対象としてだよ」

誤魔化しの言葉が有咲によって否定される。やっぱり有咲相手に誤魔化しなんて通じなかった。この状況からの言い逃れは多分できない。



そして同時に、目を逸らしていた事実にも目を向けなければいけなくなってしまうた。

「好きなんだろう」

「有咲相手に隠したって意味ないか。そうだね好きだよ朝日先輩のこと」

むしろどうやったらあの人のことを嫌えるのか不思議なくらいだ。

「けど、それは有咲もでしょ」

「ああそうだな。好きだよ」

あつさり肯定される。

恥ずかしがる様子はない。些細なことでも照れる有咲が何一つ動揺していなかった。いつもの照れ屋はどこへやら。

ペースを乱されそうで。いや。ペースを乱されるだろうから、それが怖くて仕方ない。

「……………いつから気づいてたの」

「さあな。一つ言えるのはお前自分で思ってるよりもわかりやすいよ。すぐ顔に出るし」

「有咲も大差ないじゃん」

「けど最近のお前はあまりにも積極的だった。文化祭の時のあれ、私に知らないとも思ってたのか」

「……………隠れて見てる、なんて悪趣味じゃない？」

「人がやっとの思いで撮ってもらったツーショット見て嫉妬するなんて心が狭すぎねえーか？」

普段の何気ない会話なら主導権を簡単に握れるのに朝日先輩のことだと全く主導権を握らせてくれない。

こういう時の有咲は、ハッキリ言って苦手だった。

「お前さ、朝日先輩に告白したんだろ」

「っ!？」

「けど保留されてるから必死にアピールしてる、だろ？」

すべて見透かしたように言う有咲が怖かった。

「……なんで」

「私も同じだからな。先輩からの返事待ち。だから朝日先輩のことは誰よりも見てるつもりなんだよ」

朝日先輩の事情を知っていて、昔も今も見ていて、朝日先輩のことが好きで、その先輩からの返事待ち。

つまり私たちの状況はほとんど同じってわけだ。

「………それを知ってて、何の用なの？別に朝日先輩にアピールするのは勝手でしょ？」

「そりゃあな。別に私もそれに文句言う気じゃねえよ」

だったら一体何なのか。呼ばれて、そんな話しておいて。

「そろそろ本題に入るが」

有咲は立ち上がり私の前に立つ。身長は私の方が高いはずなのに真っ直ぐすぎる目に見上げられるのが嫌だった。

名前を呼ばれる。

そして口から出た言葉に驚きを隠せなかった。

「一時休戦にしないか」

「え？」

「それより協力してくれ」

突然すぎて何を言っているのかわからなかった。

一時休戦、というのは話の流れから察するに朝日先輩へのアピールをだろう。別に戦ってはいないのだからその表現が正しいのかは微妙。

けど協力というのは一体。

「朝日先輩を、助けたいんだ」

それは私と同じ想いだった。

「わかるだろ私の言いたいこと」

「っ！もしかして紗夜先輩たちと」

「ああ。仲を戻したい」

協力というのは氷川姉妹の仲を戻すのを、らしい。それは私も戻してあげたい。だけど。

「どれだけ難しいこと言ってるかわかってるんだよね」

「当たり前だろ。そもそも朝日先輩の考えを改めさせねえと……」

「む、無理だよ！だって朝日先輩が紗夜先輩たちにあんな態度取ってるのだって」

有咲だってわかっているはずだ。何の勝算もなくそんな目標みたいなものだけ持ってたって意味ないことも。

「わかってるだろ。朝日先輩が元に戻るためには紗夜先輩や日菜先輩との仲を戻して、そのうえで両親との問題を解決しないと意味ねえって」

「わかっているよそんなこと！けどどうしようもないじゃん！」

「なあ紗綾。お前朝日先輩のこと好きって言うわりには意気地なしだ

よな」

「ッ!?!」

「好きならさどんな時でもどんな状況でも助けたいって思うもんじゃねえの」

言われなくたってそんなこと。だけど私にはいくら手を伸ばしたって助けられる未来が見えない。

今までの楽しかった日々はあくまで表面的。裏では暴力に傷つく人がいるのに見えていないフリをして、そして解決してほしいと祈っている。

他人行儀だと言われてもおかしくない。

みんな私に言うんだ。「力になるよ」って。

何の、何に対しての言葉なの。私は所詮力を持たない人間なのに、どうして私に力を貸そうとするの。意味ないんだよ私に力なんか貸しても。だってそれを上手く使えないから。何のアイディアも浮かばない。何が今の先輩に必要なのかもわからない。

それなのにどうして。

「朝日先輩の演技をやめさせたいなら紗夜先輩たちとの仲を戻すのが一番だ」

「だ、だからって」

「現状を変えようとしないう朝日先輩にも問題はあある。けどなそれが手を差し伸べない理由にはならないだろ」

「っ……」

わざと不仲になっていること。

姉妹の距離を一定以上詰めようとしないうこと。

虐待されていること。

そのせいで傷が増えていくこと。

妹さんたちに被害がいかないように身代わりになっていること。

証拠は揃っているはずなのに警察に行かないこと。

知っている。先輩の意見も想いも。だけど一番知るべきなのは紗夜先輩と日菜先輩だ。なのに朝日先輩は心配をかけたくないからと言わない。

本当にバカで優しくてどうしようもない人。

「お前にやる気がねえならいいよ。私一人でどうにかするから」

有咲は、すごいと思う。

今言ったことは一人でやった方が明らかに朝日先輩からの好感度は上がる。それをわかっていて私に話したんだ。一人では支えが足りないと思つて。多分これに協力したら、そのせいで朝日先輩が取られたつてきつと文句一つ言わないで祝福してくれるのだろう。

本当に怖い子。私が一人で抱え込むようなことを平気で人に想像して、自分が絶対に勝つと闘志を燃やしている。

大変な子と好きな人が被つちやつたもんだ。

正々堂々としたライバル宣言。もちろん受けたいよ。けど私は有咲に勝てるなんて思つてない。けど。

「……わかった。協力する。助けよう絶対に」

受けないと納得できないよね。有咲も私も。

私たちは誓いも握手を交わす。それを受理するように下校を示すチャイムが鳴った。

◇◇◇

それはただの偶然だった。私は風紀委員の活動で校内の見回りをしていただけ。

「朝日先輩を助けたいんだ」

足が止まった。空き教室の扉にかけていた手が動かなくなる。

気づけば教室内の会話に聞き耳を立てていた。普段なら絶対にやらないことなのに。

それだけ中から聞こえてきた言葉が衝撃的だった。

「どれだけ難しいこと言ってるかわかってるんだよね」

「当たり前前だろ。そもそも朝日先輩の考えを改めさせねえと……」

会話をしているのは声的に市ヶ谷さんと山吹さんの様だ。両者共に姉さんと話しているのを見たことがあるし仲は良いのだろう。

どちらも成績優秀者と記憶している。そんな二人が不良児の姉さんと仲良くなったきっかけがわからないが。

「む、無理だよ！だって朝日先輩が紗夜先輩たちにあんな態度取ってるのだって」

「わかってるだろ。朝日先輩が元に戻るためには紗夜先輩や日菜先輩との仲を戻して、そのうえで両親との問題を解決しないと意味ねえって」

「わかってるよそんなこと！けどどうしようもないじゃん！」

「なあ沙綾。お前朝日先輩のこと好きって言うわりには意気地なしだよな」

「ッ!?!」

「好きならさどんな時でもどんな状況でも助けたいって思うもんじゃねえの」

何かもめている様子だった。一方的に市ヶ谷さんが突っかかっているのか歯切りの良い山吹さんがもっている。

内容も、姉さんが好きだとかそういう話だしやはり聞くのはよくない。そう思って教室から離れようとしたら

「朝日先輩の演技をやめさせたいなら紗夜先輩たちとの仲を戻すのが一番だ」

「え……………?」

衝撃的な言葉が聞こえた。

「だ、だからって」

「現状を変えようとしないう朝日先輩にも問題はあある。けどなそれが手を差し伸べない理由にはならないだろ」  
「っ……………」

演技……………? 仲を戻したい……………? どういうこと。脳をフル回転して考える。

演技って何が。仲を戻したいって何。現状を変えようとしないう? 何を言っているのか。

疑問がどんどん溢れていく。一旦整理しよう。

今までのことが全て演技だと二人は言った。それも元々知っていたかのような素振りだ。この際二人が知っているのかはどうだっていい。

問題なのはその理由だ。

あの日姉さんは私たちに酷いことを言った。本当に突然に。でもそれは姉さんの本心であったかと思ひ込んでいた。突き放したのだっ

て私が日菜にしてしまったことと同じだと。

しかしそれが全て間違っていたとしたら？

今思い返してみればおかしな点が多い。姉さんが私たちを嫌いだったというのなら何度も私と日菜のフォローをしなくてもよかったです。

面倒を見る、というのが両親からの指示なら仲直りさせたりケンカの仲裁に入る必要なんてなかったはずなのに。どうして姉さんは……。

今までに感じていた違和感は間違いじゃなかったってこと？

「じゃあ帰るか」

その声にハッとする。

このままここには盗み聞きしていたことがバレてしまう。素早く物陰に身を隠した。

幸い二人は私に気づいていない様子。ゆっくり物陰から出ればもう彼女たちの姿は見えなくなっていた。早々と生徒会室に戻ってカバンを回収する。

校内の見回りはあの教室が最後だったため「何も異常はなかった」とだけ報告して帰宅する。まあ私にとっては異常だらけだったけど。帰宅中も帰宅後も市ヶ谷さんと山吹さんの会話が頭から抜けることはなかった。



## 結託の日。

「日菜。ちょっといいかしら」

「え、おねーちゃん!？」

家に帰って夕食とお風呂を済ませた私は日菜の部屋に訪れていた。

内容は帰りながらずっと考えていた市ヶ谷さんたちの会話。結局市ヶ谷さんたちの言っていたことは何一つわからなかった。

ギターの練習をしても全く集中できなくて、ただ迷走して。日菜の部屋に来たのも姉さんと仲の良かった日菜なら姉さんのことを何か知っているかもしれないと思ったから。

核心に迫れるんじゃないかって淡い期待があった。

ノックをして開いた扉。中には急に現れた私に驚く日菜がいた。

けど次の瞬間には目がキラキラ輝いていてとても嬉しそうだった。

「どうかしたの？おねーちゃんがあたしの部屋に来るなんて珍しいね！」

「話したいことがあって。時間大丈夫？」

「うん！」

いつも以上に明るい声。そんなに私が来たことが嬉しいのだろうか。

扉を閉じて部屋の中に入れば日菜は自分の座っていた椅子を私に譲ろうとしていた。さすがに部屋の主である日菜を退かしてまで座ろうと思わないから断った。椅子に腰かけたままの日菜とは対照的に私は立ったまま話すことにする。

「それで話して何？るんっ♪ってすること？」

「るんとするかはわからないわね」

日菜の言う「るんっ♪」の意味が大方楽しいことなのは理解してるつもりだった。なるるんっとはしないとすべきだったか。

「……日菜」

「ん？」

「姉さんが私たちを突き放した日、貴方は何を思ったの」

「え……」

突然の私の発言に日菜は目を丸くした。

「……それ、どういう意味？」

「……今日、姉さんのことで気になったことがあるのよ」

なんでもいい。だから教えて。

そう私と言えば日菜は真剣な表情で考え始めていた。日菜とこうやって話をする事自体久しぶりだからこんな真剣な日菜を最後に見たのはいつだろうと思う。明確な時は覚えていないが姉さん関連だったことは覚えている。

「……あの日のことであたしが覚えてるのは、ただ悲しかったってことだけだよ。初めておねーちゃんに拒絶されてショックだった」

「日菜……」

「けど……それ以上におねーちゃんは悲しそうにしてた」

「え……？」

姉さんが、悲しそう？

あの日にも姉さんはそんな顔を……？

「あの日、おねーちゃんがあたしの知ってるおねーちゃんじゃなく

なった。言動も口調も行動も。

けどね、おねーちゃんの悲しそうな顔だけは変わってなかったよ。

おねーちゃんは知らないでしょ。おねーちゃん、あたしたちを突き放した日、自分の部屋で泣いてたんだよ」

「泣いてた……？」

「うん。泣いてた。多分、あの日の夜偶然部屋から出てなかったら気づくことなかったと思う」

すすり泣く声とあたしたちへの謝罪が込められていた。そう日菜は言った。

「それを聞いておねーちゃんがあたしたちに言ったあの言葉が嘘だつて知った。だからあたし、決めたんだ。どんなにおねーちゃんがあたしから離れようとしてもあたしはおねーちゃんについて行くって。

その結果で落ち込むこともあったけど、でも後悔はしないようにしたかったから」

「どうして、教えてくれなかったの」

「だってあの後すぐにおねーちゃんと、その……仲悪くなっちゃったから」

「っ……」

日菜に聞けば聞くほど私の知らない姉さんが増えていく。

それが少しだけ私の心をもやもやさせた。

「あと、あの日からだよ」

「何が」

「お母さんたちがおねーちゃんに冷たくなつたの」

「冷たくって……日菜？何言つて」

「お母さんたちはおねーちゃんがああなつても全く表情が変わらなかつたの。今までもちよくちよく変だなあつて思うことはあつたけど、次の日くらいから完璧に変わつてた。」

おねーちゃんのことなんてどうでもいいって態度を取り始めて、あたしたちのことは大切そうなのにおねーちゃんはそうでもないって言ってるようにあたしには見えてた」

人に興味なかったあたしがそれだけわかったんだから間違いないよ。

そう日菜に言われて今までの姉さんとお母さんたちのやり取りを思い出す。

見たことはあまりない。多分数も多くない。けどどれも私たちと比べるとその差は明らかに違う。

「おねーちゃん、本当に気づいてなかったの？」

考えれば姉さんのことを両親に何か言われたことがあっただろうか。

急に私たちにあんな態度を取ったのにも関わらず両親は気に留めることは一度だつてなかった。それはなぜ？

そんなにわかりやすい変化にどうして私は気づいていなかった。

「……私はずっと、姉さんが一方的に私たちを嫌って両親に反抗しているだけだと思ってた。けどもしそれが違うとしたら……」

「おねーちゃんがああなったことについてお母さんたちが何か知ってもおかしくないと思う」

確かにそう考えると今までの行動も納得できるかもしれない。

けどどうなると姉さんとお母さんたちの間で何が起こっていたのかはわからないからそれを見つけないと。ただ直接お母さんたちに聞いていいものなのかは微妙だ。

けどやっぱり、どう考えても不自然だ。姉さんが態度を変えたのに私たちと両親の接し方が何も変わらないのはおかしい。どうして今までそれに気づかなかったのかも考え物だが、本当に市ヶ谷さんたち

の会話を聞いていなかったら永遠に気づかなかったかもしれない。そもそもどうして市ヶ谷さんたちは姉さんの抱えていることを知っていたの。

「それで、おねーちゃんはおたしにそれを聞いてどうするつもりなの」  
「……決まっているでしょ。姉さんを助けるのよ」  
「助ける？」

私は今日市ヶ谷さんと山吹さんが話していたことを話した。要約して簡潔にはあるけど話せば話すほど日菜の表情がコロコロ変わっていく。最終的には私と同じように悩んだ顔になっていた。

「ただ今姉さんの抱えている問題が昔と同じなのか否かはわからないわ。もしかしたら前の悩みはもう解決していて、今は違う悩みを新たに抱えているのかもしれない。私たちにできることも、本当はないのかもしれない。

けど、それが姉さんと向き合わない理由になってはいけないと私は思っているわ」

姉さんに突き放された過去がある。

日菜を突き放してしまった過去がある。

自分が孤独だと思っていた過去がある。

思い返してみれば日菜にも姉さんに対しても向き合わずにずっと逃げてばかりだった。

そんなのは、もう終わりにしよう。

私が後悔しないように。

日菜にも姉さんにも後悔させないように。

「ねえ日菜。私に協力してくれる？」

「もちろんだよ」

日菜は頷いた。

「なら早速で悪いけど姉さんの部屋に行かない？」

「おねーちゃんのもの、部屋……？」

「簡単に話してくれないのはわかってるわ。けど話さないと何も始まらないですよ」

今更遅いかもしれない。突き放されたことに勝手に怒って勝手に傷ついて、今までたくさん迷惑かけた。向き合えなかった分、これからは全力でぶつからないといけない。

どんなに傷つけられても姉さんが離れていかないように。

妹とブラフと心の叫び。

部屋の扉をノックされたのと同時に開かれた扉の先にいたのは妹たちだった。

二人して真面目な顔をしている。

「姉さん。話があつて来ました」

「……私、入っていいなんて言っていないけど」

「ノックはしました」

鍵をかけ忘れていた数十分前の自分に舌打ちをする。だが二人で私の部屋に来るなんて珍しいこともあるもんだ。色々問い詰められる想像ができてしまう。

「と、突然ごめんねおねーちゃん。あたしたちおねーちゃんに訊きたいことがあつて……」

「私はお前たちに話すことは何もないよ」

「そんなこと言つて逃げようとししないで」

打った先手を後手の紗夜に止められる。

二人に塞がれている扉からは出られない。かと言つて背中側のベランダの先は行き止まりだ。それに加えここは二階。物理的に退路は塞がれた。

逃げられないなら上手く言い包めるしかない。

「単刀直入に言います。姉さんは私たちに隠していることがありますよね」

「人間なんだし隠し事くらいあつて当然だろ」

予想範囲内の質問。解答を返す。

「そういうことじゃありません。知っているんですよ私たちは」  
「知ってる？」

「ええ。姉さんが三年前から抱えているものを私たちは知っています」

「っ!？」

冷水を浴びたような気分だった。

知ってる？あの日からの私のことをか？待ってなんでいつから。

あれだけ二人にはバレないように行動してきたのに一体どこでバレたって言うんだ。

ケガやら包帯だって多少無理矢理にでも誤魔化してきたのに。

それなのにどうしてあいつらのことが……。

いや待てよ。違うどう考えたっておかしい。もし仮に二人が  
虚待  
そのことを知っていたんならもっと早めに私の所に来て、もっと早めに私への暴力はなくなつて、もうとつくにあいつらは警察に行っているはずだ。

そうなつていないのならこれは紗夜のブラフ。あいつらについて何も触れていない辺りそういうことなんだろう。

けど今それが分かったとしても見開いてしまった目をなかつたことにはできなかつた。

「……やっぱり、そうだったのね」

「ち、違う！別に何も」

わかりやすい慌て振りだった。これで気づかないやつなんかいない。墓穴掘ってどうするんだよ。



「姉さん、姉さんが抱えているものは何。私たちには話せないようなこと。」

思わず目を逸らした。

話せない。話せるわけがない。二人はあいつらのことを純粹に慕っているのに、その想像を壊せない。

「そんなに私たちは頼りない？」

「違うんだ、本当に、違って……」

何が違う。間違ひなんか起きてないだろ。

私の嫌な声が脳内に響き渡る。

「紗夜たちが、頼りないんじゃないんだ……」

ああそうだ。紗夜と日菜みたいな秀才と天才が頼りにならないわけがないよなあ。

「じゃあどうして言ってくれないの？」

お前本当は最初から自覚してるんだろ。

「おねーちゃん」

お前の弱さが人を切り捨てられないことだって。

「どうして私たちをあの日突き放そうと思ったの」

人をいくら遠ざけてもその繋がりは切りたいくないってこともわかってんだろ。

「そ、それは……………」

——そのせいで自分以上に周りを傷つけていることに気づいていない。

「本当のことだけ教えて」

——下手くそなんだよその立ち回りが。

「本当に……………なんでも……………」

——もう言っちゃまえ。その方が楽だ。

「嘘なんかつかないで」

——中途半端な気持ちなんて何の役にも立たねえよ。

「……………わかってんだよそんなことは」

——ならハッキリしろ！

「姉さん！」

——自分の意思くらいちゃんと持ちやがれ!!

「うるせえ！いい加減にしろ!!」

「ッ!？」

——おお？やる気か？

「なんなんださつきから適当なことばっか言いやがって!!」

——結構核心ついてたろ？

「ふざけんな！言えないものは言えないだろ！」

——さつきとぶちまけちまえばいいのによお。

「そんな簡単な話じゃないだろ！将来に関わることなんだぞ!!」

——だからって妹たちの将来のために自分の将来潰すのは間違ってるだろ。

「関係ない！私はどうなったって構わない！」

——そんなこと言って沙綾や有咲、他のやつらがこれからも隣にいてくれるとは限らないだろ。

「わかってるってそんなこと！」

——お前がずっと大切にしたいものはなんだ。大切なもののためにお前がすべきことは何かよく考えろよ。

「……わ、たしが……するべき……」

「おねーちゃん!!」

「っ!？」

大声で呼ばれてハッと視線を上げた。

いつの間にかベランダに続く大窓まで後退していた。両耳を塞いでいた手を日菜は握りしめる。肩で息をして汗が地面に落ちた。

「あたしは何かあってもおねーちゃんの味方だよ！何かあっても受け止めるし軽蔑なんてしないから！だから」

「……………もう、今日は出て行って」

「お、おねーちゃん……………？」

「今、全然冷静な思考じゃないから話したって何の意味もない」

今は何をしてもダメな気がした。ゆっくり一人でしっかり冷静に何が正しいのかを自分なりに考えないといけない。じやなきや向き合う理由も価値もないから。

「……………頼むよ、もう出て行ってくれ」

「……………日菜行きましょう」

「で、でもおねーちゃんが」

「姉さんは一人になりたいって言ったのよ。邪魔したらダメよ」

紗夜が日菜の腕を引く。私の手を握っていた日菜は心配そうな表情のまま手を離れた。重力通り私の手が落ちていく。その手をじつと見つめた。

人の温もりが消えていく。かき集めてもどんどん逃げていく。嫌だった。まるで私の前からみんながいなくなるみたいに感じた。両手を握りしめる。

そっと視線を上げて二人を見る。

日菜を先に部屋から出した紗夜が心配そうな顔でこちらを見ていた。

やめろそんな目しないでくれ。私は心配されたくないんだよ。

扉が閉じた後、二人がいなくなったことを確認して私はその場に崩れ落ちた。

知りたいこと。

この頃私は何が目的だろうと思う。

最初は紗夜を守りたいという明確な目的があつた。大切な妹を守ってあげたいってただそれだけの意思で行動していた。中学の頃の私がどんなことを思つてそうしたかちやんとは覚えていないが確かそんな動機だつたと思う。

けど次第に大切なものが増えていった。

最初の大切は有咲だつた。丁度私が虐待される一ヶ月ほど前に偶然見つけた流星堂で出逢つた。初めこそ人見知りを発揮していた有咲だつたけど話してみれば信じられないほど馬があつて。

私のことを先輩と呼んで、ギターの腕前を褒めてくれて、いろんな話を聞いてくれて、なによりも慕つてくれたことが嬉しかった。

次の大切は沙綾。出逢つたのは虐待されてから。キツイオシオキをされた次の日にやまぶきベーカーリーの裏手で倒れていたところを発見されたことがきっかけだつた。救急車を呼ぼうとしたその手を掴んで掠れた声で拒否するように首を振って困らせて。

怪我の手当てをしてもらう代わりにあつたことを全て曝け出した。その後から学校で話しかけてくれるようになった。

他にも大切だと言える人たちが増えていった。猫耳やりみちちゃんやおたえのポピパメンバー。あこちゃんやりんりん、松原。

この一年だけで関わりを持ちすぎた。欲張りの私は欲しいものが手に入ってさらに欲しがつた。

それが最大の間違いだったんだ。

増えすぎた幸せは持ちきれないと知らなかっただけ。元々容量のほとんどない私の内部メモリー。溢れたらどれだけ増やしたって溢れるだけなのに私はそれを知らなかった。

一人じゃ抱えきれないほど増えた大切と幸せが私を押し潰す。

どんどんそれらを手に入れるたびに保存しようとしたからそのバチが当たった。

バケモノからの制裁。

あいつらは私の幸せを奪うのが好きだ。私が苦しんでる姿を見るのが好きだ。私を傷つけることが好きだ。

いつだって怒りの表情をしているけど内心はきつと大笑いしている。

だってそうだろう？

人間は楽しくもないことをずっと続けていられない生き物なんだから。そうじゃなきゃ私だって何も納得できないよ。

私の幸せを奪うのが楽しい。私の苦しむ姿を見るのが楽しい。私を傷つけることが楽しい。

だからポピパのメンバーに手を出そうとした。人質にでも取ればさらに楽しく私を傷つけられると思ってたんだそうに決まってる。

人の幸せを奪うことはそれほど楽しいことなのか私にはわからない。けどそれが楽しさに繋がるかは人それぞれだし気にしたことはない。

私はただの人間サンドバック。その扱いだからストレス発散の道具に違いない。

ねえ親って何。親って何をしてくれるものなの。私のはあんなにだけ他の家庭は？

例えば沙綾のところは優しくて良い人たちだった。有咲のところもおばあちゃんとか会ったことはないが親切だった。

なあ、あれは異常？それともこつちがイジヨウ？

ねえ、幸せってたくさん持ってたらだめなの？たくさん持つてることはアクなの？

ほら、誰でもいいから答えてよ。オカシイのはどつち？

私は、ナニヲシンジレバイイノ？

◇◇◇

放課後、HRが終わってすぐ私は一年生のフロアに出向いていた。理由はただ一つ。

「市ヶ谷さん」

「さ、紗夜先輩……!?!」

教室を覗けば帰る準備をしていた彼女を呼んだ。私の姿を見て驚いた彼女だったがすぐに駆け寄ってきた。

「市ヶ谷さん、もうHRは終わってますか？」

「はい。終わってますけど……どうかしましたか」

「話があって来ました。お時間よろしいですか」

首を縦に振る彼女。おそろおそろというのか緊張しているというのか。そんな市ヶ谷さんに私は首を傾げていた。

「……あの、紗夜先輩。話って何ですか？」

「今からする話には山吹さんもいてほしいのだけど同じクラスではないの？」

「沙綾は隣のクラスですけど……」

「そう。なら行きましょう」

カバンを持った市ヶ谷さんと共に隣のクラスに向かう。

そこには山吹さんの他にもPoppin Partyのメンバーが勢揃いしていた。

「あれ？有咲と紗夜先輩？」

「珍しい組み合わせだね」

仲良く話していたはずの戸山さんが私に気づいた途端そう言った。花園さんが私の方を見て続ける。牛込さんと山吹さんもそれを聞いて振り返っていた。

「……有咲、何仕出かしたの？」

「何もしてねえよ！」

山吹さんが眉をひそめながら言う。

あまり話したことがあるわけではないが市ヶ谷さんはいつも丁寧な話し方をしているからこの口調は珍しいと思った。ハツとしているのを見る限り人には見せない一面なのだろう。

私のせいでその面を引き出してしまったし、誤解されているようなので助け舟を出すことにする。

「別に市ヶ谷さんは何か規則を破ったから私というわけではないので



「ご安心を」

「そ、そうなんです。よかったです……」

「私、有咲のことだから出席日数の関係で呼び出されても不思議じゃないと思ってた」

「もしかして有咲、留年の危機？」

「んなわけあるか！香澄が引つ張ってくからちやんと学校行ってるだろー！」

「なんで仕方なくみたいなの言い方なの？」

何故だろう。みんな市ヶ谷さんに対する発言が酷くないだろうか。反応が初犯に言う感じではない。私は市ヶ谷さんを問題児だと思っただことはなかったが今日で少し変わりそうだ。

「つーか紗夜先輩がいるのは私と、あと沙綾に話があるからだよ」

「え？私!？」

「有咲に続いて沙綾まで留年の危機？」

「おたえは留年から離れろ！」

軽快でリズムカルにツツコミを入れていく市ヶ谷さんに笑いそうになりながら私は五人のやり取りを見ていた。あいかわらずいつ見ても楽しそうで元気をもらえる。バンドもこの五人だから成り立っているのだろう。

「皆さんこれから練習ですか？」

「はい！今日も蔵で練習です！」

「蔵……？」

聞き慣れない言葉に首を傾げる。その疑問を私に説明してくれたのは市ヶ谷さんだった。

なんでも市ヶ谷さんの家の敷地内には蔵と呼ばれる建物があるらしく防音のため P o p p i n g P a r t y の練習はいつもそこでやっ

ていると言う。近くに無料で練習できる場所があるだなんて羨ましい限りだ。

「すみません。練習があるのはわかってますが少し市ヶ谷さんと山吹さんをお借りします。長い時間は取らせませんから」

「わかりました。有咲、沙綾、頑張ってね！」

戸山さんたちと別れた私は二人を引き連れて生徒会室の隣にある会議室へと入った。

二人を先に入れて後ろ手に鍵を掛ける。不思議そうな二つの目が私を見つめる。

「それで紗夜先輩。私たちを呼んだ理由は何ですか」

「……多分、お察ししているかと思っっていますが……」

私は二人の目を見てそう言う。

そして勢い良く頭を下げた。

「え、あの、紗夜先輩!?!」

「お願いします。私に力を貸してください」

「ちよ、顔上げてください！」

焦った声が二つ。それに顔を上げた。困惑した表情だった。

「急にどうしたんですか。何かあったんですか」

「頭下げなくても私たちにできることがあるなら協力しますから」

心配そうな表情。私がかんな姿を見せたことがないからだろうか。けどこれは私でも日菜でも解決できなかったこと。多分姉さんの

隣にいなかったから、だから隣にいた秘密を知っている彼女たちの協力が必要だと思った。

「……先に言っておきます。私は文化祭のすぐ後に市ヶ谷さんと山吹さんが話しているところを偶然聞きました」

「っ!？」

「すみません。聞くつもりはなかったんです」

狼狽が二つ。やはり聞かれたくない話だったらしい。

「ま、待ってください。どこまで、聞いたんですか……?」

「姉さんのあの態度が演技ということは聞きました」

私の発言に彼女たちの肩がピクツと震えた。これが多分、彼女たちにとって一番聞かれたくない話だったのだろう。それを察しつつ私は問いかけた。

「私は、知りたいんです。私と日菜の知らない姉さんのことを。市ヶ谷さんと山吹さんが知っている姉さんのことを。教えてくれませんか」

最初はどうか迷っていた彼女たちだがしばらくして口を開いた。

それでわかったことは彼女たちが本気で姉さんを想っているという事。

本気で姉さんを変えようと思っているということだった。

知らない私。

「姉さんのことを教えてください」

そう紗夜先輩が私たちに言った時、私は腹が立って仕方なかった。

「私たちが教えることは、簡単です。けどそれだと多分紗夜先輩たちは納得できないと思います。正直私も初めて聞いた時は信じられませんでしたから」

朝日先輩から直接聞いた方がいいですよ。

そう続けたら紗夜先輩は訳がわからないという顔をしていた。そんな紗夜先輩の横をすり抜けて沙綾の手を引いて生徒会室から出て。

「待つてください」

「紗夜先輩も多分日菜先輩も。朝日先輩のこと、見てなさすぎなんです。ちゃんと見てたらこうはなってないんですよ」

私たちを呼び止める声も私が一蹴する。

紗夜先輩はそれ以上何も言わなかった。きっと、朝日先輩と向き合って来なかったことを改めて認識したからだ。それ以外ありえない。

「……有咲って、朝日先輩のことになると相手が誰であっても平気で酷いこと言うよね」

正門に辿り着いた所でそう言われた。

「そんなことねえよ。気のせいだ」

手を離して蔵に向けて歩き出す。

「すごいブーメラン発言だったけど？」

「……わかってるよそんなこと」

私がちやんと見てたら朝日先輩はああはならなかったかもしれない。

いつだってそう思うんだ。紗夜先輩に言った言葉が自分にも響いている。

「あーりさ」

後ろを歩いていたら沙綾が隣に並ぶ。

心配そうに垂れ下がる眉が気に食わなかった。

「有咲は、バンドのことで朝日先輩のことになるとすつごく真面目だよね」

「……なんだよ急に」

「私は何かに必死になってる有咲好きだよ」

「……………うぜえ」

そっぽ向く私に沙綾はクスクス笑った。

こんな時にからかうのはやめてほしい。

「絶対、また朝日先輩と笑い合おうね」

急に真面目なこと言うのもやめてほしかった。

◇?◇?◇?

誰かと話している時に第三者のように客観的に物事を見られる自分がいることはなんとなく気づいていた。

あこちゃんやりんりと話している時。

松原や猫耳たちと話している時。

有咲や沙綾と話している時。

紗夜や日菜と話している時。

全て話していることとは違うことを思っていた。

『朝日さんかっこいいです!』

「本当?ありがとうございます」

——お前はかっこよくなんかない。

『……頼りに、なります……』

「そう言ってもらえると嬉しいな」

——頼りにだつてなりやしない。

『朝日さん、これ教えてほしいんだけど……』

「はあ。仕方ないな」

——どうせお前に期待なんてしていない。

『朝日先輩!ギター教えてください!』

「必要なのは往復練習だぞ」

——みんなただお前を利用してただけさ。

『練習、一緒にしませんか？』

「少しだけな」

——ご機嫌取りもそのためだよ。

『チョコ、食べます？』

「ありがとう。もううよ」

——仲良くすることに他意はない。

『好きです朝日先輩』

『愛してます世界中の誰よりも』

「待ってて。ちゃんと答えを出すから」

——こんなお前を好きになるはずないだろ。お前は弱い自分が嫌いなのにその自分を好きと言うヤツラを好きにはなれないさ。好きって言葉は偽りなんだよ。

『姉さんの抱えているものは何。私たちには言えないようなことなの？』

『あたしは何があってもおねーちゃんの味方だよ！』

「ありがとう。もう少しだけ待ってて」

——本当は嫌いなくせに心配そうなフリなんかするなよ。私に味方なんていない。適当なこと言うな。ワタシはこれまでもこれからもずっと独りなんだから。惑わせるのはやめてくれ。

「違うそうじゃない！あいつらは誰一人そんなこと思ってない！」

——どうしてそうだと言いきれる。お前には人の心が読める

のか？

「読めなくたって一緒に過ごしてたらわかるさ！」

——本当に？彼女たちがお前のいない所で何か言っている可能性はゼロパーセントで間違いないんだな？

「っ……」

——おいおい黙るなよ。ワタシはお前に確認しているだけじゃないか。お前だってその自信があるからそう言ったんだろ？

「うるやろ」

——また逆ギレする気か？お前の悪いところだぞ。

「知ってるよ。何が悪い」

——お前散々ワタシにキレてるけどさ、ちゃんと自覚してんだろ？

「やめろ」

——あいつらはみんな、多分お前のことを信頼してくれてい

る。けどお前は、心の奥ではあいつらを信用も信頼もしていないだろ。

「ちがう」

——信用と信頼をしているように見せて本当は誰もお前的心中には住んじやいない。



有咲も沙綾も紗夜も日菜も。お前は誰にも期待していないし信じないようにしている。

理由は簡単だ。裏切られたくないんだよ。

両親みたいに信じていた人たちに裏切られたくないから、だから最初から誰も信じようとしなかった。信じていた人たちも遠ざけた。

お前は弱いうえに卑怯なヤツだよ。

あいつらはお前のことに逃げずに向き合おうとしてくれているのにお前はいつだって自分のことから逃げている。

この案件だって、本来ならもつと前に解決していたはずだ。もつと早くに紗夜や日菜との仲を戻せていたしわざわざ不良児を演じる必要もなかった。

全部お前が悪い。お前が

「わかってんだよ!!……わかってるんだ。本当は全部無意味なことだって、変わりやしないことだって」

「………ワタシは嫌いだよ。お前のそういうところ、大嫌いだ。………」

「バカな自覚はあるさ。けど……仕方ないだろ」

「………私には、考えを改める気はない。黙っててくれ」

「………私には、考えを改める気はない。黙っててくれ」

「………私には、考えを改める気はない。黙っててくれ」

「………私には、考えを改める気はない。黙っててくれ」

「できるもんならやってみやがれ」

お前がどう足掻いていくか楽しみだよ。

スマートフォンに送られたメッセージ。  
それに目を通す。

朝日先輩。

先輩は一人じゃないです。  
だから一人で悩まないで。  
一人で強がらないで。

朝日先輩。

悩んでいることを抱え込まないでください。  
言ってくれないと、わからないです。  
私は貴方の本心が知りたい。

沙綾と有咲から。他にも色々な人からの心配そうなメッセージ。  
胸が痛い。

だけどそんなの送られても無理だよ。  
言えない言いたくない。強がってない強がろうともしない。問題なんて抱えてない抱えた覚えもない。本心を隠したつもりもその気もない。

私は嘘つきじゃないよ嘘ついたことないでしょ。

ねえ。

優しくなくても優しいと。

かっこよくななくてもかっこいいと。

頼りにならなくても頼りになると。

大切だと思っていなくても大切だと。

好きでなくても好きだと。

貴方は、そう言ってくれますか？

笑えない冗談。

今日はバンド練習がなく、私は店の手伝いをしていた。

昼のピークを過ぎた雨の日。天気の良いか店内には私以外誰もいない。父さんに頼まれたパンを陳列しているとチリンと扉の開く音がした。

振り返れば珍しいお客さん。笑顔で慣れた挨拶をする。

「いらつしやいませ燐子先輩」

「……山吹さん、こんにちは……」

Roseliaのキーボード担当の白金燐子先輩。大人しくてゆっくり、たどたどしい話し方が特徴の人だ。

まだあまり関わったことはないが優しい先輩だということは知っていた。

手には傘が握られている。

「燐子先輩。傘立てはそこにあるので使ってください」

「は、はい……ありがとうございます……」

私の言葉を聞いて燐子先輩は慌てて傘を傘立てに納めていた。

店内を見て回るのだから邪魔にならないように端による。しかしいつまで経っても動いている気配はなくて、陳列を終えて燐子先輩を見ると店内をキョロキョロ見ている様子がない。何か戸惑っている感じだった。

「何かお探しですか？」

「……あ、いえ……そういうわけでは……」

他のお客さんと同じように話しかければやんわり断られた。

私の知る限り燐子先輩は初来店だろうからどこに何があるとかオススメだとかを聞きたいんだと思っていたけど違うみたい。

トレイを持った燐子先輩はメロンパンとチョココロネを取ってレジに向かう。

一つ一つ袋分けをしてお会計をする。お会計の時に話しかけられた。

「…………あの…………山吹さん…………」

「はーっ」

「…………朝日さんが、どこにいるか…………ご存知ですか…………？」

袋詰めをしていた手が止まる。

視線を上げれば燐子先輩は手にしていたサイフに目線を落としていた。

「…………どうしたんですか急に」

「最近…………朝日さんの姿を、見ていなくて…………話したいことが…………あつたんですけど…………メッセージも、返ってこなくて…………」

燐子先輩の言葉に私は何も言えなかった。

話したいこととはなんだろうか。

そもそもどうして燐子先輩が。

同じ学校だけど燐子先輩が朝日先輩と話している所なんて見たことがない。

確か違うクラスだったはずだし接点もないだろう。

なのに、そのはずなのに、なんで。

「…………家じゃないんですか」

「…………氷川さんに…………いないと、言われて…………山吹さんなら、

知っているかと……」

「どうして……」

「……校内で話しているのを……よく見ます、から……」

多分今の朝日先輩の精神的に一人でいたいと思うはず。

それもカラオケみたいに騒がしい所ではなく静かでゆっくりできる所に。

案として出せるのは仕事場かネットカフェくらい。

どっちにいたっておかしくはない。けどもしネットカフェにいたらのネットカフェにいるか分からないから完全に積みだ。

これは先に調べてもらうしかないかな。

スマホを取り出して私は有咲にメッセージを送った。すぐについた既読の文字。スタンプが返って来たのを見て袋詰めを再開する。

「……ちなみに、話したいことってなんですか」

サイフから出された小銭を受け取る。ちょうどだった。

「……知りたいんです………朝日さんの、ことが……」

「朝日先輩のことを知りたい？」

「はい……あの日の、朝日さんは……おかしかった、から……」

全然話が見えなかった。燐子先輩は一体何の話をしているのだろうか。

「何かあったんですか？」

「……山吹さんは……朝日さんに、拒絶されたこと……ありますか？」

燐子先輩の言っていることが最初分からなかった。徐々に理解して、最悪なイメージが湧いてくる。

「燐子先輩、もしかして……」

「私じゃ……ないです」

と言うことは他の誰かが拒絶されたってこと？

「なら。誰、ですか……」

「……あこちゃん、です」

「ッ!？」

燐子先輩は躊躇い目を伏せながら言った。それに私は目を見開く。  
なにそれ。朝日先輩があこを拒絶した？嘘でしょ、完全に笑えない  
冗談だよ。

「待って、ください！それって一体いつの話ですか!？」

「……月曜日……です」

それって私たちを突き放した次の日ってこと？

嘘でしょタイミング悪すぎ。

朝日先輩は自分のせいで私たちに危害を加えられそうになったことと自分の最大の秘密が最悪の形でバレたことを後悔した。だからこれから先、私たちに危害を加えられないように突き放した。私だつてそのことを理解しているつもりだった。

けどまさか他の人たちまで突き放してるだなんて。

いや、心優しい朝日先輩ならそうして当然かもしれない。けどあこが朝日先輩と知り合いとは知らなかった。

朝日先輩は良い人なんだ。あこも多分その部分しか見ていなかったはず。信頼していただろう。

なのに突き放された。理由もわからず、拒絶された。優しかった先輩に突然そんなことされたら誰だって悲しくなる。純真無垢なあこならダメージは私たちの比じゃない。

「あ、あこは大丈夫なんですか？」

「…………Roseliaの、練習には…………ちゃんと来てます…………  
けど……………」

「けど？」

「……………プライベートで、会うことは…………減り、ました……………」

隣子先輩が朝日先輩とどんな関係だったかは知らない。

けど悲しげなその表情はきつとあこだけでなく朝日先輩へも向けられていた。

「…………正直、今でも…………信じられないんです。…………朝日さんは…………あこちゃんのこと…………妹みたいに、可愛がっていました。…………あこちゃんも、本当の姉のように…………甘えていました。…………一緒にいる時は…………とても楽しそうでした。…………だから…………シヨックでした……………」

朝日先輩、突き放すのは私たちだけでよかったじゃないですか。

私はただ話を聞くことしかできなかつた。

「私…………初めて見ました……………朝日さんが、あこちゃんに…………暴言を、吐くのを。…………衝撃、でした。…………あこちゃん、泣いていたんです……………冗談だって…………言っただけで、泣いて、泣いて、泣いて……………冗談だっただけで……………」

そんなの当たり前前だ。私たちは事情を知っているからまだいい。けど隣子先輩やあこは違うのに。なんだかんだ離れられて一番悲しむのは朝日先輩のくせに。どうして。バカ。

「…………朝日さんとは…………まだ短い期間しか、一緒に過ごさせてませ



ん。………それでも私は………朝日さんが、酷いことを………  
言ったのには、理由があると………思っています」

私の目を見て燐子先輩はそう言った。その目は完全に覚悟が決まっ  
まっつていて、逃げ出したくなる気持ちを必死に抑える。

「………私は、朝日さんと………また笑い合いたい。………あの楽し  
かった時間を………嘘だとは、言わせたくない。………認めたくな  
い。………そのために………本当のことを、知りたいんです………  
！」

朝日さんは、どこにいますか？

力強い言葉に私は何も言えなくなる。言おうにも口の中が渴いて  
気持ち悪かった。

どうしてみんなこうなのか。どうしてみんなそんな風に行動でき  
る。私はアイデアが思いつかないとか有咲や紗夜先輩たちが解決  
してくれるんじゃないかとか他人行儀になってしまっているのにと  
うして。

朝日先輩のことは好きだ。この想いが揺らいだことは一度もない。  
本気で今の状況から救い出したいとも思っている。

けどそのために行動できない。先輩の計画の邪魔をしているん  
じゃないのかとお門違いなことばかり考えて、本当は怖いだけ。蔵で  
朝日先輩が暴力を振るわれているのを見て、あんな風に自分が傷つき  
たくないと思ってしまうた。

何度も蔵での出来事がフラッシュバックした。朝日先輩の今じや  
すっかり見慣れている傷がこれでもかと言うくらいフラッシュバッ  
クした。ただ臆病な感情だけが私を埋め尽くした。

結局大切なのは自分の次に先輩なのだと思いき知らされる。

大切なもののために行動できる性格だと思っていた過去の自分を  
殴りたかった。

私にあるのは助けたいという意味だけ。けどそれだけあったって

何の意味もないとわかっているのに。どうして私はそれを変えられない。どうして私はこんなにも弱いのだろう。

所詮口だけの女。そんな何もできず何も守れない私が、

嫌いで

嫌いで

大嫌いで

勇敢な人たちに、嫉妬する。

知りません。

それが無難な解答。そう言えばこれ以上燐子先輩が私の発言で真実に近づくことはない。そうすれば朝日先輩のことを知られずに済む。そうすればこれ以上傷つきやしないんだ。

だから私はゆっくりその言葉を口に――。

その時、独特な着信音が店内に響き渡った。

二人してその音の正体である私のスマホに目を向ける。ディスプレイには市ヶ谷有咲の表記。

仕事の時はマナーモードにしているのだが今日はし忘れていたらしかった。

「び、びびっくりした……」

「……わ、私も、です……」

電話を取ろうとしない私に燐子先輩は「出ないんですか？」と首を傾げた。

さすがに店番中だからと言ったが「何か大切な連絡かもしれません

よ」と言われたらそんな気がしてしまう。そもそも今日は店番がある  
と有咲は知っているはずなのに電話を掛けてくると言うことは急ぎ  
の用かもしれない。それに有咲なら要件も手短かに話してくれるだろ  
う。燐子先輩以外のお客さんもないから早く動く心臓のまま断り  
を入れて電話に出た。

「もしもし有咲? どうし――」

『さーや、助けて!』

「え、香澄?」

電話の相手は有咲ではなく香澄だった。珍しく小声なうえ切羽詰  
まった声から聞こえてきたSOSに驚く。

「どうしたの香澄! っていうかなんで有咲のスマホから?」

『今朝日先輩のお母さんが蔵に押しかけて来てるの! 蔵の中で有咲と  
何か話してるみたいなんだけど何か雰囲気がおかしいって言うか』

『あら香澄ちゃん。コソコソしてるけど、誰かと電話中?』

『ひっ!』

楽しい声と怯えた声。息が止まりそうだった。

『誰と通話しているの? スマホ見せて』

『か、返して!』

『沙綾ちゃんって子と話していたのね。もしかして前ここにいた子か  
しら』

『さっきまで有咲と話してたのになんで……』

『有咲ちゃんならそこで大人しくしているわよ』

「待って有咲に何したんですか」

自分でも驚くほど低い声が出た。

目の前の燐子先輩の肩が揺れる。

通話の先から小さく笑う声がした。

『何をしたと思う?』

「っ!ふざけないでください!有咲に何かしたら許しませんよ!」

『あら。まるで私が悪人みたいじゃない。私はただ楽しくお話していただけよ』

「……………一体何が目的なんですか」

『ふふっ。ここに来たらわかるんじゃない?』

『沙綾!!絶対蔵に来るんじゃないやねえ!!』

「有咲!」

『あら。オシオキが足りないみたいね』

『ちよまで、何して!』

『有咲!』

『オシオキよ』

「有咲!?有咲!!」

そこで通話は切れた。無慈悲な機械音だけが耳にこだまする。

絶望しそうだった。あの人が朝日先輩いな蔵に一体何の用がある。考えたってわかりやしない。音声だけを頼りにしたって情報不足だ。

ただ最悪の事態になっていることは理解できた。

「や、山吹さん……………?」

「っ!?!」

名前を呼ばれてお店の中に燐子先輩がいることを思い出した。

不安そうな瞳に見つめられる。最悪なやり取りを聞かせてしまった。けど何か言い訳を考えているだけの余裕はない。

「すみません燐子先輩。話はここまでです」

「え、山吹さん……………!?!」

どうにか父さんに店番を代わってもらって私は傘も持たず勢いよく家から飛び出した。

有咲ごめん。今回ばかりは有咲の言うこと聞けないや。

だって私は、有咲を助けたいから。

雨が、強くなった気がした。

いてほしくないのに。

いつもならあつという間の道が今日は長く感じた。手ぶらのはずなのに普段の練習以上に上がる息。ぬかるみに足を取られて転びそうになる。

雨に濡れて重くなつた服。くつつく前髪。

視界は暗くて街灯がないと走れなかつただろう。

横を勢いよく通つた車が私に攻撃をしてきた。

汚れても止まらない。

そう言えばさつき燐子先輩に名前を呼ばれた気がした。後で謝らないと。

焦っているわりに私の脳はまだ冷静だつたようだ。

蔵の扉を勢いよく開く。地下室の入り口を躊躇なく開けばすぐさま耳に届いたのは香澄の声だつた。目にしたのは床に尻もちをついている有咲の姿。頬は心なしか赤い。殴られたことはすぐわかつた。

「あら。随分小汚い恰好ね」

「有咲！大丈夫!?!」

「さーや!」

「バカ!.....来るなって、言っただろ.....!」

「無視なんて酷いわね。礼儀のなつていない子だこと」

香澄に支えられた有咲はそう言う。

香澄からの電話がなかつたらきつとここには来ていなかった。有咲のこんな姿を見ることもなかつた。

初めて聞いた香澄からのSOS。切羽詰まつた声はすぐに思い出せる。有咲の声だつて震えてた。それなのに、今強がらないでよ。

「有咲のこと離してください!」

「沙綾！私のことは良いから逃げろ！」

「有咲のこと放っておけないよ！」

「あら。随分仲間思いね。それなら貴方が代わりになる？」  
「ッ!？」

代わり。その言葉を聞いて私の足が動かなくなった。

ここまで来て、ちよっぴりヒーローっぽいセリフを言っても覚悟の決まらない自分の弱さ。ああもう、こんなところで怖がらないですよ。ちゃんと動いて……!！」

「あら。その勇気もないのに必死にここまで来たの？」

凶星だった。けど、それを肯定はしなくなかった。震える拳を強く握りしめる。

「有咲を、離してください」

「嫌よ」

きっぱり断られた。気持ち悪い笑みを浮かべている。鳥肌が立つた。

その目は私から逸らされ代わりに二人を見ていた。二人の表情が強張る。

「私は有咲ちゃんとお話してただけよ？止められる義理はないわ」

「お話って、なら手を出す必要はないじゃないですか！」

「手が滑ったのよ」

わかりやすくして悪意しかない言葉に苛立ちが、募っていく。

ねえおかしいじゃんなんで。有咲が痛めつけられる理由なんて一つもない。私たちはただ朝日先輩と楽しい時間を過ごしていただけなのに。

香澄はバケモノの視線に怯えていた。

「アンタ一体何なんだよ!」

「有咲が何したって言うんですか!」

「恨むなら朝日を恨みなさい。にしても運がないわね。朝日と関わっていないければこうはなっていないなかったのにね」

「朝日先輩は何も悪くないじゃないですか!自分のやっていることを正当化しようとししないでください!」

「事実だけど、まあ、なんだっていいわね」

「っ!香澄!」

バケモノがモーションに入って瞬間、有咲が香澄を片手で突き飛ばした。

「ッ!」

「有咲!」

遠慮なく有咲の手首を踏みつける先輩の母親。

私はやつとので動いた足を動かしてバケモノの手を掴んでやめるように言おうとするも突き飛ばされた。

香澄が私の名前を呼ぶ。バケモノは私のことを薄ら笑いで見下していた。齒の奥がギシツと鳴った。

「あら、突然倒れ込んでどうかしたの?」

「ッ!」

有咲のうめき声があった。さすがに冷静ではいられない。

一発殴ってやりたかった。

香澄に支えられていた手を振り払って立ち上がる。

その時、蔵の入り口が勢い良く開けられた。

階段を駆け下りてきたのは朝日先輩だった。私たちの姿を見て目



を見開く。しかし先輩の母親は表情一つ変えなかった。

「なに、してやがる……!!」

「意外と遅かったわね。もっと早く来ると思っていたわ」

ドスの利いた低い声。朝日先輩は全身ずぶ濡れなうえに肩で息をしていた。

どうしてここにいるのかは分からなかったけど、いてほしくなかった。

「離せよ今すぐ！サンドバッグは私一人で十分だろ！」

「あら。何人いたっていいんじゃないかしら？」

「ふぎけるのも大概にしろよ！」

「ふぎけて言ってるつもりはないわよ？」

怒りを露わにする朝日先輩に対してバケモノの対応は変わらない。グリグリと有咲の手首をわざわざ踏み直すのを見て、朝日先輩の我慢は限界を迎えたようだった。

拳を作った朝日先輩はバケモノに殴り掛かる。しかしバケモノはそれを軽々と避けていた。ケラケラ笑っている姿には狂気しか感じない。

有咲から離れたのを見てすかさず駆け寄る。踏まれた部分が赤くなっていた。

「もう、ここには来るんじゃない……!!」

「どうして？私はただ、話をしに來ただけじゃない。その権利を奪われるのはおかしくない？」

「話がしたいなら手を出すのは間違ってるだろ！大人のくせにそんなこともわからねえのか！」

「もう少し、物分りのいい子だと思っていたんだけど違ったみたいね」「ッ!!」

「朝日先輩！」

朝日先輩のお腹にバケモノの蹴りが突き刺さる。その場に倒れ込みそうな先輩の頭をバケモノは叩いていた。

「私はそんな反抗的な子に育てた覚えはないわよ？」

「私だって、そんな暴力的なやつの子供に生まれた覚えはねえよ！」

「オシオキが足りないみたいね」

「朝日先輩！」

朝日先輩がまた殴られる。そう思ったその時。

誰かのスマホが鳴った。私たちではない、バケモノのスマホだった。

舌打ちをしてディスプレイを見たバケモノはすぐさまスマホを耳に当てた。

外行きの1オクターブ高い声。話の内容的に仕事先からの様だった。

電話に出ている隙に朝日先輩に駆け寄る。バケモノのことを睨んでいた。

「残念だけど今はこれまでね。朝日、今日はとことん可愛がってあげるからちゃんと家に居なさいよ」

「誰がてめえの言うことなんか聞くかよ！」

「ふふっ。なら帰って来なくてもいいわよ？そうしたらどうなるのか、わかっていると思うけど」

バケモノはニタアと気持ち悪い笑みを私たちに向けていく。朝日先輩が怒りに充ちた表情で私の身体を遠ざけた。

「それじゃあまた後でね朝日」

リズムカルな音を立てて階段が踏まれていく。蔵の入り口が閉じた瞬間、朝日先輩の身体が素早く動いた。

蔵の中に置かれていた救急箱を掴んで有咲に駆け寄る。

赤く暗れたその手首。それを驚いた顔で見た朝日先輩はその手を有咲が痛がらないように取った。

「……………ごめん有咲。もっと早く着いてたら」

「朝日先輩のせいじゃないです。私が冷静に対応できずに反抗的な態度を取ったからなので気にしないでください」

「それでも……………私がいなかったら傷つかずに済んだはずなのに」

「ごめんなさい、ごめんなさい……………！」

そう言っつて涙を流す朝日先輩。

いつも大きくて頼りがいのある後ろ姿は今日は小さかった。

いつも何かを見つめている視線が、有咲のために雫を零す。

いつものかつこよさも凛々しさも今は存在しない。

私たちはそんな先輩になんと声をかけていいのかわからなかった。

気にしないでなんてお門違いなこととは言えない。どんな言葉をか

けても先輩は責任を感じるに違いない。下手なことは言えなかった。

どれくらいの時が経っただろう。普段よりも長く感じる時間。そ

のくせ焦る脳内。蔵の中にはただすすり泣く声が響いていた。

限界なんてもうとつくに。

ずっと変わりたくないことがある。  
変えたくない関係がある。  
そう思っているのに、どうして変わってしまうのだろう。  
望んでもいない未来が近づいている。

重たい身体、痛む節々、増えていく傷、増えていく包帯、見せられない肌。全てが嫌だった。  
けど一番嫌いなのは本音で話せない自分。嘘について傷つける。  
そんな最低な自分。

こんな奴にはなりたくなかったはずなのにいつの間にかそんなクズにまで成り下がってしまった。  
妹たちと話すことに恐怖を感じてしまっている自分のことが大嫌いだった。

酷い言葉をぶつけて遠ざけようとして、そのくせ離れられるのを怖がって。  
矛盾した考えがさらに私の心を傷つけていく。  
そんな自分自身を殺してしまいたいと思ったのは今に始まったことじゃない。

「……………ッ！……………っは……………！」

左手首に当てた刃を横に引く。  
痛みと共に流れ出る新鮮な血。やけに嬉しかった。  
何度目かもわからないリストカット。いつからか始めてしまった間違った私を正気に戻す方法。

最初は本気で死にたくて切った。

でも結局怖くて深く切れなかった。それに私を慕ってくれる子たちに申し訳ないと思つてしまった。

紗夜にも日菜にも死んだ姿なんて見せたくないと思つた。

だからやめよう。そう思つたはずなのに。

自分で自分に与える痛みはよかつた。

あいつらからの制裁は夢のように過ぎていく。けどこれはじわじわ感じる痛みで生きている気になれた。流れる赤は私のことを肯定してくれているように感じたから。

そうしたらどんどん誰にも言えない秘密が増えていった。紗夜や日菜だけでなく沙綾や有咲にも言えない秘密が。

痛みに耐えながら消毒をして包帯を巻いていく。

普段から包帯をしていてよかつたと思つた。

傷は残るが仕方のないことだと割り切つていた。問題はあるが心配する必要はない。

どうせこの方法で死ねないのはわかっているから。

◇◇

「朝日先輩！お願いです逃げないでください！」

「関わるなって言つてるだろ！何度言えばわかるんだ！」

もう嫌だ。

「朝日先輩！私たちのこと、頼ってください……！」  
「うるさい！もう何も言わないでくれ！」

嫌いだ。

「私はお前らなんて大っ嫌いだよ！」

こんな自分、知りたくなかった。

逃げたらダメなのにどうしてこうなるんだ。

私はもう嘘なんてつきたくないのに。

ねえ、本当のこと、いつ言えるの。

◇◇◇

家の玄関を開けて一番最初に目に入ったのは仁王立ちしている紗夜だった。その横で日菜が立っている。その目が私を捉えていて面倒な展開になるのがわかった。

「おかえりおねーちゃん」

「おかえりなさい姉さん」

「……………ただいま」

誰かに向かつてただいまと言ったのなんて何日ぶりだろうか。少

しだけ嬉しくなる。

靴を見る限り父さんと母さんは帰って来ていないようだ。数日前のことがあるから質問攻めにあう未来が見えた。だからこそすぐに逃げたかった。

二人の横を過ぎて自分の部屋に向かおうとするも紗夜に腕を掴まれる。

「行かないで」

その声が悲しげに聞こえた。  
つい足を止めてしまう。

「姉さん。私たちは、待ちましたよ。姉さんが冷静になるのを」

「……………なにそれ」

「姉さん。あの日のこと、聞かせてもらえますか。いえ話してください」

「いえるわけない。いっていいはずがない。」

「おねーちゃんのその包帯だって、原因はケンカだけじゃないでしょ」

「……………ケンカだよ」

「だとしても毎日やるわけないよね」

バケモノとの、といったらどうなるんだろう。

「将来に関わることってなんですか。姉さんがどうなってもいいって何」

「……………なんでもないよ」

「それで私たちが納得すると思っっているんですか」

わたしにとってふたりはたいせつだから。

「おねーちゃんは どうしてあたしたちと距離を置こうとするの。昔は仲良かったじゃん」

「……人は、変わるもんでしょ。私は変わった。二人だってそう。無理に仲良くする必要はないだろ」

「姉さん。お願いです。どうして私たちと距離を置いたのか教えてください」

いつだって二人は私の後ろをついてきた。

笑う時も泣く時もいつも一緒に。でもそれは過去のものだと思っていた。

中学生の頃に私が二人を突き放してから、二人の仲も悪くなって、全員別の道を進んでいると思っていた。

けどそれが途中で交わる道に繋がっていたなんて思いもしなかった。

普通だったら絶対に言おうとしないこと。

そのはずなのに。

多分私の精神が弱っていたから。

色んな人に優しくされたから。

側に寄り添おうとしてくれたから。

この悩みを聞いてほしかったから。

もう限界だったのかもしれない。

「……紗夜、日菜、私……わたしは」



「あら。三人揃って何をしているの？」

聞き覚えのある声に背筋が凍った。

おそるおそる振り返れば母親バケモがいた。ニコニコと向けられた笑顔で表情が引き攣ってしまふ。

「……帰って来るの、早かったね。どうしたの？」

どうして今あの人がいる。いつもならまだ仕事をしている時間じゃないか。なんでこんな時に限って。

「今日は早めに上がれることになったのよ。珍しいわね姉妹で揃っているなんて。何かあったの？」

冷や汗が止まらない。目が笑っていないことを悟って、震える足を必死に抑える。

「別になんでもないよ。ただの世間話。ね、そうでしょ」

早くここからいなくなりたかった。

だからこそ同意を求めた。三つ子だから私の意思を読み取ってくれると思った。

けどこんな時だけそう思うなんて都合のいい話だ。

日頃の行い。こういう時、私の意思は汲み取られない。

「あたしはおねーちゃんとお母さんたちの仲が悪くなった原因が知りたかったただだよ」

「っ!？」

「へえ。そうなのね」

言いやがった。言ってはいけない禁断の言葉を。

バケモノの目は笑っていない。これから起こるであろう光景が簡単に想像できてしまう。

自然と身体が二人を守る態勢になっていた。こうなるとやることは一つだけだった。

「姉さん………?」

「おねーちゃん………?」

もう、独裁政治は終わらせる。

「そうだよ母さん。私はずっと二人に話したかったんだ。父さんと母さんが隠したかったことを。」

面倒を見てくれず、理不尽な理由で怒られて、私だけでなく後輩にまで手を出したアンタらのことをね」

「は………」

「え………」

後ろで驚いた声が二つ。目の前には普段と変わらぬ顔。今更知らないなんて言わせない。

私は左腕の包帯を解いていく。痛々しい傷が所々に存在していて自分でも見たくくない。息を?むのが聞こえた。

「忘れたとか知らないとか言わないよね。生憎自分じゃ強く殴れない場所にも傷があつて辛いんだよ」

選べよ。肯定するか否定するか。

どっちでも二人の信頼はガタ落ちだけだな。

「ほ、本当なのお母さん?」

「じゃあ今までの傷も全部お母さんが?」

正確には父さんもだけど、まあそれはいいか。

「信じられない?」

二人に投げかけるように言う。

二人には今の状況がどう映っているのだろうか。

わからないがいい印象は持っていないと思う。

多分頭のいい二人ならどっちが正しいか理解したことだろう。

恨めしそうにしたって、無駄だ。

「……ねえ母さん。紗夜と日菜に嫌われそうになるのって、絶望するでしょ」

その言葉が引き金だった。

「姉さん!!」

「おねーちゃん!!」

殴られた。じゃんけんで言うグーの形で。

身体は右側に流れテーブルの脚に頭をぶつける。左頬がジンジンと痛んだ。

おかしいかもしれないがそんな状態で私の口角は上がっていた。何が楽しいのかわからない。自然にそうになっていた。これだから自分の行動は理解できなかった。

「台無しよ。全部全部!お前のせいだ!!」

「はっ!自業自得だろうが!人のせいにしてんじゃねえよボケ!!」

「親に向かってなんて口を利くのよ!」

「やめてお母さん!」

「落ち着いてよ!」

再度殴られそうになるのを二人が止めてくれる。バケモノが二人を傷つけられないことを知ってか知らずか。おそらく後者だが助かったことに変わりはない。

「……覚えておきなさいよ朝日」

恐ろしい形相で睨まれたって負け惜しみに見えてしまう。

ざまあみろ。自分の行いに後悔してろ。

バケモノは寝室へと戻っていく。

それを見送れば、安心して力が抜けた。

「姉さん！」

床に倒れそうになったところを紗夜に支えられる。日菜はすぐに氷嚢を準備して私の頬に当ててくれた。

「……ありがとう二人共」

思えばお礼を言うのなんていつぶりだ。随分久しぶりな気がする。

紗夜から身体を離して氷嚢片手に立ち上がった。

「姉さん」

「何」

「説明、ちゃんとしてくれますよね」

話さないわけにはいかない。知られた以上、私だけの問題ではなくなっただけだから。

「私の部屋、行こうか。そこで全部話してあげるよ」

二人の心配そうな表情がやけに心に刺さった。

真実を。

「さーて。どこから話そうか」

姉さんはやけに間延びした声でベッドに腰を掛けてそう言った。

自ら部屋に鍵を掛けていたということは逃げるつもりも私たちを逃がすつもりもないと言うこと。真剣な話をするはずなのにどこか気の抜けた姉さんの発言は色々場違いだと思った。

「それより先におねーちゃんの手当てしないと……」

「大丈夫だよ。ただ殴られただけだし。もう慣れたから」

淡々としていた。母親に殴られて頬が赤く腫れているというのに、どうして姉さんはそんなに平然としていられるのだろう。左腕の傷が今までの姉さんの苦勞を物語っている。

「……いつから」

「ん？殴られ始めたの？それなら」

「違うわ。姉さんが演技を始めたのが、よ」

「っ……」

姉さんは驚いて、すぐに表情を歪めた。

「どうやら私が演技のことを知っていたのは想定外だったみたいね。」

「少し前、咲祭が終わってすぐの頃、風紀委員として校内の見回りをしていたら偶然市ヶ谷さんと山吹さんがそんなことを言っていたの。ついでに言うとう姉さんを『助きたい』とも」

「あいつら……」

姉さんは困ったように頭を掻いていた。

「ちよ、ちよっと待って！演技って何？！どういうこと?!」

日菜は困惑している様子だった。ふうーと息を吐く。

ずっとおかしいと思っていた。だけど私も日菜に対しての感情の変化があったからもしかしたら当然の変化だと思っようになった。心の底から優しい姉さんに限ってそんなことありえるはずなのに。

「今まで姉さんが私たちに取っていた嫌な態度は全部嘘だったのよ」

「ええ!?そ、そうだったの!?!」

日菜は目を見開いて姉さんを見つめた。姉さんは「上手く隠せてたつもりだったんだけどなー」と呟く。

「うんそうだよ。私は紗夜と日菜のこと嫌いになったことなんてない。むしろずっと大好きで大切だって思ってる」

久しぶりに聞いた「好き」の言葉に胸の奥が温かくなった。

「だったらどうしてあたしたちに嫌われるようなことばっかりしてたの?」

その問いに、姉さんはすぐには答えなかった。一度考えるような素振りを見せる。

「……………紗夜の質問にまだ答えてなかったよね。」

私が演技をしたのは中二の時だった。きっかけはね、虐待じゃない。紗夜がいたからなんだ」

予想外の発言だった。てっきり私はその時からすでに虐待されて

いてそのことを隠すために私たちを遠ざけたのだと思っていた。  
それなのに。

「おねーちゃんが、きっかけ……?」

「うん」

「わ、私が姉さんに何かしたってこと……?」

「違うよ」

姉さんは力強く否定した。

そしてとんでもない真実を口にする。

「だってあのままだったら紗夜が虐待されてたから」

呼吸が止まる。

姉さんの言ったことを理解できなかった。

「それってどういう……」

「日菜は知らないでしょ。この家の裏側」

「裏側?」

「最初はみんな平等に愛されていた。欲しいものも愛情もみんなに与えられていた。だけどある時両親は重大な真実を知ってしまった。授業を聞くだけでテストは満点、運動神経抜群で色んな部からスカウトされる。一度見ただけでなんでも完璧にこなすことのできる天才がいた。それが日菜だった」

確かに日菜は天才だ。だけどそれがどうやってたら私のせいで姉さんが不良のように変わることに繋がるのかわからない。

日菜だって困った表情をしていた。

「そしたら思うわけだ。『他の子も日菜と同じ才能を持っているかも』ってね」

ああ。気づいてしまった。

「そしてわかったことは才能で日菜と同じレベルはいない。そのうえ努力したって追いつけないやつがいる。それが紗夜だった」

ここからが間違いなく今に繋がる運命の分かれ道。

「私は一度だけ見たことがあった。私と日菜よりテストの点が十点低いつて理由だけで怒られている紗夜の姿を。努力を認めてもらえず悔しさから身体を震わせていた紗夜の姿を。私は紗夜の努力を知っていたからそれが許せなかった。

あいつらに認めさせたかった。だから、自分を落とすことを決めたんだ」

「まさか、そんなことで……?」

「バカらしいと思う? 効果覲面だったよ。

二人は輝いてた。それに紗夜も自分より下がいる感覚は気分良かったでしょ?」

「ちがつ!」

違うとは、言い切れなかった。だって間違っていないから。

日菜の天才性に勝てなくて腹が立って、でもそれよりも下がいることに安心している自分は確かにいた。私は日菜に負けていても姉さんには負けていないってどこか安心していた。

真実だ。全部姉さんの言った通り。

「……………ごめんなさい……………」

「別に怒ってないよ。むしろ私の狙ったことしか起こってないから」

そう言って姉さんは小さく笑った。目に涙が溜まる。



「…………おねーちゃん」

「なに？」

「あたしおねーちゃんのこと好きだよ」

「うん」

「おねーちゃんは？」

「もちろん好きだよ」

「…………さっきの話、全部本当なんだよね」

「うん」

「っ！」

日菜が姉さんに抱きついた。声を上げて泣きじやくる日菜を姉さんは優しく宥める。

「…………姉さん」

「なに？」

「私はずっと姉さんの優しさに甘えてました。多分これからもたくさん甘えます」

「うん」

「それでも、私の姉さんでいてくれますか」

「…………おいで」

広げられた片腕に飛び込んで泣いた。その間ずっと私の頭を優しく撫でてくれて、子供の頃に戻ったみたいですごく懐かしかった。

◇◇◇

「…………落ち着いた？」

「ええ…………」

「うん……」

私から離れた二人の目は赤く腫れていた。まだ少し涙が溜まっている。本当に私の妹たちは涙が似合わない。後で氷持つてきてあげないと。

あ、さっきの氷嚢でいいか。

「姉さん」

「どうしたの紗夜」

「私を助けてくれてありがとう」

「おねーちゃん」

「なあに」

「あたしの心配をしてくれてありがとう。他にもおねーちゃんと仲直りするきっかけをくれてありがとう！」

二人は笑顔で私に感謝を伝える。

心が温かくなって涙が零れてしまいそうだった。

それを堪えて私も笑顔を返す。

「そんなの当たり前じゃん。だって昼日業と夜紗夜を繋げられるのは朝私だけなんだから」

二人は驚いたような顔をして、また抱きついてきた。

さっきと違って二人一緒と言うこともあり支えきれずに背中からベッドに倒れ込む。

なんだかとても懐かしい香りがして自然と涙が零れた。

時、動き出す。

珍しく目覚めのいい朝だった。何かに包まれて温かい。目を開いて一番最初に見たのは日菜のあどけない寝顔だった。幼い頃に見ていたものと何ら変わりのないそれに思わず笑みが零れる。

いつもと違う枕の感触は日菜に腕枕をされているから。視線を下に下ろせば私のお腹には後ろから紗夜の手が回されていた。規則正しい呼吸音がすぐ後ろから聞こえてなんだか嬉しかった。

いつの間にか止まってしまった私たちの時が、また動き出す。

「……………ねえ、さん……………」

「んー？どうしたの」

思いのほか優しい声が出た。けど紗夜は言葉を続ける気配はない。代わりに寝息が耳に届く。寝言だったらしい。

かわいい。やっぱりかわいい。そんな紗夜を頭を撫でようにも後ろにいるせいで撫でられない。手を伸ばしても届かないし動いて起こしてしまったら申し訳ない。だからお腹に回っている左手の上に私の右手を重ねて握りしめた。

「……………あ、れ……………？おねーちゃん……………？」

聞こえた声に視線を上げる。日菜が瞼を薄く開いて私を見ていた。その目に優しく微笑む。

「おはよう日菜」

「ん……………おはよー……………」

「よく寝れた？」

「うん……………ふあ……………」

大きな欠伸をする日菜。それも変わっていなかった。

「……………なんでおねーちゃんがあたしの部屋にいるの……………?」

「勘違いしてるみたいだけどここ私の部屋だからね」

「ふえ……………?」

マヌケな声に笑う。日菜は寝ぼけているのか状況が呑み込めていないみたいだった。

「なんで、おねーちゃんの部屋……………?」

「昨日のこと、覚えてないの?」

「昨日のこと……………」

私の言葉を繰り返す日菜。すぐに目を見開いて身体を起こした。とは言っても私に腕枕をしているから大して起き上がれていないけど。

「思い出した?」

「う、うん!」

ガバツと私に抱きつく。腕枕していた手を頭に回された。空いている片手が私の左手を握る。日菜が嬉しそうに笑った。

「えへへっ……………こういうの、久しぶりだね」

「そうだね」

主に私のせいだけど、とは言わなかった。言ったら日菜に怒られる気がしたから。おねーちゃんのせいじゃないよって悲しそうな目で言われそうだったから。

「昔は私が日菜を抱きしめる側だったのになー。大きくなっちゃって」

「えー？身長はおねーちゃんの方が大きいよ？」

「そうじゃないって」

日菜の発言に苦笑い。うちの妹はこういう話を分かってくれない。器がだよ。まあそんなところもかわいいけど。

その時お腹に回されていた手に力が入った。背中に額を押し付けられる。

「紗夜？ごめん、起こしちゃった？」

「いえ。ただ目が覚めたの」

「そっか。おはよう紗夜」

「おはよう姉さん」

再度手を握り直せば紗夜の手が一度離れた。指を絡められる。俗に言う恋人繋ぎと呼ばれるやつ。恥ずかしがり屋の紗夜がこんなことをするのは珍しい。

「どうしたの紗夜」

「……別に」

「おねーちゃん、あたしがおねーちゃんに抱きついてるのが羨ましかったんでしょー？」

日菜の声に紗夜の身体がピクツと揺れた。凶星みたい。顔を赤く染めているであろう紗夜を想像するとかわいくてついにやけてしまふ。

「そうなんだ。かわいいところあるね紗夜」

「……なによそれ」

不貞腐れた声だった。私たちのからかいに拗ねてしまふところもかわいい。

「……………私だって、たまには甘えたいって思うわよ」

あーもうなにそれかわいすぎ。そのかわいさは世界一だね誰も勝てない。

私は日菜から離れて正面から紗夜を抱きしめた。背中に日菜がくつつく。

今日が幸せだと実感した。

◇◇◇

休日だし出かけようよ。そう言い出したのは日菜だった。

時刻は短針と長針がてっぺんをさしていてみんなして寝すぎたと少し反省。テキパキと準備を進め家から出たのはそれから三十分後のこと。

先に部屋を出て全ての部屋を確認して「誰もいなかった」と言う日菜の言葉を聞いて安心して一階に降りられた。両親がいないところに違和感を覚えるも今は気にしないことにした。

「それで日菜。どこに行くつもりなんだよ」

「ショッピングモールかな。買い物行こうよ！」

「そうね。お昼を済ませるのもショッピングモールのフードコートがいいんじゃないかしら」

と言うわけで私たちはショッピングモールに向けて足を進めた。  
お昼時と言うこともありフードコートは人で溢れかえっていた。  
だが日菜が運よく見つけた四人掛けの席にどうにか座ることができた。

「お昼買ってくるけど二人は何かいい？」

席を見つけてくれた日菜と包帯を巻き直してくれた紗夜へのお礼として代表してお昼を買いに行こうとした私。それについて来ようとしたのは紗夜だった。

「姉さん。私も行くわ」

「いやいいよ。一人で大丈夫。てか二人で行くと日菜が泣くから」

「おねーちゃんはあたしのことなんだと思ってるの!？」

「喜怒哀楽が激しいかわいい妹」

しまった正直に答えすぎた。

日菜が目を輝かせて見えない尻尾を全力で振っている。恥ずかしくなっつてつい目を逸らした。

「おねーちゃん!もう一回!もう一回言って!」

「昼抜きにするぞお前」

私の抵抗は虚しくかわいくおねだりされて買いに行かざるを得なくなった。元々行かないという選択肢はないのだが。

「……………紗夜、日菜。セットメニュー注文したらハッピーセットついてきたんだけどいる?」

「あ、朝日さん!私をハッピーセットのおもちやみたいに扱わないで

！」

「ま、松原さん？」

「花音ちゃん？どうしたの？」

ハンバーガーショップで目的の物を買って席に戻ろうとした私の目に飛び込んできたのは見たことある人影だった。今にも泣き出しそうな表情で私に「助けて」と言ったのはクラスメイトの松原花音。急なことで困惑する私だったがとりあえず話を聞くことにした。

どうやら前に屋上に来ていた黒髪の一年と一緒に買い物に来ていたがそいつとはぐれたらしかった。ショップ内グモール内で迷子とか子供かよと思ったがここがどこかも分からないと言っているのを聞く限りこいつは方向音痴で間違いないのだろう。

とりあえずトレーを机の上に置いて私の隣に松原を座らせた。

「迷子だと。ついさつき拾った」

「拾ったって……」

「ついわけで松原。スマホ出せ。その後輩に電話掛けろ」

「う、うん」

松原は私の言う通りスマホで後輩に電話を掛ける。それを借りて耳に当てた。

『もしもし花音さん？今どこにいるの？』

「松原なら今フードコートにいる」

『え!?だ、誰!?』

「氷川朝日」

『えっ!?ひ、氷川先輩!?な、なんで!?』

「迷子になってるの拾ったんだよ。いいからとりあえずフードコート  
の一番奥の席に來い」

それ以上は聞かずに電話を切った。松原にスマホを返せば苦笑い



していた。紗夜も日菜も似たような表情をしていて眉を顰める。

「……………どうしたお前ら」

「いや、さすがに強引すぎだよ朝日さん……………」

「おねーちゃんってこういう時不器用だよね」

「同意見よ」

「うるせ」

紗夜や日菜、あとは有咲と沙綾相手になら素で話せるけど、今まで冷たくあしらってたやつらに急に口調変えるのなんか変だろ。恥ずかしいだろ。わかれよ。

「おねーちゃん食べていいのー?」

「どうぞ」

「姉さんお金は」

「いいよ私の奢り」

「え?!いいの!?!」

「いいよいいよ。仲直り記念だから」

「そう言っつて姉さんは今日の分は全額払う気なんですよ」

「まあね」

まあ妹たちに金なんて使わせたくないからね。

「……………」

「なんだよ松原」

「いや……………紗夜ちゃんたちには優しいんだなって……………」

「……………はあ?」

不思議そうな表情をしていると思ったらまさかそんな当たり前のことを言い出すとは。

私は呆れた声を漏らした。

「妹に優しくするのなんて当たり前だろ」

「それ花女の人が聞いたら衝撃受けると思うよ」

「なんでだよ」

「今までの朝日さんと紗夜ちゃんのやりとりを見てたらそうなるよ……」

まあ学校でもケンカ腰でしかなかったからな……。さすがに困惑するか。

「けど、仲直りできたんだね。よかった」

ほほ笑む松原。つい目を逸らした。

「ま、おねーちゃんはあたしたちのこと好きだからね！」

「本当によかったね日菜ちゃん」

「つか二人は知り合いだったわけ？初耳なんだけど」

「あたしは天文部だからこころちゃんと知り合いつて」

「私はこころちゃんと同じバンド組んでるから」

「は？バンド？」

松原がバンドを組んでいるなんて話初めて聞いた。確かこころつてあの金髪だろ。あの話通じないやつとバンド組んでいるとかどんな物好きだよ。まあ私に関わろうとするくらいなら相当か。

「松原さん、バンドを組んでいたのね。初めて知ったわ」

「おねーちゃんもそうなの？」

「ええ。ちなみに担当楽器は何？」

「ドラムだよ」

「嘘だろおい」

「ほ、ホントだよ！」

松原がドラムってどうなってんだよ。リズムの要だぞ。大丈夫かよそのバンド。

「今度ライブやる予定だから時間があるなら見に来てよ」

「……まあ、時間があればな」

「……」

「……なんだよ」

「いや、断られると思ってたから意外で……」

「……姉さんって素直じゃないわよね」

「紗夜には言われたくない」

「おねーちゃんが言えくない?」

「うるさいわよ」

結局どつちもどつちだろ。

「ふふっ。仲良しだね」

松原のその声に三人して目を合わせる。こんな時にシンクロするなんて三つ子とは思議なものだ。おかしくて笑う。

結局私たちは離れていたようで昔と何も変わっていなかった。ちよつと長い姉妹喧嘩をしていただけ。仲直りしたらその後ほ。

「当たり前だろ」

「当たり前じゃない」

「当たり前じゃない!」

お互いに笑い合えるんだ。

◇◇◇

花音ちゃんが美咲ちゃんと合流して別れた後、あたしたちはお昼を食べ終わってシヨツピングモール内を回る。

姉妹三人でシヨツピングなんて初めての経験だった。家族で来ることはあつたけど、それも中学生の頃までの話。だからこうやっておねーちゃんたちと並んで歩けることが嬉しかった。

「そういえば日菜。アイドルなのに変装もなしに歩いていいの？」

「んー大丈夫じゃない？ パスパレは最近始動したばかりだしね」

「もしそうだとっても少しくらい変装したらどうなの？」

「もーおねーちゃんたち心配しすぎだって」

なんだかんだ心配してくれるおねーちゃんたちのことがあたしは好き。

向けられていた視線が睨みから優しいものに変わったことが嬉しい。

ただたわいもない会話を隣で聞ける、言える。

見ているのが背中じゃなくて横顔になったのは進歩であり初心で。

永遠にこの時間が続けばいいってあたしは思うんだ。

「紗夜。日菜」

不意におねーちゃんの足が止まった。つられてあたしたちも足を止める。

「……………どうしたの姉さん」

おねーちゃんが不思議そうに問いかける。その表情は曇っていた。あたしも同じような顔になる。

なんで少し悲しそうに俯き気味なの。

おかしいよ。だって今日は楽しい日でしょ？その表情は合っていないじゃん。

そう思っていたらおねーちゃんが顔は上げた。

何かを決意したような、それでいてとても笑顔だった。

「私、紗夜と日菜が妹で本当に良かったよ」

嬉しいこと。

嬉しいことというのは不意に訪れる。

蔵練の日。とは言っても手首が使えない私は練習にほとんど参加していなかった。最初の方は左手だけで弾いていたのだが沙綾を筆頭にみんなに止められた。

今日は全体を見て指示出してよ、なんて。それ一番つまんない。

誰よりも練習して追いつかないといけないのは私なのに。

SPACEのオーディションはもうすぐなのに。

こんなところでつまずいている暇はないのに。

そんな焦りもバレて、大丈夫だよって声を掛けられて。

その笑みが悲し気なことには気づきたくなかった。

そう思いながら、みんなの休憩がてら開いたスマホ。

メッセージを見て勢いよく立ち上がった。

ギターの練習を続けていた香澄とおたえ、お茶を用意してくれたりみ、パンを広げる沙綾の視線が刺さる。それを気にできなかった。

「あ、有咲?..どうかしたの?..」

「.....なあ、どうしよう」

私、今めっちゃ泣きそうなんだけど。

呟いた言葉と共に流れた涙。両手で握ったスマホに雫が落ちていく。みんなが駆け寄ってきたのがわかった。

「有咲!?..何どうしたの!?!」

「これ」

沙綾に背中を擦されながらスマホを渡す。同時に顔を上げて笑った。

それを見て沙綾も香澄もりみもおたえも目を見開く。

ずっと見たかった。私が何よりも望んでいた光景が広がっていた。

「え、待って有咲これって!」

「今、送られて来たんだよ朝日先輩から……!!」

朝日先輩から送られてきたのは一枚の写真だった。

「朝日先輩と、紗夜先輩と日菜先輩と一緒に写真に写ってる……!!」

写真に写っていたのは三人。朝日先輩と紗夜先輩と日菜先輩。それがどういふことかわかるだろうか。

ずっと仲が良いのに、紗夜先輩と日菜先輩のために仲が悪いフリを朝日先輩はしていた。

だから今までの状況ならこんな写真送られてくるはずがない。つまり。

「……よかった……なかなかおり、できたんだっ……」

朝日先輩が悩んでいたことが全てなくなったわけではないだろう。けどきつと隠すという面においての肩の荷は下りたはずだ。一人で抱えていたものが少なくなったのだから喜ぶべきこと。

そして、何よりも、また朝日先輩が笑顔で笑っていることが嬉しくて仕方なかった。

「有咲ちゃん……」

「酷い顔してるよ。ほら、ハンカチ」

「……うるせえ……」

りみの心配そうな声を聞きながらおたえからハンカチを受け取る。顔を上げた時に沙綾と香澄が泣きそうな、安心したような顔をしていたのは見間違いないじゃない。

「泣いてんじゃねえよ……」

「し、仕方ないじゃん！」

「有咲、ブーメランだよ」

「お、おたえちゃん……！」

ハンカチで涙を拭う。分かりきったことを言うおたえを無視してまたスマホに目を向けた。

追加で送られてきたメッセージがあった。もう二分も経っている。

『ありがとう』

たったそれだけだった。何に對してのお礼か全くわからない。写真とミスマッチではないか。それとも誰かに送る予定だったのを間違えたのか。

とりあえず返信を返しておく。

『朝日先輩。明日蔵に来られますか？』

送ったメッセージ。すぐに既読がついた。それなのに返事が返ってこない。

なんでもない普通の質問なのに何か考えることもないはずだ。「空いている」か「空いていない」か。その二択しかない。予定があるなら断りの返信が来てもいいだろう。

どうして何も来ない。

それがただ疑問でしかなかった。



「ありさあ!!」

「ぬあ!なんだよ香澄!急に抱きつく」

「よかった!よかったよお!」

私に抱きついて涙を零す香澄にいつものノリでは何も言えなくなった。

香澄だつて目撃者。私たちと同じ秘密を共有した人間。朝日先輩のことを私たちと同じくらい心配していたのだ。この涙は美しすぎる。

「……ああ。そうだな」

肩に埋められた頭を優しく撫でる。

ふと沙綾を見れば香澄と同じことをりみにしていた。

おたえは一度周りをキョロキョロと見渡しギターを手を取っていた。

そして訳分らない歌詞を歌い出す。

「あつりさとくかつすみとくさあくやはくなつきむしく」

「おいやめろ!」

「お、おたえちゃん!」

いい曲調でなんて歌詞歌ってるんだよ!しかもこの雰囲気ですれ違って、雰囲気ぶち壊しもいいところだぞ!?

「ごめん。雰囲気、和ませようと思って」

「それでその歌詞か!?私たちを励ますような歌詞にしろよ!」

私の発言におたえは首を傾げた。

何がわからないって言うんだよこのド天然。

「別に有咲たち落ち込んでないでしょ？朝日先輩が朝日先輩になって嬉しいんでしょ？なら励ます必要なくない？」

珍しく的確を捉えた言葉に黙ってしまう。

確かにその通りだ。朝日先輩が戻ったんなら泣いてたらダメだよな。朝日先輩に怒られちまう。

「あははっ。おたえ、いい事言うね」

「沙綾に褒められた。ご褒美にうさぎのしっぽパン頂戴」

「はいはい。ちゃんと用意してるよ」

沙綾はいつも通りにおたえにパンを渡す。

なんだか吹っ切れた表情をしている気がしたのは気のせいだろうか。

「ほら香澄も、パン食べよう？」

「……うん。食べる」

まだ元気が足りないように見えるがそのうち元に戻るだろう。

三人は笑顔を向けている。だから私も笑った。

そうしているうちに届いていたメツセージに目を通す。

『わかった、明日ね』

たったそれだけ。そんな十秒で返せるような内容だけ。他にメツセージが返って来る気配はなかった。

忙しいのかな。仲直りしたんだし紗夜先輩や日菜先輩に構っているのか。

写真の場所は明らかに外だ。今は出かけている最中なのだろう。なら邪魔はできない。

だからそれ以上は何も言うことはなかった。それが間違いだったと気づいたのは次の日。

どれだけ待っても朝日先輩が蔵に来ることはなかった。

◇◇

二つの声が部屋に交差する。言い合いでしかないそれを止める者は誰もいない。

罵声が響く。反論として荒げた声。お互いに引けない状況。焦りで身体が熱くなる。

彼女たちはもう家にはいない。だから安心して自分のいた。

腹部に刺さる鉄。倒れれば胸部にまで痛みが走った。

息苦しくて仕方ない。吐血する。意識が遠のいていくのを感じた。

目の前のそいつは怒りの表情を浮かべていて何かを喚いている。理解はできなかつた。

その中に一瞬見えた悲しみに満ちた表情につい手を伸ばしてしまふ。

その手は開かれた目と共に弾かれた。

疑問、溢れる。

「嫌いになったことなんてないよ」

嬉しかった。

「おいで」

温かかった。

「おはよう」

幸せだった。

「ほら撮るぞ」

笑顔になれた。

「行け！」

辛かった。

幸せな時間が長く続かないことをこの日初めて知った。

あたしはただおねーちゃんと。

私はただ姉さんと。

「一緒にいたいだけなのに」

◇◇◇

次の日学校に行つて私が真つ先に向かつたのは二年生の教室だった。朝日先輩のクラスであるA組を覗く。しかしそこに朝日先輩はいなかった。

「あれ有咲ちゃん？二年生の教室でどうしたの？」

「ま、松原先輩。あの、朝日先輩いますか？」

現れたのは朝日先輩と同じクラスの松原先輩だった。文化祭の時の鋭い雰囲気を感じ出して恐縮するがそんな様子はなくおっとりとしている。

「朝日さん？」

松原先輩は首を傾げた後に教室内を見渡した。そしていないみたいだよと返す。私は松原先輩にお礼を言つて早々に二年生のフロアから去つた。

次に先輩がいそうな候補である屋上へと足を進めた。

正直紗夜先輩たちと仲直りしたというのなら学校で不良のような態度を取る必要はない。元の朝日先輩の性格を考えれば孤独よりもみんなでワイワイ騒いでいる方が性に合っている。

容姿や落ち着きは紗夜先輩、けど性格は日菜先輩。それが本来の朝日先輩。

それが見られるのは、やっぱり嬉しい。だからこそ早くそんな朝日先輩を見たかった。

鼻歌が零れる。今日は調子がいいみたいだ。

「朝日先輩ー」

屋上の扉を捻り私はそこにいるであろう人物の名前を呼んだ。

しかし返ってくる声はない。屋上に出ていつもいる場所を見るが誰もいない。

ここじゃないのか。なら旧校舎だろうか。

「あれ、有咲？」

「……なんだよ沙綾か」

「何その反応。酷くない？」

屋上から教室へ移動しようとしたら聞こえてきた声。朝日先輩かと思つて振り返ればそこにいたのは沙綾だった。朝日先輩ではないという事実には悪いがテンションが下がってしまう。

「なんでここにいるんだよ」

「朝日先輩のこと探してて。有咲もそうでしょ？」

「ああ。けどここに朝日先輩はいねえぞ。教室にもいなかったしまだ来てねえんじやねえか？」

「かもね」

そう言う沙綾だが私の言葉に少なからず落ち込んでいた。

「そう言えば有咲。あの後朝日先輩から連絡来たの？」

「いや全然。家にも行ってみようと思つただけどそれはさすがに迷

惑かと思つて……」

「まあ朝日先輩としても両親のこととかあるし家に来てほしくないかもしれないね」

「それは私も思つた。とりあえず今日会えるからいいかなつて」

「……もうそろそろHR始まつちゃうし昼休みにまた朝日先輩の所行こつつか」

「そうだな。HR遅れると面倒だし行くか」

私の声に頷いた沙綾と一緒に屋上を降りていく。

そこには紗夜先輩がいた。今登校してきたのか鞆を持っている。いつもなら朝早くに登校して風紀委員の仕事をしているのに珍しい。

私たちに気づいたのか挨拶をしてくれる。

「市ヶ谷さん、山吹さん、おはようございます」

「おはようございます紗夜先輩」

「おはようございます。この時間に登校してくるなんて珍しいですね」

「今日はやることがあつて。お二人は屋上で何をしていたんですか？」

「朝日先輩のことを探してて……」

朝日先輩との仲を戻したというのなら別に言つてもいいだろう。

そう思つて呟いた言葉。紗夜先輩は「それなら」と返す。

「姉さんでしたら風邪で休みですよ」

「え、そうなんですか？」

「はい。数日前から拗らせていて、今日も看病をしてから来ました」  
「けどそれならどうして連絡がつかないんですか？」

「それは、姉さんが最近スマホを水没させたからです。買い替えに行かないといけないんですけど姉さんが本調子じゃないので行けていなくて……」

最近まで色々なことに気を遣っていた朝日先輩。その疲れが今になって現れたってことだろうか。紗夜先輩の発言的に朝日先輩は寝込んでいるんだろうし、やっぱり家には行かなくて正解だったな。けどいくらスマホが水没していたとしても連絡する手段はいくらでもあったはずなのに。なんか、朝日先輩らしくないと思った。

それに家で寝ているのならあの両親から何かされるんじゃないか、とも。正直そこが一番心配だ。

「……大丈夫です。姉さんのことなら心配しないでください」

私たちの顔を見て紗夜先輩は優しくそう言った。そんなに朝日先輩への心配が態度に出ていたのか。それは紗夜先輩にしかわからない。

「私と日菜がちゃんと見てます。お母さんたちは近づかせませんか」

紗夜先輩の真面目な言葉に私たちは顔を見合わせる。そしてお互いに頷いた。

今の紗夜先輩になら朝日先輩のこと任せられそうだと思った。

「紗夜先輩。朝日先輩のこと頼みますね」

「お願いします」

「はい。もちろんです」

なぜかその瞳には決意が揺れていて、少し疑問が湧いたが気づかないフリをした。



◇◇◇

Roseliaの練習に初めて紗夜が来なかった。いつもなら10分前にはスタジオにいるのに何時間待っても来る気配すらない。電話やメッセージを送っても返答はなくて、さすがに変だと思った。日菜にも同じことをしたけど結果は変わらなくて。心配になったアタシは様子を見に行くことにした。

練習終わりにそれを告げれば友希那たちも行きたいと言出し、4人で紗夜の家を訪れた。

しかしインターフォンを押していくら待っても誰かが出てくる気配はない。おかしいと思った。だってその日は日菜もオフだって言ってたし。家の駐車場には車が止まっていたから親もいるものだと思うた。

「紗夜も日菜もいないのかなー？」

「……何か……あったんでしょうか……？」

「急にどこかへ出かける用事だったのかもしれないわね」

「なら次の練習の時に聞けばいいんじゃないですか？」

仮に友希那の言っていることが正しいとして果たして紗夜が何の連絡もなしに練習を休むだろうか。ただでさえ真面目な性格で、大切なものや譲れないものに対する執着心が強いのに連絡を入れないということがありえるだろうか。性格が正反対の日菜ならもしかしたらありえるかもしれないけど紗夜相手なら十中八九ありえない。

隣子の言った通り何かあったに違いない。けどあの言ったように次の練習に来た時に話してくれるかどうかは微妙だろう。それは多分日菜相手でも同じこと。

まあ連絡が取れないなら今日は諦めるしかないんだけどね。

「あれ？リサちゃん？」

「日菜！」

「友希那ちゃんに隣子ちゃんにあちゃんもこんな所で何してるの？」

アタシたちの後ろからひよつこりと顔を出した日菜に驚き声を上げる。こっちは何度も連絡して連絡が取れなかったことを心配していたというのに当の本人はいつも通り。あつけらかなとした態度に張っていた気が抜けてしまった。とりあえず、会えてよかった。

「日菜。何回も電話したのに全然出てくれないから心配したんだよ？」

「え、そうだったの？スマホの充電なかったから家に置いたままだったんだよね。ごめんね取れなくて」

そういうことらしい。日菜らしい答えに胸を撫で下ろした。

「それでどうしたの？何か用事だった？」

「あ、そうそう。あのさ日菜。紗夜って今どこにいるの？」

ただそう伝えた。それなのに何故か日菜の肩が揺れる。不思議で首を傾げた。

「日菜？」

「あ、いや……うん。隠しても仕方ないよね……」

ごめんねみんな。

下がったトーンで最初にそう謝った日菜。続いた予想外の言葉に絶句する。

「おねーちゃん、しばらくRoseliaの練習休むから」

簡潔で、重みのある言葉。

何事もなく家の中に入ろうとする日菜の腕を咄嗟に掴んだ。

「ま、待って日菜どういいうこと」

日菜は何も言わない。振り返った時に見せた表情は悲しげで身を引くそうになる。

日菜のそんな表情、初めて見た。

「……………今はただ待っててよ。あたしだって……………なんでこうなったのか、知りたい」

「日菜。ねえホントに何があったの。紗夜は無事なんだよね？」

「……………多分、近いうちに知ることになるよ。だから今日は放っておいて」

焦った声ではそれ以上追求できなかった。

数分後、鞆を片手に出てきた日菜はアタシたちに目も向けず横を真っ直ぐ通り過ぎて行った。

きつかけと先輩。

きつかけは一つのニュース報道だった。

「ここで臨時ニュースをお届けします」

毎朝聞き慣れたアナウンサーの声でニュースが読み上げられていく。ばあちゃんや香澄と話をしながらいつも通り聞き流していく。

そのはずだった。

「先日〇〇区にて刺傷事件が発生しました。犯行を行なったのは氷川  
—————。40歳。被害にあったのは人気急上昇中のアイドルバン  
ドグループPastel\*Palettesに所属している氷川日  
菜さんの姉である氷川朝日さんだと言うことが判明しました」

「は……」

自分の耳を疑った。テレビに釘付けになる。

「朝日さんは胸や肩などを包丁で合計六箇所刺され」

なんだよこの放送。

「病院に搬送された今も意識不明の重体だそうです」

だって紗夜先輩は朝日先輩が休んでる理由はただの風邪だって。

「警察の調べによると—————容疑者とその夫である—————は普段

から朝日さんに暴行を加えていたという証拠が見つかり日菜さんや  
姉の紗夜さんに話を伺っているとのことですよ」

「ッー！」

「有咲!？」

香澄の声は無視して何も持たずに家を出た。全力で通学路を駆けていく。

きつかけにしてはあまりにも衝撃的で信じられないことだった。

そしてそんな大切なことを私たちに黙っていた紗夜先輩のことを私は許せなかった。

「紗夜先輩!!」

「市ヶ谷さん?.....っ!」

校舎に入っすぐのところまで風紀委員の仕事をしていた紗夜先輩の胸ぐらを両手で掴んで壁に押え付ける。ドンツと大きな音が辺りに響き渡った。持っていたプリントがドサツと床に散らばる。

見るからに紗夜先輩は痛がっていた。けどそんなこと気にできるほど今の私は優しくなかった。

「.....紗夜先輩。今私がなんで怒ってるのかわかりますか」

いつもより明らかに低い声が出た。学校では三年間イイコのフリしてるつもりだったけどもう無理。朝日先輩のことでこんなに怒れるなんて知らなかった。普段の私がやらないようなことしてる。

紗夜先輩のこと睨みつけてるし返答次第で首を絞めそうだ。

「わからないとか、言わないですよね」

「いち、がやさん。苦しいので離してください」

「もちろんちゃんと答えてくれれば離しますよ」

「.....姉さんのことですよね」

「それで?紗夜先輩は私たちに朝日先輩が学校を休んでる理由、なんて言いましたっけ?」

「.....」

今更バツ悪そうな顔すんなよ。ムカつくだろ。

「どういうつもりなんですか。紗夜先輩は私たちと朝日先輩の仲が良  
いこと知ってますよね？なのにどうしてそんな大切なこと教えてく  
れなかったんですか」

「それは……」

無責任なんだよアンタら家族は。朝日先輩の態度なんて薄っぺら  
なものしか見てないくせに朝日先輩のことをわかった気になって。  
普通に考えて家で起こっていた虐待に姉妹の紗夜先輩たちが気づか  
ないなんておかしなことが起こるはずないんだ。朝日先輩はあんな  
に紗夜先輩たちのことが好きなのに。なんでアンタらは。

「私は朝日先輩が紗夜先輩たちとの仲が戻って嬉しかったんです。あ  
の写真だけで仲の良さが伝わって正直嫉妬した。私じゃ朝日先輩の  
本当の笑顔は引き出せなかったんだって落ち込みました。けど  
朝日先輩の一番大切な人たちが紗夜先輩たちだって知ってたから悔  
しいって気持ちを抑えて仲が戻ったことを祝福したのに。

ほんと、なんで伝えてくれなかったんです？」

「……………」

「いい加減にしろよ！黙だんまりりって、おちよくってんのか!!」

我慢の限界だった。片手を胸ぐらから離してその手を振り上げた。  
私の行動に紗夜先輩は目を開いてすぐに痛みに耐えるためにギョッ  
と目をつぶった。

「ちよっ！有咲!!」

拳を振り下ろそうとした瞬間に邪魔が入った。そいつに腕を掴ま  
れて動けない。

「何してるの！」

「離せよ沙綾」

「いくら朝日先輩のことだとしてもそれはやりすぎだよ！」

「うるせえな。私は一発殴らないと気が済まない！」

「だからダメだつて！」

「殴りたいなら殴ってください」

「は……？」

聞こえてきた予想外の言葉に私は目を丸くした。沙綾も同じような目で紗夜先輩を見ていた。

「私を殴つて、それでその怒りが収まるならいくらでも殴ってもらつて構わないわ」

「紗夜先輩、何言ってるのかわかっていますか」

「ええ。もちろんよ。ちゃんと言葉の意味を理解したうえで言っているわ」

「なんで」

「……そうね。強いて言うなら罪滅ぼしよ。まあ姉さんことに対する私への罪はそんな軽いもので済むとは全く思っていないし姉さんがあんなってしまったのは私にも原因があることだつてわかっている。私のせいだつて思っているからこそ、貴方には。市ヶ谷さんには先に私を殴る権利があると思つているわ。山吹さんも同じよ」

さあどうぞなんて言う紗夜先輩は薄く笑っていた。

「……なんでだよ、なんでアンタは」

そんな所だけ朝日先輩と似てるんだよ。

やめろ。朝日先輩と同じ優しい目で見つめるな。

腕が震えた。その震えは全身に広がって全然止まってくれなかつ

た。

もう殴れなかった。殴る気なんて起きなかった。殴れる状況じゃなかった。

拳から力が抜ける。沙綾に掴まれた腕と紗夜先輩の胸ぐらを掴んでいた腕は重力に逆らうことなく垂れ下がった。

立っていられなくてその場に座り込めば沙綾がしゃがみ込んで背中を撫でてくれた。今になって汗が噴き出す。

「そこ三人！何をしているの！」

慌てて振り返ればそこにいたのは体育と生徒指導を担当している教師だった。ジャージ姿でこちらを仁王立ちで見ている。その周りにはたくさんのオーデイエンス。

大方騒ぎを聞きつけて来たんだろう。やべえなんて言えばいい。急に先輩の胸倉を掴んで暴言を吐いたなんて印象悪すぎる。

「他の生徒から登校してきた市ヶ谷が突然氷川に殴りかかったと聞いたがそれは本当か」

「せ、先生違うんです！有咲はそんなこと」

「山吹お前には聞いていない。市ヶ谷、氷川。事実か？」

多分紗夜先輩は本当のことを言う。だって完全に被害者だから。それに嘘がつけない真面目な人だと言うことも知っている。言わないわけがない。

怒られることを覚悟して私は顔を伏せた。

「いえ。そんな事実ありませんよ」

思わず顔を上げる。私と教師の間に入って私を守るような形になる。

紗夜先輩の表情を見て、やっぱり姉妹なんだと思った。



「確かに傍からは市ヶ谷さんが私に殴りかかったように見えただけです。他意はありませんがあれはよろけたところを私が支えただけです。他意はありません」

「市ヶ谷が大声を出していたように思うんだが？」

「それは体調を崩しているのに無理をしようとしていたので私が叱つた時のものです。市ヶ谷さんも大声を上げていましたがそれほど大声ではありませんでしたよ」

「……氷川。何故お前は市ヶ谷を庇っている」

「庇ってなんかいません。全て事実です。それよりも市ヶ谷さんは体調が悪そうなので保健室に連れて行ってもいいですか？」

なんで、この人は私なんかを。

「市ヶ谷さん、大丈夫ですか？」

「さよ、せんぱい……私……」

「話は後で聞きます。今は私に話を合わせてください」

紗夜先輩は屈んで私の背中に手を回した。沙綾と一緒に保健室についてくるよう頼んだから左側を支えられる。私は病人に見えるような演技をしながら保健室を目指した。

## 今の先輩。

保健室に入ればそこに保健医の先生はいなかった。

誰もいない方がいいと思っていた私は市ヶ谷さんと山吹さんを一番奥のベッドに連れて行く。白いカーテンで周りの空間を遮った。

「……紗夜先輩。聞きたいことがたくさんあります」

「はい。わかっています。姉さんのことなら全部話しますよ」

いずれ市ヶ谷さんたちには話さないといけないとわかっていた。それなのにあの日、市ヶ谷さんたちに会った時に言えなかったのは。

「まず最初に、ごめんなさい。姉さんのことで嘘をついたことを謝らせてください」

「……いえ。私の方こそ突然掴みかかって、しかも殴ろうとしてすみませんでした。私焦ってて冷静じゃなかったです」

「仕方のないことですよ。私だって市ヶ谷さんたちの立場なら市ヶ谷さん同様、キレていましたから」

大切な人が突然入院して、しかもそれを知っていた親族から何も伝えられていなかったら。特に仲の良い人たちにさえ伝えられていなかったら。そんなこと、考えるだけでムカついてしまうだろう。

だが今回ばかりはどうしようもないと思った。それで諦めてほしかったというのはおかしなことだろう。

「紗夜先輩。どうしてこんなことになったんですか？」

「今から話すことで、もしかするとお二人は私たちのしたことを許せないかもしれませんが。そうなったとしても、せめて最後まで話を聞いてください」

そんな前振りで始めたのはあの日の話。  
事実であり、私にとっても最大の分岐点だった忘れられない一日のこと。

◇◇◇

「私、紗夜と日菜が妹で本当に良かったよ」

何を思っただんなことを言ったのか、買い物に出かけている最中の私には見当もつかなかった。日菜が「どうしたの？」と聞いても姉さんは「なんか言いたくなかった」なんて返答しかしなくて。それでもその言葉の嬉しさで、持っていた疑問は吹き飛んでしまった。

「あたしもおねーちゃんたちがおねーちゃんて本当に良かったって思ってるよ！」

「ありがとう日菜」

ニコニコとお互いに笑顔を向けあう二人。しばらくしてその目は私に向けられることになった。

「な、何よ……」

「いや。日菜は言ってくれたんだし紗夜は言ってくれないのかなーって」

「おねーちゃんはあたしたちがおねーちゃんと妹なの嫌だった？」

「うっ……」

そんなわけがない。二人と姉妹で良かったと私だっただけ思っている。

だけど今、ショッピングモールの人がたくさん通る場所で言う必要はあるのかしら。そもそも恥ずかしい。

「ぎーよー」

「おねーちゃん」

「わかった。わかったわよ。言えばいいんでしょ」

はあーと息を吐いて二人に目を向ける。

姉さん、日菜も。そんな期待の目で見ないで。

「……私も、姉さんと日菜が姉妹で良かったわよ」

これでいい？ そう聞こうとした瞬間に聞こえてきたのは歓声だった。

「聞いたか日菜。紗夜が私たちと姉妹で良かったってよ！」

「うん。バツチリ録音したよ！ 聞く？」

「聞く。音源も送ってよ」

「もちろん！」

「ちよつと！ 何してるのよ！」

「まあまあ。落ち着けてって紗夜」

姉さんと日菜がやり始めたことだから落ち着けという姉さんに納得がいかなかった。けどここは公共の場だし大人しくすることにす

る。悪気なさそうに笑う姉さんを見ると今までのことを思い出して怒るに怒れなかった。

そもそも言ったとこ自体は事実なのだから問題はない。ただ私が恥ずかしいだけ。それくらいなら今日くらいは見逃してもいいと思う。そう思ったのはきつと和解できたから。

「……今日だけよ。いいわね」  
「はいはい。了解しましたよー」

笑顔なんて最近じゃレアなものを見せてくれたお礼ということにしておこう。

「ねえおねーちゃん！これ誰に送ればいいと思う？やっぱリリサちーかなー？」

「それと白鷺に送つとけ。絶対驚くから」

「日菜！それ今すぐ消しなさい！」

「ええ！嫌だよ！」

前言撤回。何がなんでも消させないと。あれが今井さんや白鷺さんに広まるなんて考えただけで恥ずかしいわ。

「よし日菜逃げるぞー」

「うん！」

「待ちなさい！」

結局高校生にもなつてシヨッピングモールで追いかけてこが始まった。鬼は私。追いかけてられているというのにやけに嬉しそうな二人を見てついにやけてしまう。

ああ、なんて馬鹿なことしているのかしら。学校では風紀委員なんてやって色んなことを取り締まっているというのに。こんな姿他の人たちに見られたら次からどんな顔して委員の仕事をすればいいのかしら。

けどまあ。今はそんなこと、どうでもいいわね。

この状況を楽しんでいる段階でもう手遅れなもの。

シヨッピングモールを出た所で捕まえた日菜の腕を掴んで動きを止める。それを狙っていたのかニヤリと口角を上げた日菜は、日菜の

腕を掴んでいた私の腕を引いた。倒れそうになったところを抱きとめられて、さらに後ろから覆い被さるように姉さんであろう人物が私を抱きしめる。

めちやくちやだ。外でこんなことしてるなんて恥ずかしい。

けど不思議と振り払おうとは思えなくて、ただ胸の奥が温かくなつた。

この時の私たちは幸せが有限であることをまだ知らなかった。

事件が起こったのは家に着いてからだだった。

薄々おかしいとは思っていた。

家に近づくにつれて姉さんの口数が減っていくのが目に見えて、私たちが話を振っても聞いていないことがあった。

けどそれを今日連れ回したからだと思ひ込んでいた。

それは間違いでしかなかった。

「紗夜、日菜。約束してもらってもいい」

家まで残り数十メートル。もう視界に入っている距離で告げられた言葉。突然のことに日菜と二人困惑する。

「え？約束？」

「どうしたの姉さん」

「大切なことなんだ」

静かに淡々と重なっていく言葉。いつの間にか一歩前を歩いていた姉さんの表情は私たちには見えなくて、けど震えている手をキュツ

と握りしめていることはわかった。

不安が私たちに降りかかる。

今すぐにその手を取ってあげたいのに、その背中が何もするなど言っていて動けなかった。

「今日くらいはさ、私の言ったこと、守ってよ」

「……姉さん。何を企んでいるの」

「何も。私は、何もしないよ。ただ、最後に抵抗くらいはしないとね」

姉さんが何を言っているのか本気でわからなかった。

家はもう数メートル。

姉さんは学校から帰ってきたかのような何気なさで家の扉を開いた。

姉さんが何を考えているのかすぐにわかった。だから納得したくない自分しかいなくて。その瞬間だけは姉さんを否定したかった。

◇?◇?◇?

紗夜先輩に案内されて朝日先輩の元に訪れていた私たちは、今朝日先輩の姿を見て絶句していた。

個室の病室のベッドの上。腕には点滴、包帯。痛々しい傷が巻かれていない部分から見えた。口を覆う酸素マスクと規則正しい音を鳴らす心電図。大人しく寝ている先輩は珍しすぎた。

元気に笑うこともからかうことも愚痴を漏らすこともない。ただ息をしているだけの先輩は知らない先輩だった。

そんな先輩に寄り添って手を取る。前に感じた体温よりも冷たくて泣いてしまいそうだった。

「……姉さんはお母さんたちに刺されてすぐに運ばれたわけじゃないの。救急車が来るのが遅れたから。……いえ。私たちが逃げて、すぐに連絡しなかったから姉さんは今こうなってしまうている。

それに姉さんが虐待されていたという事実を知ったこと自体最近で、ずっと姉さんのことは勘違いしたままでした。

……市ヶ谷さん、山吹さん。私は姉さんに対しても貴方たちに対しても酷いことをしたと思っています。正直、許してなんて簡単には言えないし私が貴方たちの立場だったら許せなくて当然です。一生恨んでくれて構いません。どんな罰でも受け入れるつもりです。もう、腹は括りました」

ちよつと外に出ています。

そう聞こえた後に扉の開閉音が耳に届いた。

私に近づいてくる足音。それに背中を撫でられる。

「……大丈夫だよ有咲。朝日先輩なら絶対戻ってくるからさ」

「……ああ」

私も外出てるね。

そう言つて沙綾も出て行った。

朝日先輩と二人きり。このシチュエーションがこんなに嬉しくないと感じたのは初めてだった。

「……はやく、めざませよ……バカあ……」

両手で握っていた先輩の手に雫が落ちていく。



誰もそれを拭ってはくれなかった。

想い、重なる。

「おねーちゃん、沙綾ちゃん。来てたんだね」

「日菜先輩……………」

「おねーちゃん。今日は特に変わった様子はなかったよ」

「そう。ありがとう日菜」

「いいよいいよ。あたしがおねーちゃんの側にいたくて勝手にやっていることだから」

それに事務所からも活動一時休止って言われてるし。

そう言う日菜先輩の表情はやけに暗かった。あの明るさの欠片もない。

「……………日菜。貴方また寝ていないの？クマができているわよ」

「うん……………おねーちゃんのこと心配すぎて全然寝られなくて」

「気持ちわかるけど寝ないと肝心な時に動けないわよ。体調を崩したら元も子もないんだから」

紗夜先輩はそうやって日菜先輩を叱った。

確かによく見ると日菜先輩の目の下にはクマができていた。

四六時中、私たちが呑気にバンド練習をしていた時もずっとここで朝日先輩のことを見ていたというのだろうか。

だとしたら、純粹にすごいと思った。

「……………中に、有咲ちゃんいるんだよね？」

「ええ」

「……………沙綾ちゃん」

「は、はい」

病室の扉を見ていた日菜先輩の視線が私に向いた。何を言われるのか緊張する。暗い表情の中、無理矢理笑おうとする日菜先輩の姿を見て、胸が苦しくなった。

「このこと、黙っててごめんね。あたしたちも二人がおねーちゃんと仲良しだったこと知ってたのに、冷静じゃなかったから伝えられなかった」

「い、いえそんな……」

「ううん。あたしね、おねーちゃんのこととは人一倍見てるつもりだった。

何が好きで何が嫌いだとか、おねーちゃんが本当は優しくして面倒見がいいとか。そういうことは全部わかってるつもりだった。

けどわかってたのはそれだけ。おねーちゃんの悩みには気づいていなかった。抱えているものに何も気づいていなかった。

いくらおねーちゃんが隠してたからお母さんたちのやってたことに最近まで気づけなかったなんて、おねーちゃんのこと見てなさすぎだよ。妹失格だよ」

「そ、そんなこと……」

「……沙綾ちゃんは優しいね。こんなあたしに怒らず接してくれるんだから。」

そんなところに、おねーちゃんも惹かれてたのかな」

また病室に視線を向けた日菜先輩は少し口角が上がっていた。

「沙綾ちゃん。」

おねーちゃんの側にいてくれてありがとう。

おねーちゃんのこと支えてくれてありがとう。

おねーちゃんのこと好きでいてくれてありがとう。

おねーちゃんのこと怒ってくれてありがとう。

あたしたちが一緒にいられなかった分だけ、おねーちゃんと一緒にいてくれてありがとう。

だから本当にごめんね。あたしたちのせいでこうなつてごめんなさい」

「すみませんでした」

「えーいやあの！顔上げてくださいー！」

日菜先輩はあたしに頭を下げた。続いて紗夜先輩も頭を下げる。その行動に驚いて私は焦った声をあげた。

「けど、もう後悔したくないんだ。だからあたしは何があつても最後までおねーちゃんのこと、支えるよ」

「私も日菜と同じです。今更遅いかもしれませんが。それでも姉さんの隣にいたいと思う気持ちに嘘はありませんから」

「それは……私も同じです。けどその気持ちが一番強いのは有咲だと思います」

そう呟けば紗夜先輩は不思議そうな顔をした。

「山吹さんの想いも負けていないと思います……」

「……多分、有咲は朝日先輩の隣にいらればいいんだと思います。

一緒に過ごせなかった時間以上の時間を過ごせたらそれだけで有咲は満足なんですよ。だからどんな時も隣にいたいって思ってる私よりもきつと有咲の方が朝日先輩の隣にふさわしいんですよ」

「……紗綾ちゃん」

「いいんです。これが一番いいって知ってますから」

私は確かに朝日先輩の隣にいたいって思ってる。

けど一番は朝日先輩が笑っている姿を見たい。朝日先輩の幸せを願っているから。

「私は、朝日先輩が幸せならそれでいい」

その幸せの中に私の存在があればいいと、ただそう思うだけ。私が一番であつたら何よりも幸せだと、ただそう思うだけ。

きつと、他意はないんだよ。

◇◇◇

姉さんのことがニュースになってから多くの人たちがお見舞いに来てくれた。

Poppin' PartyにRoselia、ハロー・ハッピーワールドの松原さん、Pastel\*Palettesの白鷺さん。日替わりで来てくれるその人たちを見て、姉さんがどれだけの人に愛されているかを知った。いつも悪人のような態度をとっていてもその中に垣間見える優しさは色々な人に伝わっていたようだった。

「……紗夜さん」

「宇田川さん？どうかしましたか？」

姉さんの病室の外。面会している宇田川さんと白金さんを待っている。と先に出てきたのは宇田川さんだった。

「あの。聞きたいことがあるんですけど、いいですか？」

「ええ。私に話せることでしたら」

不安げな表情の宇田川さんに視線を向けるも、彼女は姉さんの病室を見ていた。

「……紗夜さんは朝日さんがあこに酷いこと言ったの、覚えてますよね」

「……………ええ。もちろんよ」

あんな衝撃的な出来事、そんな簡単に忘れられるわけがない。

「あの時、朝日さんは言ったんです。『二度と関わるな』って。『鬱陶しい』って。あの時はなんでそうなったのかわからなくて、あこが何か悪いことしちゃったんだと思ってすごく落ち込みました。

けど本当は、今回のことが原因なんですよね？

朝日さんはあこのこと嫌いじゃないですよね」

「……………私は姉さんじゃないので姉さんの考えていることが全部わかるわけではありません。ですが、今回の件はハッキリ言えます」

すれ違う寸前に呟かれた言葉。あの時はどういうわからなかった。けど今ならわかる。

姉さんは遠ざけたんだ。おそらく宇田川さんたちに虐待のことがバレてしまわないように。傷つけて遠ざける以外の選択肢しか思い浮かばなかったのか。それほど余裕がなかったということだろうか。

それは姉さんにしかわからないことだ。

「姉さんは宇田川さんのこと、嫌ってなんかいませんよ。むしろ妹みために可愛がっていると思うわ」

「……………ほ、ほんと、ですか……………?」

「嘘ついてどうするのよ」

姉さんは純粹に尊敬の眼差しで見ている後輩のことを見捨てられない。それどころか面倒見のいい姉さんはなんだかんだ妹のように甘やかしていたことだろう。宇田川さんに忘れ物を届けに来た時に初めてRoseliaの練習に顔を出したときの表情が明らかにそうだった。

「姉さんは宇田川さんのこと、嫌いにならないわよ。だから泣かないで」

「……………うう、紗夜さん！」

私の胸に飛び込む宇田川さん。腕の中で泣く姿はやっぱり年相応で、そつと背中を撫でてあげた。

姉さん。早く目を覚まして。貴方を待っている人はたくさんいるのよ。

さよなら。

目が覚めて一番最初に見たのは真つ白な天井だった。

自分の部屋のものではない。身体を起こしてみるとそこは私の知らない場所。真つ白で先の見えない空間だった。どこを見たって同じ。私以外の人間はいない。いるのは私だけ。あるのはこれまた真つ白なベッドだけ。

正直何がなんだかわからなくてとりあえずベッドから下りてみることにした。

歩いてみると足の裏が地面に触れるたび、そこが水面のように揺れる。普通じゃありえない状況。アメンボにでもなった気分だ。

不意にカチャとスイッチの押された音が背後からして慌てて振り返る。

そこに真つ白な空間はなかった。真つ白なベッドも消えて、あったのは見慣れた建物。導かれるまま中に入り目を見開く。

いたのは紗夜と日菜。けど明らかに幼くなっている。見た目は小学生くらいにしか見えなかった。

「あつーおねーちゃんおかえりー！」

「おかえりなさい、おねえちゃん！」

一生懸命積み木を重ねていた手を止め私を笑顔で出迎えてくれた。私に近づいた二人が手を取る。

今では滅多に見られない満面の笑顔を見て、確信した。



「これは夢の中だと。」

「ただいま。ひなちゃん、さよちゃん。いいこで留守番してた?」

「うん!おねーちゃんとおみきしてたの!」

「きいてよおねえちゃん!ひなちゃんさつきわたしのつみきくずしたんだよ!」

「ひなちゃん?」

「わ、わざとじゃないもん!」

幼い妹たちと会話を始めたのは幼い私だった。勝手に言葉を発していく私。夢ならそれをコントロールしたいのにそうはさせてくれなかった。

台本を読むようにスラスラとキャッチボールは続いていた。

「わざとじゃなくてもあやまりなさい!」

「……ご、ごめんねおねーちゃん」

「ううん。いいよ。だからかなしそうなかおしないで」

「ほーらなかない!ひなちゃんはつよい子でしょ」

「う、うん!」

またカチャという音がした。

いたのはさつきよりも大きくなった私たち。それぞれがバラバラの制服を着ているから中学生の頃だ。私の手にはライトグリーンのギターが握られ、二人して目を輝かせていた。

「おねーちゃんそれギター?かつこいいね!」

「へへっ、いいでしょ。お母さんたちにお願いで買ってもらったんだ」

「姉さん、何か弾けるようになったの?」

「全然まだだよ。コード抑えるの難しくて……」

「あたしおねーちゃんに弾いてほしい曲があるの！」  
「私も」

グイグイ迫る日菜、落ち着いた紗夜、頭を搔く私。日菜はずっとシヨートのままだけど私たちは伸ばしていて性格も一人称も少しずつ変わって自分のものになっていく。

昔は三位一体という感じだったのに成長すれば三者三様になって。それが嬉しいような悲しいような不思議な気持ちを抱かせた。

カチャ。画面が移り変わる。

周りには人がたくさんいた。ざわざわしている。目の前には白地に黒文字の書かれた大きな紙が壁一面に張り出されていた。

二位には私の名前。それが嬉しかった。

家でそれを報告した。どうやら日菜は一位で紗夜は二十三位だったという。紗夜は見るからに落ち込んでいた。そんな紗夜の頭を母さんは優しく撫でる。

「紗夜ちゃん。別にね頭の良さが全てじゃないの。頭が良くても気が遣えなかったり、それをひとのために使えないと意味がないわ。だからお勉強ももちろん大切だけど人に優しくできる人になってほしいの」

「できる、かな」

「ええ。紗夜ちゃんにならでるわ」

みるみるうちに笑顔になっていく紗夜に私は絶句した。

確かこの後は夜な夜な母さんと父さんが紗夜のことを叱る流れのはずだ。こんなセリフを母さんが吐いているところなんて私は見たことがなかった。

「朝日ちゃん？どうかしたの？」

ちゃん付けで呼ばれることに頭がズキツと痛んだ。

「体調が悪いのならお薬飲んで休みましょう」

知らないその優しさに胸が痛んだ。

カチャ。もう勘弁してくれよ。

「朝日、紗夜、日菜。誕生日おめでとう。これは俺たちからのプレゼントだ」

「今日はみんなで遊園地に行きましょう」

父さんがくれたのは三人お揃いのピン留めとシユシユ。

母さんの言葉に声を上げて喜んで、プレゼントをさっそくつけて出かける準備を始める。

私はプレゼントとしばらくの間にらめっこしていた。

家族そろってどこかへ出かけるのなんて久しぶりだろう。

カチャ。楽しい時間が日々重なっていく。

早々と年月が過ぎていった。私たちは高校一年生になった。新しい制服を三人で着て毎日一緒に笑い合う。

私の真似をして紗夜と日菜がギターを始めた。毎日のように誰かの部屋に集まってお互いを高めあう。その時間が楽しくて何時間も弾き続けるのが日課になっていた。

別々のバンドに入って時にはライバルとして戦った。

バンドメンバーとの仲も良くて一緒に遊びに行くことも多かった。

「だからここはキーボードとドラムだけの演奏にしようよ」

「ええっ！む、無理！目立つちゃうじゃん！」

「バンドはそれぞれが目立ってなんぼでしょ。がんば」

「リーダーの意見は絶対だし仕方ないよ」

同級生三人とバンドを組んでいた私は昼休みを屋上で過ごし、メンバーと新曲の話をしている時間が好きだった。

バカみたいな話をしている子の時が好きで仕方なかった。

『先輩は妹さんのことが好きなんですね』

『まあな。大切な私の家族だから』

「っ……………」

ただ屋上にいると時々頭が痛んだ。身に覚えのない映像が数秒流れている間、私が知らない誰かを思い出させる。

「朝日？大丈夫？」

「…………う、うん。またアレが来てただけ」

「あー。前から言ってるやつでしょ？今日は何が見えたのよ」

「なんか屋上の壁にもたれながら私ともう一人が話してた」

「顔は？」

「見えなかったよ。わかったのは同じ制服着てたことだけ」

いつだっけ見える映像には制限が掛かっている。目や口みたいに一部分だけだとハッキリ見えるのに顔全体は見えない。話している内容も人の名前やキーになる言葉が流れるとその言葉にノイズが入る。

病院に行っても異常はなかったしなぜそれが私の頭によぎるのか理由がわからなかった。

「朝日って健忘症になったことないんだよね？」

「う、うん。親とか妹たちに聞いても知らないって言ってたよ」

「じゃあどうして頻繁にそうなるのかな」

「もしかしたら前世の記憶でも受け継いでるんじゃないの？」

この映像が流れると何かを忘れている気になる。

だけどそんなことないと思うし多分私の勝手な思い込みなんだろう。なら前世の記憶って言うのが一番正しい？いやさすがにありえないか。

考えたってわからないくせに自問自答を繰り返した。

『先輩は幸せですか？』

『幸せだよ。毎日が楽しくて忘れられない思い出なんだ』

『私は先輩という時が一番幸せです』

『そうなのかな？ならもつと一緒にいてやろうか？』

聞いてないよ。今すぐいなくなつて。私は貴方達とは無関係なんだから。知りもしないんだから。

『先輩。——してもいいですか？』

『お前になら何されてもいいよ』

だからバンドメンバーに心配をかけるようなタイミングででてこないでよ。

カチヤ。私は氷川朝日だよね。

「……頭でも打つたの姉さん」

「ひどいよ紗夜。私結構真面目に言ってるのに」

「うーん。けどおねーちゃんが帰って来てすぐ『私は氷川朝日だよね？』なんて聞いたのが悪いと思うけど」

「ええー。日菜まで私の敵なのー?」

そう言つてベッドに倒れ込めば「敵とかないよ」と明るく返された。

「急にそんなこと言われたら誰だつて困惑するわ。なんでそう聞いたのか理由を聞かせてもらえろ?」

「実はねえ……………」

私は屋上であつたことを二人に話した。紗夜は眉をひそめて神妙そうな顔をする。日菜はキラキラした顔をする。同じ顔なのに真反対の表情の二人に吹き出した。

「ちよ、姉さん笑わなくてもいいでしょ」

「あはは、ごめんごめん。それで二人は今話した感じの経験ある?」

私の問いに二人して首を振つた。経験しているのは三つ子の中でも私だけらしい。不思議だ。

「なんでそうなつたか、とか覚えてないの?」

「……………この症状が始まったのは高校生になって初めて屋上に行った日だからそれが関係してるとは思うけど……………」

「屋上以外では映像は流れないの?」

「ううん。多いのが屋上つてだけ。他の場所では屋上ほど流れないかな」

「……………さっぱりだわ」

「……………あたしもお手上げ」

優秀な妹たちでもわからないと言う。なら本当に原因不明なのかもしれない。治るのはいつになるんだろう。

「それよりおねーちゃん。新しく覚えた曲があるから聞いてよ!」

「いいよ。私も聞かせたい曲があるんだ」

「じゃあ私、部屋からギター取ってくるわ」

「あたしもー!」

妹たちが部屋から出て行って一瞬静かになった空間。

なんだか寂しくてギターを手を取ってチューニングしていく。

『先輩はもう一人じゃないですから』

『……そうだな』

また聞こえてきた声に音を止める。知らない声のはずなのになぜ  
がその声に懐かしさを感じる。

『安心してください。私はずっと先輩の隣にいますよ』

ひどく、心がざわついた。

カチャ。ねえ教えて、貴方は誰なの。

「朝日。俺たちにはお前が必要だ」

「朝日ちゃん。私はこれから貴方を大切にするわ」

「姉さん。ずっと私たちの姉さんでいてください」

「おねーちゃん。また一緒にセッションしよ」

家族が笑顔で待っている。

私の大切な人たちが私を必要としてくれる。

姉としてまた次の日が来てくれることを望んでいる。

迷うことは何もない。

私は手に入れたんだ。

最高の日常を。  
最高の生活を。  
最高の思い出を。

もうこれ以上何もいらぬ。

「本気で言ってるんですか」

脳内ではなくはつきりと背後から聞こえてきた声。

伸ばそうとした手をそのままに振り返ればそこにいたのはいつも映像内に出てくる女の子だった。あいかわらず顔は雲がかつていて見えなかった。

「今までの生活を全部捨ててまで理想の家族でありたかったんですか。このまま先輩は私たちの目の前から姿を消すつもりですか」

この声をどこで聞いたのか思い出せない。ただ頭が痛んだ。

「……………何の話」

「早く思い出してください。本当はこれが夢だってわかっているんですよ」

さらに頭に痛みが走った。

「……………貴方は、誰」

「私の名前くらい自分で思い出してもらわないと困ります」

女の子は悲しそうに笑った。それに胸が痛む。

わかっていた。今までが全部偽物作り話つてことぐらい。私が作



り出した妄想ってことぐらい。何を選ぶのが正しいのかも理解していた。けど私にはできなかつた。ずっと夢みていた生活だつた。参観日に教室に両親がいること。体育祭で応援してくれること。毎年全員揃って誕生日を祝えること。他愛もない会話ができること。それが仮に妄想だつたとしても、その姿を見てしまったら後戻りできない。

私はまたあの日を繰り返したい。まだ幸せな時を終わらせたくないんだ。

「先輩は、幸せですか」

「……幸せ、だよ」

「家族と一緒に過ごしていた日々は、大切でしたか」

「……大切、だつたよ」

当たり前だ。大切だから私は守りたかつた。

「ならまたそうなるために立ち止まることはやめませんか」  
「え……」

「過去を振り返らない人間も後悔しない人間もいません。けどその過去や後悔を糧にできる人間はいます。先輩はそうだと私は思ってます」

「……できないよ、そんなこと」

「できます。私が保証します。だから」

女の子は私の手を取る。両手で包んで言った。

「過去を変えないで、これから先の未来を私たちと一緒に歩いてください」

「……………ははっ……………お前には敵わないな」

流れた涙を乱暴に拭って笑顔の彼女にキスを落とす。  
満足げな彼女に手を引かれ私は走り出した。

◇◇

なんで忘れていたんだろう。

お前は私にとって大切な後輩なのに。

過去が今のものでなければ出会うことのなかった後輩なのに。

お前だけじゃない。他にもあの過去を抱えていたからこそ出会えた人たちがいる。

私と大切な時間や思い出を残してくれた人たちがいる。  
みんないいやつらだった。

それなのに何の言葉も謝罪もお礼もなしにいなくなるなんて非常識だよな。

まだまだやり残したことばかりだ。

それは全部、あいつらとやらなきや楽しくねえよな。

それに私はまだお前に気持ちを伝えてないから。

さよなら理想の自分。

ただそっと、目を閉じた。

◇◇◇

目が覚めて最初に目に入ったのは白い天井と白いカーテンだった。機械音が一定のリズムを刻んでいた。口と鼻が何かに覆われている感覚。それを取ろうと右腕を動かそうとすれば何かに押さえつけられて動けなかった。首だけを動かし安堵する。優しい気持ちになつた。スヤスヤ寝息を立てる彼女の頭に動く左手を伸ばす。腕にはコードのようなものがペタペタ繋がっていた。

撫でた髪は柔らかくてサラサラしていた。あどけない寝顔にクスツと笑みが零れる。普段は怒つてばつかなのにこういう表情を見て、かわいい以外の感想が出ないのはきつと彼女がとてもかわいいからだ。

気づけば彼女と目が合った。パチパチと何度も瞬きをする。段々と目を見開いて、勢いよく立ち上がった。

口を両手で抑えるそれは、幽霊でも見たみたい。

「…………おはよ」

少しこもった声で言う。

ゆっくり状況を理解していく彼女の目には涙が溜まっていた。今にも零れ落ちそうな雫は、落ちる前に私の胸元に沁み込む。

すがるように大声で泣き出した彼女の背に手を回せばその声はもっと大きくなっていた。

想いと決意。

私のことを助けてくれてありがとうございます。

お前のおかげで私は私でいられるよ。

目が覚めてすぐに感じた幸福を私はきつと忘れられない。

私のために泣いてくれる人たちがいるという事実を、これから先も大切にしていきたい。

◇◇

有咲が泣き出した瞬間に勢いよく開いた病室の扉。切羽詰まった表情で登場したのは二人の妹ともう一人の大切な後輩。私を見た瞬間に目をこれでもかかってくらい開いたもんだから笑ってやった。

「おはよ」

溜まっていく涙に噛みしめられる唇。溢れ出して抱きしめられた身体。泣き崩れる姿を見ながら頭を撫でてやる。

大丈夫だよ。もうどこにも行かないから。私はここにいるよ。

そんな言葉を掛けてあげる。優しく優しすぎるくらいの口調で言ってみよう。

今日ばかりは泣き虫な彼女たち。出てくるのは良かったという言葉と私の名前だけ。

「ああ。もう泣かないですよ」

そうは口で言いつつ無理だろうなと直感的に思った。

有咲と沙綾には今までずっと私のことを悩ませてしまった。

紗夜と日菜には私がいなくなる恐怖を与えてしまった。

私が抱えている問題を一緒になって解こうとしてくれた。

その事実が変わらない。それが当然じゃないことを今になって知る。

本当なら見捨てても良かった。

私に近づかなければ物理的にも精神的にも傷つくことはなかったから。

けどそれをわかったうえで踏み込んでくれた。あつたのは優しさだけじゃない。

強い想い。

こんなこと言うのはおこがましいかもしれないけど私と一緒にいたいという確かな想いがあったからついて来てくれたんだろう。

そんな彼女たちには感謝以外の言葉が贈れない。

隣にいてあげることが今の私にできる唯一のことだと思った。

どれだけ時間が経っただろう。知らなくてもいいが多分結構な時間を使った。とても有意義な時間だったことだ。

泣いていた二人が顔を上げる。目元が真っ赤で、伝っていた涙の道をそっと指で拭ってあげた。

「朝日先輩い!! 本当に良かったよお!!」

「朝日さん!!!」

私が目覚めたと報告を受けたのか。一時間もしないうちに私の病室にはポピパ、Roselia、松原、白鷺が集まっていた。入ってくる人たちに何事もなかったかのように笑顔で挨拶をしてやれば泣き出すやつも多かった。

特に猫耳とあちゃんは私の姿を見て秒で懐に飛び込んできた。

あちゃんには本心ではないとはいえ酷いことを言ってしまった罪悪感がぬぐえないのに、当の本人は私のために泣いてくれた。良い子過ぎて泣けてくる。

猫耳も、うん。あの現場を見せてしまったんだ。怖い思いをさせた。だからごめんの意味も込めて力一杯抱きしめてやった。

いつの間にか増えていた私の知り合いたち。

もう、胸がいつぱいだ。

◇◇◇

数日後。色々な検査を受けて問題のなかった私は無事退院することになった。迎えに来てくれたのはお見舞い皆勤賞の有咲。話を聞けば紗夜と日菜、それと沙綾に任せられたらしい。余計なお世話だと思った。

「朝日先輩。荷物ってこれで全部ですか？」

「ああ。他のは全部昨日紗夜と日菜が持って帰ってくれたから。あるのはそれだけだよ」

「段差、気を付けてください」

「ありがとう」

積極的に私のために行動してくれるから多少苦笑い。私はできることまで取られて手持ち無沙汰だ。

それを言ってみたが「ダメ」「無理されたら困る」「たまには頼ることも大事」と却下された。ぐうの音も出ない。現在許されていることと言えば隣を歩くことくらいだろうか。

「朝日先輩。今から蔵に寄って行きませんか？」

「蔵に？」

「はい。久しぶりに、私たちの曲、聞いてほしいです」

ああ。そうだ。私が勝手に遠ざけたからこいつらの音楽をしばらく聞けていなかったんだ。ずっと聞きたかったのに聞こうとしなかった。出向けなかった蔵。今なら行く資格があるだろう。

「もちろん。お供してよろしいですか？」

「私がお願いしたんですけど……」

それはどつちでもいいじゃん？ 一歩前に出て有咲の手を引く。頬を染める有咲の表情ににやりと笑った。

「いいだろ？」

「……仕方ないですね」

私から顔を逸らす有咲だが耳まで赤くなっているのを見逃さなかった。

そんなところもかわいい。

「照れなくてもいいのに」

「……照れるに決まってるでしょ、馬鹿なんじゃないですか」

口では色々言っているのに手を離す気配はない。それどころか

ギュツと握り直す。

「ただけ私のこと好きなんだよ。とは言わなかった。」

蔵に行けばそこにはもう全員集まっていた。扉を開いた瞬間に聞こえたギターの音色に笑みが零れる。あーあ。マシになったとは言え教えることはまだありそうだ。

「あつ！朝日先輩！」

「退院おめでとうございます！」

「おう。ただいま」

ポピパのメンバーじゃない人間が「ただいま」というのは少しおかしいかもしれない。けど私はこれが一番合っていると思ったから。

「朝日先輩！早速なんですけどこのフレーズを上手く弾くコツ教えてくださいー！」

「朝日先輩。私、朝日先輩の退院曲考えました。聞いてください」

「お前ら、ホント元気だな」

「か、香澄ちゃん！おたえちゃん！朝日先輩退院してきたばかりだから」

「あーいいよりみちゃん。なんか、力抜けて助かるわ」

ポピパらしさ。それはこいつらにしか出せない空気感って意味だ。ならそれを感じられる時に感じなきゃな。それに、こうドタバタしてる方が「帰ってきた」感じあるし。

「…………朝日先輩。丸くなりました？」

「元々こういう性格だったの。ほら。どこができねえんだよ」

「できないんじゃないです！上手く弾けないんです！」



「どつちも大差ねえよ。いいからやるぞ」

「朝日先輩。私の演奏……」

「わかったわかった。後で聞いてやるから今は待ってって」

「嫌です。今聞いてほしい」

「我儘か！」

さすがに退院して早々これは面倒だけどな。

結局一時間ほど猫耳やおたえに付き合った後、本題に入ることにした。私がここに呼ばれたのは五人の成長を見るため。それを特等席で見れるのだ。嬉しいに決まっている。

「で？何の曲を見せてくれるんだ？」

「新曲です。今度SPACEのオーディションを受ける用の出来たばかりの曲」

「全力で歌うのでしっかり聞いていてくださいね！」

そうやって始まったのはエールソング。夢を追いかける人たちの背中を押す曲だった。猫耳が歌い、おたえがギターをかき鳴らす。りみちゃんと沙綾がリズム、有咲がメロディーを支えた。最後に見た時よりも格段に上手くなっている演奏。少し変な音が聞こえてきたりもするが、ハッキリ言って今までで一番上手いと思った。

私が遠ざけている間にできた曲。それは歌詞の通り困難に立ち向かって前へ進もうとしていることがわかった。この歌詞は誰に向けてられたものか。それを追求する必要はないだろう。

やりきったのであろう笑顔での終演。真っ先に拍手が出てきた。

こんな曲を作ったことへと演奏に対して。そしてちゃんと進めた自分に、というのは変だろうか。

まあそんな心情はどうだっていい。

今が最高であると、言えればそれだけで。

私も、前に進まなきゃな。

◇◇◇

「お、おねーちゃん、本当に行くの？」

不安げな日菜の声にコクリと頷く。今から私が行こうとしている場所は本来行く必要のない場所。そこに行こうとするのを妹たちは止めようとする。

「どうして行くのよ」

「話したいことがあるからだ」

「それはどうしても行かないといけないの？」

「ああ」

覚悟なら決まっていた。私の決意は変わらない。

「明日、母さんたちに会ってくる」

この先がどうなるか私は知らない。

罵倒されるだろうか。それでも構わない。

私は私のしたいことをして、知りたいことを知れば、言いたいことを言えればそれで。

本音をぶつけて。

「こちらです」

刑務官の案内で通された部屋はドラマで見たことがある作りだった。部屋を二分割するようにアクリル板だろうか、ポツポツと無数の穴が空いた透明な板で区切られている。室内は意外と狭く、置かれているものは椅子くらいでとてもシンプルだ。

部屋まで案内してくれた刑務官にお礼を言つて椅子に座つて待つ。五分程して目の前の扉が開いた。

私を包丁で刺したことで刑務所に収監されることになった母さん。父さんは数日前に別の刑務所に移動することになったと聞いていた。刑務官が扉を閉め、二人だけの空間になる。

「お久しぶりです。元気でやっていましたか?」

「最高だとも思っていたのかしら」

今まで使つたことないほど丁寧な挨拶をした。それを静かに返される。

怒鳴られるかと思つていたのでから意外で驚いた。

ちゃんと話せそうなのが幸いだ。

「それで? 私に何の用かしら。来る必要なかったでしょう」

「そうですね。本当なら来なくてよかったですよ。けど私がどうしても聞きたいことがあったので」

そうこれは大切なこと。けど紗夜と日菜には聞かせる必要のない戯言。私だけが知っていればいいこと。

「どうして、姉妹内でカーストを付けたんですか。昔はどんなことがあつたってちゃんと平等に見てくれていたのに」

あまり長い時間いたくもないから手短に済ませたかった。

「ああ。何かと思えばそのこと。今更聞いて何になるの？」

「いいから答えてください」

なぜ私たちを急に差別し始めたのか。どうしてそんなことをするようになったのか。私ではなく紗夜が対象だったら。それを考えると怖くて仕方ない。

はあーとため息をつく母さんをただ見つめる。

「……理由があるというのなら、日菜ちゃんが私たちの期待に応えすぎたから、かしらね」

「日菜のせいって意味ですか」

「そういう意味じゃないわ」

けどまあ、ここまで来たら言ってもいいわね。

そんなセリフから始まったのは母さんの過去だった。

「私には何の才能もなかったのよ。どれだけ勉強しても要領が悪くて入りたかった大学にも行けなかったしそのせいでなりたい仕事にも就けなかった。親には何か言われることはなかった。むしろ慰めてくれて、けどそれが私を責め立てるものにも思えた。屈辱だったのよ。」

それから結婚してあなたたちが生まれて、そして才能が開花した。見ただけで勉強も運動も完璧。成長するにつれて日菜ちゃんの何でもできる範囲が広くなって、そんな姿を見てこの子なら私の夢を叶えてくれるかもしれないってそう思ったのよ」

「だからって、言いたいんですか」

「それに思うでしょう。日菜に才能があるのなら他の二人にもあると思つて当然でしょう」

「……ええ。そうかもしれないね」

日菜の才能は私や秀才の紗夜じやどう頑張つたつて勝てやしないほど上をいつている。日菜ほどの才能とは言わずとも似たような才能を持った子が生まれてもおかしくないと思うのは人間としては当たり前なのかもしれない。

「ですが、それで虐待だなんて。もっとやり方はあつたんじやないんですか？」

「……言い訳になるけど、あの時は仕事で腹が立つことが多くて精神的にキテたのよ。だからほとんど八つ当たりみたいなものだった。初めて殴つた日、正直なことを言えば後悔した。それでも父親であるあの人は大丈夫なんて言つて、私もそれを鵜呑みにして。そんな時に何かを傷つけている瞬間、ストレスが軽減されることを知つた。そしてあなたを怒れる理由ができてしまった。

引き金なんて一度引いたらおしまいよ。何度だつて繰り返す。慣れてしまえばそれが間違いだつてことにも気づけないんだもの」

母さんは自嘲気味に笑つた。本当に後悔しているようなそんな表情だつた。

「あなたが私を恨んでいることも殺してしまいたいくらい嫌つていることも知つているわ。だから、なんでここに来る必要があつたのかわからないの。そんなことを聞きたかつたから？ 本当にそれだけ？」

やはりこの人は母親だ。子供と一緒にいる時間が一番長かつた分、一番私の性格を理解している。今更知りたくもなかつた。

「……聞きたいことはそれだけです」

「そう」

「ですけど、言いたいことはたくさんあります」

「ええ。知っているわ」

私は一度息を吐く。そして真つ直ぐ目を見て、想いを伝えた。

「確かに母さんは許されなかったことをしました。私の後輩に手を出して、私を刺して殺しかけた罪は簡単には消えないと思います。一生をかけて償うべきだと思います」

「ええ」

「それでも私は、あなたのことを恨んだりしていませんよ」

そんな私の返答に母さんは驚いていた。それもそうだよな。殺されかけたのに恨んでないなんて、そんなおかしいことあつていいはずもないだろう。普通はな。私はそんな普通のことを求めてない。

「確かに虐待されている間は『なんで私が』とか『殺してやりたい』とか思ったこともありましたよ。ただそれは精神的に余裕がなかったから、だからそう思っただけ。本気で恨んだことなんて、ないです」  
「……正気じゃないわね」

「そうかもしれません。日菜と姉妹になったことが嫌だったことだつてあつた。日菜がいなければただ愛してくれたんじゃないかとか。考えたことあります。けど日菜が笑つて『おねーちゃん』って呼んでくれるたびに、嬉しくて。やっぱりこの子の姉でよかったって思えて。それは紗夜も同じで。

あなたたちの元に生まれて大変なことだつて多かつた。苦しくて死にたいことだつてあつた。

それでもあなたたちから生まれて、生き延びること出会えた人たちがいる。

だからこそ、感謝しています」

「……」

「いくら酷いことをされても、優しくされた事実は揺らが無い。だから今だって、あなたたちのことは家族だって思ってます。ずっとそう思ってます」

「っ……朝日」

「……言いたいことはそれだけです。」

本当に今までありがとうございます」

母さんがどう思っていたかなんて知らない。知らなくていい。後悔なんてしていいようがいまいが私には関係ない。

どうせもう、関わることはないんだから。

深々と頭を下げて、私は部屋から出た。

もう、迷いはなかった。

◇◇◇

「姉さん」

「おねーちゃん」

「紗夜、日菜……」

刑務所を出てすぐの所にいたのは私の妹たち。浮かない顔をしているのを見る限り私のことを心配してきたのだろう。

「姉さん、大丈夫だったの？」

「おねーちゃん……」

「うん。大丈夫だよ」

本当に、心配性な妹たち。

心配をかけている事実は、これからなくしていかないよね。

「帰ろう。私たちの家に」

二人の手を引いて私は歩き出した。



## 第二章 君たちと過ごす日常。 山あり谷あり。

「日菜。そっちの箱は隣の部屋に持って行って」

「うん。わかった！」

「姉さん、これはこの部屋でいいの？」

「そこに置いてていいよ。私のだから」

あの事件から約二週間後、私たち姉妹は新居に越してきていた。理由は、あの床に私の血痕が染みついている事件のことを思い出してしまふから。そして、あの人たちが帰って来ても鉢合わせないように。

全部姉妹で話し合っただけで決めたことだった。

だがその時にも色々問題があった。それが主に金銭面。引っ越すとしたらお金がそれなりにかかる。ただの高校生の私たちにはキツイ。それが紗夜の意見だった。

だから私は自分の通帳を取り出して、ついでに自分で書いた小説も渡して私の仕事のことを全部話したのだ。

最初は驚いていたものの金銭面の問題は、とりあえずなくなった。三人で物件を決めて、そして今日越してきたのだ。

「おねーちゃん。運ぶのってこれで全部？」

「だね。紗夜はこれから練習？」

「ええ。湊さんたちには休んでもいいと言われたけど、頂点を目指すのなら休んでいられないもの」

「頑張るのはいいけど無理はするなよ？」

「それは姉さんでしょ。私はちゃんと管理してるわよ」

ぐうの音も出ないな。

「おねーちゃん、お茶飲む？」

「飲む。紗夜は？」

「私もいたたくわ」

「おっけー！」

日菜がキッチンでお茶を入れるのを待ったためにリビングに置いてある椅子に腰を下ろした。テーブルに肘をつけて手の甲の上に顎を乗せる。私の隣に紗夜も椅子に座り息を吐いた。

「お疲れ紗夜」

「姉さんこそお疲れ様。大丈夫？」

「まあ、二人が手伝ってくれたから」

私の手首を気にして重い荷物を何一つ運ばせてくれなかったから私はほとんど疲れていない。むしろ二人の方が疲れているだろう。けどそんな表情をしていないのはどうしてか。

「紗夜、練習っていつ行くの？」

「そろそろなのだけど、今井さんが新居を見たいから迎えに来ると言っていたので……」

「おねーちゃん、リサちー来るの？ならリサちーの分のお茶も用意しとくねー！」

「いつの間に仲良くなったんだよ」

「同じバンドメンバーだからじゃないかしら」

「そんなこと言って、どうせ最初はああいうタイプ苦手だって思ってたんだろ？」

「そ、それは……」

紗夜の性格はよく理解してるんだから素直に認めればいいのに。  
家のチャイムが鳴った。

私が出るわ。そう言つて紗夜は玄関へと足を運んだ。

「うわあー！いい感じの所に引越して来たんだね〜」

「いらつしやいリサちー！」

「やつほー日菜。朝日」

「おはよ。わざわざ紗夜のこと迎えに来てもらつて悪いな」

「姉さん。その言い方だと私が来るように頼んだみたいじゃない」

「どっちでも變わらないつて」

「あははっ」

くだらない言葉を投げながら椅子に座るよう誘導する。

私の斜め向かいに腰掛けたのを確認して、日菜が運んでくれたお茶に口をつけた。

「そう言えば、最近どうよRoselia。SPACEのラストライブに向けて頑張つてる？」

「まあ、それなりにね。友希那も紗夜も厳しいから気は抜けないんだよ〜」

「だろうな。紗夜、バカみたいに真面目だから」

「姉さん！」

怒る紗夜にクスクス笑う。それを見て日菜たちも笑っていた。

「朝日ってほんと明るくなつたよね。冗談言う姿なんてアタシが初めて会つた時には想像できなかつたよ〜」

「私は元々こういう性格だつーの。リサが知らなかつただけだろ」

「……やつぱ、慣れないなあ……」

「はっ」

「いや……朝日に名前と呼ばれるの、慣れないなつて」

そう、リサの言う通り私は一部の人間の呼び方を変えた。というのにも理由があつて、まあ簡単に言えば遠ざける必要性がなくなつたら。

今までは関係ないやつへの気遣いもあつてむやみに相手の懐に入ろうとしなかつた。

だが今はもう違う。そんなことしなくてよくなつた。だから統一して名前で呼ぶようにしたのだ。

最初松原を花音って呼べば驚きつつも嬉しそうに笑つて、白鷺を千聖と呼んだらしてやったりという感じの顔されて、猫耳は……：なにかそのままでもいいと思つた。まあ、ここまではいいんだ。問題はリサ。

何故か今井をリサと呼べば未だに微妙な反応をされる。なんだよ名前前で呼ばない方がいいのかよと思つたがその件は本人に否定された。単純に違和感を覚えていただけだというからリサと呼び続けているが、これならもう今井って呼ぼうかな。

そんな時ポケットに入れていたスマホが鳴つた。相手は有咲。

『朝日先輩。今時間ありますか？』

そんな短い文章。私は何かあつたのかと思つて返信を返す。

「あつ、朝日！有咲からメッセージ来たんでしょ！」

「……なんだよ急に」

「朝日って意外と感情、表に出るよね。嬉しそうにスマホ眺めてたし、口元緩んでるよー？」

ニヤニヤしながらそう言うリサに思わずそっぽ向いて口元を隠した。

まさかりサにバレるくらいニヤけていたなんて思つてもみなかつた。

どんだけ嬉しかったんだよ私。っーか恥ず。

「ほんとおねーちゃんって有咲ちゃんのこと好きだよね」

「見てるこっちが恥ずかしいくらいだらしない顔してたわよ……」

マジですか……。

もうこいつらの前でメッセージ見れない。絶対見ない。

そんな時返ってきたメッセージ。それを横目で見た私は、思わず勢いよく立ち上がった。狼狽しているのがわかる。

「姉さん?どうしたの?」

「悪いちよつと出かける!」

「え!?どこ行くの!?!」

「猫耳の家!!」

私はスマホだけを手にして家から飛び出した。

◇◇◇

ここに来るのは初めてで、有咲から送られてきた地図を頼りに進んできたから本当にここがあいつの家なのか確信はない。だが表札には「戸山」とあるのだから多分あっているのだろう。

インターホンを押す。「どちら様ですか」という声が聞こえた。

「猫耳……香澄さんの知り合いの氷川と言います」

『え、氷川先輩!?!』

インターホン越しの驚いたような声。どうして私のことを知っているのだろう。声的に猫耳ではないことはわかる。先輩、という口調から後輩であることは確定した。

玄関前で待っていていればゆっくりと開いた扉。おそるおそるこちらを覗き込む影が一つ。

「……お姉ちゃんに、何の用ですか？」

猫耳のことをお姉ちゃんと呼んでいるってことは妹か。あいつに妹がいるなんて初めて知った。私のことを知っているというのなら花女の後輩だろう。

「さっき、声が出なくなっただけで聞いて。それで様子を見に来た」

「……どうぞ。入ってください」

何故か警戒した素振りを見せる猫耳の妹。

やっぱり普段の素行が悪かっただけに信用は薄いのだろうか。

こればかりは自分のせいだからどうしようもない。

階段を使つて二階に上がって、一番奥。そこが猫耳の部屋らしい。

「お姉ちゃん。お客さん来てるよ」

ノックしながら妹さんが言う。聞こえてきそうな元気な声が何一つ聞こえない。静かに部屋の扉が開いて猫耳が顔を出した。

私のことを見て、元気に笑う姿はない。ただ私の名前を小さく掠れた声で呼んで、困ったように笑った。

妹さんが自分部屋に戻って猫耳の部屋に二人きり。

前みたく、自分から何か話してくれる気配はない。ベッドに腰かけ

て俯く猫耳の目の前に立つ。

「…………SPACEのオーデイション、受けたんだろ。どうだった」  
「…………」

「確かにあのオーナーは厳しい人だよ。音楽に対して本気だから、だから認めてもらえないバンドも多かった。けど、それは気にしなくていいんだってお前はまだまだ初心者でこれからなんだよ。だから…………」

「それじゃ、ダメなんです！」

小さくても力のある声。咳き込む猫耳に何も言えなくなる。

「ずっと、元気だけでどうにかしようとしてたから、それで迷惑かけちゃって。下手だから、みんなの足を引っ張って。もっと上手くならないといけないのに」

「猫耳」

「…………オーナーに言われたんです。私が一番できてなかったって。だからもつと練習しないとイケなくて。オーデイションも、後一回しかないのに」

私はどうしたらいいんですか？

顔をあげて涙を零す猫耳。初めて見た泣き顔。胸が締め付けられる。

けどどうして声が出なくなったのか。ショックだったのか。プレッシャーだったのか。

ただ私には何もできなくて、そつとその身体を抱きしめた。

見たいのは君の笑顔。

「……………」

「どーしたのおねーちゃん」

夕飯を食べ終え紗夜に入れてもらったお茶を飲みながら、猫耳をどうすればいいか考えていけばテーブルの向かいに座っていた日菜が不思議そうに声を掛けてきた。顔をあげれば似たような表情が二つ。

「いや、ちよつと考え事してて」

「今度は何に悩んでるのよ」

まるでいつも私が悩みまくってるみたいない方だった。間違っていないが複雑だ。

けど、二人になら相談してもいいだろう。何かいいアイディアが出るかもしれないし。

そう思っただけは猫耳の声が出なくなったことを話した。

原因はおそらくオーディション後にオーナーに言われた言葉。

『あんたが一番できてなかった』

その言葉を猫耳がどれほど深刻に受け入れたのかはわからない。だが結果的にオーディション中に声が出なくなるという事態にまで発展していた。

やらなければいけないことが多くて、不安で、失敗できない状況で失敗してはいけないという考えや雰囲気猫耳を追い詰めた原因だろう。



どうして隣にいてやれなかったのかと今更後悔する。

S P A C Eのライブに出られるかどうかはあと一回のオーディションで決まってしまう。

失敗してはいけない。

もっと上手くならないといけない。

これで失敗したら出られなくなる。

同じことの繰り返し。

散々に自分を責めていた。

今も声の出ない自分を責めている。

ポピパのみんなの優しさが焦りに繋がっている。

普段なら気にしていないようなことを気にしてしまう。

わかっていた何が原因かは。

だから助言してあげることまでできたはずなのに。

そんな猫耳に、何も言えなかった。

師匠なのに、何もしてあげられていない事実が悔しかった。

違う。あの日の二の舞になると思ってたにもできなかった。ただ怖がっていただけ。

「姉さんはどうしたいの？」

「私……。」

「こういうのは姉さんの気持ちが大切だと思うわ」

「そうだよ。おねーちゃんの真っ直ぐな想いを伝えれば大丈夫だって」

私の気持ち。真っ直ぐな想い。

悲し気に笑うのが嫌だった。踏み出すことやギターを弾くことに戸惑ってほしくない。

ただ、それだけ。

「私は……あいつに笑ってほしい。バカみたいに笑って、バカみたいに突っ走って。失敗を恐れて、何かに挑戦することを怖がらないでほしい。そんなのあいつらしくないから。ギターも、ずっと続けていてほしい」

「その言葉を伝えてみたらいいじゃない。答えが出ていたのに悩むのはやめて。姉さんらしくないわよ」

「堂々と思ったことを伝えたら、きっと伝わるよ。今までがそうだったじゃん！」

「……うん。そうだったな」

そうだよな。考えすぎたって意味はない。どうせ同じことを繰り返すのだから。

ならいつそ想いを全部曝け出してしまった方が、楽なうえに伝わるよな。

「ありがとう紗夜、日菜」

「別にいいわよこれくらい」

「どういたしまして！」

◇◇◇

「猫耳」

「朝日先輩」

「悪い。待たせたな」

放課後。前日からメッセージで呼びだしていた猫耳と合流するために猫耳の教室に訪れていた。HRから時間も経っていたということもあって教室には猫耳以外誰もいない。私が一緒にいて変に騒がれることもなくて楽だ。

「今日はどうかしたんですか」

首を傾げる猫耳が聞く。

「今日、この後何か予定あるか?」

私の質問に猫耳は少し落ち込んだ顔で首を横に振った。

多分猫耳は蔵で練習しようと思っていたはずだ。だけどそれを他のメンバー、主に有咲に止められたのだろう。それならいつも持っているはずのギターを今日は持つていないというのも頷ける。

それはバンドが好きで猫耳からしたら苦痛のはずだ。だから息抜きにでも連れて行きたかった。

「暇ならさ、私に付き合ってくれない?」

「どこか、行くんですか……?」

「ちよっと買い物に付き合ってよ」

そう言つて半ば無理矢理猫耳の手を引けば慌てながらも鞆を持つてついて来てくれた。猫耳にイタズラに笑いかければ困惑していたけれど気にしない。

私は猫耳の手を引いたまま学校を出て進んで行く。戸惑ったような声が後ろから聞こえてきたが聞こえていないことにした。

「もしかして、江戸川楽器店に行くんですか？」

「ん？案外察しがいんだな。そうだよ」

その瞬間、猫耳の手が震えた。手を握る力が強くなる。

やっぱりか。そう思っても行き先を変えようとは思わなかった。

「ピックが足りなくなっけ、買いたくて」

「そう、ですか」

「一人で行くのもあれだったからさ。よかったよ猫耳がいて。あ、猫耳もピック足りなかつたら買ってあげるよ」

「……ありがとうございます」

そのお礼の声が小さいのは、きっと出ないからじゃない。

「蔵に、行かなくてもいいんですか？」

「行くよ。けどそれはピック買った後」

楽器店に入ればバイト中のリイ先輩と目が合った。私たちを見て何やら意味ありげに微笑んでいたが見なかつたことにして店内を進んで行く。

「猫耳は、何個くらいピック必要？」

「……三つ、あれば」

「ん、三つね。他に必要なある？弦とか」

「大丈夫です……」

「……わかった」

ここに来る時は大抵はしゃいでいるのに。静かすぎて落ち着かない日が来るとは思っていなかった。

「私はお会計してくるから店内見て回ってなよ」

頷く猫耳の手を離して私はレジにいたリイ先輩に商品を渡す。

「朝日。香澄ちゃん、どうしたの」

「ちよつと、色々あって」

リイ先輩は慣れた手つきで商品をレジに通していく。

「……………浮かない顔してるね」

「え……………」

「大丈夫だよ。香澄ちゃんは強い子だから」

深く追求してはこない。それなのにわかったような発言をする。

リイ先輩、エスパーかな。

けど今はそれくらいの距離感がありがたかった。

お会計を終え猫耳を探す。さっきまでの場所に彼女はいない。少し店内を探せば猫耳はすぐに見つかった。

ギターを見つめていた。紅のそれをただ羨ましそうに、そして切なそうに。

「猫耳」

一言呼べば振り返った。

私は何度その似合わない表情を見ればいいんだろうか。

「行くかうか」

君の明るさには程遠い笑顔を向けた。

「もう一つ行きたいところがあるんだけどいい？」

楽器店から出て猫耳に問えば疑問を持った表情のまま頷いた。それを確認してまた手を引いた。

向かったのは近くにある公園。日も暮れてきたということもあるからあまり長い時間拘束することはできなさそう。だが誰もいないここなら話くらいはゆつくりできそうだった。

ベンチに猫耳を座らせ私は鞆をその隣に置く。

中から財布を取り出して自販機で缶ジュースを二本買った。一本渡せば小さい声でお礼が聞こえた。鞆を挟んで隣に腰を下ろす。缶を開けて一口飲んだ。

「ねえ猫耳。バンド楽しい？」

「……楽しい、です。毎日キラキラしてみんなで音を合わせる時にいつもワクワクして」

そう言って猫耳は一度言葉を止めた。彼女の方を向けば缶ジュースを握りしめたまま俯いていた。

「けど、最近わからなくなって。……楽しいから続けてたはずなのに、それよりも上手くならないとって。楽しいよりもプレッシャーが大きくなって。ちゃんと弾かなきゃって思えば思うほど指が動かなくて声も出せなくて」

——怖いんです。

「このままギターが弾けなくなるんじゃないかって。弾けても肝心なところでミスして、みんなが一生懸命練習してきた努力を無駄にするんじゃないかって思って」

初めて聞いた猫耳の弱音。よかった、ちゃんと聞けて。  
私は立ち上がって猫耳の前にかがみこむ。不安に揺れる瞳と目が  
合った。それに微笑みかける。

「猫耳は、ギター好き？」

「……好きです」

「ポピパは？」

「……大好きです！」

「それはきつとあいつら全員が思ってることだよ」

猫耳は何も言わず私を見つめた。

「大丈夫。お前には、何でも何度でも支えてくれる仲間がいるんだか  
ら」

安心して、弾いていいんだよ。

驚きと困惑が混ざったような表情。そんなの初めて見た。やっぱり  
似合ってるない。

「お前の気持ちが全部わかるとは言わない。けど、理解できる部分も  
あるんだ。

仲間の期待に応えたい気持ちと自分の気持ちの両立ができなくて、  
不要に仲間を傷つけて。ずっと、隣にいてくれたのに裏切って。

嫌になるんだよ自分が。その瞬間は自分自身のこと世界で一番  
大っ嫌いで許せなくなる。

けどさ、そういう時こそ自分がどれだけその事実に向き合えるかが  
重要なんだよ。

死にももの狂いで努力を重ね続けることが重要なんだよ。

今すぐに、答えを出せとは言わない。ただこれだけは覚えていてくれ」

お前は一人じゃないよ。

「有咲、沙綾、りみちゃん、おたえ、それに私だっている。他にもお前を支えてくれるやつらはいくらでもいるじゃないか。

最初にポピパを作ってあいつらを、私を巻き込んだのはお前だ。巻き込まれた今なら巻き込まれて良かったって、多分みんな思ってる。だから頼られたって、文句なんか言わないさ」

だから、少しずつ前に進もう。一緒に歩いてやるからさ。



全員で前へススメ。

「あ、朝日さん！」

「お待たせあこちゃん、りんりん」

放課後、正門の前で集まる約束をしていた私がそこに行けば待ち人であるあこちゃんとりんりんの二人がいた。楽しそうに談笑していたあこちゃんだが私の存在に気付いた瞬間満面の笑顔を向けて手を振る。それについて笑みがこぼれてしまった。

今日集まったのには理由がある。

先日私はあこちゃんとりんりんを呼び出して事件発生の数日前、私が一方的にあこちゃんを傷つけて悲しませてしまった時の謝罪をしていた。二人を家に呼んで目の前で土下座して、あんなことを言った以上、ひどいことを言われて縁を切られても仕方ないと思っていた。それなのにこの子は怒ることはなくて。むしろ良かったって、泣いたんだ。抱きつかれて力いっぱい抱きしめられて。りんりんも優しい微笑みを向けてくれて。

本当に恵まれていると思った。最低な私を許してくれる優しすぎる場所だと思った。だからこそいつの間にか私の目からも涙がこぼれていて、肩にそつと頭を預けて。

この場所は絶対に守らなければいけないと心に誓った。

今日は言ってしまうば私を許してくれたお礼。

あこちゃんのリクエストでRoseliaの練習のない今日にファミレスに行く約束をしていたのだ。

本当はもつと豪華なものをぐ馳走をしたかったのだがあこちゃんが「これがいい」と言ったのだからそうすることにした。

Roseliaの話、ゲームの話、姉妹の話。話題が尽きることはない。

ファミレスに着くのだった一瞬だった。

店員さんに案内された席に座ってわくわくした表情でメニュー表を開くあこちゃんにりんりんと二人で笑って、ドラムを叩いている時はものすごくかっこいいのにこんな時はかわいいだなんてずるい子だと思った。

ドリンクバーで飲み物を入れて注文した料理に手を付けていく。多いかと思つた料理もどんどん減っていく。話の花が咲けばお腹も空くみたいだ。

「……そう言えば…朝日さん……」

「ん? どうした?」

「……戸山さん……大丈夫でしたか……?」

「あー、うん。まあ大丈夫だと思うよ」

「え? 香澄に何かあつたの?」

同じ学校であり、社交的な猫耳の変化にはすぐに気づける。声が出ないという問題ならばなおわかりやすいだろう。

あこちゃんは違う学校だから知らなくて当然。興味津々に聞くその無垢な瞳にあまり暗い雰囲気の話はしたくないが……。

「まあ、簡潔に言えば猫耳の声が出なくなつてさ」

「え!?! 大丈夫なんですか!?!」

「一応今日の朝会つた時には声は戻つてたから日常生活には問題ないはずだよ」

一番の問題はちゃんと歌えるのかどうかだ。

もし歌えなかったら、猫耳がここを乗り越えられなかったら。

いや、そんなこと考えるのは野暮かな。

猫耳に本心を伝えた以上、今は信じて待つしかない。

あこちゃんは私の言葉に「よかつた〜」と胸を撫で下ろしていた。それはりんりんも同じ様子だった。

「Poppin' Partyの曲って落ち込んでるときに聞くと元氣になれるからあこは好きなんです！」

「……………うん……………そうだね……………」

「ああ。私も、そう思うよ」

元氣を貰える曲に仕上がっているのはあいつの元氣さが歌に乗るから。前向きな歌詞を穢れを知らない純粹でまっすぐな笑顔で歌うから。みんなに元氣を与えようという氣持ちをもっているから。

だから変な言い方かもしれないがこうなるのは当然なのだ。ただそれを当然のようにできてしまうのは才能でしかない。あいつにか出せない誰かへの歌。

きつと私はどこかでそんな歌を歌える猫耳を羨んでいたのかもしれない。

「ねえ朝日さん、今度Roseliaと一緒にライブしましょうよ！絶対楽しいですって！」

「そういうのは私じゃなくて猫耳たちに言え。私に言われたってどうしようもないぞ。そっちだって友希那に確認取らないとできないだろ……………」

友希那の了承さえ取ればどうにかなるだろう。なんせこっちにいるのはライブやイベント事の大好きな連中ばかりなんだから。

そう思っているとテーブルの上に置いていたスマホの画面が点灯した。それに目を移せば送り主は猫耳だった。

『今から蔵に来られますか？』

そんな短い文章。だけどそれが大切なことだと直感的に判断でき  
て。

私はテーブルに置かれていた伝票を見てカバンの中から財布を出  
す。

「悪い。用事ができたから今日は先に帰るな」

「……戸山さん、ですか……?」

「ああ。お金は渡しとくから」

「わかりました!また行きましようね!」

「もちろん」

二人に笑いかけて私はファミレスを出る。

走って蔵を目指した。

◇◇◇

蔵の扉を開けばそこにはP o p p i n , P a r t y全員が揃って  
いた。

私を待っていたのか、私が入ってきた瞬間に空気が変わった気がし  
た。

猫耳が真剣な表情で私を見つめる。他のメンバーはそれぞれの担  
当の楽器を構えていた。

「朝日先輩。私たちの音楽、聴いてください」

目の前の丸椅子に座れば始まったのは「前へススメ」

ただ前に聞いた時とは少しだけ違った。

歌割りが違う。前聞いた時は全て猫耳が歌っていたのに、今はみん

なで歌うパートが増えていた。

りみちちゃんから始まりおたえ、有咲、沙綾へとバトンが渡る。そして猫耳に渡った瞬間、真剣な眼差しを私に向ける。

猫耳一人を周りのみんなが支える。それがこいつらが導き出した答え。一人で背負わなくてもいいと知った猫耳は笑顔でその歌を歌っていく。

猫耳の笑顔を見ていなかったのはここ一週間くらいなのに随分久しぶりな気がした。どれだけの笑顔を毎日振る舞っていたのだろうか。そして私もその笑顔に多少なりとも元気をもらっていたらしい。

この曲は、みんなで歌ってなお輝く。

それが実感できた。

最後のフレーズを弾く。

終わってほしくない。けど終わってやりきった表情を見たいとも思う。ああ、矛盾してるな。

別にいいか。これを一番最初に見られたのはきつと私なんだから。その事実だけで十分だ。

「どう、でしたか……？」

最高の演奏をしても当本人は無自覚らしい。

まあ、それが猫耳らしくていいか。

「……なあ猫耳。お前はこれを、どんな気持ちで歌ってたの」

「みんなの、ポピパだけじゃなくて他の人たちの、たくさんの人の背中を押せるように。そんな気持ちを込めて歌いました」

意思はぶれない。きつと今回のことでさらに強くなった想い。私は、もう支えなくなつた方がいいのかもな。

一度息を吐く。そして優しい口調で言った。

「よかったよ。今までで一番上手かった」

「……!!」

猫耳だけじゃない。他の四人も目を開いている。

なんだよ全員自覚なしかよ。必死すぎ。そこもいいところか。

「オーディション、頑張れよ」

笑いかければ私の胸に飛び込んできた猫耳。

ギターを持ったまま抱きついてくるから焦って、怒りたかった。けど涙を流す猫耳にそんなことできるはずもなく頭を撫でる。

「よくやった」と言えば、さらに泣き声の大きくなった。

## SPACEと私と後輩と。

誰かの演奏をライブハウスでまた聞く日が来るなんて昔の私は想像していたのだろうか。

答えはきつとNOで、踏み出さなければいけない一歩であることも知っている。そのうえで踏み出すことはないと思っていたふとどきものだ。

踏み出しただけ、その勇気を出しただけいい方だと私は思っていた。

震える指先でその扉を開く。

あの日から何も変わっていないそこは昔を思い出させるから正直好きではなかった。

「すみません、オープンの時間はまだ先で……」

「ちよつと待ちな。あんた、もしかして」

私に気付いて声を掛けた女性とそれを止めた女性。

ああ。本当に、貴方も変わっていない。

「お久しぶりです、オーナー」

「まさか朝日かい？」

オーナーは私を見て目を見開いていた。やっぱりオーナーも私のこんな姿を見たら驚くよね。

だって前来た時とは、変わっているから。

「随分変わったね。一瞬誰かわからなかったよ」

「そう言うオーナーは何も変わってない感じがしますね」

「オーナー。こちらの方は？」

私に声を掛けた女性が問いかける。最近入ったスタッフなのだろう。知らなくて当然。

むしろ、知られていないほうが好都合だ。

「初めまして。氷川朝日と言います。Roseliaの紗夜とPasetel\*Palletesの日菜の姉です」

「ああ！道理で似てるなーって思っていましたよ」

女性はそう言って両手を合わせ納得した様子だった。

Roseliaはここで演奏していることもあるしパスパレはアイドルという括り。多分知られているだろうと思っていたが、本当に知られているとは。

私の妹たち、有名人すぎないか？

「朝日は昔ここで演奏してたんだよ」

「そうだったんですね。それなら何か楽器が弾けるんですか？」

「そう、ですね。一応ギターをやっています」

「妹さんたちと同じなんですね」

紗夜と日菜が憧れて始めた楽器。それが誇らしいようなむずがゆいような。

私がやっていなかったら誰も始めていなかったであろうそれは言わば私たちを繋ぎ止めてくれた運命なんだろう。とか、柄でもないことを考える。

「それで今日はどうしたんだい。オープン前に来るだなんて」

「……私の弟子がお世話になったみたいなのでお礼を言いに来たんですよ」

「弟子？」

「Poppin' Partyの戸山香澄です。オーナーが色々現実突



き付けてくれたおかげで成長できました。ありがとうございます」

「……あんた、本当にそういうところは変わってないね」

これは変わっていないところなんだろうか。自分じゃよくわからない。

「それだけで来たわけじゃないだろう?」

「そうですね。あとはSPACEが閉店するって聞いたので最後にと  
思って」

「……そうかい」

それを聞いたオーナーはそれ以上何も言う気配はない。ただ杖を  
持ったその手に少し力が入っているのを見逃さなかった。だから私  
はもう少しだけここにしようと思った。

「SPACEがなくなるの、寂しいです」

「もう決めたことだから何を言っても私は揺らがないよ」

「そういうところ、オーナーらしいですね」

「……あんたは」

「はい?」

「あの頃のアんたは私が出会ってきたギタリストの中でも上手い方  
だったしプロにでもなるんだと思っていたよ」

「あははっ。さすがに褒めすぎですよ」

「事実だよ」

オーナーがそう言ってくれるのは単純に嬉しかった。音楽に本気  
の人だと知っているから。目指していた時期もあるんだし嬉しくな  
いわけがない。だけど。

「……そう言ってくれるのは確かに嬉しいです。けど、私はものすご  
く弱いからです。だからあの日もあのまま逃げ出したんです。全部

終わりにしたかったんですよ。何もかも」

「あなたの気持ちが変わらないわけじゃない。ただだからって諦めるようなやつじゃなかっただろう」

「……色々ありましたよ。この中学の頃から今に至るまでに。本当に嫌で辛くて自分が嫌いになることだって多かったです。」

だからここには。いえ、ここだけじゃない。ライブハウスって場所に誰かの演奏を見に来ることはもう二度とないって思っていました」

けど最後なら来れてよかったと思う。またオーナーに会えてよかったと思う。あのままお別れというのはあまりにも寂しすぎたから。

「今まで、ありがとうございました。ここで私たちを使ってくれて。あいつらもきつと感謝してると思います」

「私はある日、間違っていると見えなかったのが今でも心残りだよ」

「あれは私の落ち度の問題でしたからオーナーは何も悪くなかったですよ」

そう。あれはあくまでも事故であり私だけの失敗だった。だから私以外の人間は何も悪くない。それは割り切れているからいい。一番割り切れていないのは私の周りだけだったのが問題だっただけだ。

「あの子たちもあなたが来なくなってから見なくなったが元気にしてるのかい」

「……さあ。私もよく知らないですから」

あんなことがあって会えるほど私の肝は座っていない。裏切った人間を受け入れてくれるとは思えない。そんな判断の結果だった。

ここにいたって深堀されるのは過去のことだけ。ならもう潮時だ。これ以上あの日を振り返る必要はない。

「それじゃあ私はこの辺で。最後のライブ、楽しみにしてますね」

「朝日」

「はい？」

「っ……」

それは今言わないでほしかった。私がまた、繰り返したらどうする気なのさ。

その言葉に返す言葉はなく、私は再度扉を開く。

段々と熱くなり始めている日差しが私を攻撃していた。

◇◇◇

二時間もすれば最後のライブということもあって人が押し寄せていた。私は関係者という立場を使ってすぐに中に入れたけどあれを並んで入ろうと思うと人によって大変な目に遭うのは目に見えていた。本当に関係者チケットをくれた有咲たちには感謝しかない。

「……何してんだ」

そんな感謝は一度置いておこう。

私の目の前には楽屋の扉の前で佇んでいるポピパの姿。一度扉を開いたかと思えばすぐに閉じる。それを何度か繰り返していた。

いや、本当に何してるんだよ。

「あっ！朝日先輩！」

「もう来てたんですね」

「ああ。てかなんで楽屋入らないの？」

「それはその……」

歯切れの悪い有咲と苦笑いしている沙綾とりみちゃん、いつも通りの猫耳とおたえ。

本当にどうしたんだこいつら。

そう思っているとその扉が勝手に開いた。中には見慣れた人物。

「ふっふっふっ。漆黒の闇より現れし、混沌を司る魔王！宇田川あこさんじょー！ドーン!!」

「……あ、あこちゃん……!」

「あ、あこちゃん!?りんりんまで!」

「あっ！朝日さん！こんにちわ!」

扉の先にいたのはあこちゃんとりんりん。制服姿の彼女たちは笑顔に向けていた。

「今日のライブ見に来てくれたんですか?」

「うん。けどRoseliaも出るなんて知らなかったよ」

「……氷川さんから…聞いていないん…ですか……?」

「何も。なんだよ紗夜のやつ。教えてくれたっていいのにさ」

紗夜が何か言ってた記憶はないし聞き逃していたということもないはずだ。つまり紗夜には何も言われていない。どうして言わなかったのだろう。ポピパが参加するなら絶対来ると思ったからだろうか。

「朝日先輩と燐子先輩とあこって仲良かったんですね。私初めて知りました」

「ゲーム仲間なんだよ」

「オフ会もよくやるくらい仲良しだもんね!」

あこちゃんが周りに見せつけるように勢いよく飛び込んでくるもんだからしつかり受け止めた。抱きしめられた身体。優しく頭を撫でてやる。

……有咲からの視線が痛い。

ふと部屋の中を覗けば出演者であろう人たちが大量にいた。それを見てなんとなくポピパの意思を感じ取る。

こりや、有咲とかりみちゃんの性格だと中に入るまでが至難だ。てか人多すぎだし、外で着替えた方がよさそうだな。

「お前ら、ここから少し行った先にスペースがあるからそこで着替え  
て来いよ」

「そんな場所あるんですか？」

「ああ。人気もないし着替えて待つてる分には十分な広さだと思う」

「へえ。朝日先輩よく知ってますね。ここで演奏したことでもあるんですか？」

「……まあ、昔ね」

それはきつと好奇心から出た言葉。だから彼女たちに非はない。けど思い出させないでほしかったって、そう思っている。

「いいからさっさと着替えに行けよ。時間迫ってるだろ」

「あ、ほんとだ！みんな行こう！」

「……あこちゃん……私たちも……行こう」

「うん。そうだね。朝日さん、また後で！」

ステージに出るみんなと別れてやることのない私だけが残る。さすがにここにいるのは邪魔だから移動することにした。

とは言え開演の時間まではまだ時間がある。ここで時間を潰せるスペースがないことくらい知っていた。どうしたものかと途方に暮れる。

そんな時にふと目に入った倉庫。暇だった私はギターでも借りて弾いておこうと思った。  
それだけだったのに。

「っ……っ」

その真っ赤なボディには見覚えがある。むしろ見覚えしかない。あの日何度も後悔することになった、ある意味原因でもある存在。なんでここにあるんだよ。だってオーナーには。

「……見なかったことにしよう」

ああ。ここには何もなかった。だから私は何も見ていない。

そう自分に言い聞かせてカフェに向かった。異常なほど甘ったるい飲み物が飲みたくなったから。

舞台には魔物がいる。

どうして、こうなるんだ。ここは大事な最後の舞台だぞ。そう思ったって現実是不変ならない。

舞台袖には泣き出しそうなギタリスト。大切な私の後輩。私だって怖いんだ。知っているから。こうなったギタリストの末路を。だからこそそれだけは辿らせたくなかった。

震える指先を握りしめて大丈夫だよって笑って。

私は昔の仲間をそつと手に取った。

◇◇◇

「姉さん？そんな所で何をしているの？」

「……紗夜」

倉庫の中にいた私に声を掛けたのは紗夜だった。ゴシツクなステージ衣装を身に纏って私の隣に並ぶ。何故か不安そうな顔をしていて心配になった。

「どうかした？」

「倉庫の中で立ち止まっているから少し驚いたのよ。何をしていたの？」

「……いや。ちよつと思ふことがあつて。別に大したことじゃないよ」

「これは、ギターね。これを見ていたの？」

紗夜は私の言葉を聞いた後に目に入ったのであろう真っ赤なギターに近づいた。それを止めるように腕を掴めば紗夜は不思議そうな顔になる。

「姉さん？」

これは呪いのギターだから。触っちゃだめだよ。そんな根拠もないことを思いながら笑うんだ。

「私は紗夜に聞きたかったことがあったんだけど」

「何かしら？」

「どうして今日ここで演奏するってこと教えてくれなかったんだよ。私、あこちゃんとりんりんがいるの見て初めて知ったんだけど」

そう言えば紗夜はきよとんとした。なにその顔かわいい。と思えばすぐにその表情が真剣なものに変わった。

「日葉には話していたから姉さんにも話したつもりでいたわ……」  
「おい」

真剣な顔で言わないでほしかった事実。こんなんでも姉なのに。同じ家に住んでるのに。言うタイミングならいくらでもあったはずなのに。

「私、そんな子に育てた覚えない」

「何言ってるのよ」

「私は紗夜の保護者だから」

「本当に何言ってるのよ」

私は紗夜から直接聞きたかったのに。



そう零せば紗夜は申し訳なきように眉を下げた。

「それは、ごめんなさい。だけど聞いていなくてもPoppin' Partyに付き添うと思っていたから大丈夫かと思って」

「そりやあまあ、大切な弟子たちがいるから当たり前だろ」

「姉さんにそんなことを言わせるだなんて驚きね」

「どういう意味だよおい」

「昔の姉さんが聞いたらびっくりするでしょうね」

「案外そうでもないんじゃない？私年下は好きだし」

「……色々問題のある発言に思えるわね」

「いつになく酷いな」

そんなくだらないやりとりに二人で笑いあって私たちは倉庫から出た。

上手く誤魔化せただろうか。誤魔化せているといいのだけど。

「紗夜の演奏を間近で見られる機会なんて今までなかったから新鮮だね」

「それは姉さんにチケットを渡しても行かないの一点張りだったからでしょう……」

「あとは紗夜がバンドメンバーとケンカして抜けたりしたからね」

「……それに関しては何も言えないわね」

紗夜がギターが存在を思い出す前に私は次の話題を切り出す。開演までの時間を計算してもそろそろ準備をしなければならぬだろう。そう思い楽屋までの道を進む。

「まあ、こうやって紗夜の演奏が見られるならいいかな」

「……姉さんは」

「ん？」

「姉さんは、またバンドを組もうとは思わないの？」

その言葉に私の足が止まった。つられて紗夜の足も止まる。二人の間に静寂が流れた。

自分で壊した心地のいい場所。

それを、また求めてもいいのだろうか。

私は自分の手を見つめ、ギュツと握りしめる。そして紗夜に困ったように笑った。

「……どうかな。チャンスがあるならやりたいと思うよ」

曖昧な返事をして紗夜を楽屋へ押し込む。

少し悲しそうな表情をしているのはきつと。

「おいおい。ステージ前から悲しそうな顔は似合わないぞ？」

「姉さん。私は」

「今は言うなよ。お前の演奏を待ってる人たちがいる。だからそいつらの想いに応えて来いよ」

応えられなかったやつが何を言っているんだか。

逃げて今も中途半端な形で楽器を弾いているくせにどの口がそんな偉そうなことを言っている。

守れなくて逃げた卑怯者の声が届いてもいいものなのか。

頑張って紗夜に口角が上がった表情を見せる。

正直、笑えている自信がなかった。

◇◇◇

ライブは、時間通りに始まった。

Poppin', Party, Roselia, CHISP Aを含め全部で六つのバンドが順番に演奏を披露していく形になっている。

関係者席である二階のスペース。そこは私の他に参加者たちの保護者や友人らしき人たちで埋まっていた。それぞれがペンライトを振って、けど私は振らずに一番後ろの方で見守っていて。

オーナーの姿はここにはない。多分舞台袖から参加者たちの演奏を見ているんだろう。前だつてそうだった。

1バンドで披露するのは最大四曲。四曲やらないバンドもあるから全体で約二時間半ほどのライブ。まあ何バンドも集まっているのだからそれくらいやつて当然だろうと思いつつ演奏を眺めていた。

全然知らないバンドだけどオーナーに参加を許されただけあつてやっぱり上手い。きつとあの頃の私なんかよりもずっと強くていい子たちなのが演奏から伝わってくる。

それが少しだけ羨ましくて知りもしない彼女たちに嫉妬する。

随分心の狭い人間になったものだ。そう考えるのもだいぶ今更な気はする。

「こんばんは。Roseliaです。早速だけど一曲聞いて」

Roseliaは真面目なやつが多いだけに他のバンドより一回りも二回りもレベルが上だと感じた。やはり練習量が違うのか、完璧にでも個性のあるそんな演奏。

昔よりも自分の音を手に入れている紗夜のギターが奏でる音が心地いい。

普段通り周りを支えているリサの低音に安心感を覚える。

かつこよさを追求し見せ方を徹底しているあこちゃんのドラム。

綺麗で美しいというキーボードならではの印象を与えるりんりん。そして力強くて伸びのある友希那の歌声。

その中で演奏できたらどれだけ幸せだろうと考えて、やめた。

友希那が私の実力で Roselia に参加させてくれるわけがない。完成されたバンドにわざわざ歯車をつけ足して壊す気にはなれない。

あり得もしない未来のことを考えても空しいだけだ。

知っている。何度も願って叶わなかった夢があるから。

だから私は何かを望んだりしない。どうせ叶いやしないんだから。

「こんばんは！CHiSPAです！まずはメンバー紹介から」

CHiSPAは沙綾が加入している時に少しばかり一緒に練習していた時期がある。とは言え隠したいことがあったからわざと距離を置いていたし夏希とは学校で会っても一言二言話して終わっていた。これからはもつと話せるといいんだけど。

CHiSPAの演奏は基本元気が伝わってくるものが多い。それは彼女たちの人柄なんだろう。

夏希はがむしゃらだけどもつすぐに。

文華は夏希に寄り添いつつも周りとのバランスを取って。

真結は自由に、けど羽目は外しすぎず。

さとちゃん全体を導いて。

バランスの取れたいいバンドだと思った。相当練習したんだろう。前よりも格段によくなっている。これならオーナーに認められて当然だと思った。

「朝日ちゃん！」

突然真横の扉が開いたかと思えば呼ばれた名前。そこには朝オーナーの隣にいたスタッフの女性がいた。確か名前は真次凛々子まつきりりこさん。慌てた様子だった。

「どうしたんですか？」

「一緒に来てほしいの。アクシデントが起きちゃってオーナーが朝日ちゃんのことを呼んでるの」

アクシデント？このタイミングで？しかも私を呼ぶって一体どういう状況だって言うんだよ。

とりあえず私は凛々子さんの言葉に頷いて後ろをついていく。向かう先はどう考えても舞台袖で、そこに入った私は硬直した。

泣いていたのだ、猫耳が。他のメンバーが必死に励ましているのがわかる。

「おい猫耳！どうした何があった！」

私は猫耳に駆け寄って肩に手を置く。けど猫耳は泣いたまま。状況が読めなくて困惑する。

「朝日先輩！」

「有咲！何があったか簡潔に説明しろ！」

「舞台袖で待っていたら香澄のギターのストラップが切れて！」  
「っ!？」

まさかと思った。急いで周りを見渡せばオーナーと凛々子さんがなにやら話し合いをしていた。その手には猫耳の相棒であるランダムスターが握られている。私と目が合って、こちらに近づいてきた。

「朝日。頼みがある」

「……時間稼ぎ、ですか」

言われなくたってこの状況ならすぐに理解できた。オーナーは表情を変えない。前にもこのトラブルがあったからだろうか。曇るのは私の表情だけだ。

「この子の相棒を直すのに約十分。それまでの時間をどうにか繋いでほしい」

CHISP Aの演奏はもう終わる。残るバンドはポピパだけ。他のバンドがもう一度出るといふ選択肢はない。そしてこの場で演奏できるのは私だけ。

こんなの選択肢がないのと同じだ。私は、ステージには立ちたくないのに。だけど。

ふとポピパのメンバーを見渡す。不安そうな顔だ。とても演奏なんてできそうにない。これは、誰かが励まさないや今日が最悪な思い出になることが容易に想像でいた。

もしかしたら猫耳は、ギターやバンドのことが怖くなってしまいかもしれない。

それは、それだけは絶対、あっちゃいけない。二の舞を作ってはいけない。作らせたくない。

立ち上がって走った。目指すのは倉庫。

真っ赤に染まったそいつは私をどういふ風に見ているのか私にはわからない。

あの日のことを謝れていないのだから怒っているのかもしれない。一年以上ここに置き去りにしていたのだから許してくれないかもしれない。

「……お願いだ。力を貸してくれ」

今日だけは、怖さもすべて投げ出して。  
まっすぐ、君たちへ勇気を届けたい。

ストラップを首から掛けて私はみんなの元へ戻る。何故か驚いた  
ような顔をしていた。

そんなに赤は似合っていないだろうか。髪をポニーテールに結つ  
てオーナーを見る。

「暴れて来な」

「……はーい」

それは約束できる自信がないけど。

舞台袖からはCHiSPAのみんなが戻ってくる。もう時間か。  
早いな。

「あ、朝日先輩！大丈夫なんですか!？」

「それは、どういう意味で？」

「手首とか！」

有咲は心配性だな。有咲だけじゃない。みんな心配しているのは  
同じだ。紗夜だって私を見つめている。そんな不安げな表情に大丈  
夫だよって笑いかけた。

猫耳に近寄ってその頭を撫でてやる。

「――見てろよ私のステージ」

最高に熱く盛り上げてポピパに繋げる。それが私の使命だと思っ  
たから。

ステージに足を踏み入れれば少し困惑の混ざったような歓声が聞  
こえた。当然かな。ソロで出る予定は今回なかったのだから。心配

しなくても全員私のファンにしてやるよ。  
傷ついたボディをひと撫でする。そしてギターをかき鳴らした。



紅のギターをこの手に。

「どうも皆さんこんばんは」

マイク越し響いた声。優しいお客さんは持っていたペンライトを振ってくれる。そんなお客さんにお礼を言ってMCを続けていく。

「今日はオーナーに頼み込んで飛び入りで参加させてもらうことになりました、氷川朝日と言います。お気づきの方もいると思うんですけどRoseliaの氷川紗夜は私の妹になります」

紗夜の名前を出せば一部が騒ぎ出す。Roseliaか紗夜の熱狂的なファンだろうか。

「このあと私の弟子にあたるPoppin' Partyが演奏するんですけどその前に少しだけ私の演奏を聞いてください」

これはただの時間稼ぎ。けどお客さんを退屈させてはいけない。退屈になって途中で退出されたら困る。「師匠がこの程度の実力なら弟子のレベルはもつと低い」なんて思われるのは心外なのだ。

あいつらは私よりも上手い。誰にも負けないくらい上手い。思いの強さに勝てるやつはいない。

そうだって証明したくて、猫耳を奮い立たせたくて私は今日ギターを取った。

けどそんなもの建前に過ぎない。ステージに立つ建前。それがなかったら絶対立つことはなかったSPASE最後のステージ。きっと私はステージに立つための理由が欲しかった。

立ちたくて仕方なかったけど過去の自分に拒まれて、このステージ

ただけけどその呪縛から解放されたのに内心どこかには怖がっている自分がいる。

そんな自分を笑い飛ばしてやりたくて、目をつぶって深呼吸をする。

私ができる曲数は多くても三曲。

あいつらには最高の形で繋げる。そのために場を温めよう。もつと熱くしよう。

やるのはBLACK SHOUT!

正直音数が足りていない段階であいつらの完璧な演奏とは程遠い。スコアなんて見たことはないし紗夜が弾いているのを数回聞いた程度。覚えていないところばかりだからアドリブを入れまくる。歌姫様には敵わない歌声。音程を維持しつつも自由な演奏。これが終わったらあいつらに怒られてしまうだろうか。

それでも今だけは。

届きたい気持ちを込めて弾いていく。

これが慰めになる確勝はない。

それでもやる価値はあるし彼女たちの記憶にトラウマなんてものを植え付けたくはない。

何よりも。

紗夜と同じステージに立てる日々を想像してしまったら離れたくもなくなる。

もしもなんてあるかもわからないそんな日を想像して意味はないかもしれない。

私が紗夜と一緒にステージに立ちたいというのは事実だから紗夜が隣にいてくれたらなんて思っただけ。

その日が来ないことをわかっているのに私は何度だって夢を見続

ける。覚えていない曲を選んだのだった。それがあつたからだ。

◇◇◇

「す、す、す……」

「すげえ……」

舞台袖で姉さんの演奏を見ていた私たちはほとんど全員が度肝を抜かれていた。宇田川さん、市ヶ谷さんから零れた言葉に幾人かが頷く。

私が姉さんの演奏を見たのは一番最近でも数か月前の Rose lia の練習の日。あの時も演奏技術の高さに驚いた。けど今やっているこの演奏はその時と比べ物にならないくらい上手い。いつの間にもこんなにも上達していたのだろうか。市ヶ谷さんの家にあるという蔵で練習しているのだろうか。

Poppin', Party の皆さんは姉さんに練習を見てもらっているのなら姉さんの演奏も見ているはずだ。それなのに全員が驚いている。

もしかしてステージに立ったことで成長したというの？昔から本番に強い人だったけどそんなことあるのかしら。

「……ここまでだとは思っていなかったわ」

BLACK SHOUT! をギター一本で弾いて、圧倒的に音が足りなくて下手したら何もやっているのかわからない状況。

それなのに、どうして姉さんの音はこんなにも響くの。演奏技術云々じゃない。心に訴えかけてくる何かがある。

同じ姉妹なのにきつと姉さんしか持っていないそれは私のことを

揺さぶった。

「市ヶ谷さんたちは、知っていたの」

「へ？」

「姉さんの演奏がこれほどのものだということを、知っていたんですか？」

市ヶ谷さんは私の問いかけに首を振った。

「朝日先輩が練習してるところを私たちはほとんど見たことないんですよ」

「見たことないんですか？」

「ないって言うのは少し語弊がありますけど……朝日先輩はなんでもすぐにこなしちゃうんですよ。だけどそれはきつと天才だとかそういうものではなくて努力して積み重ねているんだと思います。きつと朝日先輩の意地みたいなものだと思うんですけど、なんでもできるから頼ってくれてっていう心の表れなんじゃないですか？なんでも聞いてほしいって思ってるんじゃないですか？私はそうだって捉えています」

市ヶ谷さんが語ったのは姉さんの本心のようなもの。意地っ張りな姉さんのことだ。それはありえる。

けど本当にそれだけが理由だろうか。疑っているわけではない。何か隠していてもそれを全部無理に話してほしいとは思わない。言いたくなかった時に言えばいいと思っている。

今の姉さんは、どこか怖がっているように感じた。

二曲目が始まる。二曲目はPoppin, Partyのティアドロップスだった。Poppin, Partyの中でもかっこいいに分類される数少ない曲。確か今回のセットリストには入ってなかったはずだ。

ギターがかっこいいこの曲。花園さん、戸山さんとはまた違った演奏。アレンジの入ったそれはPoppin, Partyの奏でものとは別物だ。

「あれが、ティアドロップス……？」

「私たちが弾くのと全然違う……」

Poppin, Partyの皆さんも初めて聞いたのか驚いていた。ここにいる全員が姉さんの演奏に引き込まれている。

弾き切れば観客からは拍手と歓声が響いていた。

『ありがとうございます。残念なんですけど次が最後の曲になります。次の曲は私の始まりの曲です』

ふと姉さんがこっちを向いた。目が合えば笑っていて、胸が高鳴る。

次は何をするの？って昔の私が顔を出す。無邪気で私のできないギターを弾ける姉さんのことを純粹に尊敬し憧れていた頃。

自由に楽しそうに弾く姉さんの姿を見るのが好きだった。

私は姉さんの弾くギターの音が好きだった。

あの頃の音は、もう聞けないんだと思っていた。

三曲目に姉さんが弾いたのは懐かしいあの曲。私たちがギターを始めようと思ったあの曲。曲名はなんだっただろう。姉さんに聞いても教えてもらえなかった。調べても出て来ない。おそらくオリジナルのもの。

あの頃と、なんら変わりのない音だった。

かっこいいのにその裏に隠れたどこか悲し気な曲はどこか姉さん

と似ている。

ねえどうしてそんなに悲しそうなの。私がかしたなら謝るから。だからお願い。笑顔を見せてよ。

そう言いたくなるような音。あの頃はただいい曲としか思わなかったが、あの頃の姉さんの想いを込めていたのだろう。泣きたくなる。

私は多分。姉さんのことを何も知らないのだと思う。

昔は隣を歩いていたら姉さんの考えていることは手に取るように分かった。

けどいつの間にか姉さんは一歩前を歩くようになって。私たちが進むのに邪魔なものを率先してどかしてくれたから私たちはスムーズに歩き続けることができていた。苦労も理不尽なこともたくさんあったのに私たちに何も悟られないまま文句一つ言わずにやってくれた。

私たちはずっと姉さんの背中に守られて生きて来たから、いつしか正面から姉さんを見ることはなくなっていた。とても自然なやり方だった。

趣味だったギターがいつの間にか家からなくなって、引きこもって、と思っていたら身体に傷を作って。

すべて私たちがのためなんて今だから理解できていること。距離を置かれていた頃は姉さんの抱えているものを知ろうとも思わなかった。そんな余裕なかった。私は私で必死だった。

なんて自分勝手な話だろう。自分のためにしか行動できていなかったというのに、それでも姉さんは私のことを見捨てないでくれ

た。

ずっと大切に私のたった一人の姉さん。

そんな姉さんと叶えたい夢はただ一つだけ。

「いつか、一緒のステージに……」

そんな声は観客の歓声にかき消された。

◇◇

紅のギターの音を止める。私の耳に届くのは荒い息遣いと歓声。私の名前を呼ぶ声に拳を突き上げればさらに声が上がった。横目でステージ袖を見ればそこにいるのは弟子たちの姿。ちゃんとランダムスターを持っていた。

まっすぐ進んで猫耳に拳を突き出した。コツン、とぶつかり合う。それに笑みが零れた。

「全力で暴れて来い」

「はいー!」

真剣な表情でステージに向かった五人。それに安心する。大丈夫な気がした。

ギターのストラップを首から抜いて近くにいた夏希に渡す。目の前に紗夜がいるのを確認してそこに抱きついた。

「ね、姉さん!?!」

驚いた声が耳に届く。他の周りにいたメンバーを揃って私の心配をしていた。震える身体で紗夜の服を握りしめる。

「大丈夫なの!?どこか痛めたりとか……」

「うるさいな……あいつらの演奏が聞こえないだろ……」

そう呟けばみんな私に気を遣ってか静かになった。目を閉じてその音を聞く。

安定した沙綾のリズム、それに寄り添うりみちゃんの低音、有咲のしなやかなメロデー、おたえのめちやくちやかっこいいギター、そして猫耳のまっすぐで繊細な音と歌声。

みんな上手くなつたと思う。特に猫耳は、各段に進化している。

上がる歓声は、あいつらの成功をわかりやすく表現していた。

それがただ嬉しかった。



名前で呼んで。

SPASEのライブが終わり、私とポピパのメンバーは蔵で打ち上げをしていた。ジュースやお菓子をテーブルに広げてライブのことを話し合っつて。話が尽きることはない。

RoseliaやCHiSPAとの打ち上げはまた別日にやるらしくそこに私のことも呼んでくれると言ってくれた。嬉しい限りである。

「朝日先輩！今日のギター演奏すごかったですね!!」

「うん！すつごくかっこよかったです!!」

「私、感動しました!」

「そんなに褒めるなよ。別に大したことなかったろ?」

「いやいや。あれは本当にすごかったですつて!」

「本当ですよ。いつの間に練習してたんですか?」

さつきから似たようなことばかり言われている気がする。

「私の演奏がすごかった」。皆、同じだ。個人個人感想を言っつてはいるものの私のことばかり褒める。今回の主役は私ではなく目の前の五人なのに。私はあくまでも繋ぎでしかなかったのに。

「私の話はいいんだつて。それより、今回のライブどうだった?」

「はい!楽しかったです!」

「そうだろうな。お前はいつも楽しそうだ」

「けど楽しくできたのは朝日先輩のおかげですよ」

「へ?」

「だつて朝日先輩があの時私たちを元気づけてくれたから。だから私はステージに立てたんです」

ありがとうございます、なんてお礼を言って頭を下げる五人。顔を上げた先には笑顔があった。それに安心する。

よかった、引きずってなくて。よかった、壊れなくて。

「私の音楽で救えるならいくらでも演奏するって。いくらこの身体がボロボロになってもそれは変わらないよ」

「それはダメです。朝日先輩にはこれからも支えてもらわなきゃ困るので」

「だいたい香澄やおたえが暴走した時に誰が止めるんですか」

「それは有咲の役目でしょ？」

「一人でどうにかなるわけじゃないですか」

「そこをどうにかするのが有咲の役目じゃん。がんば」

「ノリが軽いんですよ！」

「有咲のつつこみ、私は大好きだよ！」

「私も好き」

「誰のせいでつつこみすることになってると思ってるんだよ!!」

そんなやりとりで笑って、どれだけ私にとって心地のいいものなのか実感して、このメンバーが大切なんだと、守るべき場所なのだと改めて思った。

ここは私を認めてくれる居場所なのだから。

「よし。香澄、これから有咲のつつこみが繁盛するように私たちが一曲歌っちゃおっか」

「そうだね！歌っちゃおう！」

「ちよっと待て猫耳」

自身のギターを持ち出して歌おうとしていた猫耳を引き止める。不思議そうな顔をしたのは猫耳だけじゃない。

「朝日先輩？どうしたんですか？」

「猫耳。ちよつとギター見せろ」

「はい」

差し出されたギターを受け取ってストラップと本体を見る。

ランダムスターに傷ついた痕はない。ストラップはオーナーの計らいでか新しいものになっている。これなら多分、これから使う分にも問題はないだろう。

「ねえ猫耳」

「はい？」

「猫耳はさ、ギター上手くなったよね」

「……え？」

「うん。上手くなった。師匠の私が言うんだから間違いないよ」

聞き間違いだと思ったのか猫耳が聞き返す。私はそれにクスッと笑ってギターを渡した。

カバンから楽器店の袋を取り出して猫耳の前に立つ。

これはただの私の気持ちだ。だから受け取ってもらわなければ困る。

「今回のライブが終わったら渡そうと思ってたんだ。師匠から弟子に向けてのプレゼント」

猫耳は目を丸くして私の手から袋を受け取った。

「な、なんですかこれ」

「開けてみればわかるよ」

それだけ言って私は笑う。中身を取り出す猫耳が目を見開いた。私に目で訴えかけてくる。

「朝日先輩これ！」

「どう？びつくりした？」

袋の中身はストラップ。赤い本体に刺繍で P o p p i n , P a r t y と書かれたそれは数日前からこの日に合わせて知り合いに作ってもらっていたもの。喜ぶ顔が見れると思っていた。予想は的中。

「かっこいいライブをありがとう」

『そう言えば気になってたんですけど、先輩ってどうして香澄のこと猫耳って呼んでるんですか』

『どうしてって？』

『だって弟子って言うわりには扱いが雑だし、考えてみたら先輩が香澄のこと名前で呼んでるところ見たことないなーと思って』

『別に大した理由なんかないよ。初めて出会った時からそう呼んでる。それに今更呼び方変えるのもおかしくないか』

『そうですか？名前で呼んだら香澄喜ぶと思いますよ』

『そんなの求めてないから』

猫耳と呼ぼうとした時不意によぎったあの日の光景。

あーあ。私の負けだよ沙綾。

名前で呼んで、こいつの笑顔が見たいと思ってしまった。

「ありがとう香澄。お前は最高の弟子だよ」

「!？」

私の言葉を聞いた瞬間、香澄の目から涙がこぼれた。拭いても拭いても、それはとめどなく流れ続ける。泣き声が蔵内にこだまする。そんな香澄の頭を撫でればお腹に軽く頭突きされた。

「私、朝日先輩の弟子で良かったです!!」

顔を上げた香澄の顔は涙に濡れていた。  
そして何にも負けないくらい眩しい笑顔だった。

◇◇◇

「有咲。今日有咲の家に泊まってもいい？」

「はい。……え？」

蔵での打ち上げが終わりみんなで片づけをしている最中、私が投げた問いに有咲は頷いた。その後にキョトンとした表情を見せる。久しぶりに見たそんな顔に笑みが隠せない。

「な？いいだろ？」

そんな声に顔を赤く染める彼女は少なからず期待しているようだった。

◇◇◇

「有咲の部屋に来るのって久しぶりだなー。最後に入ったのっていつだっけ」

「私が高校に入る前でしたから三か月くらい前じゃないですか？」

ポピパのメンバーが全員帰った後、私は有咲の部屋に訪れていた。有咲曰く三か月ぶりの訪問だが前上がった時となんら変わりはない

ように思う。本棚の本の数が増えたくらいだ。並ぶ私の作品に嬉しくなる。

「三か月。……もうそんなに経つんだな」

「とは言っても蔵練の度に会ってるので久しぶり感はないですけどね」

「確かに言ってる」

まだ二年生になって三か月しか経っていないのに、思えば色々なことがあった。

新しいクラスメイトと仲良くなれた。

新しく愉快的な後輩が増えた。

新しい思い出ができた。

紗夜と日菜と仲直りできた。

私の秘密を打ち明けられた。

両親に想いを伝えられた。

大変なことも多かったけど乗り越えて今がある。

全部大切な思い出。

そして今日、新たな一ページを綴ることができたことだろう。

私は有咲の部屋のベッドに寝転がってそんなことを思っていた。

「有咲」

「なんですか?」

「今日のライブ楽しかった?」

「はい。とっっても」

ああ。そんな幸せそうな顔が見られるなら私は何度だってお前に尽くせる。

「朝日先輩が守ってくれたからですかね」

「え？」

「今日のライブ、不安だったんです。文化祭の時は知ってる人たちばかりだったから大丈夫だったんですけどライブハウスで演奏するのって初めてだったから緊張して、そんな時に香澄のアクシデントが起こって。正直失敗する未来しか見えなくて震えてました。もうダメだって、思っていました。」

諦めムードが漂って、怖くなって、そんな時に朝日先輩は現れたんです。

ギターを弾いて私たちに勇気を与えて、そのうえ会場を盛り上げて、本当にかっこよかった。

「やっぱり朝日先輩は私たちのヒーローですね」

ヒーローなんてたいそうな言葉、私に似合うものではないだろう。

それでも君たちの、君のためのヒーローになら何度だってなれる。そうだと自信を持って言えるから。

「有咲」

「はい？」

「好きだよ」

その言葉は引っかかることなくすんなりと口から出てきた。何度か瞬きをした有咲は少しだけマヌケな顔をしていて、そんな顔もかわいいと思った。

「文化祭の時の返事、まだしてなかったから。遅くなってごめんね」

「いや別にいいんですけど……」

有咲は困ったように頭を掻いていた。有咲のことだから照れると思っていたのにそんなことはないらしい。

「ん？どうかした？」

「なんか、告白の返事にはあっさりしてるなーって」

「もつと照れた顔でやった方が良かった？」

「そういうことじゃないですけど……」

これは疑われてる感じ？けど私が冗談でこんなことを言わないことくらい有咲なら理解してると思っていたのに。

まあ、わからないというのならわからせてやるだけだけど。

「確認ですけど後輩としての好きとかではないですよ？」

「あの日の告白は友愛としてだったの？」

もしそうなら有咲のことを惚れさせるまでだけど。

ねえそうじゃないでしょ？

有咲の好きは、それじゃないでしょ？

「有咲、こっち来て」

「な、なんでですか？」

「いいから」

私は寝転んだまま有咲に手招きする。疑問を持ちつつ近づいてくる彼女。手の届く範囲に来た瞬間、両手を有咲の首に回して引き寄せた。ギョツとした表情に笑いかけてそのまま唇を奪う。

私の身体を潰してしまわぬように彼女はどうか離れようと試みているけど私がそれを許さない。私に覆い被さるその熱が私のことを温める。

離れた時には二人して肩で息をしていた。赤らんだ表情についてやついてしまう。今の私はイタズラが成功した子供のように映っていることだろう。

「私の好きは、こういう好きだよ」



「っ……心臓に、悪いですよ……」

そんなこと言ってまんざらでもないくせに。

脱力した私の上で息を整える有咲はきつと傍から見たら私を襲っているように見えることだ。

そう言ったらどんなかわい表情を見せてくれるのだろうか。わくわくしてしまう。

「私、有咲のこと大好きだよ」

「わ、私も好きです！」

「これからもずっと、有咲のヒーローでいてもいい？」

「もちろんです。むしろそんな人、朝日先輩以外いませんよ」

満面の笑みを向けられ心臓が荒々しく脈打ちだした。たまらなくなつて有咲の背に腕を回した。

触れる体温に安心する。こみ上げる大好きって気持ち伝わるように力を少し強くして、永遠にも感じるこの時間にただ目を閉じた。

テストは留年を掛けた戦争なんだよ。

「ま、待ちなさい朝日！」

「そ、そうですよ朝日さん！」

「……それだけは……！」

「姉さん！さすがに非道よ！」

「お願い朝日！考え直して!!」

そんな風に懇願されたって問答無用。

今の私はお前たちの先生なんだから容赦はしないよ。

「さあ、お前ら。勉強の時間だ」

五人の嫌がる声が部屋中にこだました。

◇◇◇

今日はなんでもない普通の休日だった。

紗夜はバンド練習があつて日菜は仕事。私はポピパの練習もないという連絡を受けていたため家でNFOをしていた。

紗夜が練習ならりんりんとかあこちゃんも当然練習なわけで、ゲーム内のフレンドと共にボスを倒して素材集めを進めていく。レベル上げも兼ねたその作業。だがこれがそれなりに楽しい。

それをしている時、充電をしていたスマホのディスプレイが点灯した。

ゲーム片手間に覗けばそこには紗夜からのメッセージ。開けば「今家にいるかしら？」なんて簡潔な文章があつた。

それ以上のことは何も書いていない。急ぎなのかもわからないそれに返信はせず、通話を繋いだ。

そうじゃないとゲーム止めないといけないし、けど今ボス戦だから

それはできない。

ワンコールですぐに繋がったそれに私は用件を聞くことにした。

『もしもし』

『急にどしたの紗夜？』

『姉さん仕事申中だったかしら？』

『ゲーム中。今ボス戦なんだよ』

『それなら暇ね。ちようどよかったわ』

『別に暇じゃないけどな。で？どうしたの？』

『今から今井さんの家に来られるかしら？』

『リサの家？なんで？』

『それは、来てから説明するわ』

なんだそりゃ。意味深なことを言った紗夜は「お願いね」なんて言って通話を切った。

用件も言わずに呼ぶなんて一体どんな要件なのか。

考えたくもない。嫌な予感がする。

だがしかし妹に頼まれた以上断るといふ選択肢は存在しない。

ボスを倒し次第チャットで抜けることを伝えパソコンをシャットダウンする。

その間に紗夜から来ていた勉強道具を持ってきてという連絡に、なんとなく察しがついた。

なるほど。勉強会ね。夏休み前に定期テストがあるんだしそうなるよな。Roseliaの練習が終わってすぐに連絡が来たってことはRoselia内での勉強会なのだろう。

今までに紗夜が誰かと勉強会をしているところなんて見たことも聞いたこともない。

一匹狼は卒業したようでお姉ちゃん嬉しいよ。

だが、勉強会を開くということは、誰かの成績がやばいのかな？

そうだとすると該当しそうなのは……やっぱりあこちゃんだろうか。あの子に頭のいいイメージはないし、紗夜たちも全力で教えるだろう。

けど紗夜たちが教えられるのなら私が行く意味はさほどない気がする。

疑問を持ちつつも私はカバンに参考書と筆記用具を入れてリサの家を目指した。

この時の私は、これから先に待ち受けている試練をまだ知らない。

◇◇◇

「朝日、待ってたよ〜」

リサの家のインターホンを鳴らせばすぐに玄関が開いた。出てきたのはリサ。緩めの挨拶で出迎えられる。玄関で靴を脱げばそこには既にリサ以外に四つの靴が並べられていた。

「今日は朝日が来られて助かったよ〜」

「リサ。紗夜に言われた通り勉強道具は持ってきたけど今日つてやっぱり」

「うん。そう。今度ある定期テストに向けての勉強会だよ」

予想通りの回答に私は頷く。だがそれだけなら私を呼ぶ必要はなかっただろう。

そう思っつてリサに問いかける。

「定期テスト前なんだし勉強会をするのはなんとなくわかるけど、あ

る程度の範囲は紗夜が教えられるだろう？りんりんもいるし、私を呼ぶ必要なんてなかったんじゃないか？」

「いや〜……それが色々問題があつてね。紗夜と燐子だけじゃ手に負えないってことになったんだよね……」

リサは頭を掻きながら苦笑い気味に視線を逸らした。

紗夜とりんりんの二人が解決できないって一体どんな問題だよ。

私に解決できるものなのかそれ。

「ま、詳しい話はアタシの部屋に行つてからにするから。朝日は麦茶と緑茶だったらどっちがいい？」

「……麦茶」

「おっけー」

一度リビングによつて麦茶の入ったペットボトルとマグカップを取つたりリサと共に私は部屋へと向かった。

扉を開いた先に広がっていたのは広めのローテーブルに座っているりんりん、あこちゃん、友希那、紗夜の姿。手にはシャーペンを持って教科書を開いている。

「ええ？どういうこと!？」

「……だから、これは……」

「意味が分からないわ。これを勉強して何になるのよ」

「つべこべ言わずにやってください」

しかしそこには嘆きと放棄の声が二つ。

瞬時に胸騒ぎがした。ここは危険だと直感が伝えてくる。

だが来てしまった以上引けない。だから私は部屋の中に踏み入れた。

「姉さん。来てくれたんですね」

紗夜とりんりんの安心したとでも言いたげな表情に全てを察してしまった。

ああ。だから紗夜は用件を言わずに呼ぼうとしたのか。私の考えが浅はかだったよ。

目の前には教科書や参考書と睨めっこしているあこちゃんと、涼しげな顔でマグカップに口をつけている友希那。眉を顰める私を見て後ろのリサがまた苦笑いをした。

「……お前ら、とりあえず今の状況を一から説明してくれ」

「ええ。実は……」

私の発言で紗夜は説明を始めた。

◇◇◇

事の始まりは今日。Roseliaの練習後。

白金さんと宇田川さんが話していたことがきっかけでした。

「ねえりんりん！テストでわからないところがあるから教えて!!」

「……うん……いいよ……」

「ありがとう！あこ今回の範囲全然わからなくて……」

「宇田川さん。普段からちゃんと復習しておけばそうやって慌てなくて済むんですよ」

「うっ。それはそうですけど授業聞いてもチャンピオンなんですよんー」

「開き直らないでください」

私は宇田川さんに、失礼ながらあまり頭がいいという印象を持ったことがなかった。いつの間にかしみついてしまったイメージから考えても勉強をしている姿を想像できなかったということもある。

今までは何も気にしたことがなかったがテストの度、毎回白金さんに教えてもらっていたのだろうか。

「あははっ。あこはいつもテストギリギリになってから慌てるタイプだもんね〜」

「今井さんは知っていたんですか？」

「うん。ダンス部でもよく話すし多少はね。けどアタシはそこまで頭よくないし隣子が適任だと思ってたから手伝ったことはなかったけど……あこ、この前再試がどうか言っていなかったっけ？」

「そうなんです！あこ次のテストで点数が悪かったら放課後に再テストを受けないといけなくて……」

宇田川さんは中学生。しかも彼女の通う羽丘は私の通う花女と同じくエスカレーター式の一貫校だ。私が中学生の頃の話にはなってしまうが再試なんて受けたことがない。クラスに数名受けている生徒を見たことがあるが確か皆テストの点数が平均点を大幅に下回っている人たちだったはずだ。

その基準だとした場合、宇田川さんは今までのテストで相当酷い点数を取り続けていたということになる。

「……宇田川さん。その再試の日はもう決まっていますか？」

「確か先生は、悪かった科目×日数って言ってました」

「テストのある科目は？」

「五科目です」

「苦手な科目は？」

「こ、国語と社会は大丈夫なんです！けど他は……」

つまり、最悪宇田川さんは三日間バンド練習を休む可能性があるということになる。それはその間宇田川さん抜きで練習をするということだ。

もし仮にそうなった場合、今井さんや白金さんはどうにかなるが湊

さんは何を言い出すかわからない。かく言う私も事前にその話を聞いていなかったら呆れていただろう。否、既に呆れそうだ。

「でしたら私も教えます。そうすれば白金さんが仮にわからなくなっても大丈夫でしょうし一人で支える必要もないですから」

「……ありがとうございます……ごじます……」

「ねえ紗夜、迷惑じゃなければアタシと友希那も勉強教えてもらっていいかな？」

「ちよつとりサ。急に引つ張らないでちょうだい」

湊さんの腕を掴んでこちらに連れてきた今井さんは申し訳なさそうにそう言った。私がそれに二つ返事を返せば今井さんはホツとした様子で、笑顔でお礼の言葉を返した。

別に何人でやろうが勉強をすることに変わりはないし同学年だから復習や予習するだけのこと。それはすなわち自己のレベルアップに繋がるから私は迷惑だと思つたことはない。今井さんは私が断るとでも思つていたのだろうか。

「けど五人でやるとなるとどこか広いスペースが必要ですよね？宇田川さんたちはどこでやる予定だったんですか？」

「元々はあこの家でやる予定だったんですけど……」

「もし場所がないのならアタシの家使つていいよ」

「……いいんですか……？」

「うん。今お母さんたち旅行行ってアタシしかいないし。それに多分アタシの家の方がいいと思うんだよね……」

「それはどういう意味ですか？」

「え、えつと……」

意味深な今井さんの言葉に私は首を傾げた。

今井さんは言いにくそうに言葉を濁す。そして衝撃的な言葉を言い放つた。



「友希那の勉強見てくれない？アタシ一人の力じゃ手に負えないから」

「……………え？」

今井さんの言った言葉の意味が分からないほど私はバカじゃない。今まで気にして来なかった。否、酷いとは思っていなかったのだ。勝手にできているものだと思っていた。そう信じていた。だからこそ、その真実は私たちに衝撃を与えたのだ。

「友希那さん、勉強できなかったんですか？」

「できないんじゃないわ。やらないだけよ」

「それは言い訳のつもりですか」

宇田川さんよりも先に湊さんに呆れそうだった。

この発言、明らかに勉強をしてこなかった人のそれだ。普段が真面目であるからこそ勉強面もそうだと思っていたのに。

「今井さん、テストの科目は？」

「えっと。国語、数学、英語、化学、生物、日本史、の五教科六科目だよ」

「では湊さん。苦手な科目は？」

「……………」

「湊さん」

「リサ。用ができたから私は先に行くわね」

「逃がすわけないでしょう」

私の言葉に答えないままいなくなろうとする湊さんの腕を掴んで引き留める。

とりあえず今ので全科目苦手ということはわかった。これは湊さ

んのためにも教えなければいけない。

これはお節介ではなく使命感だ。

今井さんから湊さんの今までのテストの詳しい点数を聞いて絶句したのは言うまでもない。

◇◇◇

「以上が今日勉強会をすることになったきつかけです」  
「……」

それを聞いて私は頭を抱えた。頭痛がする。

やべえだろ全科目ダメって。大体授業聞いときやある程度は点数取れるだろうに。というかどれか一教科くらいはどうにかなるだろうに。

今までの授業何聞いてたんだよ。何を勉強してきたんだよ。

「とういわけで姉さん。姉さんには湊さんの相手をお願いするわ」

「うん。嫌だ」

誰がそんなやばい成績のやつ教えられるか。無理だろ。わけわからなさすぎて私が教えたくないわ。

「朝日。そこをなんとか……」

「いや無理。ただ授業を聞いてわからないなら理解しようとしてるって面を汲んで教えようと思うけどさ。こいつ、やる気ないだろ」

「失礼ね。勉強する気くらいあるわよ」

「勉強する気があるやつは『勉強して何になるのよ』なんて言わねえ」

来たばっかだけど帰りたい。

紗夜に視線を移せば静かに首を振られた。

「とりあえず一度友希那の勉強見てくれない？話はその後聞くからさ……」

「……はあ。わかった」

リサがここまで頼んでいるのだ。彼女に免じてここは素直に教えてやろう。

そう思った矢先、友希那がとあることを言ってきた。

「そもそも、どうして私は朝日に勉強を教えてもらわないといけないのよ」

「あ？」

「戸山さんたちが前に言っていたわ。朝日、貴方は学校の授業をサボっているのでしょうか。そんな人が勉強を教えられるとは思えないわ」

「……リサ、もしかしてこいつ」

「う、うん。友希那何も知らないんだと思うよ」

「湊さん、相当勘違いをしているようですね」

変わらない表情のリサに呆れた様子の紗夜。きっと私は紗夜と同じ表情をしていることだ。

「姉さんはこの間の模試で学年一位だったんですよ」

「え？」

「ええ！そうなんですか!？」

目を丸くする友希那とあこ。だが両者とも異なる理由だろう。

「いくらサボっていようが勉強できりや何も言われないってわけだ。んで？誰が勉強教えられないって？」

笑顔を向ければ友希那はすぐさまこの場から逃げようと腰を上げた。その肩に手を置く。そしてそのままその場に座らせた。

「逃げるなんて、許さないからな」

「……はい」

「困るのはお前だつてちゃんと自覚しろ」

「友希那さんが、お説教されてる……」

「……珍しいね……」

「これに関しては自業自得でしょう」

「あはは……」

「んなこと言っていないでお前らも勉強しろよ」

「勉強なんかできなくなつて音楽活動に関係はないわ」

「それで留年しても知らねえぞ」

テストは留年を掛けた戦争だつてことわかつてないな。

私は頭を抱える。今にも逃げ出しそうな友希那を捕まえて、ペンを走らせた。

これは自業自得の罰ゲームだよ。

勉強を始めて早二時間が経った。さすがに長時間の勉強は集中力が切れるため一度休憩を入れることにした。

あこちゃん超喜んでた。

本来なら友希那も喜ぶ、というか一息入れたところだっただろうけどそれは私がそれを阻止していた。

理由は――。

「朝日、休憩中なのに問題を解かせようとするのは止めてくれないかしら」

「お前に休憩が存在するわけねえだろボケ」

誰が今までの時間目を離れたら曲作りを始めていたやつに休憩なんて与えるかよ。

まだ大量にある問題のうち三問しか解けてないだろ。というかその問題も全部途中で諦めて私が解説したやつじゃねえか。

「ま、まあまあ。落ち着きなよ朝日」

「このままだとこいつ確実に赤点だけどいいのか？」

「それは……よくないけど」

「なら止めるなよ」

赤点取って困るのは誰だと思ってるんだ。

ため息をつく。乱暴に頭を搔けば紗夜がお茶を注いでくれた。これで落ち着けということらしい。

それを一気に飲み干し、私は再度友希那と向き合う。

リサが作ってくれたクッキーを食べ、リサが入れた紅茶を飲んで一息ついている。

何もしてないのにどうしてこいつは優雅に過ごしているんだろうと真面目に思った。

このままじゃ一向に勉強は進まないし、やっぱり友希那は勉強する気がないし、正直お手上げ状態だ。

「……なあ、私帰っていい？」

「ダメです。私たちだけでは手に負えないので」

なんで紗夜は私だったら手に負えると思ってるんだよ。私だって手に負えないわ。

ていうかりりんも紗夜も教えることがメインになってて自分の勉強が捗ってるようには見えない。これはどうにかしないとりんりと紗夜の成績が下がる可能性があるな。

まあ、紗夜がそんなハマするとは思わないけど。

何がなんでも勉強しなきゃいけない状況を作ればいいんだけど……。

「そういえばみんな今日の夕飯どうする？うちで食べてく？」

「え!?!リサ姉が作ってくれるの?」

「うん。そのつもりだよ?」

「わー!リサ姉の手料理だ!楽しみだなあ!」

「ありがたいお話ですけど今井さんに迷惑ではないですか?」

「全然。むしろ誰かのために作る方が作りがいがあるっつもんだよ。なんなら泊まっつてもいいし?」

「あっ……!」

そうだ。その手があった。この方法ならこいつに、こいつらの勉強が捗るかもしれない。

「……どうか、しましたか……?」

「いや、なんでもないよ。リサ、料理なら私も手伝うぞ」

「え、朝日って料理できたの？」

「できるも何も家で普段料理してんの私だぞ？」

「そうだったの？」

「ええ。私たちよりも姉さんの方が上手なのでつい任せる形に……」

「そうなんだ。それならお願いしようかな」

「りよーかい。紗夜、友希那の勉強見てて。りんりんとあこちゃんは頃合い見て再開してね」

「わかったわ」

「はいー！」

個々に頷き、返事をするのを見送って私は部屋から出ようとする。そこで一つ聞き忘れていたことを思い出して部屋を覗き込んだ。

「そう言えば苦手なものってあったりする？」

「あこ、ピーマンが苦手で……」

「……私は、セロリが……」

「はいよ」

それだけわかれば十分だ。そう思い私は先にキッチンに向かったリサを追いかけるように階段を下りた。

キッチンに着けばリサは既にエプロンを身に着けていて冷蔵庫の中を探っている様子だった。せっせと材料をキッチンに並べていく。

「この材料、カレーか？」

「正解。材料見ただけでわかつちやうなんて、さすが普段から料理してるだけのことはあるね」

「カレーの材料くらいみんな見慣れてるだろ。誰でもわかるつての」「あははっ。確かにそうかも」

リサに渡されたエプロンを身に着け私は食材を切っていく。炒めるのはリサの担当。いつも一人で作ってる分、手慣れた者二人でやっ

た時の速さは比べ物にならない。

とりあえずにんじんは普通に使う半分の量にしておいた。

「あれ？にんじん余らせないで全部使っていいよ？」

「あーいやー。全部は使わなくていいかな。後々紗夜に怒られそうだし」

「え？もしかして紗夜ってにんじん苦手なの？」

やっぱり、紗夜がにんじん苦手って聞いたら驚くよな。あいつのイメージ、めちやくちや好き嫌いとか苦手だから残すって行動嫌いそうなのに。

「すつごく意外……」

「そういうと思ったよ」

「紗夜はにんじんが苦手なんだね。覚えとこ」

「そういうリサは何か苦手な食べ物あるのか？あと友希那も」

「友希那はゴーヤかな。後味苦いの嫌いみたいで。ちなみにアタシは食べ物の苦手はないんだけどグリーンスムージーが苦手」

ほーなるほどね。

友希那はゴーヤ、リサはグリーンスムージー、紗夜はにんじん、りんりはセロリで、あこちゃんはピーマンね……って、ちよいまで。

「本当なら好き嫌いさせないように苦手なもの入れておきたいんだけどね。ちょうどゴーヤもセロリもピーマンもあるし。まあカレーに入れるにはちよつとって感じだから入れないけどね」

グリーンスムージーは一旦置いておくとして、ゴーヤ、にんじん、セロリ、ピーマンっていくらなんでも野菜に集中しすぎだろ。

なんだこの野菜苦手集団。あんだけいい演奏できるのに嫌いな食べ物ただのガキじゃないか。



「どうしたの朝日。頭抱えて」

「……なんでもない」

まあ、そのおかげで私のやりたいことは簡単にできそうだしいいか。

「なありサ」

「んー？どうしたの？」

「冷蔵庫にある食材なんだけど、後で勝手に使っても大丈夫か？」

「まあ、今日はお父さんもお母さんも帰って来ないから別に大丈夫だけれど何に使うの？」

「まあ、色々な」

リサの了承も取れたし完璧だ。私の策に抜かりはない。

「カレー、もうそろそろできるしあいつら呼んで来いよ。あとは私がやっとかからさ」

「……ねえ朝日。何か企んでない？」

「企むって何を？」

「……まあ、気のせいならいいけど」

リサは他のメンバーを呼ぶために部屋に戻った。

一人取り残された私はため息を零し呟いた。

「全く……察しのいいやつは嫌いだよ。………なんてね」

◇◇◇

誰かの家で食卓を共にする、なんて家族以外だと久しぶり。しかもこんな大人数というだけあって賑やかだ。いや、喋っているのは基本的にあこちゃんとりサくらい。紗夜と友希那とりんりんは適当に話すくらいだ。

だけど、なんだろうな。いつもの食卓では日菜がずっと喋っているし心地がよかった。

夕食を終えてみんなを部屋に戻した後、私は一人皿洗いをしていった。リサや紗夜は手伝うと言ってくれたが友希那とあこちゃんの勉強を任せるために先に部屋に行ってもらった。

リサは「朝日がいないと教えられないじゃ……」なんて心配していたけど、大丈夫だよ私が戻ったら嫌でもやらないといけなくなるし。その意味を知っているのは私だけ。

皿洗いが終わり次第私は準備を始める。

ミキサーはあつたし勝手に使ってもいいだろう。

なんせテスト前で、あいつらはRoseliaの練習に穴をあけたくないんだからな。

多少強引な策であっても、文句は言わせないさ。

「あつ、朝日お疲れ様〜」

部屋に戻れば勉強を始めて十分ほどしか経っていないのにも関わらず机の上に項垂れているあこちゃん、それにわたわたしているりん。ため息を吐きながらも参考書を開く紗夜に頭を悩ませているリサ、ゆっくり飲み物を飲んで何の焦りもない友希那。

何度見たって、カオスなことに変わりはなかった。リサは私が来たことに対して手を振りながら労いの言葉をかけてくれた。

ありがとう、けどごめん。これからやることはお前らのためだから恨むなよ。

「姉さん？その緑の飲み物は一体……」

紗夜の問いに答えることはなく私は紗夜の持っていた参考書を手  
に取った。

「友希那。8のX乗 $\parallel$ 4は？」

「はい？」

にこにこしながら友希那を見る。友希那はわからないわ、とひと蹴  
りした。

「紗夜」

「 $x \parallel 3$ 分の2ね」

「正解。というわけで不正解の友希那には罰ゲームだ」

「罰ゲーム？」

友希那、というか全員が首を傾げる。それを無視して私はさつき  
作っておいた緑の液体をコップに注いで友希那に手渡した。

「なによこれ」

「ああこれ？スムージーだよ。ただのスムージー。まあまずは一口飲  
んでから感想をどうぞ」

笑顔でそう言えば友希那はそれを飲んだ。リサの表情がなんと  
なく引き攣っているのは見なかったことにしておこう。

「うっ……！」

「み、湊さん!？」

「友希那さん!？どうしたんですか!？」

私の渡したスムージーを一口飲んだ友希那は苦しそうな声を上げ

た。それに心配そうなみんなの声が続く。

それに笑みが零れてしまう。

「ね、姉さん！湊さんに何を飲ませたのよ!?!」

「何って、別に危険なものなんも混ぜてねーよ。混ぜたもんはゴージャ、にんじん、セロリ、ピーマン、あとは冷蔵庫にあつた果物を少々。それを水ベースにミキサーで混ぜただけだよ」

私の言葉に全員が言葉を詰まらせた。信じられないものを見るよ  
うな目だった。

「お前らの嫌いなもの、野菜に固まっててよかったよ。集めるの簡単  
だった」

「朝日、もしかしてさつき苦手なもの聞いたのって……」

「もちろんこのためだよ。今から出す問題、答えられなかったらこの  
グリーンスムージーを飲んでもらう。それが嫌なら全部正解するこ  
とだな」

さすがにバカ相手に何も見ずにやれなんて鬼みたいなことは言わ  
ない。教科書でも何でも見て解けばいい。解けさえすれば問題なん  
てないんだから。

まあ、この歌姫様がどうなるかは知らないけど。

「さあ友希那。まずはそれ一気に飲み干しちゃおうか。話はそれから  
だ」

「あ、悪魔だ……」

「リサ、随分他人事じゃねえか？もちろん全員参加してもらう。今日  
は泊まり込みで勉強会だ」

逃がさないよ誰も。

そんな目を彼女たちに見せればそれぞれ嘆いていた。

本当は妹や妹ポジの子をいじめたくはないけど今回は別問題だ。なんせ赤点を取って困るのはお前らなんだから。誰かが赤点取ったら練習できないんだ。だったらこういうのは連帯責任だろ？

「さあ、お前ら。勉強の時間だ」

ここから罰ゲームありきの勉強会が始まった。

どれほどこの罰ゲームを受けなくなかったのか紗夜とりんりんは全問正解をして回避、リサも意地で二問ミスまでに抑えた。

ただあちちゃんと友希那に関しては、案の定という感じだった。

後日返ってきたテストは全員どうにか赤点を回避しRoseliaの練習に支障をきたすことはなかった。

Roseliaの全員が安心したのと同時に私との勉強会を恐れることになったのはまた別の話。

私だって極限の状況じゃなかったらあんな強引なことしないのにな。

ちなみにグリーンスマージーは不味かった。

## 私のファン。

私が本屋に行く理由は主に三つある。

一つ目は好きな小説家さんや漫画家さんの作品、雑誌を買うため。本屋の当然の使い方である。

二つ目は暇潰し。ふらつと本屋に立ち寄ってゆっくり店内を見て回る。そこで発見した気になる書籍を買ったり買わなかったり。静かで本があるのは落ち着くからというのもあるのかもしれない。

そして三つ目。これは特殊な本屋への通い方。

「あ、見て見て。『赤日和ひさ』の新作出てるよ」

「ほんとだ。今日発売なんだね」

そう、新作がどれくらい売れているのかの市場調査。私はそのためだけに朝からショッピングモールに併設されている本屋に足を運んでいた。ショッピングモールに併設されている場所を選んだのは家から近いというのもあるがお腹が空いたらフードコートに行けるからというのもある。

私の新作が積まれたコーナーから私の小説が二つなくなる。小さな声で「ありがとうございます」と呟いてガッツポーズをした。やはり自分の作品が売れてくれるのは嬉しかった。

基本的に私が小説を書く時は自分が書きたいストーリーを好きなように書いている。だから他の人にこうがいいと言われても書くこととは思えなかった。それは書きたいと思ったストーリーじゃないと書けないが故だった。

私はその辺りの評価を気にしたことはあまりない。もちろん面白くないという文字を見た時は凹んだが。

評価を気にしないとは言ったがこうやって市場調査をしているには理由があった。

一つ目はどの年齢層が読んでいるのかを知るため。それによってウケるネタが違うのだからそれを知りたいということ。

二つ目は、まあ、私が私の作品がどれだけ近所の本屋で売れているか知りたかったから。買う人を見ているのは楽しいし嬉しかった。

だから、うん、それはだいたい想定外の出来事だった。

「あれ？朝日さん？」

本を選ぶフリをしていた私に声をかける人がいた。振り返ればそこには見慣れた人たち。

「あこちゃん、りんりんも。ここで会うなんて奇遇だね」

「……そう、ですね」

「ほんとですよ！あこびつくりしちゃいました！」

あこちゃんは挨拶そこそこに無邪気に抱きついてくる。猫のようにすり寄ってくるあこちゃんの頭を撫でた。

「朝日さんも本を買いに来たんですか？」

朝日さん「も」と言っている辺り二人は本を買いに来ている様子だった。まあ本屋に訪れる人たちは大抵それが目的だが。

私は別に本を買いに来たわけではないから首を横に振った。代わりに「本を見に来たんだよ」と答える。本当のことは言っていないが間違ったことは言っていないしいだろう。

「朝日さんがここにいてってことは今日はポピパの練習はお休みなんですか？」

「うん。今日は有咲と沙綾とりみちゃんが用事があるから全体練習はないよ。多分香澄とおたえは練習してるだろうけど」

「……それ、行かなくてもいいんですか……?」

「……正直さつきから着信がうるさい」

香澄からのメッセージは止むことを知らないのか定期的に送られてくる。マナーモードにしているからまだいいが音が鳴り続けていたらいいよ電源を切るところだった。

「Roseliaは確か休みだったよね」

「はい。なのでりんりんの買い物に付き合った後に一緒にオフ会でもやろうと思ってる」

「……朝日さん、最近ゲームの方にログインしていなかったの……忙しいのかと思って誘わなかったんですけど……よければどうですか?」

「もちろん付き合うよ。オフ会、久しぶりだし」

最近ポピパの練習だけでなく友希那や香澄、おたえの勉強を見たりで時間が取れていなかったように思う。実際昨日だって締め切り間近の小説を書いていてあちゃんからのクエストの誘い自体を断ったのだ。まさか今日オフ会があるなんて思っていなかったし時間があるうちに遊んでおきたいと思った。

あちゃんは私の返事を聞いて喜んでいた。さらに抱きつく力が強くなる。

うん、今日はその笑顔を見ただけで満足だ。

「それでりんりん、今日は何買いに来たの?小説?」

「はい……好きな作家さんの新作を……」

そう言ってるりんりんは店内を見回す。そしてまっすぐ、私の小説の置かれている方へ歩き出した。そこにある本を一冊取ってその表紙



を私に見せる。

震えた。

「その本……」

『赤日和ひさ』さん……この人の小説、面白いんです……」

りんりんの表情はとても楽しそうだった。

私は嬉しいやら、読まれている事実が少しだけ恥ずかしくて動揺して。

「りんりんその人の小説全部持つてるんですよ！毎回発売日に買いに来るくらい大好きだもんね！」

こくりと頷くりんりん。それを見て私は乾いた笑いと「まじか、まじかあ……」と零しその場に座り込んで頭を抱えた。

知らなかった。私は嬉しさと涙が溢れてしまいそうだった。さすがにここで泣いたら軽く事件だし堪える。

「あ、朝日さん!?!どうしたんですか!?!」

「え……と、その……」

「朝日さん……?」

「毎度、ありがとうございます」

立ち上がり下げた頭の前で聞こえて来たのは困惑した声ばかりだった。

◇◇◇

「えーこの『赤日和ひさ』さんって朝日さんのことだったんですか!?!」

本屋から移動してフードコートに集まった私たち。それぞれが注文を終え、オフ会が始まった。とは言っても話題は『赤日和ひさ』のことで埋め尽くされていた。

「う、うん。ほら『赤日和ひさ』って並び変えたら『氷川朝日』になるでしょ?」

「ほ、ホントだ!」

先ほどからテンションの上がりまくっているあちやんとむしろ何も言葉を発しないりんりんは対照的。いつも通りのようだが、りんりんは私の小説を全部読んでいると言っていたしこの話題ならもつと食いついてきてもいいのに。

「それからNFOの『ひさ』って名前もここから取ってるんだよ」

「な、なるほどー!なんで『ひさ』なのか気になってたんですね!」

まあ一度オフ会をしてからというものの通話を繋ぎながらゲームをする時は私は名前で呼ばれることがほとんどだったから今では『ひさ』と呼ばれることの方が違和感ではあるけれど。

「……あ、朝日さん……」

「りんりん?」

「……本当に朝日さんが、あの『赤日和ひさ』先生なんですか……?」

「そうだよ?」

「……証拠とか、ありますか……?」

やっこのことでりんりんが口を開いたかと思えばそれは疑いの言葉だった。突然証拠を見せろと言われて困ってしまう。

「うーん、家に帰れば新人賞取った時の賞状とトロフィーがあるけど

……」

「……今証明できるものはないんですか？」

「えー、そうだなあ……」

そうは言われても普段から特別何かを持っているわけではない証明なんて……。

「あ、そうだ。SNSのアカウントなら今見せられるぞ？ほら」

私はスマホを操作して青い鳥がアイコンのSNSアプリを開いた。そのアカウントのトップページを見せる。

あこちゃんの変わらずはしゃいでいて、りんりんは何かを決意したような表情に早変わりしていた。

「あの、りんりん？」

「……朝日さん」

「何？」

「……サインください……!」

買ったばかりの本を差し出してそう言われた。

嬉しいと困惑の混ざった表情になったことは許してほしい。

「もちろん。いくらでも書くよ」

私はカバンの中からマジックを取り出して本の表紙を開いたそこにスラスラと筆を走らせていく。できたサインを渡せばりんりんは今日一の笑顔を向けていた。

「……ありがとうございます……!嬉しいです……!」

「ははっ。どういたしまして」

「朝日さんが小説家だってこと、紗夜さんたちは知っているんですか

？」

「知ってるよ。私から話したから。他にも日菜とか有咲とか沙綾とか。あこちゃん知ってる人だとこれくらいかな」

「そうなんですね。紗夜さん、知ってたんなら教えてくれてもいいのに……」

まあ紗夜は私が言わない限り言うことはないだろう。有咲と沙綾も同じ。日菜はどうかわかんないけど。

「……これからも、応援してますね……」

「ありがとう」

ファンが増えたことは純粋に嬉しかった。そんなファンに聞いたことはたくさんある。

「ね、私の小説のどこが好き？」

「え……？そうですね……」

今はこの時間を大切にしたい。

そう、思った。

子猫は効果抜群。

夏の日のこと。聞こえて来たのはなき声だった。傘にリズムを刻む雨音に紛れる小さな声。何度も聞いたことのあるか弱い声。

私は家に帰る足を止め、その声を頼りに進んでいく。

「みいーつけた」

声の主はすぐに見つかった。しゃがみこんで傘を傾ける。伸ばした手は抵抗されることはなかった。それどころか私の手にしがみついてきたのだ、逃げられると思ったのに想定外だった。

「案外人懐っこいんだな」

今は小雨だが予報ではこれから強くなる。雨の中放っておけば体調を崩してしまうことは目に見えていた。まだ小さいのだから弱って死んでしまうかもしれない。

それは嫌だった。犠牲にしたくなかった。

私はカバンからタオルを取り出してその子を拾い上げる。その中に包んで抱いた。家の近くで良かった、なんて思いながら足を速めた。

◇◇◇

「「「かわいいー!!」」」」

私の部屋に五人の声が室内にこだまする。自分が褒められているわけでは決していないがついドヤ顔をしてしまう。「そうだろー」なん

て返してこの子の頭を撫でてやる。

「猫飼いだめだとは聞いてましたけどこんなにかわいい子猫だったなんて！」

「名前なんて言うんですか？」

この前拾ったこの子を飼うと決めてから早一週間が経過した。その間に飼うために必要な道具を集めて。

そのことをこいつらに知られ見たいと言うもんだから今日は急遽練習を休みにして私の家に集まることになっていたので。

私の部屋の小さな同居猫は今日も人気者だった。

「アツシユだよ」

アツシユグレーの毛並みを撫でながら答える。何かに名前をつけるのは時間がかかると思っていただけこの子の場合はずんわり決まった。安直ではあったかもしれないけどシンプルだし呼んだらちゃんと反応してくれる。この子も気に入っているように思えた。

「朝日先輩！撫でてもいいですか!？」

「ああもちろん」

許可を出せば香澄はアツシユの頭に手を伸ばす。私がさつきまで撫でていた所を撫でれば香澄の手に身体をこすりつけていた。

「みんなも撫でていいぞ」

「じゃあ遠慮なく」

おたえが躊躇なくアツシユの背を、りみちゃんが控えめにアツシユの顎を撫でる。目が細くなっている気持ちよさそうだった。

「有咲と沙綾も触るか？」

触りたそうにうずうずしている有咲とそれに苦笑いを浮かべている沙綾にそれぞれ声を掛ける。

三人からアツシユを取りあげて二人の方へ抱きながら見せればなぜか有咲は緊張したような表情になっていた。

今度は私が苦笑いする番だった。

「別に噛んだりしないぞ？」

「そ、それはわかってますよ！」

有咲はおそろおそろと言った感じでアツシユに手を伸ばす。アツシユの目と鼻の先で、その先に触れられない手。先手を打ったのはアツシユ。小さな舌が有咲の指をペロツと舐めた。有咲の身体がピクリと跳ねた。

だけどそれに安心したのか今度は頭を撫でていた。その手は顎に下りる。アツシユは気持ちよさそうに喉を鳴らしていた。

有咲が嬉しそうに笑う。

その表情にきゅんとした。

「おー。朝日先輩と有咲がいちゃついでる」

「お、おたえちゃん冷やかしたらダメだよ」

おたえとりみちちゃんの声に私は我に返った。どうやら無意識に有咲の頭を撫でていたらしい。有咲を見ればワナワナと顔を赤くして震えていた。しまったと思っ手て手を離すがこの空気は変わってはいれない。

アツシユは私の手からすり抜けてベッドの上にジャンプした。そこで丸まっている。

「ごめん、無意識だった」

「い、いえ、別に嫌じゃないですから……」

「有咲！それって私たちも撫でていいってこと!？」

「撫でていいの有咲？」

「お、お前たちはダメ！」

「なんで？」と香澄は不思議そうに首を傾げた。それに私は頭を掻いた。りみちゃんが香澄とおたえに説明しようと試みる。

「おたえちゃん、香澄ちゃん。有咲ちゃんは朝日先輩だけに撫でて」

「りみストップ！それ以上は言うな!!」

それを止めたのは他でもない有咲だった。焦ったように声を上げる。

「急に目の前でイチヤイチヤしないですよ。嫉妬しちゃうじゃん」

「沙綾は何言ってるんだよ!!」

なかなかカオスになってきた。冷やかされ色んな地雷を踏まれ踏み抜き有咲の顔は真っ赤なまま。

ふと目が合った。その目は明らかに助けを求めている。二人きりの時は私の言葉でよく真っ赤になっているけど大人数の時はあまりない。正直独り占めしたいところはあるから見せたくないって想いはあるけれど。

照れて目の潤む恋人はめっちゃくちゃかわいい。

「ホントかわいいな有咲は」

思わず本音が満面の笑みと共に零れる。怒りたくても怒れないのか有咲は顔を隠していた。指の隙間から見えた目。

「……………バカ…………」



逸らされ小さな声で呟かれた言葉。私の心臓を貫くには十分すぎた。破壊力が高くて顔に熱が集まるのを感じる。両手で顔を覆って俯き悶えた。

バカって、そう言いたいのはこっちだっつての。  
アツシユはあくびをしてまた目を閉じた。

「ただいま。姉さん、頼まれてた買い物してきたわよ」  
「ただいま。あ、ポピパ勢揃いだ〜！」

最悪のタイミングで帰ってきて部屋扉を開いた妹たち。頭を抱えて私は俯いたまま。ポピパのメンバーは元気に挨拶を返していた。

「アツシユ！遊ぼー！」

日菜は無邪気にアツシユに声を掛ける。私たちよりもアツシユに構いたいみたいだ。アツシユは興味なさそうにそっぽ向いていたが。

「……何があったのよ」

「何も聞かないでくれ……」

紗夜の不思議そうな声に私はそう返した。さすがにこの顔を見られるわけにはいかない。絶対にやけてるし。

私はリビングに向かって熱を冷やすため冷蔵庫から水を出して飲んだ。汗を拭う。胸元をパタパタと仰いだ。

「……朝日先輩」

「……飲む？」

私に続いて部屋から出て来た有咲に水を注いだコップを差し出す。

受け取って飲み干す。両手でコップを持つ姿が可愛かった。

「抜け出してきてよかったの」

「みんなはアツシユに夢中でしたから」

「けど紗夜たちは私たちのこと気にしてたし」

「多分、紗夜先輩は気使ってくれてるんだと思いますよ」

「なんか、ごめんな。からかわれる形にしちやって」

「……別に。私は本当に嬉しかった、ですから」

むしろもつとやってほしかったし。

そう呟く。コップを預かってシンクの中に置いた。

可愛い以外の言葉で表せるはずがなくて思わず抱き寄せた。大人しく腕の中に納まるのは珍しいと思った。

「……さすがにあれは反則」

「……そんなこと言われても困ります」

「……二人きりじゃなくてよかった」

「……それも、困ります」

熱を帯びた声。無意識だろうか。背筋がゾクツと震えた。身体を離して有咲の唇にキスを落とす。さつきよりも強くその身体を抱きしめた。

「……今日、泊まってく?」

「下心が見えるんですけど……」

「……うっさい」

「もしかして、照れてますか?」

「照れてないよ」

「照れてる」

「照れてない」

「照れてる」

同じ言葉を繰り返すその口をまた塞いだ。赤い顔で嬉しそうに笑う有咲は世界一可愛い。

「じゃあ、戻るか」

「そうですね」

離れてからは一定の距離間。だけどそれが心地いい。君が好きで仕方がない。零れる想いは君に全部あげるよ。君だけへの愛だから。

「ね、姉さん！絆創膏ってどこにあったかしら？」

「絆創膏って、ケガでもしたのか？」

「私ではなく山吹さんが」

「あはは……」

部屋に戻って聞こえて来たのは紗夜の焦る声だった。苦笑いを浮かべる沙綾の右人差し指からは赤い液体が出ていた。

私は沙綾を連れ出しリビングに戻る。沙綾が指を洗っている間に救急箱から絆創膏を取り出した。指を拭いて絆創膏を巻き付ける。

「一体何したからこうなったんだよ……」

「実は私もアツシユに触ろうと思って手を伸ばしたら噛まれちゃって」

「は？アツシユが噛んだの？」

「はい。みんなも触れるし子猫だからって油断してたらがぶつ、と。結構痛かったですよ」

アツシユが誰かも噛むなんて初めてのことだった。しかも噛まれたのが沙綾だとは。勝手に動物に好かれるタイプだと思ってたのに。

「私、昔からなぜか動物になつかれないんですね。好きなんですけど」

「意外だな。すぐなつきそうなのに」

沙綾は巻かれた絆創膏を見てお礼を言う。小さな傷だし練習に影響はないだろうと思いつながら返事をした。

「……羨ましいって思っちゃってるの、バレてるんですかね」

意味ありげな表情で笑う沙綾に私は何も言えない。

選ばなかったんだ。今更何か言う資格もないだろう。

「戻るぞ」なんて言ってる私は沙綾に背を向ける。部屋に入ればアツシユが初めて見る動きをしていて頭を抱えた。

想い、夏の計画。

「オーナー」

「よく来たね」

元ガールズバンドの聖地、ライブハウス『SPACE』

そこに現れたのは過去の常連だった。私を呼ぶ姿がえらく久しぶりである頃よりも成長していた。子供の成長は早いものだ実感する。

「……本当に閉めたんですね」

「私も歳だからね。いい頃合いだったんだよ」

「そうですか。あたしとしてもここには思い入れがありますからまたここで演奏したかったんですね」

「あんたも音楽で生きているからそう言うだろうとは思っていたよ」

「オーナーなら受け入れてくれるのを知っているからですよ」

「あんたたちは実力があつたからね。息もあつていた。あれでバンドを組んでいないのか不思議なくらいだったさ」

私たち以外誰もいない静かなスタジオ。彼女は懐かしそうにスタジオ内を見て回っていた。

「出られるのなら、四人で出たかったですよ」

「そうかい」

悲しそうに笑う彼女。何があつたのか知っているからこそ辛いものがある。

「本当はラストライブ行きたかつたんですけどどうしても外せない仕事が入ってて」

「そいつは仕方ない。だけどラストライブはあんたにも聞いてほしかったよ」

「ははっ。そう言ってもらえるのは嬉しいですね。何か面白いものでもあったんですか?」

「朝日が歌った」

私の言葉に彼女は信じられないとでも言いたげに目を見開いた。動揺が手に取るようにわかる。

本当に朝日のことに関してはまだすぐ感情を出す子だ。

「朝日が、歌ったんですか……?」

「ああ。全力でね」

彼女は嬉しそうな、けどどこか悲しそうな表情をしていた。唇をきゅつと噛みしめる。

「……いつか、弾いてくれる日が来るとは思っていました。願っていました。ですけどその日がこんなに早いとは」

「アクシデントの対応だった。出る予定はなかったんだよ」

「それでも、見たかった。一度失敗して立ち直れなかったあいつが立ち直る瞬間をあたしは間近で見たかったですよ」

「……別に、立ち直っちゃいないさ」

「え……」

「ただ大切な子たちを奮い立たせるために自分の恐怖を押し殺しただけ。本当は怖くて仕方なかっただろうよ。……それでも弾き切ったことは褒めてやるべきだと思うがね」

それがあんたたちとじゃなかったことが私としても悲しかった。もしあの時舞台上に上がったのがあんたたちであったのなら私はどれほど嬉しかったことか。

「……ちなみに、何を弾いてたんですか」

「あなたの望む曲ではなかったよ」

「……まあ、そうですね」

「……それで、あなたに渡したいものがあるんだ」

私は彼女を引き連れて倉庫に向かう。扉を開いて彼女が息を呑んだ。

「……まだ、ここにあったんですね」

「初めて失敗した日、朝日は私にこう言ったんだ。『このギターは、捨ててください』って」

「っ!？」

「多分朝日は自分で処分できないから私にそう言ったんだろうね。もちろん私はそんなことしなかった。このギターが朝日にとって、あなたにとっても大切なものだったことを知っていたから」

「……そう、ですかね」

「そうだよ。じゃなきゃわざわざこのギターを使ってステージになんて出ないさ」

時間稼ぎを頼んだ時、確かに私はこのギターを弾いてほしいと思った。だけどこのギターにトラウマがあることを知っていたから絶対に出不いと思っていた。

だからこのギターを弾いてくれたことが嬉しかったんだ。

「こいつを弾いた日、朝日に言ったんだ。『連れて帰ってくれ』って。けど朝日はいい顔をしなかったよ。まだあの日のことを気にしているんだろうね」

「あたしたちは気にしてないのに。本当にバカですよあいつは。あいつがいなくなる方が困るってのにわかってないんだから……」

「朝日にも色々あったんだ。わかってやってほしい」

「わかってますよ。……わかってます。それでもあたしは朝日に隣に

いてほしかったんです。バンド、組んでほしかったんですよ」

俯いた彼女は悔しそうに身体を震わせる。握りしめた拳からは今にも血が流れてしまいそうだった。

「……このギター、持って帰ってくれないかい」

「え……」

「ここにあっても使われることはない。朝日もきつと取りに来てくれない。それなら元の持ち主に、そして朝日のことを一番理解しているあんたに渡しておきたいんだよ」

「……オーナーがそう言うなら、預かります。だけど一つ勘違いしてますよ」

彼女はギターを受け取ってケースにしまいながらそう言う。どういう意味なのか私にはわからなかった。

「確かにあたしは朝日と仲が良かったです。親友だって、言える仲でした。ですけどあたしは朝日のことを何もわかってなかった。だからあいつは隣からいなくなっただんですよ」

今日はありがとうございました。そう言って彼女はギターを背負って出て行く。あの頃の姿はもう見られないのかと思うとやっぱりその手を取っていればよかったのかと後悔して仕方なかった。

◇◇

最近よく夢を見る。

紗夜がいて、日菜がいて、有咲がいて、沙綾がいて、他にもたくさん今までに関わってきたやつらがいてみんな楽しそうに話している。楽器を弾いてる、叩いてる。そんな夢。



その中には両親もいて、紗夜や日菜だけでなくポピパのメンバーとも仲良くしていた。そこにいるやつらは揃いも揃って全員が笑顔だった。それがなんだか嬉しくて。

話しかけたんだ、みんなに。

なのに誰も私の言葉には耳を傾けてくれなくて、触れようとすればその身体をすり抜けていた。

幽霊にでもなった気分だった。

そこにいる全員が知り合いなのに、全員が知らない人になったようだった。全員が全員私の存在を認識すらしていなかった。

何度叫んでも私の叫びは届かない。

返ってくるのは楽しそうな笑い声。

私に見せつけるように声は大きくなっていく。

私はこの世界にいらない人間なのだと言われているみたいだった。

そうして目が覚める。

みんなが私を認識している事実には安心したのは初めてのことだった。

◇◇◇

それは夏休みも半分が過ぎた頃の話。宿題が終わっていないからと香澄によって蔵に集められた私たちは静かにクーラーの効いた部屋で過ごしていた。

宿題なんてとつくに終わらせていた私と有咲はそれぞれネットサーフィンを、他のメンバーは黙々と問題を解いていた。だがその空気が一時間も続けばさすがに限界も来るもの。

「あく疲れたあ〜」

真っ先に音を上げたのは香澄だった。机の上に両手を伸ばして突っ伏す。その香澄を見て苦笑いを浮かべたり、お疲れと声を掛けたら、背を伸ばしたりとみんなバラバラの行動を取っていた。

これは一旦休憩かな。そんなことを思いながら自分のコップにお茶を注いだ。

「……ねえ、夏らしいことしたくない？」

「夏らしいこと？」

香澄は顔を上げてそんなことを言う。また面倒な展開になりそうだと私は先に視線を逸らしていた。

「うん！みんなでどこか遊びに行こうよ！」

「いいね。どこ行く？」

「みんなが行きたいところ全部！」

「はあ？」

あーあ始まった。こうなると香澄に引きずられるから私は何も聞こえていないフリをする。

「みんなどこ行きたいとかある？」

「私は水族館行きたいなー」

「私、うさぎがいるところ」

「おたえはぶれねえな……」

「有咲は？」

「え？そ、そんなこと急に言われても思いつかねえっての」

まあ普通はそうだよな。私だって思いつかないし。正直家に籠っていたいもんな。

「それじゃあ朝日先輩はどこ行きたいですか？」

「へえー。177って天気予報だったのかー」

「あの、朝日先輩？」

「117は時報ねー。ふーん」

「朝日先輩話聞いてくださいよ!」

さすがにこの方法じゃ回避できなかつたか。残念だ。

私はジト目を香澄に向ける。香澄はぷくーと頬を膨らませていた。なんだよかわいいなこのやろう。

「……なんだ」

「だーかーらー!この夏の間はどこに行きたいかって聞いてるんですよ!」

「特にない。てかそれ私も連れて行かれるの?」

「もちろんです!朝日先輩はポピパの一員みたいなどころありますから!」

いつからだよ。とは思っていても口にしなかつた。個人的にそれは嬉しかったし目の前のこいつらもいい顔で私のことを見ていたから。

けど遊びに行くかは別問題だと私は思っていた。

「それで、どこ行きたいですか?」

「だからそつちで決めてくれよ」

「ダメです!ちゃんと朝日先輩も意見出してください。全部行くので!」

なんだそりや……。呆れてしまう。苦笑しているメンバーもちらほら。

「それでどこですか?」

「マジなことを言うところにも行きたくない」

「え!」

「だって夏だぞ?暑いんだぞ?灼熱地獄だぞ?用があってもなくても外出たくないじゃん」

むしろなんでわざわざ暑い中外出たいの？焼きたいの？太陽に  
じめられたいの？もしかしてDMなの？絶対クーラー効いた部屋で  
ゆったり過ごしてる方がいいじゃん。

「朝日先輩が有咲みたいなこと言ってる……」

「朝日先輩、有咲の引きこもりがうつったの……？」

「おい誰が引きこもりだ！」

「それは否定できない事実でしょ？」

なんか有咲に飛び火したな。ごめん有咲。その犠牲は無駄にしな  
いよ。

「一応言っておくけど本心だから」

「そんなこと言わずに行きましようよー！ね！」

「わかったわかった。わかったから離れろ香澄暑い」

頼むからいちいち私に抱きつかないでほしい。

有咲からの視線が痛いんだ。

「んで？どこ行きたいんだよ。場所次第では断るぞ」

「じゃあまずはどこに行こっか？さーやは行きたい場所ある？」

「え、私？私はそうだな……」

——海とかどうかな。

その言葉に私は表情が暗くなった。「行きたくない」と本気で思っ  
た。

寂しさ、失いたくない曲。

そこには私以外いなかった。  
わかつていたことなのに無性に悲しくなった。

◇◇◇

「合宿？」

「ええ。今週末に二泊三日でコテージを借りてやる予定なのよ」

月曜の夜。夕飯だからと部屋に紗夜を呼びに行けばそんな話をされた。予定は前もって話してくれる紗夜が直前になって話すことは珍しい。けどまあそれは急にでも決まってしまった、とかそういうことだろう。別に追求なんてしない。けど合宿する理由は気になっていた。

「なんでまた。ライブ近かったっけ？」

「ライブ、というかせつかくの休みだし自分たちの音を見直したり、たまには雰囲気を変えて練習するのにはいい機会だと湊さんが言っていて。そこで新曲も作ってしまうらしくて」

「なるほどなー」

夏の間にも新曲を仕上げたいという気持ちが変わらないわけじゃない。というか長期休暇の間に仕上げたいと思うのは妥当だろう。R  
oseliaで行くのなら特に心配もない。

ただ偶然とはいえよくもまあ被ったもんだと思った。

「今週末って確か日菜も地方ロケじゃなかったっけ？」

「ええ。そうなのよ」

被ってしまったものは仕方ない。家事に関しても一通りできるし問題はないだろう。そう思ったのだから私は「楽しんで来いよ」なんて言って紗夜には言っておいた。

「二人とも時間大丈夫か？」

「私はもう出るわよ」

「あたしもそろそろマネージャーが迎えに来る時間だよ」

「そっか。忘れ物するなよ。特に日菜」

「ええ!?なんで名指し!？」

「紗夜が忘れ物すると思ってるのか？」

家を出る前のやりとりはいつも通りであいかわらず可愛くて仕方ない。「紗夜が忘れ物をするなんてことがあったらまず体調を疑う」と告げれば紗夜は「さすがにそれは言いすぎよ」と返した

「それくらい珍しいって話」

「ていうか忘れ物なんてしてないから!」

「はいはい」

頬を膨らませる日菜は妹属性を存分に発揮していた。頭を撫でて落ち着かせる。

家のインターホンが鳴った。日菜の言っていた迎えだろう。

「土産話期待してるな」

「うん!彩ちゃんのるんっ♪ってくる話たくさん用意しとくね!」

「できれば彩以外の話もお願いしたいかな……」

彩とは正直ほとんど関わりないからその話だけだと困る。ただでさえ聞いてもないのに日菜が話してくるから彩がどういうやつなのか日菜の感性で伝わっていてあんまり関わることのないやつだと思っているのに、学校で会った時にどんな対応すればいいんだよ。

「それじゃあいつてきまーす!」

「姉さん私も行くわね」

「ああ。いつてらっしゃい。気をつけてな」

夏だからかそこそこ軽装の二人に私は手を振った。扉が閉まれば静寂が私のことを包んでいた。

何をしようかと頭を悩ませる。

本来ならポピパの練習の方について練習をしているのだが今日は休みなのだ。というか、あいつらはいつらで出掛けている。少し遠出をして一泊二日で海を満喫するのだと前回の練習の時にはしゃいでいた。私は楽しんで来いよとだけ伝えていた。

「行かないんですか?」「行かないよ」そんな言葉は何度繰り返したとか。諦めの悪い後輩は他のメンバーに宥められていた。本当は私も行きたかったけど行きたくはなかった。

にしてもここまで仲の良いやつらの予定が被るとは。私はとうとう神にでも見捨てられたのかよ。そう言いたくなるレベルだった。

しばらく考えて私は新作と向き合うことにした。締め切りはだいぶ先。だけどそれ以外やることが見つからなくてパソコンの電源を入れた。

二時間ほど経てば机の上に置いていたスマホが震えた。ディスプレイには香澄からのメッセージを知らせる表示。ロックを解除して開く。

『楽しんでます!』

そこに映っていたのは五人の集合写真だった。みんな笑っている。楽しそうに何よりだと思った。

ピコンと新しいメッセージが送られてくる。また写真だった。

『おすそ分けです』

写っていたのは有咲単体。それも水着の写真。しかも香澄にカメラを向けられて恥じらっていた。撮られないようにこちらに手を伸ばしていた。

なるほど白か。白とはいいチョイスじゃないか。

私はその写真を即保存して「ナイス」とだけ送っておいた。

物語の序盤を書き終わった辺りで日が暮れていた。集中していると時間というものはあつという間だ。ふうーと椅子にもたれば腹の虫が鳴いた。

キッチンに行って夕飯を作る。自分一人分だけだからだいたい手抜きをした。別に困ることはない。

一人でご飯を食べるのは久しぶり。最近はずっと紗夜や日菜と食べていたからかな。

会話のないこの空間。慣れていたはずなのに。

「寂しいなあ」

◇◇◇

誰にも自分の音を聞いてほしくない時がある。そんな日は一人スタジオで練習するのが私の中ではお決まりだった。

誰にも聞いてほしくない曲がある。だけど失いたいわけじゃないから練習する。あの頃の私にとってこの曲はすべてだった。

この歌は確か練習曲として作った。だけど曲調を気に入ったから歌詞をつけた。他でもない私が精一杯の歌詞をつけたんだ。

あいつらは喜んで弾いて叩いてくれた。

この曲を知っているのは私とあと二人だけ。三人が忘れてしまえば無くなってしまうそんな曲。



失いたくない。あいつらとの最初で最後の曲になるはずだから。失っていいはずがなかった。

私はあいつらのことが好きだから、どうしても失いたくなかった。

一音一音、一単語を丁寧に奏でていく。

あいつらに届くように心を込めて弾いていく。

どうやったらあいつらは、あの日のことを許してくれるだろう。

愚かな過ちを犯した私のことをどうしたら……。

「……」

私はギターを弾いていた手を止める。視線を上げれば一人の少女と目が合った。

小学生、いや中学生くらいだろうか。何かを見つけたような表情で私のことを見つめていた。

「見つけたわ perfect なギタリストを！」

「はあ？」

少女は許可もなくスタジオ内にズカズカ入ってきた。私に近づいてくる。何故か余裕のある表情をしていて、変なやつだと思った。

「あなた私の音楽を奏でる気はない？」

「ないけど」

「Why!?! どうしてよ！」

俗に言うスカウトつてやつをされたことには驚いたが参加する理由もないため断った。そもそも急に現れてスカウトされて「はいやります」とはならないだろう。ほんとに急だし、てかこいつ誰。私は少女の遊び相手になっているほど暇ではない。

「得体の知れない胡散臭い誘いに乗るわけないだろ。子供に付き合ってる暇はないんだけど」

「なっ!? 胡散臭いですって!?」

「むしろなんで胡散臭くないと思えたんだよ……」

帰ってほしいのに。私の意思に反してこいつがスタジオから出て行く様子は全くなかった。

「あなたの音と私の曲があれば世界に通用する音楽を作れるわ!」  
「なんだそりゃ」

よくもまあ簡単に世界に通用できるなんて自信満々に言えたものだ。世界の音楽つてやつを甘く見すぎじゃないだろうか。

そもそも私に声を掛けた時点でこいつには見る目がない。

私はもう、終わったギタリストだ。

「あいにくだが私はお前のお遊びに付き合っているほどは時間ない」  
「遊びじゃない!!」

少女は激怒した。遊びという単語はどうやら地雷だったみたいだ。私のことを睨む。そしてポケットの中から猫型のUSBを取り出して私に握らせた。

「聞けばわかるわ! あなたレベルのギタリストなら絶対に!」

「聞く気なんてない」

「いいから!」

それだけ言って少女はスタジオから出て行った。だいぶ勝手なやつだと思った。

けどなんとなくあの頃の自分に似ている気がして、他人事のように思えない。あの必死さは昔の私そのものだった。

どうしてあの子がそんなに向きになるのか気になっている自分がいたのは事実だ。

だけど理由がどうであれ追いかけるような気にはならなかった。

どうせあの子との道はここで違える。

私があいつらとの道を違えたようにきつと二度と会うことはないだろう。

だからあの子の音楽のために協力することもない。

結局名前も連絡先も教えてもらっていないから会おうと思っても会えない。

ふと顔を上げた。

嘆いて、苦しんで、葛藤して、選んで、覚悟を決めて、切り捨てて。

そんな自分がそこにいる気がした。

顔を上げることはない。ただ下を向いて、泣いていた。

慰めてくれる人はいない。その姿は孤独そのものだった。

その自分に掛ける言葉が見つからない。

私はずっと正しいと思って行動してきたんだ。間違った行動だったとしても正しいと思えば進まなければ今までの自分を否定することになってしまう。

助言したい気持ちをぐつと堪えた。

色んなものを切り捨てて来た。

今更、否定なんてできない。

できるわけがない。

していいわけがない。

静寂になったスタジオの中でまたギターを弾こうとは思えなくて私は帰る支度を始めた。

「逃げるなよ」なんてあいつの言葉が私を突き刺す。

重くなった身体を引きずって私はスタジオを後にした。

テンパる私と熱を帯びて。

「行かない」

その言葉は強がりのように思えた。

朝日先輩はああ見えて誰よりも寂しがり屋だから本当は私たちと一緒に行きたかったんだろう。ただ行かないと言うだけの理由があった。それだけ。理由というのにはなんとなく想像がついていたから私は止めなかった。決めたのは朝日先輩だから私はその意見を尊重した。

一緒に行きたくなかったのか？と聞かれれば答えに迷う。私が一緒に海に行って遊びたかったのは事実だ。きつと先輩にお願いすればなんだかんだ言いつつ最終的には折れてくれただろう。それを理解したうえで行こうとは言わなかった。

朝日先輩の嫌がることをしたくなかったから。別に海に行けるのは今年だけではなかったから。行こうって、朝日先輩から言ってくれた時に行けばいいと思った。だから私は何も言わなかった。

それがあんな結果になるとは想像していなかった。

◇◇◇？

「はー！楽しかったー！」

「うん。そうだね」

ポピパによる一泊二日の旅は幕を閉じた。二日間遊び倒したことの証明かのように空は夕焼けが沈みかけていた。

昨日と今日遊んだ分明日はみっちり練習をすることになっていた。

遊び疲れた身体を癒すためにも今日はこのまま家に帰りたいけど、こいつらの顔を見ていたら帰ろうなんて急かすような言葉を言う気にもなれない。楽しかったことも、まだ話し足りなくて帰りたくないことも本心だ。

「ねえもうちょっと話していたいからどこかお店入ろうよ!」

「明日は朝から練習なんだしやめといた方がいいんじゃない?」

「えー! 私話し足りないよ!!」

「有咲の家に泊まれば話せるんじゃない?」

「はあ!」

「おお! 名案だよおたえ!」

お願い有咲!と香澄は私に懇願する。有咲!とおたえも続く。助けを求めため沙綾とりみを見れば期待の眼差しを向けられた。どうやら満場一致の意見のようだ。

私はため息を吐く。これ、私が断っても数で押し切られる。というかそもそも断る理由も意味もないよな。

「わかったわかった。とりあえずばあちゃんに連絡するから待て」

「わーいやったあ!」

「明日は朝日先輩も来るんだから朝日先輩も呼んだら?」

「いいねそれ!」

香澄はおたえとハイタッチを交わす。沙綾が朝日先輩の名前を出したことにより香澄たちのテンションが上がっていた。朝日先輩はお泊りに呼べば来てくれるだろうし香澄のマシガントークに付き合われることになるであろう未来を想像するとなんだか申し訳なくなる。

とりあえずばあちゃんに電話を掛けようとスマホを取り出す。ディスプレイは既に通話の画面に切り替わっていて、私が今一番会

たい人の名前が表示されていた。

「……朝日先輩？」

通話ボタンを押してスマホを耳に当てる。

朝日先輩が電話をかけてくるなんて珍しいと思った。大抵メールで済ませるし、電話なんて急用以外ではほとんど使ったことがないから。何かあったのだろうか。

「もしもし」

電話の際一番スタンダードな会話の始め方。だけどそれに対する反応はない。

「あの、朝日先輩？もしもし？」

息遣いからそこにいるのはわかるのに朝日先輩は何も言ってくれない。どうしたのだろう。そう思ってもう一度名前を呼ぼうとした時、小さな声が聞こえた。気を抜いていたら聞き取れていなかったであろう小さな声。

「——あいたい」

たった四文字。私が行動するのにはそれだけで十分だった。

「ちよ、有咲!？」

「悪い！用事できたから先帰ってくれ！」

普段ならありえないシチュエーション。全力で先輩の家まで走る。息が上がって苦しいのに言葉にできない幸福感が私のことを支配する。

きつと急ぐ必要はない。「今着いたところなので家行きますね」なんて冷静に対応することもできたはずなんだ。それなのに私の足は止まらない。

私が出会いたかった。私が寂しかった。朝日先輩もそう思ってくれていたのだろうか。多分そうだ。会いたいと言ってくれたのが嬉しい。早く会いたい。

家の前で息を整える。こんな全力疾走したのは久しぶりだった。元々体力のない私は息を整えるのにも時間がかかってしまう。

やつのことで整った息。汗だくで服がくっついて気持ち悪くて仕方ない。

インターホンを押した。しかし朝日先輩からの返事はない。何度押しても変わらない。紗夜先輩や日菜先輩はいないみたいだった。

ドアノブを捻ってみれば何の抵抗もなく扉が開いて驚いた。防犯意識は高いはずなのに鍵をかけ忘れるなんて珍しいと思った。

「あ、朝日先輩……？」

扉を開いて名前を呼んだ。返事はない。嫌な予感が脳裏をよぎるがここで帰るなんて選択はできなかった。

「は、入りますよー……」

中に入りリビングにたどり着くも朝日先輩の姿はない。それどころか人のいる気配が全くなかったのだ。

朝日先輩に呼ばれたのだと思っていたが実は違ったのだろうか。けどそんなことありえるのか。仮に私の家に来て言ったのだとしたら追加で連絡が来るだろう。というかその場合家の鍵をかけ忘れるなんてヘマをあ朝日先輩がやるだろうか。答えはどう考えても否だった。

朝日先輩の部屋にノックした。やっぱり返事はない。だけど部屋の中から小さな泣き声が聞こえた。それを聞いて扉を開く。

「アツシユ……っ!?朝日先輩!?!」

朝日先輩が床に倒れていた。アツシユは朝日先輩にすり寄っていた。私は駆け寄ってその肩を擦る。そっと朝日先輩が目を開けたことに安心した。

「どうしたんですか!?た、体調は!?きゅ、救急車!?!……!」

テンパる私を朝日先輩は引き寄せ抱きしめた。両膝をついたうえで前のめりの体勢はきつい。先輩のことを抱きしめるよりも朝日先輩のことを押し潰してしまわぬように耐える方が優先で両手は床についた。動きたくても朝日先輩が抱きついてそのせいで胸が高鳴って動けない。

「あ、朝日先輩……」

「ありさ」

ただ私の名前を呼んだだけ。それなのにその声が、吐息が、熱っぽいから。全身に電流が走ったかのように痺れた。朝日先輩、と呼ぶのですら途切れ途切れのでカタコトになってしまう。

それに気づいたのかクスツと笑って私の耳に口づける。変な声が出て途端恥ずかしくなった。

「なーに恥ずかしがってるんだよ」

「いや、あの、なに……してるんですか」

「なにして抱きしめてるんだけど?」

「そうじゃなくて、その……」



もしかしてわかってやったのだろうか。それともわからずにやったのだろうか。もしわかってやったのならこの人は……。

ゴクリと唾を飲み込む。それに合わせて朝日先輩が離れた。と言っても首に回った腕はそのまま、身体だけが離れたという形。

熱い目が、赤に染った頬が、吐かれた熱を持つ吐息が、すべてが私を誘ってくる。それを見て狙ってやっているのだろうかと確信した。

気づいたらキスしていた。何度も何度も啄むようなキスを落とす。たった二日あっていなかっただけでこうなるだなんて。欲深くて、それにあまりにも忠実すぎる自分に笑いが零れそうだった。とは言っても実際笑う暇などない。朝日先輩は止まらない。私も止める気はサラサラない。

いつもと立場は逆転している。だからか朝日先輩はどこか余裕がないように見えた。それが嬉しくて激しくしてしまうのは仕方のないことだと思うんだ。

「ありさ……もつとつ……」

そうやって煽るのはどうかと思うけどな。

「……それならベッド行きましよう」

そうやって私は朝日先輩の腕から抜け出す。朝日先輩も同じように起き上がるがその場から動こうとはしなかった。不思議に思って声を掛ければこちら側に倒れ込んできて慌てふためいてしまう。

そこで朝日先輩の身体が熱いことに気がついた。火照っているとかそういう限度を超えていた。それに加え息遣いは荒い。やっこのことで朝日先輩が倒れていた理由に見当がついた。そして同時にとんでもないことをしてしまったと冷汗が流れる。

「朝日先輩、熱あるじゃないですか！」

「えー？ないってそんなの」

「そんな嘘通じるわけないじゃないですか!!」

持ち上げることとは無理だけどどうにか引つ張ってベッドに寝かせ  
る。抵抗されることなく朝日先輩はその上に納まった。

私は頭を抱えた。

生殺しは勘弁だけどいくらなんでも病人襲うのは最低すぎるだろ。

「紗夜先輩と日菜先輩はいないんですか?」

「二人とも、明日まで帰って来ない」

まじか。いつからこの調子なのかはわからないけど下手したら朝  
から何も食べてない可能性だってある。もしそうだとしたら治るも  
のも治らないだろう。悪いと思うけど緊急事態だし食材は勝手に使  
わせてもらおう。普段料理とかしないけど簡単なものなら作れない  
わけじゃない。

そう思つて朝日先輩の部屋から出て行こうとした時。くいつと弱  
い力で指を引かれた。

「朝日先輩……?」

「いかないで」

そんなことを言われて放っておけるはずがなかった。

熱が出て、家に一人で、どれだけの時間孤独を感じていたんだろう。

朝日先輩は、一人の時間が嫌いだ。理由はどう考えても紗夜先輩と  
日菜先輩を遠ざけて一人で戦ってきた日々があつたから。一人にな  
ることは孤独になることだと思つているから。紗夜先輩と日菜先輩  
はそれに気づいているのだろうか。

朝日先輩の近くには大抵誰かがいる。朝日先輩自身が好んでそう  
している。

私は一人の時間も嫌いじゃないから気持ちが変わるとは口が裂け  
ても言えない。確かにクラスメイトたちを羨ましく思うことはある

けどそれはまた別の話。

朝日先輩は誰よりも賢くて、行動的で、強くて、優しく、自分の存在を下に見ている。

みんな朝日先輩に救われているのに朝日先輩はそれをなんでもないことのように言う。

溜め込みやすいからこうやって一人になったら爆発する。そのくせ誰も頼らない。

人が何か抱えていたら何が何でも聞きだすくせに自分はギリギリまで言わないし言えない。

自分にもその優しさを向ければいいのにどうしてできないのか。そこが朝日先輩らしい、ということのだろうか。

そんな朝日先輩が頼ってくれたことが、ただただ嬉しかった。

「行きませんよどこにも。ずっと朝日先輩の隣にいます」

引かれた手を握って、私はベッドの横に腰を下ろした。「よかった」と小さく零した朝日先輩の目が眠そうに閉じていく。

「おやすみなさい」

「おやすみ……」

数秒して聞こえた寝息。あどけない寝顔に笑みが零れた。

普段はかっこよくて憧れの先輩だけど本当にかわいい。この先輩はこの先も私だけが知っていればいいのに。

少しだけワガママを想って朝日先輩と同じように目を閉じた。

アッシュがベッドの上で丸くなって小さく鳴いていた。

ケンカ。え、ケンカ？

編集部からダンボールが送られてくることはたまにある。中身は決まって手紙やプレゼントだった。

小説家になって、そこそこ人気が出て、少しずつ増えていったファンレターの数。初めてもらったのはデビューしてすぐだった。私の作品を褒めて好きだと言ってくれて、必要とされている気がして感激して泣いたことを覚えている。認められることが嬉しいとは思っていなかった。

小説家として活動してそろそろ三年が経つ。まだまだ走り始めたばかりの私の背中を押してくれるのはいつもこのファンレターだった。

一枚一枚、丁寧に封を切って中に目を通していく。三十枚目に目を通したところで私はそのファンレターから目を離した。

送ってきたのは旧友。今会うことはないがずっと私を応援してくれる友人だ。内容は何の変哲もないファンレター。でも最後にこんなことが書かれていた。

『戻ってきてくれ朝日。また一緒に音楽やろう』

私が小説家だということを知っている友人はそれなりにいる。だけれどわざわざファンレターを送って来てまで私のことを連れ戻そうとする人物は一人しか知らない。

初めて私と音を交わしてくれたあいつ以外ありえない。

だから私はその手紙を閉じて読み終わった方のダンボールに投げ入れた。

私が戻れなかった理由をあいっは知らない。私が真実を知る前に遠ざけたから知っているはずがない。

それに今更合わせる顔なんて私にはない。

だから今回も返事は書かなかった。

◇◇◇

ドラムを叩く。いつも以上に激しく、熱く。これは練習なのかただ我武者羅に叩いているだけなのかは自分でもわからない。それでもドラムを叩いている間は嫌なことは忘れられる、何も考えずに済むのだからこの時間が心地よくて仕方なかった。

「あいかわらず迫力満点だね」

「……何しに来たんだよ」

余韻に浸っていれば扉をノックする音。扉の方を見れば見慣れた仕事仲間が立っていた。

「何って仕事の依頼が来たから伝えようと思って」

「ま、そうだよな。最近じゃその話以外でお前が来ることも減ったもんな」

「それはもっと頻繁に私に会いたって意味？」

「ちげーよ」

「冗談だよ」

彼女はあたしのもとへと近づいてくる。背中に背負った楽器、キレイな黒髪は下ろして、笑う口元にあいかわらず愛想のいいやつだと思った。

「二週間後と三か月後にバックバンドの仕事。二週間後は二曲、三か月後は六曲だよ」

「曲は？」

「全部有名どころのカバーだよ」

「なら結構余裕だろうな」

たまに全部オリジナル楽曲で持ってくるやついるからこれは優しいものだ。

あたしはステイックを置いて彼女に向き合う。渡された資料に目を通していれば彼女はあたしのことを見て何か言いたげな表情をしていた。

「なんだよ」

「何かあったでしょ」

「……なにもねえよ」

「うそつき。わかるよそれくらい」

「だとしてもあたしは話す気はないから」

「あいかわらず不器用だね。人に頼ること、覚えないとしんどいよ？」

「それはお前にだけは言われたくない」

「私は頼ってるもん」

よく言うよ。あの日あたしを慰めた後に泣いてたこと、あたしは知ってるんだからな。だけどその話題は口に出してやらない。きつとこいつはあたしが何を考えているのかわかったんだろう。言わないでと、目が語っていた。

ため息を吐く。こいつは旧友だ。でも知らないことも多い。何もかもを聞きだすことが正義ではないということに気づいたのはいつだったか。知っていることに対して知らないと答えることも大切だと覚えてしまったのはいつのことだったか。

それであいつは救われたのか。今でも気がかりで考えてしまう。

そう言えばあの日あいつがいなくなった時にこいつは何も言わずに側にいてくれたっけ。結局あたしばかりが頼ってるってことなのか。

「……そう言えばさつき倉庫見てきたけどあのギター、なんで持って

たの?」

「人の家の倉庫勝手に漁ってんじやねえよ」

「あれ、朝日に渡したやつじゃないの?」

わかってっていると、目は口程に物を言う。きっとそれはあたしにも共通して言えることだった。

「やっぱりそうなんだ」と零す。これはもやもやの正体もバレてしまっただろう。なら隠す必要もない。

「……この前オーナーに会ったんだよ。その時に渡された」

「なんでオーナー?」

「SPACEで預かってたんだと。だけどSPACEはもう閉店したからあたしに預けるって」

「ふーん。けどそれだけの理由であんな胡散晴らしみたいな演奏する?」

「SPACEのラストライブで演奏したんだと」

「え?誰が?」

「朝日」

さすがにこれは想定外だったらしい。目を見開く彼女はずいぶん久しぶりに見た。

「ちよ、ちよつと待って!演奏したの?朝日が?」

「そう言ってたんだろ」

「な、なんで?だって朝日は!」

「オーナーが言うにはトラブルがあったらしい。それで緊急参戦したんだと。それがなかったら出てなかったらしい」

「なるほどね。確かにその出演は朝日らしいかも」

ああ。あたしだって思う。誰かを助けて、誰かを照らそうとするのはあいつの名前の通り、あいつの性格の通り。知っている。あいつの

ことなら。だけどだからこそ悔しいと思ってしまうのだ。

「……なんであいつが舞台に立つ理由があたしたち以外のやつらのためなんだろうな」

「……なんでだろうね。きつとあの日引き止められなかったからじゃないかな」

「やっぱ、そう思うか?」

「私よりも——が思ってることでしょ?」

あたしはスティックを握ってドラムを思いつき叩く。それを肯定ととらえたんだろう。彼女は背負っていた相棒を下ろしてケースから取り出す。アンプに繋いで音を繋いでいく。

あいつとの最初で最後の曲。リズム隊だけじゃ何を演奏しているのかわからない。あいつがいてくれなきゃあたしたちの舞台は終わらない。始まることすらない。

「あれは誰のせいでもないよ。だから誰かが責任を感じる必要はない」

「……わかってるよ」

きつとみんな頭の中ではわかっている。

それでも結局あたしたちはあの日に囚われたまま進めない。

◇◇◇

「有咲、買い物付き合ってくれてありがとうな」

「いえ。私も色々選んでもらいましたから」

休日、私たちは買い物をするためショッピングモールへ出向いていた。日用品を買い足して、軽くご飯を食べて、今度は有咲の買い物に付き合って、充実した一日だったと思う。



それにいいものも買えた。

「それ、二人なら喜んでくれると思いますよ」

「だといいんだけどな。今日早速渡してみるよ」

「はい。そうしてください」

いつもの分かれ道。ここから有咲を家まで送って行くのが日課だ。夕日が私たちを照らす。もう少しだけいたいと思った。

「有咲。夕飯食べてくか？」

「……いいんですか？」

「ああ。どうせ作るのは私だし三人分も四人分も変わらないよ」

「なら、お願いします」

嬉しそうな顔をされると私まで嬉しくなるというものだ。いつもなら一緒に歩かない帰路を一緒に歩けることに幸せを感じる。

たわいもない会話をしていれば家まですぐだった。扉の前に立つてカバンの中から鍵を取り出す。ドアノブの鍵穴に鍵を挿そうとしたらそれよりも先に内側から鍵が開いた。

中から出てきたのは当然私の妹。だが様子がいつもとは明らかに違った。

「おねーちゃんのわからず屋！」

「聞き分けが悪いわよ！」

「もういいよ！おねーちゃんのぼーか！」

「なっ！それは日菜の方でしょう！」

「おねーちゃんなんか知らないもんね！」

「え、ちよ、日菜!?!」

勢いよく飛び出していった妹の名前を呼ぶ。だけど振り返ることはなくすぐに背中は見えなくなっていた。

「すみません。私もちよつと出かけます」

「え、紗夜!？」

続いて無表情の中に怒りのようなものを混ぜた紗夜が出て行った。

この状況に困惑することしかできない。それは有咲も同じみみたいだった。

「……とりあえず、上がってくれ」

「あ、はい。わかりました」

どうせすぐに戻ってくることを予想して扉は閉めても鍵までは閉めなかった。

「朝日。日菜ちゃんが突然家に現れて怒りながら『今日からここに住む!』って言っているのだけどケンカでもしたの?」

「朝日ー。紗夜が突然家に来て『泊めてください』って不機嫌そうな顔で頭下げてきたんだけどケンカでもしたの?」

知らねえ。こつちが聞きてえ。わけわかんねえ。

千聖、リサからそれぞれ掛かってきた電話にそう答えながらため息を吐く。

なにやら珍しくケンカしたようだけどケンカした内容はわからな  
い。ていうかあの二人がケンカ?しかも日菜が怒るって紗夜のやつ  
何したんだよ。頭を抱える。

有咲に一言声を掛けて二人を連れ戻すために私は家から飛び出した。

二人が戻って来て四人で取った夕食は、すごく有咲に申し訳なくな  
った。

報告と、出合い。

「なあ紗夜。何があったら日菜とケンカすることになるんだよ」

「姉さんには関係ないわ。これは私と日菜の問題よ」

「いやだからこそ聞いてるんだろ？」

休日。日菜が朝から仕事に出掛けたため昼食は紗夜と二人で取っていた。

雰囲気は、言わずもがな最悪。いつもならなんでもない話題で盛り上げられるのに最近は無言のままだ。

普通の話題ならなんでもない。だけど私が日菜のことを話題に出せば紗夜を包む雰囲気が一気に険しいものになるのだ。一週間経った今も日菜とのケンカが続いていることはすぐにわかった。

「姉さんに話すことなんて別にないわ」

「あのな。ここまで拗らせといて何ともないわけないだろう？」

「そうかしら？」

「いい加減、何が原因なのかくらいは話してくれよ」

また無言。これで何回目だろうか。ため息をつく。

紗夜が話してくれないとなると埒が明かない。

というのも、朝日菜と話した時に今と同じような質問をしたのだが日菜も無言をつき通したのだ。揃いも揃って手の施しようがない。

それに無言を貫かれるのは、心が痛い。反抗期かよ。お姉ちゃん寂しい。なんて冗談も、そろそろ限界だった。

「……はあー。まあいいよ。私は出掛けるけど紗夜の予定は？」

「今日は練習もないから家で自主練習をするつもりよ」

「了解。今日はポピパの練習あるし夜遅くなるかも。その時は連絡す

るから出前でも取っちゃっていいから。いってきます」  
「わかったわ。いってらっしゃい」

さすがに仲直りしないってことはないだろうけど、自然消滅しそうなケンカの仕方でもない。早急に何が原因なのかを突き止めなければ。

そう考えながら私は約束の場所に足を運んだ。

◇◇◇

昼過ぎの商店街はそれなりに賑わっていた。

部活帰りにアイスを加える学生、スーツに身を包み暑そうなサラリーマン、買い物帰りの主婦。その人たちを避けながら私は指定された店を探す。

商店街にはやまぶきベーカリー以外の目的で来ることがほとんどないため知らない場所だらけだ。

「あつー朝日さんー！」

「……こんにちは、朝日さん……」

「あこちゃん、りんりん、遅くなってごめんね」

目的の店を見つけ中に入れば奥の席についていたあこちゃんとりんりに声をかけられる。手を振り彼女たちと同じ席に腰掛け謝罪の言葉をかける。

テーブルには既にケーキと紅茶が並んでいた。お冷を持ってきてくれた店員さんに同じものを注文する。

「……珍しいですね。朝日さんが遅れるなんて……」

「ちよつと紗夜と話してて……。ほら、日菜とケンカしてるだろ？」

「あー。そう言えば紗夜さんとひなちゃんケンカしてるんですね。紗夜さんが怒るならまだしも、ひなちゃんまで怒るなんて……」

「あれに関しては私も驚いたよ」

あこちゃんの発言にため息をつく。

そもそも温厚な日菜を怒らせるとか何をしたらできるんだか私にはわからん。

「……原因、何かわかったんですか……?」

「全然。日菜も紗夜も私には関係ないってそればかりでさ……」

「だいぶ、怒ってますね……」

「昨日の練習で紗夜さんが鬼みたいな形相だったのもそれが原因ですか……?」

「まじか。それについては私から謝るわ」

紗夜のやつ、練習の時までそんな感じなのか。Roseliaに私情は持ち込まないって言ったのはどこの誰だよ。がつつり持ち込んでるじゃないか。

ごめんねと謝ればぶんぶんと左右に両手を振られた。

「いや朝日さんが謝ることじゃないですよ！それにあの場はリサ姉がまとめてくれたのでどうにかかりましたし」

「またリサにお世話になったみたいだな」

最近紗夜関連のことだとリサに頼ってばかりな気がする。この前も急に家に押しかけていたし。今度お礼でも持って行くか。

「てか、この話は別にいいんだよ。それより今日私が呼ばれた理由って何？話があるとは聞いてたけどさ」

店員さんが頼んだものを持ってきたからお礼を言ってそれを受け取る。話を変えるにはちようどよかった。

首を傾げる私にあこちゃんとりんりんは顔を合わせて照れたよう

に目を逸らした。なんなんだ。

「……あのね、朝日さん。驚かないで聞いてほしいんだけど」

「うん。何？」

「あことりりんね、付き合ってるんだ」

「へえ……ん？待ってなんて？」

「だ、だからあことりりんは付き合ってるの！」

つきあってる……つきあってるって、え、どこに……？

「いや、えっと、待って、理解が追いついてない」

「あの……わかってるとは思いますが……どこかにつきあってもら  
うとか、そういう意味ではないですよ……？」

「あー、うん。大丈夫、だよ。うん」

とりあえず落ち着こう。そう思って紅茶を一口飲む。

まずは状況を整理しよう。

あこちゃんとりんりにこの喫茶店に呼び出されて、紗夜たちのこ  
とを話して、本題である二人の話を聞いて、あこちゃんとりんりが  
付き合ってるってことを知った。

うん、これで認識は間違いないはずだ。

「えっと、おめでどう……？」

「なんで疑問形なんですか？」

気の利いた言葉が出てこない辺り相当動揺しているのがわかる。  
いや、休日の喫茶店でそんな素振りを一切見ることがない友人にそん  
な報告をされたら誰だって驚くだろう。

私の反応は彼女たちの予想は裏切っけていてもおかしくはないはず  
だ。

「ごめん動揺してる。けどいつから?ていうかどっちから告白したの?」

「夏休み入る直前にあこから告白しました」

「あ、そうなのか。ならよかった」

「……それ、どういう意味ですか?」

「あ、いや、ううん。なんでもないよ」

りんりんから手を出したんじゃないかって思ったわけでは決してない。本当だよ。

「本当におめでとう。結ばれてくれたことは素直に嬉しいよ」

「ありがとうございます朝日さん!」

「けどこの話、誰が知ってるの?」

「朝日さんと紗夜さん、友希那さん、リサ姉、それからお姉ちゃんですね!」

私とRoseliaのメンバーと、お姉ちゃん?

「あーそう言えば出会った頃にお姉ちゃんがいるとか言ってたな」

「はい。ちゃんとは話したことなかったでしたっけ?」

「……宇田川巴さん……聞いたことないですか?」

「名前は初めて聞いたよ。巴って言うの?」

「はい!自慢のお姉ちゃんです!」

笑顔のあこちゃんからは日菜みたいな雰囲気を感じる。お姉ちゃんが好きだって気持ちがよく伝わってくる。

「どんな人なの?」

「かっこいい人です!あこが世界で一番かっこいいって思ってるドラマーですよ!」

「へえ。てことはバンドやってるの?」

「はい。Afterglowってバンドのドラマーなんです！」

あこちゃんも私たち姉妹と同じ関係性だったとは。だけど担当が同じならバンドのことも話が合うしさぞ楽しいことだろう。

「おっ！あこ！ここで会うなんて奇遇だな！」

「あっ！お姉ちゃん！」

「え？」

店の扉があいた途端、あこちゃんが席を立ちあがる。

手を振るあこちゃんの視線の先には赤髪のお姉さんがいた。その人を筆頭に一人を除きギターかベースかを背負った四人がいた。もしかしたらこの子たちがさつきあこちゃんから聞いたAfterglowってバンドだろうか。

「燐子さんと紗夜さんも一緒だったんですね」

なんか、知ってる展開で苦笑する。

姉妹で三つ子とは言えそんなに私と紗夜は似ているだろうか。

「キミが巴か。あこちゃんとは全然似てないね」

「へ？あの、紗夜さん……？」

「なんかー。いつもと態度違くないですかー？」

「ていうか巴。この人紗夜さんじゃないよね？」

「あーうん。一から全部説明してあげるよ」

赤メツシユの子が気づいてくれた。

ちゃんと自己紹介しようと思って隣の席に座るように促す。

「みんな何飲む？」

「いつものでいいよ」



「あたしも〜」

「私はケーキセットもお願い！」

「わかった！ちよつと待っててね！」

慣れたような注文内容と裏に下がっていく女の子。

常連であるうえにお店側の人なのだろうか。

「……羽沢さんの親が、このお店を経営してるんですよ……」

「つぐちゃんは看板娘なんです！」

「ほー。なるほどね」

私の思考を見透かしてかりりんが教えてくれる。それをあこちゃんが補足してくれた。

「や、やっぱり紗夜さんじゃないよね？モカ、誰かわかる……？」

「多分、朝日先輩じゃないー？ほらー。日菜先輩がよく話してる」

「日菜と知り合いなんだ？それなら話が早いね」

軽く自己紹介を済ませ、その間に戻ってきたつぐも交えて話に花を咲かせた。

「へえー、みんなは幼なじみで全員羽丘に通ってるんだ」

「はい。そうなんです。日菜先輩のことをそれで知ってて」

「バンドやってるってこともあつてよく話すんですよ」

自己紹介を終えて私は真っ先に日菜との関係性を聞いた。どうやら学校の先輩後輩になるらしい。

日菜はアイドルでもあるし存在が目立つから同じ学校通ってるなら知っててもおかしくはない。というか話題には上がるだろうしきっと一度くらいは聞いたことある名前ではあるだろう。

「なるほどな。けど日菜とよく話すってことは何かしら日菜が迷惑かけてるだろう?ごめんな?」

「いえそんな!迷惑なんて……」

「いやー。つぐは意外と日菜先輩に絡まれてるよねー」

「ほんとごめんねつぐ」

謝れば「そんなことないです」と両手をぶんぶん身体の前で振った。

迷惑だと思っただけ言ってくれていいのに。けどつぐは本当に迷惑だっと思ってなさそうだ。

「けどなんか、意外ですね」

「意外って何が?」

「朝日先輩って紗夜先輩と似てるって日菜先輩から聞いていたのでもっとお堅い感じかと思ってました」

「ちよいちよい。そればかりは勘弁してくれよ。あのお堅さは紗夜だけで十分だっつて」

「それは、確かに言えてますね」

「だいたい紗夜は真面目すぎだし日菜は自由すぎだしな。意外と大変だぞ」

「大変って言うわりには嬉しそうな顔してますね」

「まあ二人のことは嫌いじゃないから。まあ、頑固なところが玉に瑕って感じだけど」

私も頑固だと言われがちだが、それでも今回ほど拗らせたことなんてない。

まあ、虐待の件は別だとしての話だけど。

「そう言えば最近日菜先輩に会った時、難しい顔してたんですけどどうしてかわかりますか?」

「え?日菜が難しい顔?それっていつの話?」

「会ったのは先週です。珍しく怖い雰囲気出して……」

「ああ、あの日ね。確かにあの日の日菜さんは紗夜さんかと見間違うくらいには怖い顔してたね」

「あーそれはあれだな。ケンカした日だな」

「え、ケンカ?」

「紗夜と日菜のやつケンカしてるんだよ。今も続いている」

私の発言にAfterglowは目を丸くした。

これに続く言葉はわかっている。「おねーちゃん大好きな日菜がケンカ!」って感じのことと言われるんだろう。わかっているよもう何回も同じこと言われてきたんだから。

何か言われる前に紅茶を一口飲んでため息を吐く。

「つたく。家にいる時はいつまでも険悪モードだし、正直仕事とかに支障出てないか心配だよ」

「なんでそうなっちゃったんですか? 紗夜先輩と日菜先輩がケンカするってだいぶ大事なんじゃ……」

「原因は知らん。私もずっと聞いてるんだけど全然理由話してくれないし。むしろ何か知らないか?」

「いえ。あたしたちもその話は今日初めて聞いたので」

「まじか。なら何かわかったら教えてくれ」

来て早々した話題がまたぶり返されるとは思っていなかった。そう思いながら私はスマホを見た。

時間的にそろそろポピパの練習が始まる頃で有咲からメッセージが数件来ていた。元々はあこちゃんとりんりんの話を聞くために訪れただけだし聞きたいことはたくさんあるだろうが私はここで抜けさせてもらおう。

七人に事情を話しお会計を済ませる。

店を出た直後にかかってくる電話を取り、次の日の予定を取り付けた。

キミたちは知らない秘密事。

なんだかんだ居心地のいい羽沢珈琲店に座ることが増えた気がする。

家においても険悪な雰囲気の二人の相手をしなないといけないし執筆の集中力が途切れてしまうのは数度試みて体験済み。その間だけ二人を家から追い出すのも考えたが練習や仕事で疲れているだろうか気が引けた。

こんなことなら仕事場を引き払わなければよかったなんて思いつ心地いい空間を見つけることができて助かっていた。

夏休みのクーラーの効く涼しい店内は昼過ぎだからあまり人がいなくて執筆にはうってつけだ。パソコンのディスプレイには物語が半分ほど進んだ作品が表示されていた。

「朝日先輩。コーヒーのおかわりいかがですか？サービスしますよ」

「ありがとうございます。けどサービスっていいの？」

「はい。常連さんになりつつありますし、そのお礼つてことで」

看板娘のつぐとは通つていくうちに仲良くなれたと思う。腕の包帯のことで警戒されていたのは本当に最初の最初だけだった。こんなことなら商店街の散策はもつと早めにしておくべきだったと若干の後悔が生まれたレベルだ。

話を聞いてみるとつぐは紗夜とも日菜ともそれなりに付き合いがあるらしい。どちらにも可愛がられているみたいで安心した。

「Afterglowは夏休みの間のどんな感じ？」

「どうっていつもと変わらないですよ。ただ休みになったのでいつも以上に集まることは多いですけど。夏休みの宿題一緒にやったりとか」

「ほんと仲良しだよね」

「はい」

私には幼なじみがないからそういう存在に対する憧れみたいなものはある。だからこそ小説でも幼なじみ設定の盛り込んでるし。

「あとは練習時間が少し長めになったりとかですかね」

「まあ休みだしそうなるよな」

「ポピパもそうなんじゃないんですか？」

「練習時間？こっちは有咲のこの歳でやってるから時間に制限はないからあんまり変わらないかも。大抵予定合えばみんな朝からいるし」

「その環境羨ましいですよ」

つぐの笑みにつられて笑う。無料で練習できる環境があることなんて滅多にないしそう思うのは当然だろう。私は教えるついでに入り浸って練習もできるし有咲に感謝だな。

「そう言えば今度のライブの準備って順調ですか？」

サービスで持ってきてくれたコーヒーを出しながらつぐは問う。

「ああ。みんな張り切ってるし今のところ問題はないかな」

執筆の手を止めマウスを動かしてスマホと共有しているスケジュール表を開く。二週間後、五バンドの合同ライブが控えていた。ライブハウスC i R C L E主催の今回の合同ライブは元々まりなさんが計画し、参加バンドを集めていたそう。まりなさんと私が顔馴染みということもあってポピパも誘われた。今人気や勢いのあるバンドを呼んでライブをやりたいと詳細を聞いた際に話してくれた。当然のように了承した香澄にため息をついたのは記憶に新しい。

他に誘われたのはRoselia、ハロー・ハッピーワールド、Afterglow、そしてPastel\*Paletteの四バンド。正直パスパレを呼べるのは想定外だったしよく許可が取れたものだと思った。

「あと合宿の件ですけど、聞きました？」

「あれね。もちろん聞いたよ。花音からポピパ宛てにメッセージ来たから」

「参加しますか？」

「なんだかんだで全員乗り気」

「こっちもですよ」

突然であり、そして必然的に組まれた合宿。

組まれた意図を知っているのは全員だとしても、とんでもなく大掛かりな計画が始まることを知っているのはほんの数人だけ。クスリと笑みがこぼれてしまう。

「朝日先輩？」

「なんでもないよ。気にしないで」

笑みがこぼれてしまうのも、理由を知っているのは数人だけ。シミュレーションは完璧だった。

「それより、朝日先輩はパソコンで何をやってるんですか？」

「ん？これ？小説書いてるんだよ。こんな感じだけど一応私小説家やってるから」

「え!?!そうだったんですか!?!」

「そうだよ。もしよければ読んでくれると嬉しいな」

「え、これって！」

カバンから最近発売されたばかりの小説を差し出す。表紙を見て

つぐは驚いていた。

「つぐ?」

「こ、この小説の作者さんって朝日先輩だったんですか!」

「あれ?もしかしてこの小説知ってる?」

「は、はい。この間本屋に寄った時に買いました」

「あ、そうなんだ。お買い上げありがとうございます」

サインでも書こうか?と問えば目を輝かせ裏に戻って行った。あれだけいい反応をしてくれたらこっちまで嬉しくなるものだ。

私が彼女に向けた笑顔はきつと輝いていたことだろう。

◇?◇?◇?

「合宿ですか?」

「ええ。二泊三日でやることになったわ」

Roselliaの練習をいつも通り終わらせ、CiRCLEの受付前のスペースで今井さんがお会計しているのを待っていると湊さんからそう告げられた。初めて聞いたのか宇田川さんと白金さんも私と同じように驚いていた。

「だいぶ急ではありませんか?それにどうして今合宿を?」

「今度CiRCLEでPoppin' Party、Pastel\*Pallettes、Afterglow、ハロー・ハッピーワールドで合同ライブがあるでしょう?その時のセットリストとバンド順を決めるために合宿をしようと誘われたの」

「合宿をやらずとも集まって決められることでは?」

「一緒に練習して、モチベーションを上げようってのが目的らしいよ?」

「今井さん」

「一緒に練習すれば触発されるだろうし、ついでに親睦も深められるいい機会だって言われちゃってね。まあ参加しても問題ないと思っ  
たし一応オツケーは出してきたけど」

「いくらなんでも急ですよ。その様子だどこでやるのかも決まってる  
いでしようし。費用も日程も勝手に決められては……」

「その辺は大丈夫だよ。場所はこころが提供してくれるし日程は元々  
一日中スタジオ練入れてた日だから」

ほら、と今井さんはスケジュール表を指差す。確かにスタジオ練習  
の日と丸被りしていて日程的には問題がないようだった。

「あこは大賛成ですよ！合宿なんて楽しそうです！」

「ですけど……パスパレはよく日程合わせられましたね……」

「あーそれね。一日目は仕事入ってるらしいから夜から合流って形に  
なるんだって。あと千聖は三日目の昼には仕事があるから先に帰  
るって言ってたよ」

それを聞いて私は眉間に皺を寄せてしまう。私が日菜とケンカし  
ていることを知っているのに気まづくなるとか思わないのか。

そう考えていると今井さんが心配そうな視線を向けた。

「紗夜はそろそろ日菜と仲直りしなきゃダメだよ」

「……わかっていますよ」

それは誰かに言われなくても理解していることだった。

何でもないことなら私が折れてもいい。だけど今回のことはどう  
しても譲ることができないから。日菜と顔を合わせたら、また言い合  
いをしてしまいそうだ。

◇◇◇



「……どうだった?」

「ええ。及第点ね」

私を見て彼女はそう答える。良い返事がもらえて私はその場に座り込んだ。

息を整えて汗を拭く。彼女から差し出されたスポーツドリンクを受け取って出て行った水分を補給していく。

周りを見てみれば自分の汗で床が濡れていた。あとで綺麗に片さなければ。

「それにしても思っていた以上のことをするわね。貴方、こっちの世界が向いているんじゃないかしら?」

「そうやって煽っても何も出ないぞ」

立ち上がり隣に並ぶ。平均より小さい彼女だけど存在感は大きかった。

「数回アドバイスしただけでこれだけ良くなられたら私の立場がないわ」

「まあ、毎日のように演技してたからな」

「それは聞かなかったことにするわ」

少しだけ複雑そうな表情をするもんだからこっちは苦笑する。

「じゃあ言い方を変えるわ。さすがは日菜ちゃんの姉ね」

「日菜を引き合いに出されたら私だって立場がないんだけど?」

「でも驚いたわ」

「何が?」

「提案もアイディアも出しはしたけどまさかこんな方向に進むだなんてね」

「ノリノリのくせに」

それくらい見てたらわかる。学校にいる時と全然違う表情だ。この特訓の最中だっつてずいぶん楽しそうだよ。

「いつまでもケンカしたままだといつか仕事に影響するもの。日菜ちゃんは紗夜ちゃんや朝日のことになると感情が表に出やすいし、それについて協力するのは当たり前よ」

「もの好きだね。そんなに日菜のこと大切？」

「その言葉そっくりそのまま貴方に返すわよ」

彼女が口で負けることは珍しい。ため息をつく彼女にしてやったりの笑みを返した。

スマホのカレンダーを開く。

合宿の日はすぐそこまで迫っていた。

## はじまりの合宿デイズ。

合宿一日目が始まった。

メッセージと共に添付されたマップを頼りに弦巻家の所有する別荘に移動した。

さすがは弦巻家と言うべきか。別荘の大きさが段違いだ。みんな入った瞬間に度肝を抜かれていた。ハロハピのメンバーはちよくちよく来るらしく薫、はぐみ、こころは明るく、花音と美咲は苦笑していたが。

それぞれが泊まる部屋に荷物を置き、防音整備のされている部屋に集まっていた。こころのところの黒服を着た使用人さん？が施設の説明をしてくれるそうだ。

「練習スタジオはここを含めて四つあります。バンドの皆様で合わせられる場合はこちらを利用ください。また皆様が泊まっているお部屋は全て防音室になっておりますので個人練習はいつでももしていただいて構いません。部屋の物は飲食自由ですし好きなようにお使いください」

黒服さんが私たちを引き連れて別荘内を歩きながら施設を一つ一つ丁寧に説明していく。

その途中、目の前に現れた見慣れた姿。肩に手を置けば何故かため息をつかれた。

「人の顔見てため息って酷くない？」

「そんなことないわ」

「紗夜をそんな子に育てた覚えはないぞ」

「私だって別に姉さんに育ててもらった覚えはないわよ」

あいかわらずつれないことを言う妹に私はわざとらしく肩をすくめた。再度ため息をつかれる。

「だいたい、どうしてここに姉さんがいるのよ。この合宿は次の合同ライブの打ち合わせも兼ねてやっているのよ？ 姉さんは関係ないでしょ？」

「ポピパのメンバーに来てほしいって頼まれた。私だつて行く予定はなかったけど、ダメ元で花音に頼んだら普通に来ていいって言われたから来たんだよ」

「だったら家にいる時に言ってくればよかったじゃない。そうしていればここについて早々驚かなくて済んだのに。最初何かの見間違いかと思つたわよ」

「そつちにまで話が伝わってるもんだと思つてたから言わなかったんだよ。言わなかったことに拗ねるなつて」

「別に拗ねてないわよ」

紗夜は私がいることに驚いていたらしい。理由を話せば納得はしてくれたようだがどこか不満げだ。

「そもそも合宿に参加して大丈夫なの？」

「それは、どういう意味？」

「手のこと、忘れたわけじゃないでしょ？ 最近は病院にも通つて回復しつつあるつてことは聞いていたけど後輩に教えるために無理をしたら元も子もないじゃない」

「無理なんてしてないよ。今回の合宿だつて調子を見るのがメインだし。無理するほどギターを弾く気なんて最初からないから大丈夫だつて」

それは最近日菜からも指摘されたことだったから思わず頭を掻いた。うちの妹たちは私のことになる途端過保護になるから困ったものだ。

「ほら、テーピングもしてるしさ？」と補足するも紗夜は私にジト目を向けるだけだった。

『姉さんの大丈夫は正直あまり信じていないわ』

紗夜からそう告げられたのはつい先日。担当医に少しでも痛みを和らげるためにと勧められたテーピングを風呂あがりにはリビングで巻きなおしていた時のことだった。

テーピングを巻く手を止め、紗夜を目の前に目をパチパチと開け閉めする私。紗夜は当然と言いたげな表情をしていて私に向けて大きめのため息を吐く。

『姉さんは何かとすぐに無理をするもの。大丈夫なんて言う時は大抵大丈夫じゃない時よ』

『いやいや。そんなことないだろう？』

『そんなことなかったら私はこんなこと言わないわよ？』

まあ自覚がないわけではない。だけどそこまで深刻にとらえるようなことでもないだろう。軽い気持ちで日菜に「そんなことないよな？」と問う。

『おねーちゃん。本当に何ともない人は大丈夫なんてそもそも言わないんだよ？』

『一気に現実見せてくんよ』

そんなこともあり、今や私の大丈夫は信用に値しないものと認識されている。まあ多少のことは目を瞑ってくれるらしいけど本気で不味いと判断されたらギターを取り上げられるようになった。心配してくれているとわかっているからこそ正直二人には頭が上がりなかつた。

「無理してるって思ったら誰が何と言おうとすぐに止めるわよ」  
「わかってるって。大丈夫だよ」

紗夜はそれ以上何も言わなかった。少しは私の大丈夫を信じてくれるらしい。ありがたい限りだ。

「パスパレは午後から合流だっけさ」

「聞いてるわ」

「そうか。日菜と仲直りはできたのか？」

「日菜が折れるまで仲直りする気はないわ」

譲る気は未だにないらしい。いくらなんでも長引きすぎだろ。

でもそれなら仲直りさせがあるってものだ。

一通り説明が終わり各バンドでの練習をすることになった。パスパレが合流するまではこの体制で練習を続けるようだ。

「香澄。新曲の途中、フレーズ間違ってたぞ」

「わかってます!」

「有咲はリズムずれてたから直せよ」

「は、はい!」

「沙綾、おたえ、りみちゃんは完璧。グツジョブ」

三人に向けて親指を立てれば香澄から「ずるい!」という声がかかる。がいつものことだから特に気にしない。「どうせやれるんだろ?」そんな表情を向ければ嬉しそうに笑う。

この表情を見れるのが嬉しいと思うようになったのはいつからだろうか。こいつらと出会ったのはつい最近のはずなのに長らく一緒にいた気がする。やっぱり期間よりも時間の密度の問題なのだろう。みんなの体調は手に取るようにわかるし今日は音がノっている。ライブ前だと考えると最高のコンディションだ。

「朝日先輩は練習しないんですか？」

「やるとしたら後でやるよ。なんで？」

「いえ。今日は一度もギターに触れてないなって、そう思ってる」

「あー」

香澄とおたえの音色が室内に響く。水分を取る私に近寄ってきた有咲。彼女の指摘に思わず苦笑いをしてしまう。不思議そうに首が傾げられた。

「紗夜に無理したらギター取りあげるって言われてるんだよね。だから下手なことできなくてさ」

「あー……。朝日先輩、紗夜先輩と日菜先輩には弱いすもんね」

「否定はしない。だってあの二人、私が無理してたらぶちぎれるから……」

「まあその時は私もぶちぎれるので安心してください」

「おっと安心できない案件が増えたぞ？」

茶化す声に笑い合う。そんな関係が心地いい。

「朝日く。ちよつといい？」

扉の開閉音と共にリサが私の名前を呼んだ。有咲に断りを入れて扉の方にかけていく。壁に隠れて見えなかったが美咲も一緒のようだ。

「どうした？何か問題？」

「ううん。そうじゃないよ。もう少しで千聖が着くみたいだから打ち合わせの時間決めようと思って」

「そういうことね。確認できることは今日中にやっておきたいよな」

「その件ですけど黒服さんには事前に話を通してるのである程度のこととは終わってますよ」

「そうなの？じゃあその件も含めて千聖が来たら話すか」

「そうしよう。部屋は朝日のところで大丈夫そう？」

「ああ。大丈夫だよ」

「わかった。じゃあまた後でね」

練習中だったのだろう。二人は早々とそれぞれの練習スタジオに戻って行った。

「朝日先輩、リサさんと美咲と何の話してたんですか？」

いつの間にか背後にいた沙綾に驚く。だけどその問いを聞いて自然と口角は上がっていた。

「ちよっとしたお楽しみの話だよ」



過去を知る者。

「それで姉さん？」

「これはどういうことなの？」

夜になりパスパレが到着した。夕食を終え、部屋分けをした。正確には事前に決めていた部屋分けを伝えた、という感じだ。

部屋分けされた部屋に入り、荷物を置いて風呂の準備をしていると同室の二人にそう問われた。

「何が？」

質問の意図は理解していた。当然、不満なのだろう。同じ立場なら間違いなく抗議する。

けどこれは仕方ないのだ。こいつらは多少強引なことしないと揺らがない。

「姉さんがこう仕向けたんでしょ？」

「なんだ。バレてたの？」

「当たり前よ。そうじゃないところはならないじゃない」

「なんでケンカしてるのわかっててこんなことするの!?!おねーちゃんのいじわる!」

意地悪とか知らんわ。仲直りしないお前らが悪いんだろうが。

残念だけどこの部屋分けはもう決定事項だし変えられない。というか他のやつらには十分迷惑かけてるしまた部屋分けなんて迷惑をかけるわけにはいかない。

「とりあえず二泊は一緒だからその間に仲直りもしろよな」

「無理！」

「無理よ！」

「何なのお前ら。仲良しかよ」

「違うよ!!」

「違うわよ!!」

仲良しじゃねえか。

ほんとになんでケンカしてるのかわかんねえよ。

「なあちよつとは……」

「もういいよ！」

「ちよ、おい！日菜！」

勢いよく扉を開き出て行く妹に私は頭を抱える。紗夜に目を向ければベッドに腰をかけてギターを鳴らしていた。

ため息をつく。本当に困ったものだ。

「とりあえず私もちよつと出てくるから大人しく留守番してろよな」  
「ええ。わかったわ」

◇◇◇

私の過去を知っている人間はそう多くない。何があったのかを詳しく知っている人間はさらに少ない。

ただど過去の私を知っている人間が現れたとするのなら、そしてこの合宿参加メンバーの中にそんな人間がいるとするのなら。

口止めの手段は選んではいけない。

「あつ！朝日先輩！」

「香澄。彩ところも一緒か。何してるんだ」

「うん。香澄ちゃんが別荘内を探検しようって言い出してついて来たの」

「探検って、黒服さんに説明してもらっただろ。探検ってなんだ」

「部屋の中までは説明してもらってないですよ！だから探検するんですー！」

なにその理論。

「探検するのはいいとして、なんでここまで一緒なのさ。こいつはこの別荘内知り尽くしてるだろ」

「あら。そんなことないわよ？探検って言われたらわくわくするもの！朝日も一緒に探検しましょうー！」

あ、そうですか。私はやらないですけど。

「そうだ朝日ちゃん。さつき麻弥ちゃんが朝日ちゃんのこと探してたよ」

「麻弥が？なんで？私話したことないんだけど」

「さあ。話の内容までは知らないけど」

「そうか。教えてくれてありがとう。だけど一つ訂正してくれ」

「え？何？」

「ちゃん付けはやめろ。吐きそうになる」

「ええ!?なにそれ!？」

「いいからやめろ。いいな」

そう言い残して私は三人の横を通り過ぎる。麻弥は確か、沙綾と花音と同室だったっけか。ならそっちに向かうのが手っ取り早いだろう。

つか。話って一体何なんだろうか。見当もつかない。

そんなことを考えながら扉横の呼び鈴を鳴らす。

「はい、って朝日先輩。どうかしたんですか？」

扉を開いたのは沙綾だった。部屋の外から中を覗けば麻弥と花音が楽しそうに話している姿が確認できた。

「麻弥のこと呼んでくれる？」

「何か用事ですか？」

「私がつていうより麻弥が私に話があるらしくてさ」

「そうなんですか。呼んできますね！」

沙綾が麻弥を呼びにかけていく。

「あつ、朝日さん！は、初めまして！」

麻弥はアイドルで見えていた時と違いメガネをかけていた。緩いパーカーを着ている。そして何故か緊張していた。

確かに怖い印象を持たれて話しかけるのに緊張されることは多いけど今回はそれとは違う気がした。なんというか、会えて嬉しそうな表情をしていたのだ。

「初めまして。話があるって聞いたんだけど」

「そ、そうなんです！ずっと聞きたかったことがあって!!」

グイツと私に顔を近づけてくる麻弥に私は身を一步引く。テレビで見た時は大人しい子だと思っていたけどそうでもないのかもしれない。

「朝日さんってあれですよね！元々ふえい……もがつ！」

聞こえて来そうになった単語に私は思わず麻弥の口を片手で抑えた。

心臓が急にうるさいほど脈打つ。

どうしてお前がその名前を知っている。

「ちよつとこつち来い！」

「え!?!ちよつと!」

こんなところでできる話じゃない。そう判断して私は誰もいないスタジオに彼女を押し込んだ。連れてくる前に色んなやつに不思議そうな目を向けられたが気にしてられない。

そのまま壁に追い詰めれば照れているのか頬を赤く染めた。こんな状況で悪いが正常な判断力くらいは残しててくれよ。

「え、あ、あの……」

「おい。どうしてそのバンドのことを知ってる」

「どうしてって、ライブを見ていたので」

「ッ!?!」

いつ想定しただろう。日菜のバンドメンバーに私のことを知っている人間がいるなんて。いつからバレていたのだろう。私があのバンドのメンバーだって。一体、その事実を誰が知っているのだろう。

「……いつ」

「へ?」

「いつのライブだ。お前が見たのは一体いつの……」

「えつと……中学三年生の冬のライブです」

中三の冬。ということとは……。

「………F Future World Fees  
W Fの予選ライブの日か」

「はい。ジブン、会場で見えました」  
「マジかよ」

私は手を離し壁に背を預け胡坐をかいて座り込んだ。どうしたもんかと頭を搔く。

麻弥はそんな私に心配そうな視線を向けた。

「あの、どうかしました?」

「麻弥」

「は、はい?」

「お前この話、誰かにしたのか?」

「え?」

「私が昔入ってたバンドのこと、誰かに話したことあるか? バンドメンバーとかに」

「い、いえ。少なくともジブンはメンバーには話してないっすよ」

それならひとまず日菜が知っていることはないだろう。

FWFは大きなイベントだ。けどあの頃はネット配信もしていなかったしバンド参加メンバーも優勝、準優勝したバンド以外名前も顔も出ることはなかった。だから普通何十何百といったバンドの一つである私たちのバンドを知る人間なんていないはずなんだ。確かにネットでは多少騒がれていたけどそれでも今では誰もバンド名など覚えていない。その程度の知名度だった。そのはずなのに。

「どうして、お前は覚えてるんだよ」

「え?」

あんな悪目立ちしたバンドを覚えているなんてよっぼどのもの好きか変人だ。そんなやつがこんな近くにいるなんて想定外に決まってるじゃないか。

「そりゃあ、あれだけいい演奏をしていましたから。それを披露したのが同年代の女の子たちだと考えたら憧れないわけないじゃないですか」

「憧れ？」

「はい。そうっす」

憧れって一体何を言っている。確かに予選ライブの日の演奏はどの練習の時よりも上手くできた自信はあった。みんな絶賛してくれた。だけど本選のあれは……。

そこで一つの可能性を思いつく。そのまま麻弥に質問をした。

「……お前もしかして、知らないのか？」

「知らないって何をです？」

「本選の私たちの演奏だよ」

「あー、実はジブン本選の日は用事があってどうしても行けなかったんですよ。ですけどホームページで順位は確認しました。ネットでの評判も」

「だったら」

「はい。あの失敗の話も聞きましたよ」

あの日の失敗は夢であってほしかったのにそうはいかないらしい。自分以外にも覚えている人間がいる。目の当たりにすると罪悪感が増していく。

「麻弥、この話は誰にも言わないでくれ。バンドのことも、誰にも話さないでくれ」

「え……？」

「頼むよ」

「別にそれはいいんですけど言いたくない理由でもあるんですか？」

言いたくない理由。

ただ一つの最大の理由。

「……話が広まって、あいつらにバレたくないんだよ」

ワガママを押し通して来たのだ。

今更会う資格もどんな顔して会えばいいのかもわかりやしない。

「事情はわかりませんがどわかりました。皆さんには黙っておきます」

「ほ、ほんとか？ありがとうございます」

「ただ条件があります」

麻弥はにこつと笑う。不気味さはない。ただ最初と変わらず嬉しそうだった。

「バンドの曲を聞かせてください」

「……下手な演奏で良ければいいよ」



レクリエーション。

合宿二日目が始まった。

バンドごとに分かれて、午前午後ときっちり練習をこなす。夕食を終えて、そして迎えた楽しいことが起こる時間。

「レクリエーション、ですか？」

「ああ。せつかくの合宿だしやろうってことになったんだ」

黒服さんと打ち合わせを終え、準備を進め、その話を各部屋に伝えるに行った時の反応はそれぞれで。

部屋の配置的に最後呼びに行つた有咲は今日一番少ない困惑の表情になっていた。

「詳しいことは歩きながら話そうか」

「わかりました。けどどこに行くんですか？」

「ま、それはついて来たらわかるよ」

有咲のことだから場所を聞いても逃げたりはしないだろうけど、実際香澄は逃げ出しそうだったし、保険をかけておくのは大切だ。

有咲を連れ出し私は今回のレクリエーションの舞台となる建物裏の森に向かう。

なんとなく何をするのか察していそうな有咲は目が泳いでいた。

「どうした有咲」

わかっているフリをして私は彼女に問いかける。

「な、なんでもないです」

見え見えの強がり意地っ張り。そんなところも愛おしい。

「朝日！ やつと来た！ 早く始めちゃおうよ！」

私のことを見つけたリサが駆け寄ってくる。私の腕を掴んで引く。

「お、おいリサ？ 何をそんなに慌ててるんだよ」

「は、早く始めないとみんな待ってるよ。説明もあるんだし」

「それはわかるけどそんなに急ぐようなことでもないだろ？」

明らかにリサの様子がおかしくて、そしてその理由がおそらく有咲と同じであるとなんとなく察する。

「ははーん。さてはお前怖いんだな？」

「そ、そうだよ！ だからさっさと始めてさっさと終わりたいの！」

意外とリサは怖いものが苦手らしい。

グリーンスムージー以来の弱みだな。

「わかったわかった。さっさと始めてやるからとりあえず手離せよ」

「あ、ご、ごめん」

やつとのことです手を離してくれたリサはバツが悪そうに乾いた笑みを向けていた。

遠目の位置で日菜と話していた千聖が目線で合図を出す。それを見て美咲に視線を送れば「わかりました」と後頭部を掻いていた。

「みんなー！ 今から肝試しをするわよー！」

通る声をしているところが全員に呼びかける。

はしやぐ者、困惑する者、絶望する者。反応は様々だった。

「あ、の、朝日先輩。レクリエーションってこれですか？」

裾を掴みおそるおそる有咲が声をかける。

「ああ。夏と言えば肝試しだろ？せっかくだからやろうって話になったんだよ」

「ま、まじですか……」

すごく嫌そうな表情をしている。というか震えてることを考える  
とただ怖いのだろう。怖がつてる姿もただ可愛いだけだ。

「……楽しそうですね、朝日先輩」

「ん？そんなことないけど？」

「嘘つかないでくださいよ。楽しそう且つ悪い顔してますよ。朝日先輩もしかしてこれがあるってこと知ってたんですか？」

「んー？さあね」

いくら察しがよくたつてここに来た以上逃がす気はないんだ。

有咲含め無関係な連中には悪いが、最後まで巻き込ませてもらう。  
う。

「チームは時間短縮のためにこっちで勝手に決めさせてもらいました。今泊っている部屋分けごとに入る順番はくじ引きで決めようと思います」

「部屋ごとに分かれてちょうだい！」

「ただ私にとっては、これから始まるのは完全な賭けなんだよなあ。」

「ここでもおねーちゃんと一緒になの？あたし他のチームがいいんだけ

ど」

「あら奇遇ね。私も同じ意見よ」

正直、このレクリエーションで解決しなかったらもう解決できる気がしないんだよな。今回の姉妹喧嘩は。

「えーっと、ルール説明しますね」

美咲がこころに邪魔されながらも続けたルール説明を要約するとこうだ。

ここからまっすぐ進んで行くとチェックポイントがあつてそこにお札が置かれているらしい。それをグループで一個とつて戻つてくれば終わりのようだ。

ただ雰囲気づくりのためにスマホや時計などは没収。その代わりにグループ一つずつ懐中電灯と緊急用でトランシーバーは持つて行けるらしい。トランシーバーで助けを呼べば黒服さんが飛んでくるんだとか。その辺はさすがとしか言えない。

まあ、とりあえず一つだけ言えることがあるとすれば。

「ねえ必要以上に近づかないでよ」

「なっ、そんなこと言う必要ないでしょ!」

「私のこと挟んでケンカするのやめてくれないかな?」

日菜と紗夜の会話が思春期の子供のそれではないということだろうか。

「代表の人はくじを引いてください。その時に懐中電灯とトランシーバーを渡すので」

「私が引きに行くから手を離してもらっていいかな?」

「いやだ」

「いやよ」

行くまでに一分かかったうえに順番は最後だった。

◇◇◇

理由があるとするなら。

仲が悪いままなのは嫌で、犠牲になっても解決したい問題だから。

それ以外の理由なくて。

だから私は。

「姉さん!?!」

「どこ行くのおねーちゃん!!」

一つ事件を起こすことにした。

## 行方不明と確信事項。

「それじゃあ三人共、頑張つてね！」

弦巻さん発の肝試しはみんな嫌がりながらもスムーズに進んで行き、トリを飾る私たちの番になった。

自分の番が終わったからか今井さんは楽しそうに笑っていた。姉さんが軽く返事を返す。

今井さん、自分が行く時はあんなに青ざめていたのにいざ終わったからあんな良い笑顔をするのね……。

私たちを応援する声をほどほどに、先頭に立つ姉さんに誘導されるまま私たちは森の中に入って行く。

正直私自身気は乗らなかつたのだが一人だけ参加せず輪を乱すのは避けたいことでもあった。

夜も八時を過ぎて、夏と言えど完全に日は落ち切っているため森の中は真っ暗。いくら懐中電灯があるとはいえ一グループ一本だけだしその明かりも照らせる範囲も精々二メートルが限界だろう。その明かりもLEDというわけではなくオレンジ色のぼんやりとしたものだ。心もとない。

先が見えなくて闇の中で鳴く鳥や虫たちが不気味さを演出する。微細に肌を撫でる風が少しずつ冷たくなっている気がした。時間が経つにつれ恐怖心を煽られる。

「意外と何も無いんだね〜」

しかしそう思っているのは私だけらしい。

いつもの調子で日菜が呟く。

私とは生きている空間が違うのか興味津々といった様子で辺りを見渡していた。

「まあ、夜つてだけでただの森だからな」

姉さんにも変わった様子はなくとても落ち着いていた。

あの二人と行くことになったのはある意味幸いであり、同時にただ夜の森を散歩しているだけという感覚に切り替わる。

この二人がこうなら私がいいつもと違う態度を取るのは姉さんにかかわれそうな気がしてならなかった。

「けど肝試しなら何かしら出て来てもおかしくないじゃん？ほら、怪談話してたら幽霊が集まってくるってやつ」

「あー。訊いたことある。でも今日のこれは度胸試し、みたいな感じだからあんまり関係ないんじゃないか？弦巻家がずっと管理してる土地らしいし」

「んー、そうかな？あたし的には何かあった方がるんっ♪ってくるんだけどなー！」

「何馬鹿なこと言ってるのよ。何も無い方がいいに決まってるでしょ」

日菜がとんでもないことを言うから思わずため息をつきながらそんな言葉を返す。

しかし日菜から返ってきたのは不思議そうな毒のこもった言葉だった。

「え？あたしおねーちゃんには話しかけてないよ？あたしとおねーちゃんの会話に入って来ないでくれる？」

「日菜が馬鹿げたことを言うからでしょう」

「冗談だし、別におねーちゃんに向けて言ったわけじゃないんだからおねーちゃんには関係ないよね」

「ちよ、おい。こんなところに来てまでケンカするかよ普通」

姉さんは呆れたように呟く。二人して「黙ってて」と言えば「はい」と適当な返事が返ってきた。

姉さんにはケンカに巻き込んで申し訳ないという気持ちがありはするものの、今回のケンカは日菜が折れるまで絶対にやめる気はない。というか譲る気はない。こればかりは姉さんにも止められることではないと思っていた。

「別にいいよ。おねーちゃんのことなんか知らないし。おねーちゃん、早くお札見つけて戻ろう」

「ああ。そうだな」

日菜は姉さんの横にぴたりとくっつく。私の方を見て勝ち誇ったような顔をしていた。

姉さんに笑顔を振りまいて味方にでもしているつもりなのだろう。子供のような行動に眉をひそめた。

「——なあ……なんか嫌な予感しないか？」

「嫌な予感？」

突然素のトーンで姉さんは私たちに問いかける。心なしか進む速度が遅くなっているように感じた。

私には思い当たるようなことがなくて聞き返すことしかできない。日菜に視線を向ければ日菜も私と同じような表情で姉さんのことを見ていた。

「なんか、上手く言えないんだけどさ。良くないことが起こる気がするんだよ……」

「良くないことって？」

「それはわかんないけど」

複雑そうな表情をしていた。姉さんの勘は良いものも悪いものも



よく当たる。だからこそ良くないことが起こると言われてしまえば嫌でも気にしてしまう。きっとそれは日菜も同じだった。

「だったらなおさら早く戻った方がよさそうね。少し急ぎましようか」

「いや、大丈夫だよ。気のせいだと思うし」

「え、けど……」

「大丈夫だって。ほら、お札の置いてある石ってあれだろ？」

姉さんが懐中電灯で先を照らす。肝試しだと言っていたからもつと奥にあるのかと思っていたけれど意外と近くにあったようだ。

木々の前。楕円と四角が合わさった形の石が地面に突き刺さっていた。その石の前には確かに肝試しを始める前に説明されたものと同じお札が置かれていた。

姉さんは両手が埋まっていたからか日菜にトランシーバーを渡してから石の前にしゃがみ込みそのお札を手に取った。

これでは戻れば肝試しは終わる。しかし引き返そうとする私と日菜をよそに姉さんはしゃがみ込んだまま動こうとしなかった。

「この石……」

「何かあるの？」

「なんか文字が書かれてたみたいなんだけど所々掠れてるんだよ」

手招きされ、日菜の隣に私が並ぶ。懐中電灯で照らされた先を見れば姉さんの言う通り石には何か書かれている様だった。読めるところだけを読んでみたが文章として成立しているのかさえ不明だ。

「これ、名前が書いてたんじゃない？」

数秒してそう声を上げたのは日菜だった。

「名前？」

「ほら、ハハハ」

首を傾げる私に日菜が指を指す。指差した所は確かに名前のように読める。だが仮に名前が書いてあったとして、それが何を表しているのかはわからないまま。

そんな私の考えは最悪の形で裏切られた。

「しかもこの部分、墓って書いてるように見えない……？」  
「え……？」

次に届いた声は聞きたくなかった。日菜の声も震えている。この石に書かれている文字が、否、この石自体が何なのか理解してしまっただからだ。

「ね、ねえさ……」

——カラン。

その音と共に私たちを照らし支えてきた光が一瞬で消えた。コロコロ転がり私の足にぶつかって止まる。視線を落とせばまた明るさがあつて、立ち上がった姉さんの足元が照らされていた。

「おねーちゃん……？」

「笑い声だ」

「姉さん……？何言つて」

「子供の、笑い声」

暗闇だから姉さんの表情を上手く読み取れない。だけどその声は動揺が混ざっているように聞こえた。

「聞こえるだろ。子供の笑い声が」

子供の笑い声。私にはまったく聞こえていない何かを姉さんは聞いていた。

日菜も私と同じく姉さんの言葉に恐怖を覚えたらしい。姉さんを呼ぶ声が震えていた。

姉さんは私たちから数歩遠ざかる。私たちは金縛りにかかったようにその場から動けなかった。

「——行かなきゃ」

使命感のような言葉。その言葉を聞き届けた瞬間、目の前から姉さんがいなくなつた。

「姉さん!?!」

「どこ行くのおねーちゃん!!」

慌てて懐中電灯を拾い私たちは姉さんの後を追って走り出した。知らない土地のはずなのに姉さんは迷いなく進んで行く。

姉さんにいくら呼びかけても反応のない以上、私たちは見失つてしまわぬように後を追うことしかできなかつた。

「うわっ!」

「日菜!!」

足場が悪くて転んでしまった日菜に気づき私は足を止めた。暗闇の中に置いていくことなんてできるはずもなく起き上がる手伝いをすれば「ありがとう」とお礼の声が聞こえた。

懐中電灯で日菜の足元を照らす。木の根元が地面から突き出していた。これに引っかかったようだ。

「日菜、大丈夫?」

「あたしは大丈夫！おねーちゃんは!？」

焦る声にも慌てて先を照らす。既に姉さんの姿はなかった。静かで、どこに行っただのかもわからない。

「ど、どうしようおねーちゃん！おねーちゃんが!？」

「落ち着いて」

そんなこと言いはしたものの私だって落ち着けるような状況ではない。

姉さんがいなくなった。どうすればいい。闇雲に探したってこんな暗闇で土地勘のない場所で見つけられるはずがない。必死に頭を悩ませる。その時ふと日菜の手に持っているものが目に入った。

「日菜！トランシーバー使って連絡とって!？」

「あ、そっか！その手があった!？」

日菜はトランシーバーを操作する。すぐに出てくれた。相手は今井さんだった。

『どうしたの？何か問題?』

「た、助けて！おねーちゃんが!!」

『え？な、何ということ?』

「助けてください今井さん！姉さんがいなくなっただんです!」

『ええ!？朝日がいなくなっただ!？なんで!？ていうか本当にどういうこと!？』

「わからないから困っているんですよ!」

「おねーちゃん、なんか笑い声が聞こえるって言ってどこか言っちゃって!？そんなのどこからも聞こえないのに!」

『な、何それ!？ちよ、ちよっと待ってて!』

「リサちゃん!？」

焦った声と共に通信を切られた。今井さんも焦っていたのか私たちの声は聞いていなかったらしい。

また静かになる。動揺で不安になる。

耳を澄ませてもやはり姉さんの言う笑い声なんてまったく聞こえない。

知らない何かが私たちに襲いかかっている。幽霊だなんて、笑えない。

「お、おねーちゃん……」

日菜の不安そうな目が見つめる。

姉さんの消失はこれで二度目。不安になるのもわかる。だからこそ私がしっかりしなくてはいけないと思った。

「大丈夫よ。姉さんなら平然とした顔で戻ってくるから」

日菜の手を握って私は微笑む。表情が少しだけ和らいだ気がした。

ここで私まで不安がっただけじゃない。そんなことではただ日菜の不安を煽るだけだ。

『紗夜ちゃん、日菜ちゃん』

「白鷺さんですか？」

『ええ。リサちゃんに変わってもらったの。今黒服さんたちが探しに行ったから紗夜ちゃんたちも近くを探してみしてほしいの』

黒服さんたちが探しに来ているのならひとまず安心できる。だけど。

「そうは言われてもどこから探せば……!」

『お札を置いてた石の近くにいる?』

「い、いえ。姉さんを追いかけて走ったので」

『石を正面にしたらどっち側に走ったの?』

「えっと、左側だよ」

『そう。それなら今の位置で右折して進んで行って。しばらく進めば開けた場所にたどり着く。祠があるの。朝日は多分そこにいるわ』

「ど、どういうことですか!？」

完全に立地を把握している発言だった。しかしそんなことは今はどうでもいい。私が何よりを知りたいのは、どうして白鷺さんに今の姉さんの居場所がわかるのか、だ。

私の質問の意図を汲み取ってくれたのであろう白鷺さんは一つ間を置いてとんでもない真実を打ち明けた。

『これはさつき黒服さんに聞いたことなんだけれど……実はこの土地、弦巻家がい取る前に女の子が行方不明になっているらしいの』  
「え……?」

『行方不明になった少女、十年経った今も見つかっていないらしいわ。日菜ちゃんの言ってた、朝日の聞いた笑い声っていうのは多分その子のものね』

白鷺さんは幼少期から芸能界にいることもあって話の組み立てが上手い。どんな時だって落ち着いて、相手に伝わりやすいように話してくれる。

それでも今日はわかる気がしない。

『その少女、よく祠に訪れていたらしいから笑い声を聞いたのなら朝日はきつと……』

「本当に、そこに姉さんが……?」

『わからないわ。だけど、探してみる価値はあると思うの。私たちはここで待機するように言われているから、紗夜ちゃんと日菜ちゃんに

任せたわ』

また何か異常があつたら連絡してちょうだい。

そう続け白鷺さんは通信を切った。

私たちは互いに顔を見合わせ、覚悟を決め、頷き合つた。

「行きましょう、日菜」

「うん。早くおねーちゃんのこと見つけよう！」

もうどこかにいなくなつてしまわないように私は日菜の手を握つた。

歩き出してしまえば道などわからないはずなのに足は早々と進んで行く。恐怖は普段通りなんて望んでいなくて、想定外ばかり私たちに与えていく。

しばらく歩いていれば白鷺さんの言う通り祠があつた。想像していたよりも大きくて立派だつた。

「……………こゝ、かな？」

「そう、ね。多分こゝこゝね」

この森に祠が何個あるかはわからない。だけど多分これで間違いはないのだろう。

辺りを見渡す。もしも白鷺さんの憶測が正しいのであれば姉さんはこの近くに……………。

——ガサツ！

「誰?!」

茂みの揺れる音。驚き懐中電灯を向ければ私たちを見つめる人が一人。

「姉さん！」

「おねーちゃん！」

いた。見つけた。会いたかった。離れていたのはたった数分なのに一年くらい会っていないなかった気分だ。

不意に姉さんの口角が上がる。

「」

「え………？」

「へ………？」

小さな声だった。私たちの耳にその言葉が届くことはない。口パクだけでは何を言っているのかまではわからない。

姉さんがまた私たちに背を向ける。振り返る寸前の表情はついて来いと言いたげに見えた。いつもの根拠なんてなくせにどこか自信満々な姉さんだった。

「ま、待ってー！」

走り出す後を追いかける。今度は姉さんを見失わないように死にもの狂いで追いかける。

転びそうになりながらも足を止めることはない。さつきよりもスピードが遅い。というよりも姉さんが合わせてくれているようにすら思えた。

「姉さん!!」

「おねーちゃん!!」

やっとのことで掴んだ手。ぴつたりと足を止めた。両手を私たち



に掴まれているから動けないことだろう。

肩で息をする私たち。姉さんも同じように肩を揺らす。ゆっくり、姉さんは振り返った。

「——お前らなら絶対追いかけて来てくれると思ったよ」

想像もしていなかった言葉に私たちは目を丸くする。してやったりと姉さんはイタズラに笑った。状況とまったく合っていないかった。

姉さんの真後ろでは今井さんがバラエティ番組の企画で出てくるような看板を手にしていて白鷺さんもやり切った顔だ。

何がなんなのか、本当に訳がわからなかった。

もう二度とやらないと誓った。

「はあ!?!ドツキリ!?!」

「そうそう。全部ドツキリだよ」

森から抜け出し、「ドツキリ大成功!」の札を持ったりサと隣でやり切った表情をした千聖に目を丸くしていた二人を連れてみんなの元に戻った。

状況を知っている美咲は苦笑して、他のみんなは何事もなく安心してという感じだった。

「全部……?」

「うん。全部。嫌な予感がするって言ったことも、少女が行方不明になったって話も、石が墓地だって思い込みも、全部嘘だよ」

「じ、じゃあ笑い声がするってのは……?」

「聞こえるわけないだろ?何の事件もないこの森で」

「本当に、全部嘘だったの?」

「だから、そうだって言ってるだろ?」

まさか私の演技力があんなに通じるだなんて。紗夜はまだしも日は芸能人でドラマの仕事とかもあつたのに。これは千聖の言う通り、本当に芸能界デビューできるんじゃない?!

私は調子に乗って高笑いをする。そんな私を見て二人は互いを見合わせた。いつものように微笑みを向け合う。こくりと頷き合った。

お、なんだ?仲直りしてくれたのかな?よかった。それならこんなことしたかいが――。

「覚悟してよおねーちゃん!!」

「今日という今日は許しませんよ姉さん!!」

「ちよつと待つて想像してたのと違う!!」

鬼の形相で向かってくる二人に私は思わず逃げ出した。

二人はここ最近だと、いやこの十数年一緒に生活してきたが中々見ない表情をしていた。紗夜はまだしも日菜まで怖い顔するなんて想定外じゃん!?ほんと姉妹つて怒った顔も似るんだね!?

さつきと状況は全く同じなのに、追いかけられている内容は全く違う。

「あ、有咲!助けて!」

「市ヶ谷さん!山吹さん!姉さん!捕まえてください!!」

「おいほんとに落ち着けて!話せばわかるから!!」

「そう思うなら逃げないでよ!!」

嫌だよだつてまじでポコポコに殴られそうな勢いじゃん!

私は二人が怖すぎてポピパの中に逃げ込む。有咲やポピパのメンバーなら私を庇つて二人のことを宥めてくれると信じていたから。

「頼む有咲!あの二人に話せばわかるつて訴えてくれよ!」

「朝日先輩……」

有咲の背後から肩を掴み二人を説得してくれるように頼む。

有咲なら二人を落ち着かせることもできるだろう。二人だつて後輩の言葉を無下にはできないはずだ。

「すみません朝日先輩」

「へ?」

振り返りながらなぜか謝罪をされた。そしてそのまま掴まれた腕。目を丸くする私に有咲はニコツという効果音がつきそうなどびつきりの笑顔を向ける。それが今は不気味で私の表情が引き攣った。

「さすがにこのドッキリはやりすぎだと思うので大人しく叱られてください。私だって、怒ってますから」

「……嘘だろ？」

有咲なら。そう思っていたのに。

そう思っていれば私の肩に手が置かれた。振り返れば似たような笑顔の沙綾が立っていた。目が笑っていなかった。マジで怖い。何も言わないのが何よりも怖い。

おたえは何かの遊びだと思ったのかももう片方の肩に手を置いている。香澄は紗夜と日菜、そして有咲と沙綾を見て少し遠くでガタガタ震えている。りみちゃんは香澄のことを宥めながら苦笑するだけ。協力者であるリサと千聖に目を向けるが目すら合わせてはくれなかった。巻き込まれるのは嫌らしい。

私の味方をしてくれる人は誰もいないよう。

これは、確実に詰んだ。

「それじゃあ姉さん。話を聞かせてもらいまししょうか？」

「い、いやだなく。紗夜も日菜も、怖い顔するなよ。二人は笑った方が……」

「おねーちゃん？」

「あ、はい。わかりました」

こういうドッキリは二度とやらないと心に誓った。

◇◇◇

約束した時間に指定された普段行かないようなおしゃれなカフェ

に向かう。「いらっしやいませ」「名様ですか？」と店員さんの呼びかけ。「待ち合わせです」と告げれば一番奥の席で私の名前を呼び手を振る姿が見えた。そのまま店員さんに注文をお願いし、注文したものが運ばれるのを待つ。

運ばれるまでの間に軽く話をする。とは言え本題を切り出さず軽い世間話と言ったところ。

「それで日菜ちゃんと紗夜ちゃんがケンカしてる原因はわかったの？」

注文した紅茶を一口含み飲み込む。香りが良く渋くもないし飲みやすい。

カップをソーサーに戻した頃に集まったメンバーの一人である千聖はそう切り出した。

タイミングを見計らっていたのだろうか。会話が切れてちょうどよかった。

「それがわかってるならとっくに解決してるんだよ」

原因がわからないから困っているというのに。私は軽くため息をつく。

「朝日が泣きつくレベルだしそんなことだと思っていたわ」

当然のような反応。語弊があった。

「泣きついてねえよ。だいたい先に連絡してきたのは千聖の方だろうか」

「それはそうだけど今日呼び出したのは朝日じゃない」

「ちよいちよい。なんで会って早々ケンカするの？」

「ケンカじゃないから」

「おー息びったり」

私たちのことをなだめるリサはハモった声を聞いてパチパチと拍手する。

「二人までケンカしないですよ？紗夜とヒナだけで手一杯なんだから」

「紗夜のやつ練習の時どんな感じだ？」

「怖い顔してるよ。とは言っても話しかけたら普通に返してくれるし、まあムカついてますってオーラは出てるけどね」

感情が表情に出やすい子だと昔から思っていたけど、大丈夫かよ。コミュニケーション取る分には問題なさそうだけど雰囲気ぶち壊してないだろうか。普通に心配だ。

「それよりも問題はヒナだと思うよ？この間メッセージ送ったんだけどさ……」

そう言いながらリサはスマホを操作しその時の日菜とのトーク画面を見せてもらった。

『ヒナ？紗夜とケンカしたって聞いたんだけど何があったの？』

『さあ』

『さあって……』

『リサちゃんには関係ないよ』

『そんなこと言わないでよ。言いにくいことなの？』

『リサちゃんには言いたくない。絶対おねーちゃんの味方するから』

『え？それってどういう意味？』

メッセージはそこで切れていた。既読の文字はついているのに返していないのを見る限り日菜はこれ以上リサと話す気はないように思える。日菜がこんな中途半端にメッセージを終わらせることなん

てほとんどない。だいぶ怒っているタイミングでメッセージを送ったのだろうか。

「これは、確かに日菜ちゃんらしくはないわね……」

「でしょ？だからアタシとしても気になって仕方なくて」

「そもそもリサが紗夜の味方をするってところもわけわかんないもんな」

絶対紗夜の味方になる確信が日菜にはあるというのか。だとしたらそれは一体なぜ。何かしらの形でリサもこのケンカに関わっているってことだろうか？

「お前はと思う？」

「え？あ、あたしですか？どうと言われても……」

私たちだけで話していても埒が明かないと思い招集した最後のメンバーである美咲に話を振る。彼女は困惑した表情をしていた。一番遠い立ち位置だしまあその反応になっても仕方ないと思った。

「あ、あの……」

「ん？どうしたの美咲？」

「そもそもどうしてあたしが呼ばれたんですか？」

「なんでって？」

「だ、だって紗夜さんと日菜さんがケンカしてることだって朝日さんからの連絡で知ったばかりですし、呼ばれた理由が知りたくて……」

私の隣でアイステイーを飲みながら大人しくしていた美咲。だが呼ばれた理由がわからず先輩に囲まれていたから小さくなっていただけのようだ。

申し訳なさそうに見えた。そう言えば説明もろくにせず呼び出した私も悪いから反省する。

「ちゃんと説明するよ。それじゃあ本題に入ろうか」

今日とはある提案をするために三人を集めたのだ。これはどうしても私一人の力じゃ遂行できない。

「三人には紗夜と日菜を仲直りさせるために協力してほしいんだ」  
「協力、ですか？」

「そうそう。協力、お願いできないかな？」

「アタシはいいよー。けど何する気なの？」

「そうね。内容次第では協力できないわよ？」

とりあえず内容を伝えないことには、特に千聖には協力してもらえないだろう。

そう思っ作戦内容を事細やかに伝えていく。三人はコロコロと表情を変えながら私の話を聞いていた。

「なるほどね」と千聖が含みのある笑みを向ける。

「まじ?」とリサが疑うような顔をする。

「あ、ははっ」と美咲は頭を抱える。

納得しているかはさておき理解してくれていることはわかった。

「嘘がつけないやつだと実行する前に二人にバレかねないしお前らは適度に嘘くらいつけるだろ?」

「それは遠回しに私たちが嘘つきだって言っているのかしら?」

「おいおい悪いように捉えるなって」

「にしてもすごいこと考えたね朝日。アタシ隠し通せる自信ないよ」

「最悪紗夜と日菜にバレなようにしてくれればいいって」

「結構難しいこと言ってる自覚ある?」

リサは何とも言えない表情で頭を掻いていた。



「内容自体は理解できました。ですけどあたしが呼ばれた理由は全然見当つかないんですけど……」

「あーそれね。美咲には一つ相談したかったことがあってな」

「相談、ですか？」

「いやまあこれは美咲というよりこのころの了承がいる話ではあるんだけどさ」

「は、はあ？」

「今度、夏の終わりに五バンドの合同ライブやるだろ？それにかこつけて合宿開いてほしいんだよ」

「え？合宿ですか？」

想定外のことだったのか美咲とリサは目を丸くする。千聖には眉をひそめられた。

「そう。今度の合同ライブの最終確認だとか適当に理由つけて開催してほしいんだ」

「えっと、なんでそうなるんです？」

「あいつら、必要なかったら顔合わせようとしなくてさ。普通に打ち合わせするだけなら代表だけでも完結するし、あいつらは参加しない可能性の方が高いだろ？だから合宿を開いて、無理矢理にでも引き合わせるしかないと思ってさ。それに計画のことを考えてもそっちの方が助かるんだよ。」

頼むよ美咲。こころに頼んでどうにかして合宿開催できるようにしてくれないか？」

「だ、だからって合宿ってだいぶぶっ飛んだことになってない？」

「というかそれ、完全にこころちゃん頼りの計画よね？さすがに他力本願すぎないかしら？」

「そればっかりは仕方ないだろ？さすがにどこかの宿泊施設予約するってなったら宿泊費いくらになると思ってるんだよ。だいたいこの時期だとどこもいっぱいだし」

無理言ってる自覚はあったけどこれくらい強引じゃないとどうにもできないと思った。それに合宿も別に悪い話ではないだろう。親睦深めるなり、切磋琢磨し合ったり、色々できるし。

「まあ合宿のことは多分、どうにかなると思いますよ。こころとかはぐみとか、提案したら絶対やるって言うので」

「お、まじ？なら頼むよ」

「合宿やるのはいいとしてさ、朝日はどうやって合宿に同行する気なの？これ合同ライブに出るメンバー以外が来たら変じゃない？」

「よく考えてみるよりさ。あいつらが、特に香澄が、私のこと誘わないと思ってるのか？」

ありえないだろと言えばリサは納得した様子だった。

千聖はなんとか呆れた表情をしていた。

「ポピパと言えはですけど、市ヶ谷さんと山吹さんにはこの計画の話しなくてもいいんですか？」

「え？有咲と沙綾に？なんで？」

「なんでって、朝日さんと仲良いんですよね？実際学校内でもよく一緒にいるの見かけてましたし」

「あー。あいつらはさー、意外とお化けとか怖いもの苦手なんだよ。驚いてる顔とか見たいに決まってるじゃん？絶対かわいいし」

あるのはちよつとしたイタズラごころだけ。

「朝日って本当に……」

「あははっ……。これは紗夜も苦労するね」

「市ヶ谷さんが言ってたのってこういうことか……」

「え、何、どうした」

それぞれ苦笑いしていた。理由がわからずに首を傾げることしか

できない。

「まあいいわ。とりあえず日程にある程度目途がついたら連絡してちょうだい」

「おう。頼んだぞ〜」

「はいはい」

これで準備は整った。当日が楽しみでクスリと笑う。私たちの一大プロジェクトが幕を開けた瞬間だった。

「それじゃあお腹も空いたことだしどこかに食べに行く?」

「そうね。近くのお店にでも行きましようか」

「だな。何頼んでもいいぞ」

「あら朝日。奢ってくれるのかしら?」

「もちろん奢るよ。リサが」

「え!?アタシ!?!」

「リサちゃんごちそうさま」

「ありがとうございますリサさん」

「ちよ、勘弁してよ朝日ー!!」

結局全額私が奢った。

ケンカの原因、それは……。

突然だが石抱いしだまきという言葉をご存じだろうか。

十露盤そろばん板と呼ばれる三角形の形をした木を並べた台の上に正座をさせ、後ろ手を柱などに固定し足の上に重しの石を乗せる江戸時代に行われた拷問の一つだ。算盤そろばん責や石責とも呼ばれ、未決囚に施された拷問と言われている。時間が経てば経つほど石の重りで脛に十露盤が食い込み非常な苦痛を味わわせるかなりきつめの拷問だと私は記憶していた。

しかしそれが目の前で、しかも朝日先輩が実行される側になるなんて誰が想像できただろうか。

「なるほど。つまりすべて姉さんの提案ということね」

「は、はい。そうなります……」

朝日先輩が紗夜先輩と日菜先輩に事の経緯を説明すること早十五分。本来拷問で使われている石よりも明らかに少ない枚数の石を乗せられているとは言え、辛いことに変わりはないだろう。

弱々しく段々声が小さくなっていく。何も知らなかった組に多少のトラウマを植え付けておきながら平然とした表情で帰ってきた先輩には確かに怒りを覚えた。しかし拷問されている姿を見てしまうと、なんとというか可哀そうという感想しか出てこない。

「それでおねーちゃん？あたしたちに言うことは？」

「本当にすみませんでした。反省してます」

ここまで怒られている朝日先輩自体初めて見た。それに紗夜先輩と日菜先輩のキレ方にはここにいる全員恐怖を覚えたことだろう。少なくとも私は何でもない時にでも無駄に緊張してしまいそうだ。

謝罪の声を聞いて紗夜先輩が石を朝日先輩の足の上から降ろしそ

の間に日菜先輩は手の拘束を解除する。よろよるとキレのない動きではあるが歩けるのを見る限りそこまで重症ではないのだろう。脛についた痕を見る限り、無事というわけもなさそうだが。

その場に座り込む朝日先輩に紗夜先輩がため息をついた。日菜先輩は朝日先輩と同じ目線になるようにしやがみ込んだ。

「おねーちゃんはさ、何するにしても考えが極端だよ。もっと他にもやり方なんていくらでもあったでしょ？」

「そんなの考えても思いつかなかったんだから仕方ないだろ？暴拳にでも出なきや原因を話してくれないと思つたし、そもそもお前らがさっさと仲直りしてくればここまで大掛かりなことしなかつたつて……」

「まあ、それもそうね」

「何があつたんだよ。いい加減教えてくれてもいいだろ」

「……そうだね」

日菜先輩が静かに立ち上がる。こう言うことを思うのは失礼かもしれないが、珍しくとても真剣な表情をしていた。

「この際だから決着つけちやおうかおねーちゃん」

「……そうね。いつまでも引きずっているわけにはいかないものね。はつきりさせましょうか」

向かい合う二人。オーディエンスとして見守っていた私たちは息を呑む。

この時の私たちは知らなかったのだ。

ケンカになった内容がとんでもないことだと言うことを。

「千聖ちゃんが世界一かわいいに決まってるよね!？」

「は……?」

「何言っているのよ！今井さんが世界一に決まってるでしょ！？」  
「へ……？」

ケンカの原因がただの恋人自慢だと誰が想像しただろうか。

「千聖ちゃん普段は芸能活動もパスペレの活動も手を抜かずにこなしてる完璧超人だけど、スタッフさんとかがいなくなって気を抜いた時に見せる優しい笑顔に勝てる人なんていないから！」

「いつもはクツキー焼いてきたり皆をまとめたりお姉さんの立ち位置なのにふとした瞬間に見せる無邪気な表情とか幼い寝顔とかに勝るものなんてないわ！」

「千聖ちゃんは冷たい人みたいに見えるし仕事の時は小言言ったりもするけどそれはあたしのこと考えていってくれてる優しい子だし！外ではイチャイチャできないけど二人つきりになった時は意外と積極的なんだから！」

「今井さんは初デートで恋人繋ぎをしたら照れて数時間は目を見れなかったのよ!?それに間接キスに気づいたら耳まで真っ赤にしていたのよ!?これほどピュアな人がどこにいるって言うの!?なのに帰りは勇気を出してほっぺではあったけどキスもしてくれたんだから！こんな天使と言わざるを得ないじゃない!!」

お互いに大声でみんなに主張するように行われたノーガードの殴り合い、もとい惚気合い。

ダメージが入っているのが本人たちではなく好きな人たちだなんてやられた側からすればたまったもんじゃないだろう。

リサさんと白鷺先輩って紗夜先輩と日菜先輩と付き合ってたのか。知らなかった。

紗夜先輩と日菜先輩がどれくらいリサさんと白鷺先輩のことを想っているのか、好きすぎるのかはよくわかった。譲れない案件なもの、わからないわけじゃない。

だけどこれくらいでやめてあげろよ。その肝心の恋人たちこんな

ところで惚気られると思っていなかったから耳まで真っ赤だしふるふる震えてるぞ?」

「いやー！千聖ちゃんの方が天使だね！ダメって言いながらも押しに弱いし、何やっても最終的には許してくれるもん!!」

「膝枕してくれるし腕枕した後の幸せそうな姿を見たらこの世に生きている人と比べるなんておこがましいくらいよ!!」

もうやめろよ！リサさんと白鷺先輩のライフはゼロだぞ?」

「いい加減に考えを改めなさい!!」

「考えを改めるのはおねーちゃんでしょ!?!」

「はいはいストップストップ!」

お互いに引けない案件だからか口論は続く。それを見かねてか朝日先輩が二人の間に割り込んだ。やつとのこと二人が止まる。

「あのな、お前らこんなことでケンカしてたのかよ。呆れるわ」

今度は朝日先輩がため息をつく番だった。ついさつきまでその役割は紗夜先輩だったのに。攻守交替らしい。

さつきまで散々怒られていたはずなのにその雰囲気はない。さすがは先輩たちのお姉さんだ。先輩たちを止められるのは結局朝日先輩だけのよう。

「何言ってるのおねーちゃん!」

「そうよ！これは大切な問題なのよ!?!」

「だからってここまで引つ張るネタじゃねえだろ。アホらし……」

「だったらおねーちゃんが決めてよ!」

「ええ。もちろん今井さんですけどね!」

「千聖ちゃんだよ!」

究極の選択に思えた。これは回答次第ではどちらかを敵に回すことになる。

選べるはずがない。そう思っていた。

「バカなこと言ってるなよ」

平然と答える朝日先輩に私は目を丸くする。先輩の口振りを考えるにもう答えは完全に決まっているという感じだった。こういう時は普通悩んだりするもんじゃないだろうか。意外だ。

もしかしてどっちも敵に回さないように、どっちも傷つかないように「好きな人が一番なんだからそんなこと争う必要なんてないだろう？」とか言うのだろうか。朝日先輩ならやりかねない手だけどそれで先輩たちが納得してくれるとは到底思えな――。

「有咲が一番に決まってるんだろ」

中立案をあげることなどなく朝日先輩は言い切った。

前言撤回しよう。朝日先輩が一番暴走する人だということのを忘れていた。

「はあ!? な、何言ってるんですか!？」

自分がこのケンカの対象になった。さすがに黙って見守っている状況ではなくなる。

しかしそれは紗夜先輩と日菜先輩も同じだった。

「いやここで別の人の名前あげるとかありえないんだけど!」

「姉さん話聞いていたの!？」

「聞いてたから言ってるんだよ。よく考えてもみる。いつも練習のために蔵を貸してくれて、なんだかんだ言いながらも私のこと大切にし



てくれている。顔はかわいいし、キーボードが上手く弾けた時にぱあつてはじけた笑顔見せてくるところかわいいし、勉強してる横顔見つめてたら照れて視線逸らす姿がかわいいし。抱きしめたら最初は慌てるんだけどすぐに腕の中に納まるし、すりすりしてくるんだぞ？猫じゃん。かわいすぎてしんどいに決まってるじゃん。

お前らはリサと千聖のことを天使なんて表現してたけど有咲のかわいさを天使なんて安っぽい言葉で言い表していいわけないから。そもそも世界で一番かわいいのは有咲以外ないから。紗夜、日菜。バカなこと言うなよ」

紗夜先輩と日菜先輩の口論とは違ってとても静かで淡々と平然と何でもないことのように私のかわいいところをあげていく朝日先輩。

それを聞いてしまったから、私の顔は火が噴き出してしまいそうなほど真っ赤に染まっていることだろう。鏡で確認しなくても水を沸騰させられるくらいには熱くなっていることだ。というか今朝日先輩の顔が見れる自信はない。私のこと好きなのはわかるけど普段そんな具体的にかわいいところ言うことないのに!!まあ普段からこんなこと言われて耐えられる自信もないけど!!

突然こんなことを言われ、普段の私なら朝日先輩に「バカ」だのなんだの悪口の一つや二つ言っていただろう。だけど知らなかったんだ。人って、一定以上の恥ずかしさを超えると何も言えなくなるって。

両手で顔を隠してしやがみ込むという抵抗も今の先輩の前では無力だ。だって私のかわいいところあげることには全力出しすぎて周り見えてないから。

「どうやら貴方たちとは分かり合えないみたいね」

「残念だよおねーちゃん。わかってくれと思うってたのに」

「決定事項を覆すことなんて最初から無理だから諦めなよ」

姉妹戦争勃発。それは誰にも止めることができず、結局一時間続い

た。

私たちの悶え死ぬ声など、恋人たちには届かなかった。

「お、おい有咲！どこ行くんだよ！」

「ついて来ないでください」

「何拗ねてるんだよ」

「自分の胸に聞いてみたらいいんじゃないですか？」

「ちよ！有咲！」

「え、あの、今井さん？なんで私のこと避けるんですか？」

「別に避けてないから！」

「でしたら一緒に練習しましょう？私確認したいところが……」

「アタシはないから大丈夫だよ！」

「待って！なんで怒ってるのよ今井さん！」

「ち、千聖ちゃん？」

「何でしょうか氷川さん。私に何か御用ですか？」

「いや、あの、なんで敬語なの……？」

「何言ってるんですか？私はいつも敬語使っていたじゃないですか。

冗談がお好きなんですね」

「え？ちよ、千聖ちゃん!？」

姉妹揃って一週間のお触り禁止令が出た。朝日先輩には蔵に来ないように伝えれば落ち込んでいたものの、その結果三日で機嫌を取りに来た先輩を思わず許してしまった（そもそも恥ずかしかっただけで怒っても拗ねてもいない）ことと、姉妹の間で「それぞれの中で一番ならそれでいい」という結論に至ったことはまた別の話だったりする。

長かった夏休みが、もうすぐ終わりを告げる。

会いに来たよ。

二泊三日の合宿を終えて、妹たちがすっかり仲直りをし平和な日常に戻った頃。

私はどうしても今行かなければいけないという使命感に駆られ執筆作業を早々に切り上げて出掛けていた。

家から前の家を通り過ぎそのまま裏路地を通って進んで行く。

途中で年に数回しか訪れることがない花屋に入り、店内を回る。それほど大きい花屋ではないが特別で大切なものだから適当に選ぶわけにもいかず、結局店員のお姉さんの力も借りて花を選んだ。

花を選ぶ際に用途を聞き悲しそうにしていたお姉さんだが私が店を出る時には来店時と同じ優しい笑みを浮かべていた。

花屋から先はほぼ一本道。慣れた足取りで間違うはずのない進路を進む。

久しぶりの彼女は私になんと声をかけるだろうか。

ついてすぐ忘れないうちに私は手に持っていた花を生ける。多分今やってしまわないと忘れてしまうから。

「久しぶりだね。元気にしてた?」

ここに來るたびに動くはずのない見えるはずもないものに締め付けられる胸の痛みに耐えながら、聞こえるはずのない軽やかな声に挨拶を交わす。

彼女の墓参りに足を運ぶのは実に三か月ぶりのこと。

それでいて、久しぶりな感じがあまりしない。

彼女の存在は私に付き纏っていて逃れることを許さないから。

そう言えば近況報告はしていなくて、話題としてそれが自然と口から零れる。

「私、ギター続けてるんだ。この前は伝えられなかったけど仲良くし

てる後輩に教えて欲しいって言われてさ。少しくらいならいいかなって思っ指指導してきたんだけどなんだかんだここまで続けてるよ」

痛くて痛くて本当ならここに來ることすら辛いだけなのに、ここに來なくたってその痛みは一切消えない。

「君が教えてくれたギターで、君が教えてくれた生き方で、君が教えてくれた音楽で、私は今も生きている。何度感謝してもしきれないくらいだよ」

憧れから始まった出会いはかけがえのないもの。

「改めて言わせて。」

あの日、私のことを受け入れてくれて本当にありがとう。色んな相談に乗ってくれてありがとう。私の隣にいてくれて、本当にありがとう」

出会わなければ始まることのなかった私たちの物語。  
大切に、幸せが溢れていた時間。

「あのさ、<sup>はづき</sup>葉月」

だからこそ、出会ってはいけなかったのだとも思う。

「私、高校卒業と同時にギター辞めようと思うんだ。いいよね」

絶対に返って來ない返事を、私は今日も待っている。



「おかえりおねーちゃん」

家に戻れば仕事が終わった日菜が帰ってきていた。思っていたよりも早いご帰宅。また完璧な仕事をして巻いて来たのだろうか。

「ただいま。紗夜は？」

「まだRoseliaの練習中だよ。ライブが控えてるらしいから練習を延長することになったみたいだよ。さつき連絡あったけどおねーちゃんは見てないの？」

そう言われ私はスマホを確認する。

確かに日菜の言うような内容のメッセージが紗夜から入っていた。夕飯も先に食べてていいとのこと。

スタジオから帰る時には相当遅い時間になっているだろう。毎回Roseliaの面々は頑張りすぎだと思う。まあ体調管理はできるだろうからそれほど心配はしていないけど。

「あ、そうそうおねーちゃん。カッターある？」

「カッター？あるけど何に使うんだ？」

「通販で頼んでたのがさつき届いたんだけどあたしの持ってたカッターどこかにいっちゃってさ」

「わかった。部屋に来て。渡すから」

「ありがとう」

私は日菜を連れて部屋に戻り荷物を置きながら、机の引き出しからカッターを探す。

日菜は何をするにしても自分の部屋ではなくリビングにしていることが多い。多分今まで私たちと一緒にいる時間が少なかった分それを

増やしたいからだろう。

日菜は良い意味でも悪い意味でもストレートだから、なんとなくその意図を汲み取った私たちは誰かが家にいる時はなるべくリビングにいるようにするのが暗黙の了解になっていた。

一緒にいる時間が増えてからというもの日菜は嬉しそうに笑うことが多くなり、私としても嬉しかった。

不意に机の中に入っていたあるものに目がいく。

「……おねーちゃん？」

「あ、いや。なんでもないよ。はいこれ」

不思議そうな日菜にカッターを手渡した。「今日は執筆したいからしばらく部屋にいるね」と続ける。「わかった。がんばってね！」と日菜は部屋を後にした。

再度机の中に視線を向ける。

目を引き、乱雑に放置されていたのは猫型USBだった。

夏休みも中旬頃。紗夜が合宿へ、日菜がロケのため家を空けた日。あの曲を聞いた中学生くらいの子にスカウトされたのを思い出す。

『聞けばわかるわ！あなたレベルのギタリストなら絶対に！』

だいぶ強気で、芯のしっかりしてそうな物言い。自分の音楽に自信を持つている人間の発言。

なんだかんだ開くことのなかったUSBの中身が今、無性に気になっていた。

聞けばわかる、ね。

「……まあ、聞くだけならただだよな」

気楽な気持ちでパソコンを開きUSBを挿す。

入っていたのは音源データとメモ。

メモを開けば連絡先と住所が書かれていた。個人情報を見ず知らずの他人に書くとは不正利用してくれとでも言っているのだろうか。まあ私は悪人ではないからしらないがさすがはリテラシー勉強不足の中学生と言ったところか。

メモは閉じてイヤホンを挿し本題の音源データをクリックした。

——そして、後悔する。

「っ……っ！」

全て聞き終わる前に居ても立っても居られなくなった。

メモを開き直し住所をマップに打ち込み、カバンを掴んで部屋を飛び出す。

「うわっ！ど、どうしたのそんなに急いで？」

「悪い日菜ちよつと急用ができた！夕飯は適当に出前でも取ってくれていいから！」

カッターを返しに来たのか扉のすぐ先にいた日菜にぶつかりそうになりながらも私はそう伝え家を出た。

日没も近いが、急げば暗くなる前には着くことだろう。

電車に乗り込み、位置を確認する。

連絡先も載っていたんだ。それなのにわざわざこんなことをして。普段の私ならきつとここまで急なことはしない。

どうしてこんなことをしているのか。その答えはきつと——。

「……みたいだな……」

高級住宅地に聳え立つマンションが一つ。住所の通りならこの場

所で間違いはなく、エレベーターに乗り込み最上階を目指す。

エレベーターが開いた先の広すぎるロビーは持ち主が金持ちなのを表していた。

扉の前に立つ。見るからにセキュリティのしっかりしていて、アポなしは最悪追い返されることだろうと思ったが来た以上何もせず帰るわけにはいかない。そう思いインターホンを押した。

思い出したメモの内容。

住所を書いていたのは私がここに来ると想定していたからだろうか。

仮にそうだとしたら、恐ろしいやつだ。

そしてそれにまんまと乗ってしまった私は単純な人間だ。

「——来てくれると思っていたわよ」

出てきたのはあの時の少女。

久しぶりの再会に、どうしようもないほど胸がときめいた。

新学期が始まる。



## 会長直々の代表者。

新学期初日は全校集会で校長の面白くもない長話から幕を開けた。夏が明け、授業日程が通常通りに戻り、つまらない学校生活がまた始まる。

とは言え今までとなんら変わりはない。授業も教師もクラスメイトたちも、数名イメチェンしてるやつらがいるくらいでそれ以外は夏前と変わった点は見られない。まあこの短期間で変わった方が違和感を覚えるのだが。

夏前の一か月間もそうだったのだが、ことあるごとに香澄やおたえが教室に來たり、花音や千聖が話しかけてくることもあり授業をサボりづらくなった。そのせいといふべきかおかげといふべきか、屋上に行く機会は減っていた。あそこ、日当たりよくて良い感じに日陰もあつて過ごしやすかつたのにな。

ただ授業をサボつて不良生徒を演じる必要もなくなった以上、下手に単位を落とすような行動自体する理由がなくなったのもまた事実。最初こそもの珍しそうな視線を向けていた教師やクラスメイトたちも今では少し慣れたのか他生徒同様に扱つてくれる。とは言え教室にいる私に話しかけるのは名前を上げたクラスメイトの二人くらいだし、それに元々私に話しかけたがる物好きも少なかったわけだから腫れものとして扱われないだけ平和で助かつていた。

そんなことを考え迎えた放課後。

ある意味それはこの先を変える選択肢だったように思う。

「あ、あの、氷川さん」

おそるおそる声をかけたのはほとんど話したことのないクラスメイトだった。あまりの珍しさに数度瞬きを繰り返してしまふ。

「えっと、何か用？」

「生徒会長が氷川さんのこと呼んでるんだけど……」  
「え？」

生徒会長。今そう呼ばれている人間のことを思い出し私は教室の扉に視線を向けた。

現生徒会長が微笑んで手招きしている。これまた珍しい招集だった。教室から出て彼女の元へと向かう。

「七さん。どうしたんですか？」

現生徒会長、鰐部七菜<sup>わにべなな</sup>さん。ガールズバンドである Glitter\*Green<sup>グリッターグリーン</sup>でキーボードを担当している人で、私はバンドをやっていた頃に少しお世話になっていた。

ただバンドから抜けた今は特に接点はなくすれ違った時に軽く挨拶程度。それ以外のやりとりは全くしていなかった。

新学期が始まって一週間経った今、一体何の用なのだろう。

「ちよつと相談したいことがあってね。悪いんだけど今から生徒会室に来てくれない？」

「いいですけど、先に連絡してもいいですか？先約があるので」

用ができて遅れると有咲にメッセージを送ろうとスマホを取り出すが、それは七さんの言葉を聞き止めざるを得なかった。

「もしかして市ヶ谷さん？それなら大丈夫よ。許可は貰っているから」

「はい？それどういう……」

「言葉のままよ。さつき市ヶ谷さんと会って朝日のこと借りるって話していたの。だから連絡しなくても大丈夫よ。行きましようか」

「あ、はい」

そういうことならと私は元の位置にスマホをしまい七さんの後を追う。

しかし気になる点が一つあって問いかけた。

「七さん、有咲と仲良いんですね。意外です。グリグリ関連で面識があるのは知ってましたけど」

「市ヶ谷さんには何回かキーボードの相談や練習に付き合ったことがあるのよ。だからそれなりに仲良くしているわよ」

知らないところで有咲が交友関係を広げていて驚く。七さんの話的に有咲の方から話しかけたのだろう。人見知りでコミュ障なのに頑張ったものだ。

「ふふっ。心配しなくても取ったりしないわよ？」

「そんな心配してませんけど!？」

突然のことに思わず大きめの声で反論してしまった。下校中の他の生徒の視線が向く。

七さんは楽しそうに笑う。この人は本当に私の調子を崩すのが得意だ。

「冗談よ。市ヶ谷さんは確かにかわいいと思うけど私のタイプではないもの」

「それはそれで私としては複雑なんですけど。ていうかなんでそのこと知ってるんですか。七さんにその話をした覚えはないんですけど……」

「この間聞いてみたら市ヶ谷さんも認めたもの。まあそれを抜きにしても朝日も市ヶ谷さんも態度に出るから見えていたらわかるわよ」

ていうかいつの間に見られてたんだか。

出会った頃から七さんはこうだ。仲良くなるに連れてどんどん観察眼が鋭くなっていく。察しがよすぎて下手な嘘もつけやしない。

「まあ、それはいいとして。私に相談ってまたどうしたんですか?」「んー、口で説明することもできるんだけど実際に見てもらって本人からの意見を聞いてほしいのよ」

話題転換で本題を問うが返ってきた回答には疑問ばかりが浮かんだ。

「本人って、一体誰のことを」

「それは入ればわかるわよ」

辿り着いた生徒会室の扉を七さんは開く。

中にいた同級生がビクツと肩を震わせた。

「お、お待ちしました……」

「りんりん?じゃあ七さんの言ってた本人って」

「ええ。白金さんのことよ」

「てことはりんりんのことで相談があるってことですか?」

「ええ。白金さんのこれからのことで相談があるの」

七さんにはにつこりと笑っていてりんりんを見れば対照的に申し訳なきように少し俯いていた。

え、待って。もしかして私重大な役割に呼ばれたん巻き込まれたじゃない?

「えーっと?私にできること、ですか……?」

「むしろ朝日にお願いしたいことなのよ」

「なんででしょうか」

とてつもなく嫌な予感がする。そしてこういう時の勘はよく当た

るのだ。

七さんがにこつと笑う。開かれた口からはこう綴られた。

「白金さんが生徒会長に立候補するの。だから朝日には選挙活動と白金さんの応援演説をお願いしたいのよ」

◇◇◇

「ええ!? 燐子先輩が生徒会長に立候補!？」

「しかも朝日先輩が応援演説するんですか!？」

「生徒会選挙当日までの選挙活動もな。もうほんと、なんでこうなるんだよ……」

放課後遅れてやってきた朝日先輩が来て早々ソファに倒れ込み悶絶していたのが珍しく理由を問いただせば生徒会長選挙活動をする事になったことを知った。それも燐子先輩の、加えて応援演説も担当することになったらしい。想定すらしていなかった展開に驚くことしかできなかった。

「ま、まあもう引き受けちゃったんなら燐子さんのためだと思ってやるしかないんじゃない?」

「だいたいなあ! 私が一緒に活動したって意味ないだろ他の生徒からも教師からも印象よくないんだからさあ! むしろ一緒に活動したら絶対影響出るじゃん! もはや私じゃない方が良くない!? 七さんも七さんだ! 自分を変えたいりりんに生徒会選挙に出ることをオススメするのはいいんだよ! そこまでは! そのあとになんで応援演説担当に私のことを推薦したりするんだよ!! 適任なんていくらでもいるじゃん! もう!!」

「朝日先輩が有咲以外でこんなに悶えてるのは珍しい」

「おたえは意味わかんねえこと言ってるんじゃねえよ！」

思わずつつこんでしまったがおたえの言う通りでもあった。

これくらいの案件なら朝日先輩は簡単に引き受けそうなものなのに。まあ先輩の言い分は尤もだから否定することもできないんだけど。

印象が大事な生徒会選挙。朝日先輩の頑張りが燐子先輩の今後を左右する。というか事前の印象が悪いと問題しかないだろう。

鰐部先輩の選択は基本的に信用してるけど、どうして朝日先輩のことを選んだのかはわからない。確かに燐子先輩とも仲がいいし信頼もされている。朝日先輩だってフォローのしやすい接しやすい相手だろう。でも、それだったら紗夜先輩でもいいことになってしまう。紗夜先輩でなく朝日先輩にした理由って、何なのだろうか。

「もうさ、私じゃなくて紗夜でいいじゃん同じ顔なんだし。私にこんな重要な役割押し付けるとかほんと七さんは！」

「そんなに嫌ならなんで引き受けちゃったんですか？断ればよかったのに」

「……あれはな、無理。滅多にない七さんからのお願いだし、それにりんりに頼まれたら断れない。無理」

「じゃあもう諦めるしかないですね」

珍しく辛辣な沙綾の言葉に朝日先輩はまた頭を抱えた。しかし一度引き受けてしまったのならもう後戻りはできないだろう。諦めてもらうしかない。

「でも朝日先輩って鰐部先輩と仲良かったんですね」

不意に頭をよぎった言葉がそのまま口から零れた。それに同意する声が重なる。

「朝日先輩がグリグリの人たちと親しく話してるところって見たことないです」

「確かに。学校でグリグリとすれ違っても軽く会釈するくらいで会話してるところ見たことないですもんね」

「お姉ちゃんも朝日先輩とはあんまり話さないって言ってたよ」

「なのに鰐部先輩から直々に声をかけられたって相当仲良いんですね」

何でもない言葉のつもりだった。なのにしばらくしても朝日先輩からはなんの反応もなかった。

握った拳に力が入っている気がした。

「朝日先輩？」

「……別に、普通だよ。ただ昔、バンド関係でちょっとお世話になってたっただけ」

「あーそう言えば朝日先輩って昔バンドやってましたもんね」

「え？そうなの？」

「うん。前にナツたちから聞いたことあるし、ナツたちとも何度かセッションとかしてましたよね？」

「……そういうことも、あつたかもな」

初めて聞いた朝日先輩のバンド時代の話。海野さんは知っていたのか。よく考えたら朝日先輩からバンドの話を知ることがなかったことを思い出す。でもその朝日先輩が曖昧な返事をする辺り何かあつたのだろうか。

朝日先輩に聞いても教えてくれなさそうだし海野さんに聞けば教えてくれるのだろうか。

「っーかそんな話今はどうでもいいわ。それよりもりんりんの話！」

朝日先輩はテーブルを軽く叩いた。

「りりんが生徒会長になりたいって言ってるんだ。私にできることがあるなら全力で協力したいと思ってる。だからどうにかして生徒会選挙を乗り過ごしたいんだ。何かアイディアないかな？」

真面目なトーンで話す朝日先輩に私たちは頭を悩ませる。

生徒会選挙の経験なんて私にはない。それは多分他の四人も同じだ。正直選挙活動をしているところを見たことはあつたけど実際のところどんな準備をしているのかはわからない。

「……難しく考える必要はないんじゃないですか？」

「え？」

そう言ったのは沙綾だった。朝日先輩は首を傾げる。

「それはどういう意味？」

「朝日先輩の性格って私たちはわかっています、教師や生徒は誤解してる人がまだ多いと思います。正直このまま燐子先輩の応援演説をしても聞いてくれる人がいるのか怪しいかもしれません」

「まあ、それはそうだろうな」

「だから下手に取り繕わないで真剣にやるしかないんじゃないですか？今までの印象を覆すくらい真面目に活動すれば自然と名声はついてくると思えますよ」

「……なるほど。確かにそうだな」

沙綾の声に朝日先輩は納得したように頷いた。

「確かに適当な仕事するやつを信用するわけもないよな」

「でも朝日先輩ならなんとかできそうですし大丈夫ですよ！」

「何の根拠もない助言をありがとう香澄」

「あれ？私ディスプレイされてる？」



「そんなことないよ」

朝日先輩はスマホを取り出して何やらメッセージを送っている様だった。おそらく相手は燐子先輩だろう。

問題が解決してよかった。だけど私はあまり力になれなかったからそれが少しだけ悔しい。

「有咲ちゃん？どうかしたの？」

「……なんでもない」

ただ信頼っていうのは普段の行いから少しずつ積み上げていかなければ効果がない。ちよつとやさつとじゃ植え付けられた印象は変わらない。沙綾の言つてた真剣だの真面目だのは、今回は効力を発揮するか怪しいところだ。ただのやる気のない生徒が頑張るのとはわけが違うのだから。

朝日先輩なら上手くやれると思うけど、もしかすると結構厳しいかもしれない。

何も無いことを願い、私はキーボードの前に立った。

想像通りの厳しさで。

端的に言えば、数週間で私の想像していたことは現実となっていた。目の前で机に突っ伏す朝日先輩がまさにその証拠だった。

「今日もダメだったんですか？」

朝日先輩の隣には先ほどまで配っていたビラが積まれていて、配りに行く前に見た厚さとあまり変わっていないことを瞬時に察した。沙綾から受けたアドバイスを実行に移したのはいいけど結果がついてきていないことがよくわかる。

「ダメ、どころじゃないよ。後輩は謝りながら走っていくし先輩にはめんどくさそうな顔されるし同級生はどうすればいいのか困惑してるし。ちゃんと受け取ってくれたのは知り合いと数名のクラスメイトくらいで人数も疎ら。日に日に配れるビラの数に限られて来るし、正直もう無理しかない。つらい」

ここまで弱音を吐く先輩も珍しい。自分が避けられている存在だということとは理解していたけど実際目に見えると違っていた以上にきつかったのだろう。見る限りよっぽどショックだったんだな。

「隣先輩は？」

「りんりんの方は順調みたい」

「そうなんですか」

「でも」

「はい」

「私が応援演説もするって学校中で広まってるから受け取らないやつらもいるみたい。元々生徒会長が誰になろうと興味ないやつらが主だろうけど、私が応援演説とかがありえないって言ってるやつらも一定

数いるみたいだから」

これは、相当弱ってるな……。

朝日先輩は自分が傷つくことや被害を被ることはまったく言っていないほど気にしない。むしろ自分がそうすることによって誰かが助かるならそうする。

「りんりんは人と話すの苦手なのに勇氣出して頑張っているんだ。それが私のせいで無駄になるとか」

だからこそ自分のせいで誰かのポイントを下げたことを誰よりも嫌う人だ。しかも燐子先輩とは仲が良いし変わりたいって思っているのにそのチャンスを潰すようなことになるのは嫌なのだろう。気持ちは、わかる。

でも、一度染みついたイメージを払拭するのは難しいから。朝日先輩の内面を知る前に見た目や行動から遠ざける人たちがいることもわからなくはない。私だって出会い方が違っていたら間違はなく仲良くなっていないだろうし今までの朝日先輩を近寄り難いと思ったことが一度もないわけじゃない。

「……生徒会選挙の日っていつでしたっけ？」

「三週間後」

一ヶ月を切っている。そんな状況でこれだと生徒会選挙の日まで持つかも怪しそう。

燐子先輩以外の立候補者は二人。全生徒は約六百名。そこから当日真面目に入れる生徒が七割、興味がなく適当に見た目や話し方の印象で入れるのが二・五割、残りが休みだと仮定しても最低二百名ほどからの支援を得なければいけない計算だ。

正直大切なのは生徒会長に立候補した人がきちんと意見を言えるかどうか。応援演説は補正くらいの役割しかない。ただ燐子先輩が

大人数の前でハッキリ話せるのかどうか問題だ。やっぱり燐子先輩って大人しくて、人と話すことに慣れてる感じはあんまりない。それをこの短期間でどれだけ直せるのか、だな。

他の立候補者のことは顔と名前くらいしか知らない。でも人の前に立てそうな印象は持った。私がそう思うのならおそらく他の生徒たちもそう思っているのかもしれない。実際、活動も上手くいっているように思う。

このままだと先輩たちは当日まで支持を得られないまま終わる可能性だって……。

「あの、朝日せんぱ」

「……朝日さん」

背後から声がして振り返ればそこには燐子先輩が立っていた。手にはさつきまで配っていたのかビラがあつて、少なくとも朝日先輩の半分以下になっていた。

「りんりん？どうかしたのか？」

「少し、話したいことがあるのですが、いいですか……？」

「あ、ああ。わかった」

「じゃあ私は先に蔵に行ってますね」

生徒会長選挙のことでの話し合いだということとは理解していたから私はそう先輩に告げて教室から出た。先に蔵に行く、とは言ったものの練習に集中できる気はしていなかった。

「あらしヶ谷さん」

「……鰐部先輩？」

校舎から出て正門へ足を進めようとしたところでばったり会ったのは鰐部先輩だった。鰐部先輩も私同様カバンを持っていた。

「こんにちは。今帰りですか」

「そうよ。市ヶ谷さんも？」

「はい。今からポピパの練習に行こうと思って」

「そうなのね。でもこの時間まで学校にいるのも珍しいわね」

「そう、ですかね？」

「ええ。市ヶ谷さんって学校が終わったら一刻も早く帰路についているイメージなもの」

それについては一切否定できなかったからとりあえず笑っておい  
た。

「もしかして朝日のところにもいた？」

「な、なんでわかるんですか」

「市ヶ谷さんが学校に残りそうな理由がそれくらいなもの」

口元に手を当てクスツと笑う。

確かに私が学校に残るのはそれくらいしか理由がないけど……。  
鰐部先輩は面倒見がいいし的確なアドバイスをくれる人だから頼り  
になるのだけど、なんだか色々見透かされている気分になることがあ  
るからその時だけは苦手だと感じる。

「朝日、苦戦してるみたいね」

「は、はい。結構他の生徒たちから避けられちゃってるみたいで。  
ちよつと落ち込んでました」

「正直こうなるのは想定範囲内よね。みんな朝日の内面を知らない  
からそうなつても仕方ないもの」

鰐部先輩は今の状況になることがわかっていたような態度で少し  
驚いてしまう。

こうなるのがわかっていたのなら普通選ばないだろう。だって不

利になるし。燐子先輩のことを考えても、そうだ。

「あの、鰐部先輩。先輩はどうして朝日先輩に燐子先輩の応援演説をお願いしたんですか？正直、適任な人は他にもいたと思うんですけど」

「あら。市ヶ谷さんは朝日が応援演説者なことに不満なの？」

「ち、違います！違いますけど……」

朝日先輩が前に言っていたように紗夜先輩でもよかつたはずだといふながら思う。紗夜先輩なら真面目だし教師たちからの信頼も厚い。それに鰐部先輩も知っている生徒だ。紗夜先輩なら燐子先輩とバンドメンバーでもあるしコミュニケーションだってとりやすい。なのに紗夜先輩ではなく敢えて朝日先輩を選んだ理由が、朝日先輩にも私たちにもわからないままだった。

「言いたいことはわかるわよ。でも私は朝日に任せるのがいいと思っただ」

「どうしてですか？」

「理由は色々あるわ。例えば、信頼を取り戻すため、とかね」

「信頼を取り戻すため、ですか？」

「市ヶ谷さんはどうして朝日が避けられていると思う？」

「え？それは、不良生徒だからですか？」

「間違っではないわ。ただ原因はそれではないのよ」

「え？」

「一年生の頃の朝日は、自分のせいで誰かが傷つくことを極端に嫌っていた。それは今も変わらないかもしれないけれど今以上に自分の周りから人を無理矢理遠ざけていたわ。その時の朝日は遠ざけることでいっぱいになっていったんでしょね。遠ざけ方が酷かったの。だから今更手のひらを返したように普通の生徒であろうとすることをよく思わない生徒だっているのよ。特に、二年生で当時同じクラスだった人はね」

鰐部先輩が話すのは私の知らない朝日先輩のことだった。そんな話誰からも聞いたことがなくて困惑する。どの時期の話なのかの察しはつくけれど。

「今の朝日は誤解されたままだもの。それは私たちとしても嫌でしょう？だから誠実さを見せて、ちゃんと変わったと証明して、少しくらいは誤解を解きたいのよ」

一応あの子は私にとって可愛い後輩だからね。と続ける。しかし微笑んでいた表情が次の瞬間には真剣なものに変わった。

「それに……朝日はいい子だから、そろそろ逃げるのをやめてほしいのよ」

「逃げる……？朝日先輩がですか？」

「ええ。朝日はあの日からずっと逃げています。だからそろそろ誰かが向き合わせないといけないの。そうじゃないとあの子は、いつまでも前に進めないから。言ってしまうえばクラスメイトへの誤解を解くのはリハビリみたいなものよ」

何の話をしているのかわからなかった。

朝日先輩が逃げています？一体何から？それに今の話って？

困惑する私を見た鰐部先輩がまた微笑んだ。

「でも、苦戦されたまま終わるのは困るから少し助言をしてくるわね」

鰐部先輩は何事もなかったかのように校舎に戻って行く。

「え、あの、鰐部先輩！今の話」

聞かなければいけない気がした。だから呼び止めた。

「市ヶ谷さん」

鰐部先輩の足が止まって、振り返り、ただ一言こう言った。

「朝日の支えてあげてね」

「いや、あの、鰐部先輩！」

それ以上答えることはなく鰐部先輩の姿は見えなくなった。

「朝日先輩を支えてあげてって……」

どういう意味で鰐部先輩がそう言ったのかわからない。

朝日先輩はまだ何か隠していることがあるのだろうか。真相は謎のままだし朝日先輩に聞いてもいいものなのか、答えてくれるものなのかも判断しづらい。

『有咲。先に練習始めとくね』

香澄からのメッセージを受けてとりあえず蔵に向かうことにした。

練習だし、今さっきのことは一旦忘れよう。カバンからイヤホンを取り出して最近流行りの曲を再生した。



悩み、葛藤、緊張。

「朝日」

「……七さん」

教室で項垂れていた後輩に声をかけると彼女は静かに私の名前を呼んだ。出会った頃から呼んでくれる愛称。彼女のバンドメンバーが付けてくれたその日から私は結構気に入っている。

「らしくないわね。話くらいなら聞けるわよ」

現生徒会長が全面協力するのはさすがに見過ごせないだろう。しかし話を聞いて多少助言を下すくらいならば問題はない。そう思った。

彼女の向かいの席に腰を下ろす。

彼女はノートに何かを書いていた。

「もしかして、演説用の原稿を考えてるの？」

「はい。……ただ、何度書いても納得のいくようなものにならなくて」

ノートにはいくつか下書きが並んでいる。ただどれも二重線で却下されていた。

パツと見る限り前向きで演説だとありがちなテンプレートの文面ばかり。正直悪そうなところは見当たらない。でも彼女はこれではいけないと考えているようだ。

「何が納得いかないの？」

「それがわからないんです。自分で見ても問題ないと思うし、有咲たちに見てもらってもいいって言われました。でも改めて読み返すと何かが違うって感じるんです」

周りには感じない何かを朝日は感じているらしい。そして本人も何が原因なのかわからず悩んでいるようだ。

頭を抱えている彼女を横目に私はまたノートに目をやる。

白金さんなら学校を良くできる、白金さんなら向いていると思う、いい生徒会長になれる。

書かれている内容は要約するとそんな感じ。代表演説ならこう書くのも当然だろう。ありがちだから違和感を抱いているのだろうか。

「……なんだか、これだけ悩んでいる朝日も珍しいわね」

「……からかっています?」

「まさか。普段しつかりしすぎてくるくらいだからこうやって弱い部分が見られて嬉しいわよ」

あの日から朝日は自分の弱さを隠すようになった。代わりに強く見せようとした。本心を隠すことも多くなった。今でこそ姉妹の和解や市ヶ谷さんたちがいてくれるから心を許せるようになったけど、ほぼ一年くらいは本当に誰にも頼らなかつた。

「私にだって悩むことくらいあります」

きっとあの子たちが朝日のことを引き止められたらこうはなっていなかったのかもしれない。

でも結果論だったとしてもこうして弱さを見せてくれるようになったのは喜ばしいことだ。

「自分を変えようと頑張っているりんりんの力になりたいんです。せっかく頼ってもらえたのに何もできないままなのは嫌じゃないですか」

「気持ちわかるわ。でもだからってあまり溜め込むものでもないわよ?これから行われるのはあくまでも高校の生徒会長選挙だからね?」

「わかってます。……でも」

私のせいでりんりんの評価が落ちるのは困るんです。確かに彼女はそう言った。それで、腑に落ちる。

彼女は何度も似たようなことを言っていたが思っている以上にその言葉の重みは大きいようだ。

「朝日。もしかして白金さんのために代表演説を何事もなく確実に成功させないといけない、とか思っていない?」

「え? まあそれはそうでしょう」

彼女はさも当然かのように答えた。

「私に悪評がつくのは私が悪いので構いません。けど私が代表演説をするからイコールりんりんもやばいやつ、と噂されるのは耐えられないんです。だからそれを撤回したうえで、りんりんだけでも理解されてほしい」

なるほど。なんとなくわかった気がする。

「朝日は怖いよね」

「え……?」

「自分のせいで誰かがまた傷つくと思っっているんでしょう?」  
「っ……」

あからさまにバツの悪そうな顔をする。

一年そこらでどうにかなる傷だとは思っていないなかった。でも思っていた以上に溝が埋まっているわけでもないようだ。

「一応言っておくけど、生徒会長選挙では白金さんだけが良いと思われても意味がないわよ」

「……どういうことですか」

「貴方が悪だと思われている以上、その人に支持されている白金さんの評価も自然と下がるわ。だから貴方の評価が上がらないことには白金さんが生徒会長に選ばれることはないと思う」

同級生や教師内での評価が多少変わっているとは言え、上級生と下級生の間では朝日はまだ厄介者として扱われている。不良だと言われた生徒からいくら綺麗事を並べられたって聞く耳を傾けることはないだろう。

少なくとも今の朝日の評価はそんなものだ。そして白金さんの評価もそれが影響してる。だったら白金さんの評価を上げるよりも朝日の評価を上げた方が効果的だと私は思っていた。

「貴方が生徒からどう思われてもいいと思っっているうちは変わらな  
い」

「……七さんは、そう思うんですね」

彼女も思うことはあったようだ。でも自分ではそれでいいのかと確信が持てない。

間違いなく私の言葉を待っていた。そんな目をしていた。付き合いはそこそこ長いからそれくらいわかる。

「じゃあ、どうした方がいいと思いますか？」

「簡単な話よ。演説をするなら綺麗事じゃない、偽りのない朝日の言葉で伝えればいい」

まっすぐに真摯な言葉ほど響くものはない。きっと今の朝日にはそれ以上にできることはないだろう。それを受けて生徒たちがどう思うかは私にもわからないが無意味では無いと思う。

それを聞いて朝日はどう感じているのだろうか。

「……ありがとうございます、七さん。私、少し考えすぎていたのかも  
しれませんね」

「別にいいわよ。このまま不完全燃焼になられるよりはマシなもの」

席を立ち上がって私は朝日を見下ろす。もう、下を向いてはいな  
かった。

「私はもう帰るわ。だから助言もここまで。あとは自分で考えてね」

「はい。本当にありがとうございます」

頭を下げる彼女を最後に私は教室から去った。

朝日は誰よりも聡明で良い子だ。でもそれ故に強がりになってし  
まった。

「あの時、私の言葉をちゃんと伝えられていたら……」

手を差し伸べきれなくて勘違いされるように振る舞わせてしまっ  
た過去の自分に文句を言っただけでやりたい。

朝日はきつと私のことも姉妹のことも、そしてあの子たちのことも  
大切にしたいから自分を犠牲にするだけで成り立つならそれでいい  
と思っただけ。それが根底から変わる日はきつと来ない。

氷川朝日はそういう人間だ。嫌というほど思い知らされている。

「市ヶ谷さんにはあんな風に言っただけでこの体たらくなんてね  
……」

生徒会長選挙のことが片付いたとしても問題はまだまだ山積みだ。  
私が知らない事柄もいくつ抱えているのかわかったもんじゃやない。  
わかっているのは、早めに解決させないと取り返しをつかないこと  
になる、ということだけ。

脳裏をよぎるのはあの事件のこと。

解散してしまったバンドのこと。  
見れなくなってしまった笑顔のこと。

◇◇◇

「あつという間に生徒会長選挙の日はやってきた。体育館に集められた全校生徒たちを袖から覗く。所々で興味なさそうな反応が見受けられた。当たり前だ。全校集会を楽しめるやつなんて変人でしかないのだから。」

「あ、朝日、さん……」

「りんりん？ どうした？」

「……あ、あの……」

私を呼んだりりんりんはいつも以上に歯切れが悪い。それが不思議で首を傾げていれば、彼女の身体が震えていることに気がついた。  
……そっか。緊張してるのか。

「りんりん」

「……え……は、はい……」

「自分らしくいこう」

「え……？」

りんりんの手を握り、笑って見せる。  
驚いた顔をして、何度か瞬きを繰り返していた。

「今更取り繕っても仕方ない。緊張するのは当たり前だし、場の雰囲気にもまれるようなことが仮にあったとしても……まあその時は仕方ないと思う。私だってフオローでできる分はする。」

でも諦めたり弱気になるのはダメ。それに自分でなりたいて踏

み出した一歩目なんだ。失敗は付き物だよ。それをなるべく成功に近づけるために今日まで準備してきたんだ。

その時間は裏切らない。だから自分を信じてやろう」

「っ……はい。ありがとう、ごさいます……」

本当に少しだけ安心した表情になる。

震えは残っているけど、治まった方だろう。

「……もうすぐだ。全力でいこうか」

「……はい」

## 生徒会長選挙

「――以上で演説を終わります」

拍手と共に多少の談笑が増えていく。演説の終わった生徒は舞台上に置かれていたパイプ椅子に座り直す。その隣には朝日先輩と燐子先輩が何やら話していた。とは言っても、朝日先輩が緊張気味の燐子先輩を気にかけている、という感じだったけど。

生徒会長選挙の日はあっさりやってきた。

できる最低限の手伝いをしていればすぐにこの日はやってきた。

朝日先輩はいつからか吹っ切れたような顔つきになっていて、そのうち蔵にも来なくなつた。

理由はわかつていたからポピパのみんなは何も言わなかつた。私だって邪魔するわけにもいかず、ただ今日を待つことしかできなかつた。

「有咲。大丈夫？」

「え、ああ……」

「……そんなに朝日先輩のことが心配？」

「……べつに」

偶然隣になつた沙綾が問いかける。それに当たり障りのない言葉を返す。

正直、心配で仕方ない。

朝日先輩はいい人だけど、他の人たちはそうは思っていない人は多い。それはここ数週間でよくわかつた。

「朝日先輩なら大丈夫だと思ふよ」

「そうだと思いたいけど……」

上手くやる、なんてことは言っていたけど、朝日先輩は人の目を気



にして、そのうえで行動することもあるから、本当にどう転ぶかわからない。

「私たちは見守っておこう」

「……そうだな」

せめて何事もなく終わってくれればいいけど……。  
そう思っていた五分前の私を殴ってやりたい。

「次は白金燐子さんの応援演説です」

そのアナウンスを受けて朝日先輩が立ち上がる。それを見て体育館内がざわついた。

朝日先輩が演台の前に立った頃には簡単にはかき消せないくらいになっていた。教師たちも一部は「静かにしろ」と苦言を呈していたが、多くは黙ったままだった。

完全にアウエーだ。

演台に立った朝日先輩はざわつく体育館を見ていた。静かに治まることのない空間を数秒黙って見ていた。

大きく深呼吸をして、その眼差しが真剣なものに変わる。

——キイイイイン

「っ!？」

「え、なに……」

甲高い金属音が響いて、一瞬で静かになる。全員の視線が演台に集まっていた。

マイクを指で叩いていたらしい朝日先輩は一礼していた。

「はじめまして。白金燐子さんの応援演説を担当します、氷川朝日で

す。退屈な時間かとは思いますが、大切なことなので最後まで聞いていただけるかと助かります」

淡々と自己紹介を続ける。

何度か瞬きをしていると朝日先輩はおもむろに原稿を取り出し、何を思ったのか元に戻した。

「私にいい印象を受けている方は少ないと思います。色々な噂が立ち、敬遠していた人が大半です。……正直、この場に立つつもりはありませんでした。私のせいで悪い印象を与えることは必至だからです。でも、白金さん直々のお願いだっただので、私にできる最大限のプレゼンをしたいと思います」

また体育館がざわついた。

そりゃあ「白金さん直々のお願い」だとは誰も思っていなかったんだろう。

傍から見れば燐子先輩をカツアゲする朝日先輩の図は容易に想像しやすい。実際はゲームでもリアルでも仲良しなのだが。

「私が生徒会長に白金さんを選出する理由ですが、主に決断力が優れている、という面です。第一印象では大人しそう。話してみれば口下手。それ故に勘違いされる方々も多いと思います。

ですがそれは誤解です。まあ大人しいのも口下手なのも事実ですけど、実際は芯が強く、揺らがなことは確かです。

生徒会長になるということは、これから先も様々な決断を迫られることはあるでしょう。その際に私たちを正しく導けると思っています。

また、寛容なので学校を盛り上げる生徒会の一員となった方々の意見も、生徒から集まった意見も、すべて取り入れ、充実した学校生活になるように努めることができます。

そこが彼女の強みであり、彼女が生徒会長に相応しいと思う最大の理由になります」

朝日先輩は息を吐いて、また体育館を見回す。

「噂や見た目などでは判断することだつてない。こんな私に嫌な顔をする事もなく、快く接してくれているのがその証拠で、……そんな彼女に私も勇気をもらえました。

白金さんならこの学校をもっといい場所にしてくれると思います。なので皆さんの投票をよろしくお願いします」

深く深く、朝日先輩は腰を折った。

呆然とする私たちから顔を上げて、椅子に戻った。

遅れてやってきた何度目かのざわつき。それはしばらく止まず、司会も困惑していた。

「……なあ沙綾」

「どうしたの有咲」

「朝日先輩って、本当にすげえな」

「……そうだね」

舞台上には仲良さげに笑っている先輩二人がいる。

きっとここにいる全員に朝日先輩の言葉は伝わっただろう。

その事実には私はひどく安心した。

「つ、続きまして、生徒会長候補の白金燐子さんの演説です」

マイクを通しているはずの声も小さく聞こえる。それだけ朝日先輩の言葉が残っているということ。  
いい雰囲気だ。

自然と口角が上がっていた。

◇◇◇

「つつかれたあ……」

「お疲れ様です朝日先輩。飲みますか？」

「ありがとう。もうう」

生徒会長選挙から一週間が経った。

演説が終わってから何かと忙しく、今日も年末に向けての準備だのなんだので主に七さんにこき使われていた。生徒会のメンバーでもないのに、生徒会長選挙の演説者の一人だからという理由で使われたのは多少理不尽に思うけど、七さんの頼みとなると断れなかった。生徒会室の片付け、という名目で昼休みと放課後は書類整理と移動で、終わった頃には日が暮れてしまった。

蔵練が休みらしい有咲は教室で私のことを待っていて、差し出された飲み物を呷った。

「はあー！ 生き返る……」

「なんだかおじさんっぽいですね」

有咲はクスクスと手の甲で口元を笑っていた。

それに私は幸福感を得ていた。

「……なんか久しぶりだな」

「え？」

「こうやって何でもない時間を過ごすの」

「あー……最近はずっと立て込んでて、話もそこそこでしたもんね」

「そうそう。だから有咲の笑顔を見るのも久しぶりだなーって」

自然と笑みがこぼれる。

それを見た有咲は赤く染まった顔を逸らした。

「………そういうの、ズルいと思います」

「え？ 何が？」

「あ、いや、なんでもありません」

有咲の言ってる意味がわからなくて首を傾げる。有咲は大丈夫だと言わんばかりに私の顔の前に手を出して、もう片方の手で顔を覆っていた。意味わからん。

「忙しかったですけど、でも、よかったですね」

「りんりんのこと？」

「それはもちろん、朝日先輩の言葉がちゃんと届いてよかったなって」

生徒会長選挙の結果、りんりんの生徒会長就任が決まった。そのせいで生徒会室の掃除を手伝うことになったと言っても過言ではない。肝心のりんりんは驚いたようなホツとしたような顔をしていて、それを見てしまえば雑用なんて軽いものだった。

「すつげえ緊張した」

「そうだったんですか？ 堂々としてるように見えましたけど？」

「そりゃあ演台の前に立ったら開き直るしかないだろ……心臓飛び出て死にそうだった……」

「……本当にお疲れ様です」

有咲は机に突っ伏す私を見て苦笑していた。人前に立つのが苦手なのは有咲も同じだろうに。

「全校生徒と教員を前にあれだけ言えるなんて、かつこよかったですよ」

「……そうか？」

「はい。まさか全部アドリブで乗り切るとは思ってませんでしたけど」

「それに関しては最初からそのつもりだったんだよ」

「えっ？」

「七さんが、私の言葉で伝えればいい、って言ってくれたからな。出そうとした原稿も結局上手くまとめられなくて白紙のまま。形式上、持ってた方がいいかなって思ったから持ってただけだし」

「……………本当に朝日先輩って度胸の塊みたいな人ですよね」

「ははっ。なんだそれ」

ありえないとでも言いたげな有咲に笑って見せる。

何を言われようとも結果が全てなのだから結果を出した以上文句を言われることはない。これで文句を言われるならそれはただのいちやもんでしかないのだ。

「正直どうなるかって心配してたんです。一部では朝日先輩が燐子先輩のことを良いように扱ってるって噂も立ってましたし、燐子先輩への同情の声とか多かったですから」

「まあそうだろうな。実際はめちやくちや仲良いけど」

「今回のことで朝日先輩のことを知らなかった人たちの見方は変わったと思います」

「……………だといいな」

確かに私に向けられる目はいい意味で緩和されたように思う。でも生徒会長選挙のたった一つの演説で一度ついたイメージを覆すだけの力があつたのかと問われれば疑問は残る。

これから先のことはわからないことばかりだ。

「そうですね。朝日先輩はいつもみたいに胸を張って自分らしくいれ  
ばいいんです」

悩みは絶えない私とは裏腹に何故か余裕そうな有咲は私の頭に手を置いていた。そのまま優しく撫でられる。

温かなその感覚は懐かしい気がした。

「あ、すみません突然」

有咲は自分のやっていることに気づいて手を離す。咄嗟にその手を掴めば彼女は目を丸くした。

「やめていいなんて言っていない」

「え？」

「……今日くらいは甘やかしても、いいだろ……」

「え……」

途中から恥ずかしくなつて語尾に連れて声が小さくなっていく。何を言ってるんだ私は……！

顔を見られたくなくて腕で隠す。

有咲の困惑する声が届いて、さらに顔が熱くなった気がした。

「……朝日先輩って、実は甘えたがりですよ。でも甘え下手」

「………有咲にだけは言われたくない……」

頭を撫でられながらそう言われる。言い返したが、その声に力なんて入らない。それを聞いて有咲は楽しそうに笑っていた。

「先輩は一人で頑張りすぎです。たまには私たちのことも頼ってください」

「………わかってるよ」

「ほんとかなあ……？」

「嘘ついてると思ってる？」

「いえ。まったく」

そつと視線を上げれば有咲は優しく笑っていた。

………ずるいな、この子は。

『朝日は偉いよ。あたしにできないことをできちゃうんだから』

どうしても重なる姿は、どんどん無視できなくなっている。

有咲は私を信用してくれている。それを知りながら私は、あの日からずっと秘密を隠し続けている。いつかバレてしまうかもしれないことを言えずにいる。

「朝日先輩……う？」

「……もう少し、このままがいい」

「はい」

気づかないでほしい。

バンドを続ける以上無理だとわかっているながら私はそんなことを思ってしまう。



## 第X章 君たちといつもと違う日常を。 祝福の日。

明日は待ちに待った一年で一度の日。  
大切な人のため私たちは奮闘する。

すなわち、誕生日である。

◇◇◇

三月二十日。今日はいつも私たちのことを支えてくれている朝日先輩の誕生日だ。日頃から感謝しかしていない私たちはサプライズで誕生日パーティーを開こうとしていた。誕生日当日は平日だが朝日先輩が蔵に入り浸っているのはほぼ毎日だから問題ないだろう。

前日、朝日先輩と一緒に帰ったフリをした香澄と合流し、蔵の飾りつけをした。ケーキも朝日先輩の好きなチーズケーキを買った。プレゼントだってちゃんと用意した。準備は万端だ。

正直な話、私の選んだプレゼントを朝日先輩が気に入っているかだけが心配。

朝日先輩なら何をしても喜んでくれるだろう。けどそれじゃあなんか嫌だ。どうせあげるなら最高のプレゼントをあげたい。その想いが強くて色々悩んで決めたプレゼント。喜んでほしかった。

だから朝からドキドキでソワソワして香澄たちにまで不思議がられてしまった。放課後まで隠し通せる気がしない。

「お昼だよー！有咲行こう！」

「ちよ、香澄！引つ張らなくても行くっつーの」

クラスに顔を出したのは香澄。その後ろにはいつもの見慣れたメンバーが並んでいた。

そんなメンバーと他愛もない話をしながら廊下を過ぎ、中庭の特等席に陣取る。あとは朝日先輩が来られれば完璧なんだけど。

そんな時にポケットに入っていたスマホが鳴った。メッセージをくれたのは朝日先輩だった。

『悪い。クラスのやつらが誕生日会開いてくれて、そっち行けなくなった』

これが零時丁度に送ったメッセージの次に来るなんて誰が想像していたのか。

お昼、一緒に食べられると思っていたから少しショックだった。

「有咲？どうかしたの？」

「……朝日先輩。今日の昼一緒に食べれないって」

「ええ!?私楽しみにしてたのに！」

「クラスで誕生日会してるんだと」

「残念だけどそれなら仕方ないね」

「……そうだな」

「……大丈夫？」

「……別に、放課後には会えるだろ」

こんなことで寂しいとは言えなかった。否、言いたくなかった。かわられるのが恥ずかしくなかったし、クラスメイトに嫉妬している自分の心の狭さに嫌気が差すから。

一番が私であるという事実には救われている。

◇◇◇

結局午後の授業はずっと朝日先輩へのプレゼントに対する不安が頭をよぎっていた。

勉強にも手付かずのまま放課後を迎える。まあ別に学校の勉強に不安があるわけではないし予習も復習も改めてやれば大丈夫だが、今日のことには大丈夫な気がしない。

そんなことを思いながら帰りの支度をする。鞆を持って待ち合わせをしていた隣のクラスに足を運んだ。そこにはそのクラスの四人だけでなく朝日先輩もいた。HRが早く終わったのか。いつもより五分は早い。

「お、有咲来たな」

「はい。お待たせしました……あの朝日先輩？その袋どうしたんですか？」

朝日先輩を見て一番最初に視線を送ったのは手に持っていた二つの紙袋だった。箱や包みが大きさはバラバラだが

大量に入っている。

私の問いに朝日先輩は頭を掻いた。困ったような表情をしていた。

「これ、全部誕生日プレゼントなんだよ。ほら昼に言つたる誕生日会してもらったって。その時にももらったんだよ」

「そう、なんですか……」

「さすがに多すぎだよな」

困ってはいいたけど嬉しそうに笑う朝日先輩に胸が苦しくなった。

そうだ。人のいい朝日先輩が好かれないわけがない。だからクラスメイトの人たちも盛大に会を開いたんだろう。

朝日先輩は、私以外のプレゼントでも喜んだ。もしかしたら本気でほしかったものがその中に入っていたのかもしれない。私のものよりも気にいるプレゼントがあるかもしれない。そもそも私のプレゼントなんていらぬのかもしれない。

そんなことはない。朝日先輩は私のことが一番だつて言ってくれた。だから私のプレゼントでも喜んでくれるはずだ。

嬉しそうな顔をされて不安になるだなんて、私はいつからこんなに心狭い女になってしまったんだろう。そんな面倒な自分が嫌になる。

「んじゃ、蔵行くか」

「そうですね」

蔵に向かうまでもその不安は解決しなくて、時々私を見て心配そうな顔をする朝日先輩にぎこちなく笑った。

サプライズの誕生日会は、簡潔に言うとう成功した。

朝日先輩は驚いてくれたしケーキも喜んでくれた。ただそんな朝日先輩の表情を見る度に私の不安は増えていく。

私だけ喜んでもらえなかったら……そんな妄想ばかりがよぎっていい反応をしてくれる未来が見えなかった。

ケーキを食べて雑談して、そしてとうとう本題である。待ちに待った、朝日先輩へのプレゼント贈呈式だ。

「朝日先輩！これ私とおたえとりみりんとさーやからです！」

「ギターの弦とピック？」

「はい！朝日先輩と言えばやっぱりギターじゃないですか！」

「私のイメージがそれなのはここでただけだけだな」

「それとエフエクターです」

「こ、これ私が前に見て欲しいって思ってたやつじゃん！高かっただろ？」

「私たちと、あと花音先輩で割り勘しました」

「朝日先輩が喜ぶと思ったのでちよつとだけ奮発しちゃいました」

「ありがとうめっちゃ嬉しい！大切にします！」

そうだよな。朝日先輩相手ならギター関連のもの渡せば絶対安心だったのに。なんで思いつかなかったんだろう。

てか数人で割り勘って手があったか。それ完全に見落としてたな。

「それから、プレゼントはあと一つあるんですよ」

「まだあるのか？」

「はい。ね、有咲」

「……え？」

沙綾がニヤツと笑って私の背中を軽い叩いた。香澄も似たようなことをしている。おたえはいつも通りでりみだけが苦笑いしている。え、待って何怖い。

「朝日先輩」

「二」プレゼント、フォーユー！」「二」

「ぬわっ！」

「っ!？」

四人の言葉と共に押された私の身体。突然のことで朝日先輩の胸に飛び込む。朝日先輩はしっかりと抱きとめてくれて、感じた温もりに熱が集まった。

「私たちからのもう一つのプレゼントは今日一日有咲を好きにしている権利です！」

「はあ!?!」

香澄が言い放ったとんでもない発言に抱きとめられたまま反応する。少し声がこもってしまった。朝日先輩から離れて後方にいた香澄たちに文句をつける。

「なんだよそれ! 私は聞いてないぞ!?!」

「言っていないもん」

「有咲。プレゼントは私って言っときなよ」

「誰が言うか!!」

いくらなんでも悪ノリが過ぎるだろ。朝日先輩だって呆れて何も言ってな……。

「あ、朝日先輩!?!」

「ねえ、本当に有咲のこと好きにしているの?」

「はい。もちろんです!」

「ならそのプレゼントもらう」

「ちよっ!」

後ろから抱きしめられた私は身動きが取れなくてただ顔を赤くして戸惑うことしかできない。とは言え、朝日先輩が私を欲しいと言ってくれたのは嬉しい限りだ。それを察したのかやけに嬉しそうな他のメンバーの表情。恥ずかしいから今すぐ出て行ってほしい。

「それじゃあプレゼントも渡し終わったし帰ろうか」

「そうだね」

「邪魔者は退散しよう」

「またね有咲ちゃん」

「嘘だろ!?!」

普段の気持ちは伝わらないのにどうしてこういう時は伝わるのか不思議で仕方ない。というかいつもなら嬉しい二人キリがこんなに気掛かりなのは初めてだった。

「……なんだよ有咲。私と二人きりは嫌なのかよ」

「い、嫌じゃないです……」

珍しく拗ねた声を出す朝日先輩にキュンとした。

「有咲いちやつくなら私たちがいなくなってからにしてよ」

「今すぐくコーヒー飲みたい気分」

「ああもう！茶化すなら帰れ！」

言ってしまったと思った。しかし出てしまったものはどうしようもない。

蔵から出て行く後ろ姿をただ目で追うことしかできなかった。

「……あ、あの朝日先輩。そろそろ離してくれませんか？」

「いやだ」

香澄たちがいなくなった途端にさっきよりも強くなった力。私から離すのも切なくてそのままにしておいた。

しばらくしてやっと離してくれた朝日先輩。嬉しそうだった。

「ねえ有咲。有咲からプレゼントは？私、まだもらってないよ」

「……気に入ってくれるかわかりませんが」

私はおそろおそろ鞆から手のひらに収まるくらいの箱を朝日先輩に渡した。

「開けていい?」

「はい」

包装を丁寧の外して箱を開く。中身を見て驚いたような表情をしていた。

箱の中身はネックレス。シルバーで指輪が二つクロスしているようなもの。お店で見つけた瞬間に絶対朝日先輩に似合うと思った。

気に入ってくれただろうか。視線を朝日先輩に向ければ目がキラキラしていた。おもむろに首に着けた。

「似合ってる?」

「はい。とっても」

予想通り綺麗だった。つい見とれてしまう。

「ありがとう有咲。嬉しいよ」

私の心配はその幸せそうな笑顔を見て杞憂だと知った。

今日見たどんな表情よりも嬉しそうな顔に胸がいっぱいになった。思わず涙が零れてしまう。

「あ、有咲!?!」

「よかったあ……」

朝日先輩に正面から抱きつけば抱きしめられ頭を優しく撫でられる。

「好きだよ有咲。大好き」

「わ、たしも……大好きです」



お誕生日おめでとうございます。  
これからもずっと私の先輩でいてくださいね。

私だけの先輩。

朝日先輩は外見が少し怖いから勘違いされがちだ。

本当は優しくとってても面倒見がいいのに関わったことのない子  
たちにはそれが何一つ伝わらない。

故にクラスメイトの幾人かから質問されることはあった。

「どうしてそんなに氷川先輩と仲がいいの?」

どうしてと言われても困った。そのたびにその答えを考える。

仲良くなれたのは朝日先輩の心に寄り添えたから。言わば過去の  
私の功績だ。

出会いは衝撃的なものだったけど、きつと自己犠牲の精神みたい  
なものが私と似ていると思ったから。妹さんたちに対する強い想  
いに胸を打たれ助けあげたいと考えたのかもしれない。実際のところ  
助けるよりも助けられてばかりだけど。

朝日先輩はかっこいい。

いつも私と話している時の真面目な表情。

道を歩く時はいつの間にか車道側を歩いているし一緒にご飯を食  
べに行けば大抵ご馳走してくれる。

色々な朝日先輩を見てきた。

そのうえで一番かっこいいと思うのはギターを弾いている瞬間。

真剣な眼差し、しなやかに動く指先、揺れる髪、流れる汗、楽しそ  
うに笑う口元、鳴り響くのは魂のこもったメツセージ。

どれを取っても私の中では一番でそのかっこよさに何度だって見  
とれてしまう。

沙綾と呼ぶ声に胸の高鳴りは抑えられない。

そんなかつこいい朝日先輩のことが私は好きで好きで仕方なかった。

◇?◇?◇?

パン屋の朝は早い。私の家では父さんが一番早く起きて店に並べるパンの準備をする。それを手伝うのが私の日常。それもあってか平日休日関係なしに他の大多数の高校生よりは早起きの自信があった。

目が覚めて充電していたスマホを見ればそこにはいつもと同じ起床時間が表示されていた。起き上がって伸びをすれば掛けていた毛布が下がる。

ふと隣を見て笑みが零れた。

すやすやと規則正しい寝息を立てているのは私の大好きな人。この時期にしては随分薄着だ。私が毛布を剥ぎ取ってしまったがためにそのダメージを受けたのか猫のように身体を小さく丸めていた。ゆっくりベッドから降りて肩の位置まで毛布を掛ける。無邪気で少しだけ幼い寝顔。ぷにぷにと頬を軽く押してみても特に反応はない。

「……かわいい」

口から漏れた言葉と共に私はおでこにキスを落とす。

そしてリビングへと向かった。

今日、朝日先輩の家には私たちしかない。

紗夜先輩はRoseliaの合宿、日菜先輩はパスパレのお仕事で

昨日から地方に行っている。家に一人だけつてこともあつてか朝日先輩は私を家に招いたのだ。お泊まり自体は何度もあつたけど二人きりというのは初めてだったから緊張したのは私だけの秘密。

スマホで昨日の夜に来ていた連絡に返信をする。テレビをつけてニュース番組を見ていた。

30分くらい時間を潰したところで台所にかかっていたエプロンをつける。

冷蔵庫を覗いて食材を確認すれば朝日先輩たちはちゃんと自炊しているからか食材がそこそこ入っていた。

朝は軽くていいよね？

そう思つて卵とウィンナーを取り出した。フライパンをコンロの上に乗せ火をつける。温まったところに油を入れフライパンになじませ焼いていく。

その間にトースターに食パンを二枚並べた。

「さーや……」

「あ、おはようございます朝日先輩」

「眠い……」

「ならもう少し寝ててもいいですよ？私朝ご飯が出来たら起こしに行きますから」

一瞬火から目を離して眠たそうに目を擦る想い人にそう言った私は再度視線をフライパンに戻した。

椅子を引く音がする。朝日先輩は二度寝しないで起きることを選んだようだ。

「……沙綾」

「はい？ちよ、朝日先輩!？」

名前を呼ばれ返事をしたら背中に人の感覚。お腹に腕を回されギョツと抱きしめられた。突然のことに動揺した私は手に持ってい

たお箸を落としそうになる。朝日先輩はそんなこと気にしていないみたいで私の肩に頭を乗せたまま動かなかった。

「あ、あの……朝日先輩？離れてほしいんですけど……」

私の呼びかけに朝日先輩は何も言わない。

この状況が嫌なわけじゃないけど火を使っているから危ない。料理も進まない。それに私の心臓が早く動きすぎて死んじやいそうだった。

もう一度名前を呼ぶ。すると朝日先輩は顔を上げて視線を私以外の場所に向けて小さな声で言った。

「……なんだよ。私に抱きしめられるの嫌なのかよ」

なにそれかわいすぎ。これは料理してる場合じゃない。

私は火を止めて朝日先輩を剥がす。そして正面から抱きついた。

また私の肩に頭を埋める。その頭を撫でてやれば肩をグリグリされた。少しだけ痛い。けど朝日先輩のやることだから嬉しい。

「好きだよ沙綾」

急にそんなことを言うのは反則じゃないだろうか。

「……今日は、素直なんですね」

「……私が普段、素直じゃないみたいに言うなよ」

「事実じゃないですか」

くぐもった声がかすかすぐつたくて笑った。それが不服だったのか朝日先輩は顔を上げて私を見る。

それがキリツとしたかっこいい姿で目が離せない。

「沙綾が好きだって気持ち全部素直に伝えてきたし」

だからずるいんだって。

まっすぐなそれに私は朝日先輩に抱きついた。きつと真っ赤に染まっているであろう顔を見られたくなくて先輩の胸におでこを押しつける。

「沙綾、顔見せて」

「い、嫌です」

「なんで？」

「絶対顔真っ赤ですから。見せたくないです」

「私は見たいんだけどな」

いくらお願いされたって見せる気はない。

そう決意を固めたのに。

「私は沙綾のこと好きなんだけど、沙綾は私の顔が見たくないんだ」

そんなこと言われたら私の決意が揺らいじやう。

「ね、沙綾。本当に見ちゃダメ？」

優しい口調に、応えざるを得なかった。

ゆつくりと顔を上げる。ふんわり微笑んだ朝日先輩がそこにいた。

「かわいい」

「っ……」

今の私にその言葉は破壊力抜群で顔にもっと熱が集まる。顔を逸らしたくても朝日先輩が両手で抑えているから逸らせない。逸らしたくない。

どちらともなく唇を重ねた。たった数秒。そうはずなのに幸せが私を満たしていく。

「大好きだよ沙綾」

「私もです」

「それから誕生日おめでとう。沙綾が生まれてきて、私の隣にいてくれて、私は幸せだよ」

「っ……それは嬉しいですよ」

「さあ、何の話かな」

二人して笑いあつて、貴方を離さないと誓つて、また唇を重ねて。こんな日常が永遠に続くことを信じた。

「これからよろしくお願いします。」

朝日先輩のこと大好きです！」

私はあなたが好き。

朝日先輩はいつだって厳しい。沙綾や有咲、りみりんにおたえ、紗夜先輩たちには優しいのに私にかけるのはいつも優しいとは反対に近い。別に話しかけて無視されたりはしないしよく相談に乗ってくれるいい先輩、なんだけど少しくらい優しい言葉をかけてくれてもいいじゃんと思うのが本音。

本人に言ったことは一度もない。それを言っても変わらなさそうだし、そもそも今の師匠と弟子という関係は嫌いではないから。

変わってほしくないから私は今日もいつものように接する。明るく笑顔で先輩の隣でギターを教えよう。それ以上の望みはなかった。

その関係性を終わ変らえせたたのは朝日先輩。

私の誕生日の日に見せた真つ赤な顔が忘れられない。

◇◇◇

「朝日せんぱーい」

「んー」

「いつまでゲームしてるつもりなんですかー」

「もうちょいかな」

今日は私の誕生日前日で、前々から朝日先輩の家でデートの約束をしていた。

紗夜先輩と日菜先輩はそれぞれバンド練習とお仕事があるらしくて私が家に来た時にはもういなかった。

朝日先輩と二人きり。そんなドキドキするシチュエーションなのに、朝日先輩はずっとネットゲームばかりやっている。

朝日先輩が外は暑いから室内がいいって言ってたのに。家にいた



らいたでゲームしかしていない。私のことを呼んでおいて放っておくなんて酷い話だ。

ずっと朝日先輩の隣に座ってパソコンの画面を覗いているだけだから疲れてしまった。話しかければ返事はしてくれるのにどうしてゲームをする手を止めてはくれないのか不思議で仕方ない。

『朝日さん！次はどのクエスト行きますか？』

「そうだね。どうしよっか」

そのうえあこと通話しながらゲームをしているのだ。

隣の私には目も向けてくれないのにあことは楽しそうに話している。嫉妬しないわけがなくて。

こんなにかわいい恋人が隣にいるのに。

そんなことを思っただけで恥ずかしくなった。

近づいて、朝日先輩の肩に頭を預ける。朝日先輩の肩が揺れた気がした。

「……構ってほしいの？」

「わかってるんじゃないですか……」

ゲームをしていた視線が私に向く。その表情には笑みがあつて窓から差す夕日に照らされてキレイで、やられたと思った。

「香澄にしては遅かったな。もっと早く言われると思ってた」

あここに一言謝罪の言葉を告げて朝日先輩は通話を切った。パソコンを閉じて私と向き合う。

ゲームをしていながら通話をしていたのは私を嫉妬させるため。朝日先輩、私を嫉妬させるためにわざとゲームに集中してたんだ。それに気づくのが家に来てから何時間も経った後だなんてあまりにも

遅い。やっぱり朝日先輩は私よりも上手だ。

「もうゲームしなくていいんですか？」

「嫉妬してるかわいい恋人がいるのに放っておくわけないだろ？」

おいで、なんて言って両手を広げる。それに飛び込んだ。

温かくて、落ち着く。背中に回された手。それが腰に伸びて、引き寄せられる。いつもよりも近すぎる距離に心臓がうるさかった。

「……あさひせんぱいのほか」

「ははっ。抱きしめられて最初の言葉がそれかよ」

「……私よりもゲームを優先する人はきらいです」

「私は香澄のこと好きだけど？」

その言葉に胸が熱くなる。返事の代わりにさつきよりも強い力で抱きつく。

何を思ったのか朝日先輩は私の髪に手を伸ばす。何故か私の髪を解き始めた。不思議に思っ顔上げれば優しい顔をした朝日先輩と目が合う。

「やっばお前、髪下ろしてもかわいいな」

それを笑顔で言うんだからこの人は。顔に熱が集まるのを感じる。思わず目を逸らした。

しかし先輩はそれが嫌だったのか頬に手を当て少し強引に目を合わせさせる。引き込まれそうな澄んだその瞳から目が離せなかった。

「香澄」

段々近づく距離に自然と目を閉じた。触れる柔らかな感覚に幸せを感じる。何度も何度も角度を変えて触れられて、さつきまでのこと

なんてどうでもよくなっていた。我ながら単純だと思う。

「好きだ」

熱い熱いその視線に、私は今日も溺れていく。

◇◇◇

予定になかったお泊り会が開かれたのは次の日をまたぎそうな時間になってから。急いで家に連絡をして寝巻は朝日先輩のものを借りて同じベッドに入った。

明日はお昼からポピパの練習がある。それまではゆつくりできる。数時間前とは違って朝日先輩は私の話を一から楽しそうに聞いてくれた。それもあってかいつも以上に楽しくて仕方ない。

「朝日先輩、明日練習が終わってからどこかに行きませんか」

「行くってどこに?」

「うーん……私の家?」

「今日と変わらないと思うぞ?」

「それでもいいです。だって朝日先輩は外に出たくないんですよ?」

「人を引きこもりみたく言うんじゃないよ」

「違うんですか?」

「そう思われてたとか悲しいんだけど」

「冗談ですよ」

笑う私。いつもなら呆れているであろう先輩も今日は仕方ないなーと言って甘やかしてくれる。なんだなんだ言って私の誘いに乗ってくれる朝日先輩だけど今日はいつも以上に私に甘いみたいだ。

「あつ……」

「朝日先輩？」

声を漏らす朝日先輩に首を傾げる。何かをその瞳に映したように企んだような笑みを浮かべた。

「香澄」

「はい？」

「誕生日おめでとう」

「あ……」

もう、次の日になっていたみたい。楽しい時間が過ぎるのはあつという間だ。そして新たな歳が始まるのもあつという間だった。

スマホが慌ただしく震えだす。多分中身は私宛てのお祝いメッセージ。嬉しかった。だけど返信はすべて明日になると思う。

「一番最初は私がお祝いしたかった」

そんなことを言われてしまったら他のものに目移りなんてできなかった。

嬉しくて幸せで朝日先輩が私の恋人であるという事実を再確認して。

ああ、こんなに幸せでいいのかな。なんて、柄にもなく思う。

朝日先輩に抱きついて目を閉じる。いつもより安らかに眠れる気がした。

「大好きです……」

「……ああ。私も」

## 私への約束。

「ねえおねーちゃん！有咲ちゃんのこと、ドキドキさせたいと思わない？？」

今日は有咲と一緒に出掛ける予定があるから準備をしていると何やら企んだ表情の日菜が私の肩を叩いた。内容が内容だしこういう時の日菜は大抵ろくなことを考えちゃいない。それを知っているからこそ私の表情は日菜を怪しむものになっていた。

「……何企んでるんだよ」

「何って？」

「お前はこういう時にろくなこと考えてないの知ってるんだよ。私は嫌だからな。てかなんで有咲と会うこと知ってるんだよ」

「それはおねーちゃんの表情がわかりやすいからでしょ？」

当然のように返されて言葉を詰まらせる。やっぱり有咲とのデートが嬉しいってこと表情に出てるのか……。

「とりあえず、私はその企みにはのらないからな」

「え？おねーちゃん有咲ちゃんのことドキドキさせたくないの？」

「……それとこれとは話が別だ」

そりゃあドキドキさせられるのならさせたいさ。けどそれって狙ってどうにかできるもんか？それに日菜のアイディアだ。どんな無理難題を押し付けられるかわかったもんじゃやない。それ、私は実行できる気がしないんだけど。

「心配しなくても大丈夫だよ。あたしはただおねーちゃんに着てほし

い洋服があるだけだから」

「え？洋服？」

「そう。洋服。絶対有咲ちゃんはドキドキするだろうし変な虫もつかないと思うよ？」

確かに有咲はかわいいからデート中もよく声を掛けられる。そのたびに私が追い払っているのだがたまーに私も一緒に連れて行こうとするやつもいるから安心とは言えない。

有咲がドキドキしてそのうえで有咲に人が寄って来ない服なんてあるのだろうか。それなら一度試してみたいと思う自分もいた。

「どうするおねーちゃん」

「……どんな服なんだよ」

結局負けてしまった。日菜の表情が明るくなる。その日菜は自分の部屋に私を引っ張っていった。そこで渡された服を確認して日菜の言っていた意味を理解した。

◇◇◇

今日は朝日先輩とのデートの日。そして私にとっては特別な日。そう思いながら準備して家を出れば待ち合わせの時間よりも二十分早く着いてしまった。我ながら早すぎだよとツツコミを入れる。近くのベンチに腰を下ろして私はスマホのトークアプリを開いた。

『ちよつと早く着いちゃいました』

『もう着いたのか!?すぐ行くから待ってて!』

『急がなくても大丈夫ですよ』

すぐについた既読の文字。返ってくる言葉に嬉しくなって笑みが

零れた。

朝日先輩は私のことを一番に考えてくれる。だけどそれはたまに空回ったり無理をしたりに繋がるから私は心配でならない。まあ想いが通じてからはお互いの意見を前以上に言えるようになったし前よりも朝日先輩は無理をしなくなつたから安心してはいるのだけど。

「ねえキミ一人？なら俺らと遊ばない？」

今日のデートプランは朝日先輩に丸投げしているからどこに行くのかはわからない。どこに行くんだろう。この辺だとしたらやっぱり……。

「ちよいちよい、話聞いてるー？」

「え？」

考え事をしていたらいつの間にか私の目の前には男の人が二人、私を囲むように立っていた。貼り付けられた笑顔が気持ち悪い。

「これからカラオケ行くんだけど行かない？もちろん金は出すからさ」

「暇なら俺らと遊ぼうぜ。絶対退屈させないし」

「いえ遠慮しておきます」

「キミ一人でしょ？いいじゃん？」

「人を待っているのさ」

なんで毎回私は声を掛けられるんだろう。ていうか、なんで行くと思うんだろう。髪色明るいからか？行かねえよ下心丸出しのやつらのところになんて。知らない人について行くなって習わなかったのか？

「ほらほら行こうよー！」

「ちよっ！」

男の一人が急に私の手を掴んだ。引っ張って無理矢理立たせる。周りには人が多くて騒がしくて誰も私が無理矢理連れて行かれていくことに気づいている様子はなかった。

このパターンは前にもあった。その時は朝日先輩と一緒に守ってくれたからどうにかなったんだ。けど今は私一人。どうにか解こうにも力で勝てるわけもなくどんどん座っていた位置から遠ざかっていく。

「暴れるなよ。周りに迷惑だろ？」

「知るか！離せて！」

「ああもちろん離すよ。着いたらね」

被っていた猫が脱げてもなお男たちは迷いなく歩いていく。目的は明らかだった。

私の抵抗なんて抵抗だと思われていなかった。ふと視界に入ったカラオケ店。あそこに連れ込まれるのかと思うと背筋が凍った。

男たちがニタニタと笑っている。怖くて怖くて仕方なかった。やっぱり一度朝日先輩の家にも行けばよかった。今更後悔しても遅いけど。

「っ、助けて朝日先輩……！」

そう、思った時だった。

「おいお前ら。俺の彼女どこに連れて行く気だよ」

突然現れた男の人が男の手首を掴んだ。それによってやっと男たちは止まる。ただ計画を邪魔されて不機嫌そうに見えた。周りの人たちが突然立ち止まった私たちを鬱陶しそうに見ていた。



背が高いその人の後ろ姿は誰かに似ていた。だけど緩く髪を結んで、パーカーを着こなしている人なんて私の周りにいただろうか。それも男で。本当に誰だこの男の人は。

「あ？誰だよお前」

「それは俺のセリフだよ。待ち合わせしてたら連れて行かれそうになってるんだから。その汚い手、離せよ」

「なんだと!？」

私の手を離して男は彼に掴みかかる。胸倉を掴まれそうになったがそれを逆に掴む。その手を捻って足を払う。バランスを崩し男は倒れた。

「行くぞ！」

「え、ちよ!？」

「お、おい待て！」

男が倒れた瞬間私は彼に手を引かれた。もう一人の男は文句でも言いたげな声を上げたがそんなもの聞いていないと言わんばかりに人混みの中に入っていく。上手く人を避けて進んでいく彼。男たちのように強引なはずなのにどこか優しさを感じた。助けてもらったからそんなことを思うのだろうか。

「……………ここまで来れば大丈夫だろ」

人混みを抜けて細い路地に入った。曲がって影に身を隠した。彼は建物の陰から少しだけ顔を出して様子を見てそう言った。それを聞いて安心した。

「ありがとうございます。助かりまし、た……………っ!？」

お礼を言い切る前に彼が私の手を引いて私を抱きしめた。急なことにパニックになる。離れようにも強く抱きしめられて解けない。

「……よかった。有咲に何もなくて」

「え、なんで私の名前……」

そう呟けば拘束を解かれる。視線を上げればそこには心配そうな表情の想い人の姿があった。

「あ、朝日先輩？」

「ああ。間に合ってよかったよ有咲」

「なんで、ここに……？」

「なんでって、待ち合わせしてたでしょ？」

助けてくれた人の正体は朝日先輩だった。男装をしていたから全然誰か気づけなかった。

「有咲。大丈夫だったか？他に何もされてない？」

「は、はい。朝日先輩が助けてくれたので」

「そっか。ならよかった」

朝日先輩は安心したように笑う。私の指に朝日先輩の指が絡む。優しく、でも離さないとも言いたげだった。

「けどごめんね。私をもっと早く着いてたら有咲に怖い思いさせたりしなかったのに」

「え、いや、別に朝日先輩のせいじゃ……」

反論は口から飛び出す前に塞がれた。突然のことで一步後退すれば朝日先輩は一步前進する。私は壁と朝日先輩に挟まれていた。

侵入する舌に抵抗はできない。私は朝日先輩の手を少しだけ強く

握りしめた。

お互いに熱い吐息が漏れる。いつも以上に長い接吻は私の脳を溶かすのには十分で。唇同士を離れた頃には力が抜けてその場に座り込んだ。荒い息遣いのまま朝日先輩を見上げた。

「……ごめん。やりすぎた。立てるか？」

そうやって手を伸ばした朝日先輩は見るからに男前でかっこいい。だけどその瞳の奥は鋭く私のことを貫いていた。まるで獲物を狙う肉食動物だった。

「……珍しいですね。朝日先輩が外でキス、するなんて」

朝日先輩は私の肩口に額を預ける。握られていた手に力が入っていた。

「……あいつらが有咲に触れようとしてたっただけでムカついて、それで我慢できなかつた。こんな風に無理矢理する気はなかつたんだ。ほんとごめん」

いつになく弱い声でそんなことを言うのだから何も言えなくなる。数秒して朝日先輩は離れた。「移動しようか」なんて言っただけの手を引く。朝日先輩は顔を見られたくないのか半歩先に行っていて、ちょうど歩幅は私に合わせて歩いてくれる。胸が温かくなった。

◇◇◇

「その恰好、どうしたんですか？」

「今日の朝に日菜が渡してきた。今度撮影で使うからって買ったやつ

らしい。髪も日菜が」

「そうなんですか」

朝日先輩に連れられて入ったのは雰囲気の良いカフェだった。一番奥の席に座り店員さんにオーダーを伝える。朝日先輩がスマホをいじってしまう前に私は疑問をぶつけた。

予想通りと言うべきか男装をしようというのは日菜先輩の企みらしい。まあ、朝日先輩が自主的にやるとは思っていなかったから少し考えればわかることだったかもしれない。とりあえず新鮮な朝日先輩を見れたのだからよしとしよう。

「男装なんて初めてやったからちゃんとして見えてるのか心配だったけど杞憂だったみたいだな」

「初めてって、文化祭の時もやりましたよね？」

「あれは衣装だしノーカンだろ？」

それなら初めて男装したことになるんだらうけど単純に普段よりも声が低かったからわからなかったっていうのもあるかもしれない。ただ言えることは男装した先輩がイケメンだったことだ。

「けど人多かったのによく私のこと見つけられましたね」

「え？そりゃあ見つけられるでしょ」

あの人混みの中なら本来見つけられなくてもおかしくはない。そう思ったからこそそう言った。それなのに朝日先輩は見つけたのは当然とでも言う素振りだ。

朝日先輩は左手で頬杖を突いた。空いている方の手を伸ばして私の髪に触れる。

「普段はツインテールでガーリーな格好なのに私とのデートの時だけ綺麗な金髪下ろして大人っぽい格好して来るんだもん。そんな可愛

「い恋人のことを私が見つけれられないわけないだろ？」  
「~~~~っ!？」

笑顔でそう言う朝日先輩。私はその言葉で顔に熱が集まった。触れられているわけではないのにその視線が熱くて熱くて。

「お待たせしました。アイスティーお二つです」

「っ!？」

「ありがとうございます」

「あ、りがとう、ございます……」

店員のお姉さんは私たちのことを微笑ましく見ていた。見られていた事実には恥ずかしくなる。せめて見ていないフリをしてほしかった。

飲み物を一気に流し込む。少しはクールダウンできただろう。

ちらつと朝日先輩を見れば涼しい顔をしていた。なんだか悔しかった。

◇◇◇

色んなところを回り買い物を終えた私たちは解散することなくそのまま私の家に帰ってきた。朝日先輩の希望で今日はここに泊まるらしい。ばあちゃんに話せば朝日先輩のことを歓迎していた。

夕飯を食べて交互に風呂に入る。部屋に戻れば朝日先輩はタオルを首に下げてスマホを見ていた。男装も似合っていたけどやっぱり自然体の朝日先輩が良い。

声を掛ければスマホを置いて振り返った。

「有咲。誕生日おめでとう」

今日何度目かの祝福の言葉だった。私は「ありがとうございます」とはにかむ。ベッドに腰掛けた朝日先輩は手招きをしていた。「どうしたんですか？」なんて言いながら近づけば朝日先輩に背を預けるように座らされた。急なことで困惑する。朝日先輩の顔が見れないのは嫌だった。

「あのさ。誕生日プレゼント、あるんだけど受け取ってくれる？」

「え？けど今日の買い物で好きなもの買うからそれがプレゼントだって……」

「それはこのプレゼントが受け取ってもらえなかった時の保険だよ」

なにそれ。そんなに自信のないプレゼントってことなのだろうか。だけど正直なところ朝日先輩のセンスはいい方だと思うし私は朝日先輩から貰えるものならなんでも嬉しいんだけど。

「これ、なんだけどさ」

「え……これって……」

朝日先輩から渡されたのは手のひらに収まるサイズの箱だった。私は中身をなんとなく察して気持ちが高ぶってしまう。ゆっくり箱を開ければ銀色のリングが一つささっていた。

「……意味、わかってますよね」

「ばーか。わからないで渡すかよ」

「私、渡されるなんて、思ってませんでした」

「うん。私も渡すかどうか迷ったんだ。だけどやっぱりこういう意思表示は早い方がいいかなって。渡されても困るかなーって考えたんだけどさ、そんなことないよな」

泣くなって有咲。

それは無理なお願いだと思った。涙が零れる私のことを朝日先輩は優しく抱きしめてくれる。

「本当に悩んだんだ。だって有咲は今、学校のこととかポピパのこととかで忙しいだろ？だからそんな余裕ないことくらいわかってるよ。私としても有咲には無理してほしくない。だからさ、もしよろしければ約束をしてほしいなって」

「約束……？」

「うん」

朝日先輩は頷いてリングを摘まんだ。それを私の右手の薬指につける。サイズはぴったりだった。

「今はまだいい。今の関係のまままで全然いいんだ。けどある程度落ち着いて時間ができたらその時は一緒に指輪選びに行こう？」

「そういう約束だよ」と朝日先輩は右手を握る。「もちろんですよ」と私は何度も頷いた。こんな幸せな誕生日があってもいいんだろうか。幸せすぎて死んでしまいそうだ。

「あとはいつか、名前で呼んでくれたら」

「へ？」

「敬語も外れてくれたら嬉しいんだけどね」

朝日先輩はそんなことを呟いた。私の誕生日だというのに欲しがるなんて。だけどこれだけのものをもらったんだ。少しくらいは返さないだよな。

「ありがとう朝日。私、世界で一番幸せだよ」

いつもなら言い慣れなくて戸惑うはずの言葉なのに今日は流れる

ように言えた。

泣いてしまいそうな朝日はくしゃつとしわを寄せて笑っていた。



好きだつて言わせたいだけよ。

ずっと私の後ろをついてきていた。

晴れの日も雨の日も人見知りな君は私の後ろに隠れるばかり。前に出るように差し向けても人と話すことは苦手なようでどうすればいいのかわからないみたいで、だからこそいつだって手を取ってき

た。

それは成長し、一人で進めるようになった今でも変わらない。一人で進めるからこそ迷うことも多いのだ。姉として、道しるべになりたかった。

私にとって彼女はかわいい妹。

今も昔もその認識は変わっていないしそれ以上の感情を持つことはない。

これからもずっと、その予定だった。

◇?◇?◇?◇?

なんでもない平日の夜。日菜は仕事で遅くなるからと二人で夕食を済ませ、次の作品の参考がてらずっと気になっていた推理小説を読んでいた。

ノックの音は春前の今も乾いていて、間延びした返事の声は室内に響く。

現れたのは当然妹の紗夜だった。

「どうしたの紗夜」

「姉さん。今時間はあるかしら?」

小説から目を離れた先にいた彼女はいつになく真剣な表情をしていた。発せられた言葉は、緊張しているのか少し裏返る。

意味不明でミスマッチ。不思議で、珍しいものを見るような目を向

けてしまう。

「いや、ほんとにどうした？」

「話があるの」

聞いてくれるわよね？と目が訴える。

いつもの凜とした彼女ではなくて心配になる。

「姉さん。あの、ですね……」

久しぶりに使われた敬語。改まって何かを言われることには慣れていない。なぜか段々と赤く染まる頬から目が離せない。

「……好き、なんです」

真つ赤な顔で紗夜はそう言った。私の口からは困惑の一字がこぼれる。

告げられた言葉の意味がわからないほど私は鈍感ではない。今の状況に適切な意味として捉えられている自覚もある。

ただそれは決して姉に向ける言葉ではない。

理解したくなかった。

気がつけば私は読んでいた小説を床に落としていた。それほど動揺していた。

「さ、紗夜……？」

「好きなんです。姉さんのことが」

ダメ押しの二回目。今にも泣いてしまいそうな声色。

俯いた視線の先にある拳は力強く握られ、震えていた。

「紗夜。私、は……」

「姉さんが私をそういう目で見ていないことくらい知ってるわ」

先手必勝。私の言葉は遮られる。

「姉さんは私のことを妹としてしか見ていない。それが当たり前で、本来だったらそれは覆ることのない感情だって、わかっているわ」

不意に上げられた視線。

震える口元は無理に笑おうとして歪な三日月が作られていた。

悲しげな瞳と静かに私が合う。

私が生み出してしまった表情。紗夜にはまったく似合っていない。

「姉さんへの迷惑も、距離を置かれる可能性も、全部承知の上よ。どんな代償があっても、姉さんには知っていてほしかった」

「それは、どうして……」

三步前進。それだけで紗夜は私を見下ろす位置にいた。

手が伸びる。私の右手を両手で優しく包み込む。

「好きだから。もう、この気持ちに嘘はつけない」

怯えの中に見える情熱。

冗談を言えるほどおちゃらけても器用でもないことは知っていたが、ここまで本気だとは思っていなかった。

「覚悟していてくださいいね」

「ちよ、紗夜！」

そう言い早々と部屋から出て行った紗夜の表情は打って変わって自信あり気なものになっていた。こんなに表情がコロコロと変わる妹を私は知らない。

名前を呼ぶが紗夜が振り返ることはない。  
代わりにひっくり返ったイスが音を立てる。  
手を伸ばせないのは、初めてに近い。  
傷つけたくない。でもかと言って中途半端なままにしておくわけにはいかない。解決策は見つからない。  
イスを直して床に落とした小説を拾う。どうやら下手に曲がっている様子はない。一安心だ。

「……って、んなわけないだろ……」

ペラペラとページを捲るがどこを読んでいたのか思い出せない。楽しみにしていた小説なのに。つい数分前のことを忘れてしまうなんてどれだけ紗夜の告白が衝撃的だったのかよくわかる。おかげで考えていた小説のプロットまで真っ白だ。

ため息と後頭部を掻く音。

この感情はなんと表現していいのかわからない。

部屋の外が騒がしくなる。

どうやら日菜が帰ってきたらしい。

色々整理できていないことが多いから部屋に入って来ないことを祈る。

「おねーちゃんただいまー!」

「……おかえり」

帰ってきたら顔を見せるのが日課になっている以上、無理な願いだということとは当然理解していたが。

「……なんで本持って立ってるの?」

「別になんでもないよ。それより夕飯は?もう食べたのか?」

「うん。現場で食べてきたけど……連絡してたよね?」

ダメだ。いつもなら忘れないことも頭から抜け落ちている。

「ごめん、ちょっと疲れてるみたい。先に寝るよ」

「あ、うん。大丈夫？」

「大丈夫だよ。ありがとう」

おやすみと言い部屋から出る日菜。静寂は好きじゃない。頭をよぎるのは紗夜のことばかり。

結局片手に持っていた小説に葉が挟まれることはなかった。

◇◇

寝起きの表情はいつになく険しかった。

つり上がる眉に目の下のクマを見たくなくて水を自ら顔にぶつけていく。冷たい水は眠たい朝にはちょうどいい。

昨日の夜部屋から出て行ってもらうために日菜にはあんなことを言ったけど寝られなかった。寝られるはずがなかった。

考えはまとまらない。答えはそういう目で見ることがないという時点で決まっていた。だけどそれを面と向かって言えるのかとさえ別問題だった。

ひとつ屋根の下で一緒に暮らしてきた。離れて過ごしたことなんてない。今更離れたくはない。せっかく仲直りができたのにそれを壊したくはない。他でもない私が壊せるはずがない。

少しでも勇気が欲しい。勇気を出せた紗夜のが羨ましい。

私は臆病物だ。いつまで経ってもどんな状況でも。卒業したいのに本性は隠せない。

「おはよう姉さん」

朝食を作るために台所へ向かえばそこには既に紗夜が立っていた。平然と挨拶の言葉をかけてくれる。私は驚きつつも同じような言

葉を返した。

いつもお世話になつていいるから少しでも恩を返したいと言つて最近朝の料理当番を引き受けてくれたんだつたと思ひ出す。料理をすること自体嫌いじゃないし他のことはやつてもらつていいることが多いから断つたのだが「姉さんはすぐに無理をするからダメよ」と一蹴された。無理しすぎだと注意されることが多いもんだから紗夜の提案には賛同せざるを得なかつた。

そもそもその時は単純に良い子だとしか思つていなかつたのだ。今では色々考へていたのだろうと思つてしまう。

だからこそ、今の表情に違和感を覺えてしまう。

昨日はあんなにも真つ赤だつたのに、まるで何事もなかつたかのような平常運転ぶりだ。

私が悩んでいいるのがバカみたいで、その表情の意図になんともなく気づく。

紗夜は今までの關係性を崩さずに私にアプローチしていくつもりなのだろう。きつとそうだ。それなら私が日常生活で何かを思ふ必要はない。

普段通りでいいのだから。

朝は洋食の確率の高い我が家。今日もそれは変わらない。

既にスクランブルエッグとウインナー、半分にカットされたトーストが食卓に並んでいいた。紗夜はあいかわらず手際がいい。

冷蔵庫から前の買い物時に買ひ置きしていいたオレンジジュースをコップに注ぎ、起きたばかりでからつからに乾く喉を潤す。

「姉さん、今日もかわいいわね」

「っ!?!かはっ!ゲホゲホ!!」

それは想定外であり不意打ちの言葉だつた。すぐに対応できるわけもなく、どうにか吹き出してしまわぬように口を抑える。

当然気管と鼻にジュースが入り、むせた。コップをテーブルに置き、近くに置いてあつたティッシュを二枚取つて鼻と口元を抑える。

バカじゃねえの！ジュース飲んだときにそんなこと言うか普通！？バカか！？バカなのか！？バカだよな！？

ジュースを吐き出さなかっただけ褒めてほしい。

鼻を容赦なく襲う刺激に涙が出た。

「ふふっ。細くなった目も少しゆがんだ眉も好きよ」

「睨んでんだよ！お前の目は節穴か！？」

急激すぎる紗夜の軟化具合に口を出さずにはいられない。

これが本当にあの紗夜なのか？あの堅物風紀委員の紗夜なのか！？日菜が紗夜と入れ替わってるドツキリ！？そう言われた方が納得できる。ドツペルゲンガーだろ絶対。

「節穴じゃないわ。姉さんがかわいいのは事実よ」

「そういう話はしてないんだよ！朝から何言ってるんだ！？」

こんな状況だ。私の気は動転しまくっている。

そんな私に紗夜はクスツと笑う。

なんで今笑えるのか。滅多に見れないイタズラに微笑む表情に不覚にも胸が高鳴る。

「言ったでしょう。覚悟してくださいって。私は姉さんに本気よ」

「私に本気って……いや、だからってこれは……」

「姉さんって意外とピュアよね。私一緒にいたのに全然知らなかったわ」

「それは紗夜が突然あんなこと言うからだよ！？」

「その表情が見れるなら頑張ってるかいがあるわね」

薄紅がかった頬に目を奪われてしまう。

いつからこの子はこうなってしまったんだろう。

昨日から意識しすぎている。

「日菜のこと起こしてくるわ。先に食べてていいわよ」  
「……ああ」

日菜の部屋にノックをして入っていく。何かと疲れてイスを引いて腰掛ける。

さすがに日菜が現れたら紗夜は恥ずかしがって何かしてくることはないだろう。日菜は追求するだろうし紗夜としてもそれは好まないはずだ。

これ以上イレギュラーなことが起こってしまったのはたまったもんじゃない。ただでさえあさイチのラブコールで精神的にいつぱいいつぱいだというのに。

足元ではアツシユがお腹を空かせたのか鳴いている。足に身体をこすりつけられておねだりされては無視できない。皿にペットフードを出してやれば一気に食らいついた。

それを見てから私も朝食に手をつけていく。

起きてきた日菜は眠たそうに目を擦っていた。「おはよう」の声は「おはよ……」と欠伸とセットで返ってくる。そのまま洗面所へと足を運ぶ。戻って来次第私の目の前に座った。

三人で取る朝食はもう何度目か。わからなくなるくらい当然のように私たちは共に同じ時間を過ごして来た。

ただ一つ今までと違うことがあるとすれば、いつもの食卓に私に好意を持つ人物がいるということ。

「日菜。今日は仕事だったわよね？」

「うん。パスパレで雑誌の撮影があるんだ」

「最近大人気だよな」

「そうだね。大ガールズバンド時代ってニュースとかでも取り上げられてるくらいだし、パスパレはテレビにも出てるし代表みたいな感じになりつつあるよね」



トースターにかぶりつく日菜は何げなく言う。  
普通じゃありえない状況だというのに、あいかわらずこの子は呑気だ。

「今日の撮影もそれ関連でね。なんか、巻頭特集全三十ページに渡ってインタビュー記事とグラビアが載るんだって」

「じゃあ結構時間かかる感じ？」

「そうかも。今日もお昼から撮影だからマネージャーさんが迎えに来るって言うって、終わるのは昨日と同じ時間になると思うよ」

斜め向かいに座る紗夜から視線を感じる。嫌な予感がしてそっちを向けなくて朝食に目を落とす。

「それなら今日の夜も現場で食べて帰ってくるの？」

「そうなると思うよ」

「そう。気を付けて、皆さんに迷惑だけはかけないように」

「もう！そんなことしないよー！」

楽しそうに笑う声。視線を上げれば紗夜と目が合う。

クスツと紗夜の口角が上がった。

嫌な予感が多分間違っていない。こういう勘が当たってしまうのは昔から。気づかなければどれほど楽なことだろうか。

「ぐちそうさま」

さっさと学校に行ってしまうおう。学校にさえ辿り着ければどうにでもなるはずだ。

そもそも日菜も一緒に登校するのなら下手に何かをされることはない。紗夜なら人前でいちやつくようなことは風紀が乱れるとかで絶対にやらないだろう。

放課後は練習があるだろうし、私が家に帰る時間を遅らせれば手を

出すことはできない。どうにでもなる。

よし、その手にしよう。今の状況を打破するにはそれしかない！  
部屋に戻り次第即制服に着替えてカバンの中に必要なものを詰め  
る。

カバンを肩にかけて部屋を出れば何やら忙しそうに目の前を通り  
過ぎていく。危うくぶつかりそうだった。

「ご、ごめんねおねーちゃん！」

「そんなに急いでどうしたんだ？」

「今日日直だったことすっかり忘れてたの！」

いつの間にか制服に着替えた日菜はそう答えた。

「何してるのよ日菜。ゆっくりしてる場合じゃないじゃない」

「うん。ごめんね！あたし先に行くから！いつてきます！」

「え、ちよっ！」

日菜はカバンを持って一目散に家から飛び出す。私が声を掛ける  
暇もない。

初めて日菜に裏切られたような気がする。完全に不可抗力ではあ  
るけど。

「姉さん。私たちも行きましょうか」

色々なことが起こりそうな気がした。

「紗夜。私急に気分悪くなってきたから今日は学校休むわ」  
「何言ってるの。仮病の言い訳なら聞かないわよ？」

詰んだわ。完全に私の負けだ。今日は命日かもしれない。  
しつかり施錠し諦めて家を出た。

車道側を歩く私の隣に紗夜が並ぶ。その距離はいつもと変わらない。その事実には少しだけ安心した。変わらないことにこれほど安心するなんて。

「姉さん」

呼び声と共に包まれた左手。驚き立ち止まる。

隣を見れば赤に染まる頬があった。視線は斜め下の足元に落とされている。

「が、学校の近くまでだから」

昨日も今日の朝だって照れた様子はほとんどなかったのにどうして今照れる。

態度が全くといいほど違うもんだからその照れは私にまで伝染する。

「……わかったよ」

けど勇気を出してやったことなのだろう。それは称賛に値する。

控えめに握り返す。これでいいのかと目を向ければ嬉しそうな表情が視界に入った。

堅物風紀委員はどこにいつてしまったのか。いるのは恋する乙女だけ。

これでは、文句の一つも言えやしない。

「ありがとう」

お礼に答える代わりに手を引いた。

無言の通学路は珍しい。チラチラ様子を窺うが何を話せばいいのか迷っている感じだった。

しばらく無言は続く。

私から何か言うことはない。必然的に沈黙を破ったのは紗夜だった。

「姉さん」

「何？」

「……今日の放課後、空いてるかしら？」

発言的に今日のバンド練習はないらしい。

困った。なんとなく今から続く言葉に察しがついてしまった。

「えっと、今日は……」

送られてくる視線が弱々しくて断りにくい。

わかっけていてやっているのだろうか。だとしたら小悪魔だ。

紗夜に甘いってだけなのは自覚しているけど。

「何もないよ。どこか出かけようか？」

「……っ！はい！」

ぱあっと表情が明るくなる。元気な返事。

コロコロと変わる表情は悪い気はしなかった。

好きだつて言つてほしいだけだよ。

なんでもない普通の日常。普通の休日。そんな日の朝一番に目にしたのは妹の寝顔だった。

無垢であどけない寝顔に口角が上がってしまう。

しかしどうしてこの子が私の部屋の私のベッドで私と一緒に寝ているんだろうか。昨日寝る時は一人だったのに。いつ忍び込んできたのか。

無防備な頬を人差し指で軽く突く。柔らかな感覚以外は何も返つて来ない。

ほんとよく寝てるな。笑みが零れる。

私の腕を枕にして寝ているもんだから全然動けない。空いている手で充電していたスマホを取り時間を確認する。

ちやうど時計がてっぺんを回ったところ。休日で起きるにはいい時間だ。

「ひーなー。起きろー」

優しく、でも気がつくくらいに強さで日菜の身体を揺らす。しばらく揺らしていれば日菜の目がゆっくりと開いていく。

「……おねー、ちゃん……?」

「そうだよ。おはよう日菜」

「……なんでおねーちゃんが、あたしのへやに……?」

前にもやったことのあるやりとりに苦笑する。

この子は朝が弱いからまだ寝ぼけているみたいだ。

「ごー、私の部屋だよ?」

「ん……?」

寝起きでは理解できないらしい。  
そつと頭を撫で、状況を説明する。

「日菜が私が寝た後に私のベッドに潜り込んできたんでしょ？」  
「……そんなことしたっけ……」  
「覚えてないの？まあ私も日菜がいつ入って来たのかは知らないんだ  
けどさ」

日菜は「んー」と唸るだけ。ここまで朝が壊滅的に弱い記憶はな  
かったけど認識を改めないといけないかもしれない。

「ちよつと日菜。離れなよ」

腕も痺れてきたから起こそうとまた身体を揺らす。しかし寝ぼけ  
た彼女は何を思ったのか私の身体に抱きついて来た。私を抱き枕の  
ように包み込む。

日菜は「えへへ」「おねーちゃん」と嬉しそうに呟く。ここまで幸せ  
そうだと起こす気になれない。

だが私はこのあとポピパの練習を見に行かないといけないのだ。  
遅れるわけにはいかない。

「日菜。起きろって」

日菜の肩をグツと押す。日菜の目がぱちりと空いた。何度か瞬きを  
を繰り返して、私を見てにへと笑う。

「ひな――」

それは一瞬だった。

いつの間にかゼロ距離になった私と日菜の顔。唇には柔らかな感

覚。背中に回された手が私の服をキュツと掴む。

たった一秒にも満たない時間。それでも起こったことは数秒あっても理解できずにいた。

顔中に熱が集まるのがわかる。恥ずかしさから来ているものではない。突然のことに驚いた反応なのだと思う。

脳がショートしたように動かない。身体も動かせない。彼女からの拘束は解かれているはずなのに、ベッドに身体を預けることしかできずにいた。

数分して、やっと冷めた熱。そして理解できたことは一つだけ。自身の唇を人差し指で軽くなぞる。

柔らかだったそれは夢でも気のせいでもなかった。

◇◇

「……それで、どう思う沙綾」

「それ、多分一択だと思うんですけど」

衝撃のキスシーンから数時間後。ポピパの練習が終わり次第私は沙綾を誘って羽沢珈琲店に来ていた。すべては今朝のことと紗夜のことを相談するため。

数日前から今日あったことまでを順を追って一通り話した。

頼んでいた紅茶を一口飲んだ後、沙綾はそう答える。私としてもわかりきっていた返答。見たくなかった現実を見せられた。

「やっぱり、あれってそういうことだよな……」

「そうですね。朝日先輩を好きってことで間違いないと思いますよ。むしろそれ以外は解釈の仕様がないかと」

頭を抱える。紗夜だけで既に想定外だったのに日菜まで私のことが好きだったなんて。

いくら知らなかったこととは言え今までひとつ屋根の下で暮らし

ていたことが信じられない関係図が出来上がってしまった。

「でも紗夜先輩はまだしも日菜先輩には告白されていないんですよ？それなら寝ぼけていたって可能性も、まあありえなくはないと思いますよ？」

「……いや、その可能性は低いかも」

「どうしてですか？」

「この前、久しぶりに日菜と天体観測をしてたんだよ。その時に空を見上げた日菜が『今日も月がキレイだね、おねーちゃん』って言うて……」

「……それ、否定のしようがないですね」

いやだつて仕方なくない？日菜は物事をストレートに伝える子だしあんな遠回りな告白するなんて思わないじゃん。しかもあの時の月は満月でめっちゃキレイだったし。

けど今日のと合わせたらもう告白にしか思えないな。

なあ頼む。ちゃんと気づいたんだから呆れ顔はやめてくれ。

沙綾はため息を吐く。紅茶と一緒に頼んでいたケーキセットを口に運び、咀嚼する。

「そもそも朝日先輩は人からの好意に敏感な時と鈍感な時の差がひどいんですよ。クラスメイトとかファンの人からの好意にはすぐ気づくのに、身近な人からの好意には気がつかないってどういうことなんですか？」

「それはあれだよ。今までずっと仲の良い人って認識しかしてなかったから私を見る目線が変わってるなんて思わないんだよ」

「……はあ。朝日先輩ってほんとに……」

沙綾は何か言いたそうに頭を抱えた。

ここまで沙綾のことを呆れさせたのは初めてかもしれない。



「それで、どうすればいいと思う?」

「どう、と言うのは?」

「告白に関しては私が二人に妹以上の感情を持っていない以上断るのは決まってる。それは下手な返事をするよりもいいと、そう思ってる。」

「けど問題はその後なんだ。どうすれば二人を傷つけずに告白を断れると思う?何をどう言えば今までと変わらない関係を築けると思う?」

「そこだけが全く決まらない。告白の答えも、これからの接し方も、決まっているのだから一つ、返す言葉が見つからない。」

「私は姉妹の仲を壊したくはない。だけど現状、壊れる未来が見えてしょうがない。第三者の意見を聞けば何かしらいいアイディアも思いつくかと思った。」

「多分、どうやっても朝日先輩の思い通りにはならないと思いますよ」「え?」

「沙綾は少し考えてそう言った。想定外の言葉に私は思わず声を漏らす。」

「きつと、一度関係性が変わってしまったら元には戻らないと思います。それだけ仲が良くても恋愛感情って言うのは想像しているよりも強くて儂いものです。ですから朝日先輩がどちらかの告白を受けなくても、どちらの告白を断っても、関係は元に戻らないと思います。もしかしたらしばらくはギスギスした雰囲気か漂うかもしれません」

「……沙綾は、そう思うの?」

「はい。自分がその立場だったらって考えたら、朝日先輩と話すのが少しだけ気まづくなるんじゃないかって思います」

「真剣な言葉はただ私に突き刺さる。」

何事もなかったかのように終わらせたかった私の心情に沙綾の言葉は釘を刺している様だった。

「だから考えるべきはその後じゃないですか？」

「その後？」

「はい。告白を断った後ですよ。」

きつと完全に元の関係には戻れません。それでも元の関係に近い形には戻せると思うんです。

だから朝日先輩は先のことを考えて動けばいいんじゃないですか？」

沙綾の言葉にハツとする。

「まあこれは私の考えなので一つの意見として捉えていてください。私は朝日先輩の考えを尊重しますよ」

「……ありがとう沙綾。色々まとまった気がするわ」

財布の中から紙幣を一枚抜いてテーブルに置く。  
立ち上がってカバンを肩にかける。

「もう行くんですか？」

「ああ。こういうのは先延ばしにした方が言いづらくなるからな。私の気持ちも、早めに伝えておいた方があいつらのためでもあるだろう？」

「さすがの行動力ですね。尊敬しますよ」

沙綾は困ったように笑った。

「私はどういう結果になっても朝日先輩の味方ですよ」  
「本当にありがとう。行ってくるよ」

店を飛び出して私は走り出した。  
夕日が沈み始めている。  
今なら夕日が沈むよりも早く走れる気がした。

◇◇◇

急がなくてもよかった。それでも身体は勝手に動いていた。  
いつもなら何でもない階段が鬱陶しい。家までが遠く感じる。  
カバンから鍵を取り出して鍵穴に挿して回す。鍵をカバンの中に  
戻しドアの取っ手に手をかける。  
一度精神を落ち着かせるために深呼吸をしてから扉を開いた。  
中からは話し声がする。靴を見る限り二人とも帰ってきているよ  
うだ。

緊張で心臓がバクバクと動き出す。今すぐに逃げ出したい気持ちを  
抑えて部屋を進んで行く。

「おねーちゃんおかえりー」

「おかえりなさい」

「ただいま」

お茶でもしていたのかテーブルの上にはティーセットとお気に入り  
のお茶っ葉が並んでいた。

「遅かったわね。練習、長引いたの？」

「え、ああ。ちよつと沙綾の相談事に乗ってた」

咄嗟についた嘘ではあったが沙綾と会っていたことに間違いはな  
いしバレはしないだろう。現に二人が何かを気にする様子はなかつ  
た。

一度部屋に戻ってカバンを置く。そしてもう一度深呼吸をした。  
今から告げるのは今までで一番緊張する告白だった。

「姉さん、ちよつといいかしら」  
「っ!?ど、どうした?」

ノックの音は緊張しきつた私には爆竹のように思えて勢い良く肩を揺らした。

開かれた扉の先にいたのは紗夜だけではなかった。

「あたしたちおねーちゃんに大切な話があるんだけど」

私の方から行こうと思っていたのに、あちらから来てしまった。

好都合と言うべきか想定外と言うべきか。

とりあえず部屋に入れる。行き場を失ってベッドに腰を掛けた私の正面に二人は立った。

「話?何?」

「まずは伝えないといけないことから伝えるね」

日菜はそう言つて笑つた。

「おねーちゃん。あたしおねーちゃんのこと好きだよ。お姉ちゃんとしての好きじゃなくて、一人の女の子としておねーちゃんのが好きなの」

「……知ってるよ」

絞り出した返答はそれだった。私の言葉に驚いた様子はない。

「それなら話が早いね」と言うだけだ。

「姉さん。もちろん私の告白は覚えているわよね?」

「……ああ。覚えてるよ」

「なら私たちの言いたいこと、わかるわよね」

逃げられるような状況ではない。

二人を交互に見る。同じような表情で微笑んでいた。

二人ならきつと、告白に対する私の答えを理解してくれているはずだ。なんだかんだ以心伝心しているのだから。

だとしたら彼女たちはどうして今告白をしたのだろう。断られるのは理解しているはずなのに。

恋心に終止符を打つため？それにしてはいくらなんでも早すぎた。だとしたら、宣戦布告だろうか。それなら納得できた。

けど、仮にそうだとしても。今の想いだけでも伝えるべきだと思っただ。

「紗夜、日菜。私は二人の想いには応えられない」

色々考えていたはずなのに口から出たのはとてもシンプルな言葉だった。

「おねーちゃん、他に好きな人でもいるの？」

「いないよ。断るのはそれが理由じゃない」

「……姉さんは、私たちのこと、嫌い？」

「好きだよ。だけどそれは二人と同じ意味じゃないから」

そう、これでいい。曖昧な言葉でなければ彼女たちには言葉の意味が伝わるはずだから。

「そう。姉さんならそう言うと思っていたわ」

「へ？——っ！」

気づけば私はベッドに倒れ込んでいた。二人に拘束された腕、身体。目線の先には紗夜と日菜の顔。間から見えるライトが眩しい。

何が起きたのか理解できなかった。

紗夜の言葉の意味も、何故押し倒されたのかも、目の前の楽しそうな表情も。

「姉さんが帰ってくる前に日菜と話していたの。姉さんなら私たちの告白を絶対に断るだろうって」

「え、なんで……」

「だっておねーちゃん真面目なんだもん。だから好きでもない人と付き合うようなことはしないでしょ？ずっと見てきたから知ってるよ」

「だから日菜と話し合って決めたんですよ。これからのことを」

「これからのことって何……」

「簡潔に言うと、姉さんにどちらかを選んでもらうのはやめました」

訳がわからないまま次々と進んでいく二人の言葉。  
目を丸くする私に紗夜がクスツと笑う。

「一人ではなく二人を選んでください」

「え？」

「そうすれば完璧でしょう？」

「え、は？いや、何言ってるの……？」

紗夜はちゃんと順序を追って説明してくれるから言葉の意味を理解できなかったのは今日が初めてのことだった。

「言葉の通りだよ。あたしたち二人と付き合ってよおねーちゃん。どっちも選ばないで全員が悲しむ未来よりは何倍もマシでしょ？」

「いや、そんな不誠実なことあるか!？」

「大丈夫よ。二人ともその状況は承知の上だもの」

「ていうかどの道戻れないよねー」

日菜の手が不意に唇を撫でた。クスツと口角が上がる。

「だって、意識しちやってるもんね」

「日菜、もしかして今朝のは！」

「おねーちゃんはあたしがあんな寝ぼけ方するの今まで見たことあった？」

ハメられた。そう思ってももう遅い。

紗夜に、そして日菜に告白された時点で私は二人の手の中で踊らされていただけに過ぎなかったみたいだ。

「安心してよおねーちゃん。ちゃんとあたしたちのこと好きにさせてあげるから」

「それには、身体で覚えてもらうのが一番早いわよね」

二人の手が私の手と絡む。顔の距離が一気に近づいた。

「今夜は寝かせないよ」

「明日が休みでよかったわね」

両耳にキスをされる。

ここまで来てやっと私は妹たちのことを勘違いしていたことに気がついた。

二人の告白を断ったら何かが変わると思っていた。変わるは関係性。だからそれを修復することばかり私は考えていた。

だけどそれは違ったようだ。

私の気持ちが変わることはあっても二人の気持ちまで変わるなんてことはないらしい。

こんなの完全に想定外だ。

「勘弁してくれよ……」

これじゃあ沙綾に貰ったアドバイスはなんだったのかわからない

じゃないか。

乾いた笑い声と共に漏れた声はすぐに塞がれた。  
妹たちが独占欲の塊なんて知りたくなかった。

二人に溺れる日は、案外遠くないかもしれない。  
って思ってしまったのはちよろすぎるかな？